大正十一年九月　日第三種郵便物認可
大正十二年八月一日發行　大正十二年七月十八日印刷納本

THE JOSEI KAIZO

女性改造

第二卷第八號



有島武郎氏追想號

八月號

讀者諸姉に告ぐ

本誌創作欄の扉にある

「詩人と天才と不思議な殺人」　辻潤

「被征服者」　佐々木味津三

の二稿は、本號最初の計劃を變へ、有島武郎氏の追想號に致しました爲め、紙數に異常の超過を來たし止むを得ず九月號に發表することに致します。讀者諸姉の御諒解を乞ふ

女性改造編輯部

文學博士 松本亦太郎著

心理學講話

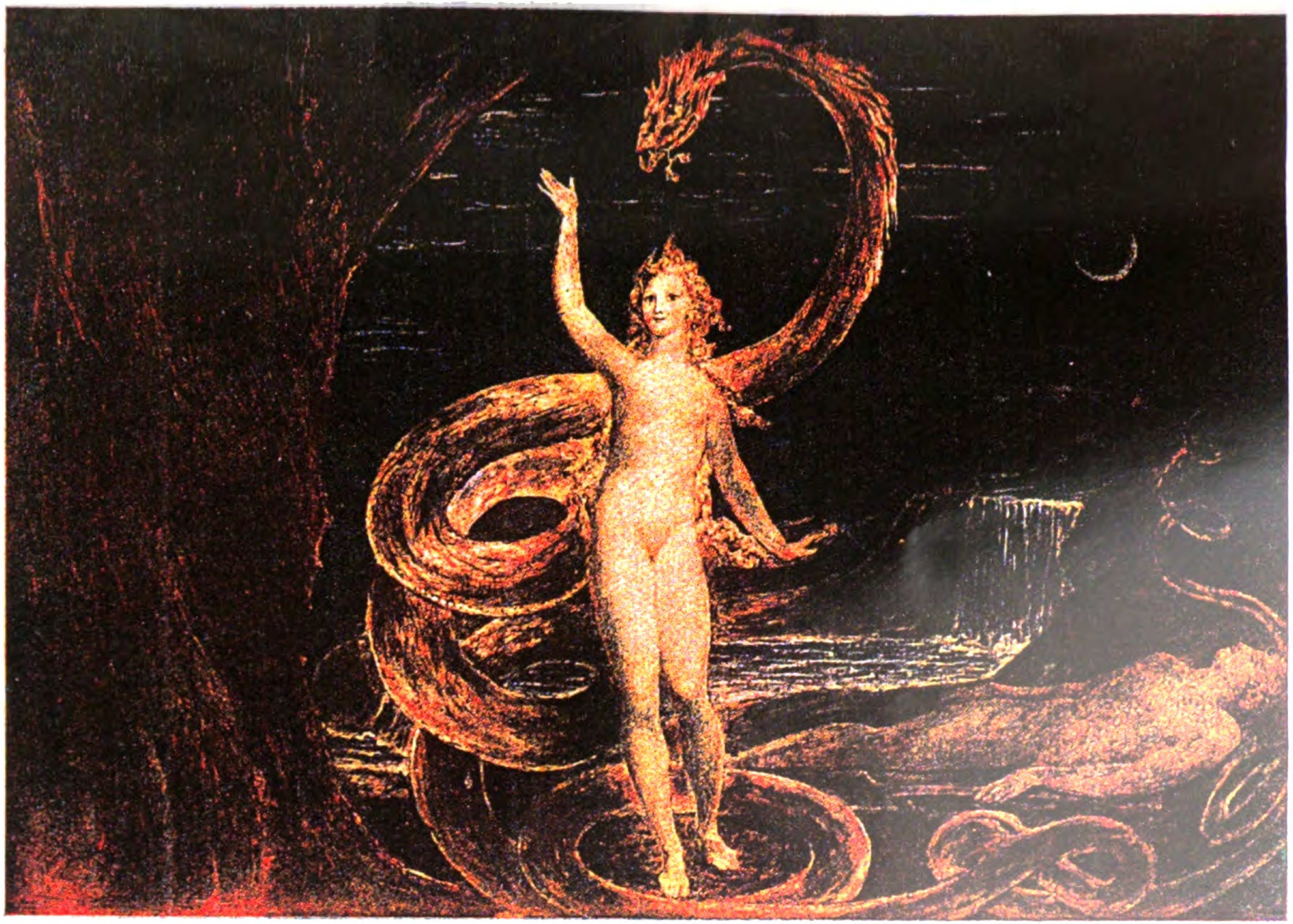
定價四圓五拾錢
送料二十錢

忽九版

社會學、倫理學、美學、敎育學その他萬學の根柢學として何人も心理學を必要とす、本學に通ぜずして人間活動の整理は難く、群衆心理、社會心理を知ることも出來ない、本書は我國で心理學の最高權威たる松本氏が、新らしき形式の下に精神動作、人間工學、能率學、智能測定學、產業心理學、行動學を十餘年研究の結果になつた有益な文献です、本書は初學者にも了解出來るが、總ての學、及事業に携はる何人も必讀の價値がある、出版二ヶ月を出でずして八版を賣盡し、九版を發行しました

東京 改造社 振替東京八四〇二


香水界空前の快擧
四月一日より御買上げの方に
（有名化粧品店薬店にて販賣す）
小瓶一個ニ壹枚
中瓶一個ニ壹枚
大瓶一個ニ貳枚
特大瓶一個ニ四枚
宛進呈
宮内省御買上品
原料香水
オリヂナル
香水用ハンカチフ
ローン製
優美花模様入
無代進呈
衛生口紅
カオール本舗
株式會社安藤井筒堂
東京日本橋區水天宮前



イブの誘惑　（ウイリアム・ブレーク）

志賀直哉著
志賀直哉傑作選集 壽々（4版）
定價二圓八十錢 送料十九錢

志賀氏は明治、大正に於ける小說界の最高權威である。日本の藝術を語るものは先づ氏の透徹した藝術境を窺はねばなるまい。

葛西善藏著
哀しき父（5版）
定價一圓九十錢 送料十七錢

文壇の雄將有島生馬氏は曰はく「自分が今まで讀んだ小說中本書の如く强く我心を打たれたものはない」我子の不良を哀しむ父の悶え、父の運命、その子の運命は悲しき惱苦に充ちて一讀鼻がつまるの思ひがある。

山本有三著
山本有三戲曲集（6版）
定價二圓八十錢 送料十九錢

天才戲曲家として一作を出すごとに讀者の血を躍らすのは山本氏の戲曲である。本書に收められたる五篇「津村敎授」「嬰子殺し」「生命の冠」「女親」「坂崎出羽守」は總て舞臺や批評で嘖々たるものであつた。

里見弴著
直輔の夢（10版）
定價一圓八十錢 送料十七錢

谷崎氏の「愛すればこそ」の名著と大正十一年度文壇の双璧と稱せらるゝ傑作。肺を惱める一靑年と、同病に懊惱せる藝妓上り、及び東京市の瀆職事件に連座せる某重役との深刻な戀愛關係を描寫した纒綿たる情緖を氏一流の麗筆にて描いたもの。

中村吉藏著
錢屋五兵衞父子（5版）
定價一圓五十錢 送料十五錢

北越の快男兒「錢屋五兵衞父子」は封建末期に於ける事業界の一大巨人であつた。彼が晚年の運命的な悲壯な沒落は舊社會解體の一の豫兆であつた。彼一家の最後の悲壯事を著者獨特の筆致で描いたもので幕末の光景紙面に躍づて讀者の心を摶つ。

野上彌生子著
小說六つ（3版）
定價二圓七十錢 送料十九錢

女流作家も多い。しかし野上氏に比すれば總ての作家は丸で比較にならぬ。本書は氏の半生涯に於ける小說の傑作六大篇を集めたものです。現今一番全國女流に讀まれています。

長與善郎著
靑銅の基督（4版）
定價二圓 送料十七錢

力强き筆「暗愴の世界へ」の不思議な魅力の結晶に成る。德川時代長崎の一南蠻鑄物師の酷烈悲壯な死を題材とした奇しき運命を如實に描き出し深刻悽愴の氣迫る。

島田清次郎著
小說 勝利を前にして（12版）
定價二圓四十錢 送料十九錢

文壇の寵兒たる著者近來の大傑作である。長篇小說「絕對道」を收む靑春の燒き盡すやうな情熱に加ふるに、シンミリした人生味の溢い所が出て來た氏の一轉機を劃した力作。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

三宅大輔著

改造社叢書第貳篇

野球

第十版

今回極東野球競技にて我國の勇將であり、且つ幾度も米國及比利賓へ遠征をなした三宅氏が身親しく對外競技に加はつた經驗と、そして理論とをこね混ぜて大成せる新式の野球、否我國が有する唯一の眞の野球、指南書だ、智と涙と、そして紳士道とを兼備すると稱せらるゝ三宅氏が單に野球を一の技術と見ず世界靑年の眞の勇氣を代表する競技なりとの前提のもとに筆を下ろされたるものであれば競技者も、看技者も一讀して野球の心髓を味へば其處に世界元氣の縮圖が公式となつて現れる。

定價貳圓八拾錢　送料十九錢

發行所

東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二

改造社

有島武郎追想

島崎藤村
石原純
秋田雨雀
赤井米吉
加藤一夫
室生犀星
石本靜枝
生田長江

片上伸
鷹野つぎ
芥川龍之介
上司小劍
宇野浩二
藤森成吉
田中純
杉森孝次郎

其他數名執筆



有島武郎君の戀愛關係

島崎藤村

有島武郎君の遺著、ホヰツトマン詩集の第二輯の終りには、『ワルト・ホヰツトマン』と題した評傳風の研究が載せてある。思ふところあつて、その一節をこゝに摘錄する。

○

有島君記して曰く、

『オ・コンナー夫人の回想記によれば、彼れが四十五の年（即ち一部的の不隨性に襲はれた年）、彼れは一人の女性を知つた。而してその女性が彼れに與へた友情的な手紙が、不圖その良人の手に落ちた。良人は憤怒と嫉妬から衆人稠座の中でホヰツトマンを詰責した。その女性に對して愛敬を感じてゐたホヰツトマンは、この事實があつて後深く彼の女に同情し

た。彼れはこの事件をオ・コンナー夫人に告げて「若し彼女が妻でなかつたならば直ちに彼女と結婚するだらう」といつた位だつた。「アダムの子等」の中にある「群象——その海原のさかまく波間から」(第一卷參照)なる詩はこの女性にあてゝ彼れの歌つたものと考へられてゐる。

——彼れはこの「白皙で碧色の眼と髮毛とを持ち、やさしく柔和な、いかにも女らしい小肥りな女性」に對して、長い間心の中に深い苦悶を味つたやうに見える。その爲めに彼れは己れの愛著的な性情を咀ひさへもした。この苦惱は多分彼れの四十九の頃まで持ち續けたらしい。その頃の手記に、

——「噓つぱちな子供じみた自己僞瞞、實際對者には存在せず、自分にばかり存在してゐたものを空想し、悉く自己に溺れて僞瞞を重ねたことを、而してその私の弱點——私の最大の弱所缺點に注意せよ。けれども常に16(こゝには4の字が記されてそれが抹殺されてこの數字に取り代へられてゐる)に對しては親しみの氣持ちと態度とを持て。然しもう彼女を追ふな」

——「冷靜な、溫和な(感情を表はすよりは)變りのない態度——貧しい人に與へよ——誰れにでも合力せよ——犯罪者と愚かなものと卑しい人々全體に對して寬大であれ——然し少しく語れ——言ひ譯けをするな——秘密を漏らすな——洒落をいつたり、言葉に綾をかけたりするな。或は諷刺的な挿話をするな。(普通の場合には)論爭せず、理屈をいふな。」

——「七月十七日

何んとしてもかんとしても私自身(と私の動靜)をこの不斷の絶大な(而して絶大な)動亂から引き放すのは大切なことだ。」

――「今、この時からもう動搖しまい（或は）「一字缺」しまい。今後は決して（如何なる事情があらうとも決して）彼女を見まい、彼女に會ふまい、彼女に話しなり云ひ開きなりをしまい――生きる限り、今から、いかなる會見もしまい。

七〇年七月十五日』

この文章がいつごろ有島君によつて書かれたものであるかは、はつきり分らない。しかしホヰットマン詩集の譯の第二輯が出版されたのは今年の二月のことであつて、隨つてこの文章がそんなに以前に書かれたものでないことは想像される。のみならず君が波多野夫妻との心の葛藤を續けながらこの文章を書いたらしいことは、おのづから字句の間に辿られる。

ホヰットマンが戀愛の對象はある人妻であつたといふ。平素ホヰットマンに私淑することの深かつた有島君が矢張人妻の秋子さんを得て、暗かつた人生觀に一つの大きな光明を見出したと言つて居るのは、偶然とはいひながら不思議な一致であると思ふ。ホヰットマンの戀愛關係に對する君の記述は、やがて君自身の戀愛關係の記述かと思はせるばかりに、さうした心の消息が窺はれるやうな氣がする。この文章にある圏點も君自身の附けたものであつて、三月の十七日あたりに君から秋子さんに送つたといふ手紙と、書いた心持の上に於いて一致するふし〴〵が多い。

有島君のいふ『戀愛と死との堅い結婚』は、この文章にあらはれたやうな心持の後に來たらしい。君が數年來の獨身生活を思ひ、それからこの文章なぞを讀んで見ると、深い哀感を催さしめる。

○

有島君はまた記して曰く、

『忠實な彼れの研究者なるエモリー、ホロウエー（Emory Holloway）のホヰットマンの戀愛關係に對する意見を附加

しておく。

――「『これから私の考へるところによれば、ホヰツトマンは夫婦關係を結ぶのは彼れに幸するものだとは考へ得なかつた謎、彼れの自由を愛してゐた。若し彼れが苟も結婚してゐたら彼れに取つての大きな誤謬であつたらう。彼れは屢々私に云つて聞かせた。彼れは妻を持つ人々を羨みはしないが、その子供達のあるのを羨むと云々』（オ・コンナー夫人の言葉）このホヰツトマンの信據するに足る戀愛の事實から讀者は次ぎのことを注意するに難くはあるまい。それは彼れがその情人として既婚の女性を選んでゐるといふことだ。かゝる婦人又はかゝる婦人の幾人かによつて彼が子供を擧げたとするなら、彼れがサイモンズになした告白の謎のやうな言葉が明瞭になつて來る。それはかういふことだ。この悲劇的な三角關係の當事者達は、事件にかゝはりのない子供の法律上、社會上、及び財産上の利益の爲に、彼自身の個人的感情を犧牲にして、事件を祕密に葬ることに一致したらうといふことだ。」

――彼れの女性に對する態度がこのやうであつたとすると、それは從來の結婚制度、家族制度に對する由々しい威脅だといはなければならない。さりながらそれは從來支持された制度に對する威脅であるが故に惡であり得ねばならぬか。これは問題である。その解決の將來は殘さる可き重い問題である。男と女と子供とが結婚といふ重荷から解放される時のやがて到來するのを私は豫感せずにはゐられない。而して私としては要求せずにはゐられないこの要求には何かの機會に於て更らにいひ及ぶことがあるだらうと思ふ。』

こゝに有島君は『男と女と子供とが結婚といふ重荷から解放される時のやがて到來するのを私は豫感せずには居られない。而して私としては要求せずにはゐられない。』と書いて居る。この心の消息は、やがて君が最後に到達した戀愛觀を語るものではなからうか。そして、かうした戀愛觀を抱くやうになつた君がこの世の現實にぶつかつた時の感は果して奈何であつたらうか。有島君の戀愛關係に就いてはいろ〳〵胸に浮んで來ることもあるが、こゝには盡せない。

有島武郎氏の死について

石原純

七月八日の午後のことでした。私は改造社からの電話で何げなく電話口に立ちながら、有島さんの變事を聞き知りました。その日の東京の新聞に出てゐたと云ふのでしたが、それをまだ見ることの出來なかつた私は本當に異常な驚きを感ぜずにはゐられませんでした。ふと私はその日の朝書棚のなかで他の書物を探しながら、意外にも同氏の著作集の一部がそこに重ねられてゐたのを見出し、「自己の要求」なる一文を拾ひ讀みなどしたことを思ひ出しました。人間の死と云ふことは謂ふまでもなく私たちの經驗する最も嚴肅な事實です。そしてそれに遭逢して私たちは異常に敏感になるものです。この敏感さが屢々自然の因果關係を超越した心靈的現象を私たちに體驗せしめます。それは因果關係の顯著でない二つの出來事を單に偶然の逢合と解することの淺薄さを感ずるからです。けれども然う云ふ場合にいつも直截單一な心靈的作用なるものが存在するものであるか、或は極めて複雜多樣な因果關係の連續がこれを結果せしめてゐるのであるか、私にはそれは遽かに斷ずることは出來ません。併しいづれにしても私たちのさう云ふ敏感さが經驗的事實を連結する何等か意味深い背後の或る物を模索しやうとする欲求を自から起させてゐることは疑ひもないことです。殊に自分と交渉の深かつた一人の生命の斷絕した場合に、私たちは之に對する哀惜の感と混交して、之を痛感せずにはゐられないのです。

私は有島さんの死を聞いてひどく私の胸の動悸を感じました。電話口から自分の部屋に歸つてどうしても落ち着かずに後から〳〵と續いて來る思ひに充たされました。理解ある人間の心の中に或る何等かの交渉が潜在するかのやうな氣さへ

するのでした。どんな事實が累して氏をこゝに導いたのであらうか、私は之を知悉することによりて氏の複雜なる心理の幾分をでも想像することが出來たなら、人間の眞の生命に對してどれ程な深い意味を掴み出すことが出來るであらうかを豫想しました。恐らく世間の人の多くのなかには謂はゆる典型道德の形枠をもつて來て斯樣なことを非難するものもあるでせう——現に今日の新聞でも私は高島米峰氏の談として、有島氏の愛は認めるとしても現代の日本の道德からはあゝした事柄は許されぬのでありますと云ふ樣な記事を讀みました。その人たちはもう少し根本に溯つて典型道德なるものゝ眞の意味と限界とについて顧みる必要がありはしないでせうか。少くとも有島さんの樣な人格者に對して之を云ふのは、その人格に對する不當な侮蔑であり、尚ほまた同時に言者自身の思想の淺薄さをもの語る外に何の利益をも持たなかつたでせう。その人たちからどんなに罰せられやうとも、若し世間が本當に有島さんのやうな人ばかりであつたなら、そこには現に在るよりもどんなに純眞な美くしい世界があらはれたでせう。愛の片影さへもなしに肉を興じ、弄ぶことの半ば公けにさへ行はれてゐる今の世に厭はしく悍ろしいことは餘りに多いのです。私たちはそのなかに在りて偶々純潔なる人格者の愛のこゝろの現はれを見て、一つの美くしい光明として寧ろ之を熱烈に憧憬し、その輝きのなかに含まれる生命の意味を深く究めることの、どれ程私たちの修養に資するかを思はずにはゐられません。之を徒らに非難するはその一瞬の光をも吹き消して世を暗黒のまゝに事勿らしめるのにも似てゐるでせう。私はこの光明を保持して世の醜惡を照らしたいと思ひます。若し第三者としてゞなく、有島さんの心もちに立ち入つて考へるならば、私は氏の體驗したであらう愛の歡喜のなかに身を打ち浸らせて生命を終ることの出來た氏のために心からの祝福を捧げたいと思ふのです。

私はこの事件について新聞の記事以外に少しも知ることが出來ませんので、充分な考察を述べることも不可能です。尚ほまた平常の有島さんとの交渉と云つても、只その創作や感想の公けにせられたものを通じての上であるのに過ぎないの

で、もつと隠れた處を見遁かしてゐるかも知れません。けれどもそれらの事がらは外に幾らも氏の親しい友だちによつて語られるでせうから、今は私は自分の接した範圍だけについて書くことに滿足します。

併し實際、私は氏の作物にはいつも尊敬と親しみとをもつて熱心に對してはゐましたが、單にそれだけで終つたなら、私はこゝに筆取ることをも差控へたかも知れません。現に私は他方に於て先日私たちの敬愛する老ケーベル先生の逝かれたことに關してその追悼のために出される「思想」へ一文を寄せる筈でしたが、上のやうな理由で寧ろ差控へることにしました。ところが有島さんの場合には戀愛の究極としての異常の死が私により多くの感激を促がしたことゝ、もう一つにはその死に赴かれる前日に始めて私への手紙を書き送られたといふ事實によつて、私が特に或る直接の交渉におかれたことと、そんな次第で私がこゝに幾らかを記すのも同氏を知るために何かの役に立ちはしないかとも思つたのです。

昨年の夏、私は「改造」に「美に關する一考察」と云ふ一つの感想を書いて、そのなかで同じ雜誌の前月號に有島さんの載せられた「描かれた花」のなかの言葉に云ひ及ぼしたことがありました。その儘で過ごすうち、今年の始め頃でしたか、ふと汽車のなかで「科學畫報」の原田三夫氏に乘り合せましたら、その話が出て、有島さんに遇つたら、あの「描かれた花」にある青年の云うたことはやはりごまかしであつたと云ふお話でしたとのことでした。勿論それはあの文の内容には關係のないことですけれど、私は只それを通じて有島さんのことを思ひ出す一つの機會を得たことでした。ところがこの六月の始めに私の感想集「人間相愛」をその發行所の鎌田氏の手で有島さんへ贈つてもらひましたら、間もなく同氏からの手紙が來たのでした。私は今度新聞で同氏が六月八日の夕刻に旅途に出られたことを見て、何だかその頃のことであつたと思ひながら、手紙の日附を見ましたら、六月七日と記してあるのでした。別に變つたことは書かれてなかつたにしても、恐らくはその時既に一日後のことが氏の心のなかに豫劃せられてゐたのでありませうか。さう云ふ場合の手紙としてこゝに公けにして見ませう。

石原純様

まだお眼にかゝる機會を得ませんが、思想のために立派なお働きをなさつて下さつてゐた事に對し陰ながら平生感謝してゐるもので御座います。此度は貴著「人間相愛」を御惠送下さいまして誠に難有う存じます。其中には私の小さな感想に對して教へて下さつたものも含まれてゐると存じますが、實はあれに對しても公けにお答へ申すべきが至當だとは思ひましたが、自然といふものに對するあなたの御考へと私のそれとが可なりかけ隔つてゐまして、其詮議に亘ると最後は結局互ひの主觀に落付く外はなき事故、枝葉の論議は結局無駄だとわざと差し控へた次第です。決し（て）貴論を無視してゐた譯ではありません。機會があつてゆつくりお話でも伺へれば仕合せだと思つてゐます。

御禮旁右まで草々不盡

六月七日　　有島武郎

私がすぐに之に對する返書を差し出しておいたのも、最早や氏の手には勿論入らなかつたのでせう。私の書いた「美に關する一考察」はこの著のなかには入れなかつたのでしたが、之を繙いてゐられるだけの餘裕は既になかつたものと察せられます。只私への答のことが氏の頭にあつたので、その申譯を述べるつもりでこれだけを書かれたのに違ひありますまい。そこに氏の強い責任感を見ることが出來るわけで、私はこの點で個人的に氏に深く感謝したいと思ふのです。その外に私はこの手紙のなかにもあらはれてゐる氏の謙遜な態度を懷かしく思ひ、そして「機會があつてゆつくりお話でも伺へれば仕合せだ」と私も切に思はずにはゐられませんでした。しかもその機會が既にその翌日から永久に消え去つてしまはうとは、それは私に取つて異常な悲みでなければなりません。

けふの新聞に出た足助素一氏の談話のなかに「有島は人間に未練はないのだが大自然に未練があつた。秋の澄み切つた

空の色やさびしい風色をもう一度見たいと云ふ如何にも詩人らしい慾望」のために一度迫られた死を肯んぜなかつたと云ふのがありました。畫家や詩人の創造する自然。否「自然の幻覺」がいかに美くしく、「いかに人間生活の內容を豐富にするか」を氏ははその「描かれた花」のなかにも說かれました。併しその美の眞の根源かやはり大自然のなかに存することを氏は果して感じられなかつたでせうか。少くとも私は自然に對する考へが詮じつめれば私たちの間にそれ程異つてゐるとは思つてゐません。只之を表現する場合にその重きをおく點が異つてゐたからに依るのであらうと信じます。それはともかくとしてて氏はやはりこの自然の美くしい幻覺をも自ら捨てて、ひたすらに愛の歡喜のなかにすべてを捧げられたのでした。「誰れがいゝのでも惡いのでもない。善につれ惡につれそれは運命が負ふどきもののやうです。私達は運命に素直であつたばかりです。」本當に有島氏の心の素直さが氏をこゝに導いたのに違ひありますまい。世間に對する氣思ひとか瘦我慢とか義理とか名譽とか野心とはかこのとき氏の心のなかには少しだも殘つてゐなかつたのでせう。純眞無垢な愛情の燃燒、自分と對象者とのみの生きる世界がそこに限りなく展開して微笑のもとに死の門をくぐりゆいたことを私は充分に想像することが出來ます。「愛の前に死がかくまで無力なものだとは此瞬間まで思はなかつた」とは、眞に愛の極致を體驗したものゝ言葉です。

有島さんの藝術的著作のなかに本當に立ち入つて考へて見たなら、殊に「或る女」の女主人公の心理などを引き比べて見るとしたなら、氏のこのやうな最後は或はそれにふさはしいものかも知れません。氏の近時の思想に一轉機を認めたと云ふやうな人たちもあるやうですけれど私は必ずしも然うは思ひません。氏の心に熱情的なものがなかつたなら、決しておれ程な藝術は生れ得なかつたでありませう。只その熱情が自分の行爲としてあらはれるために、有識なる人格者としての氏は之を決して妄りには燃やさなかつただけです。理知は決して熱情と矛盾するものではなくて、最も自然的な理想的な人格に於て共存すべきものであることを私は固く信じます。

實際有島氏のやうな人格者がこの行爲を選び最後の歡喜に到達するまでには、その心のなかに非常な煩悶苦鬪があつたに違ひありません。この苦惱を經てこそ愛の歡喜は始めて人間の生命に尊さを與へるのです。私は氏のこの苦悶の或る表示を「泉」の六月號にあつた「獨斷者の會話」のなかに見ることが出來るやうに思ひます。そこには「黑い影」なるものが自分に痩せ我慢のためにまだ生きてゐるのだらうと嘲笑しかけ、もう痩我慢を止めたらどうだと云ひ、「未練を殘さずに死ね」と云ひ掛けるのに對して、「貴樣は殘酷な奴だ」と嘆いたり、そして最後には「力が一氣に振ひ立つたら、貴樣の指圖を待つまでもない」と應答し、

「この力を一點に吸ひ集める磁石のやうな美しい力が、早く私を救ひに來てくれ」

と呼んでゐるのです。私は今そこに象徴的な意味を感じないではゐられません。

愛そのもの〻價値が人生を最も光輝あらしめるものであることを信ずる私は、愛に終始し得る生命を最も幸福なものと解さなければなりません。けれども愛に終始するとは云つても、直ちに愛の歡喜のなかに死を迎へることが許されない場合もあります。私は必ずしもそれを愛の燃燒の足りない故であるとすることは出來ません。餘りある愛の心をもつて尚ほ之に伴ふいろ〳〵な悲哀との鬪ひを續けなければならないこともあります。私も嘗て之と同樣な場合を自分に經驗しました。恐らくは私に小さき血族への後顧の慮りが必要でなかつたとしましたなら、尚ほまた愛人とのより良き生活の創造への人間的念願がなかつたとしましたなら、私はやはりその美くしい死の歡喜を選んだでもありませう。それが寧ろより容易い理想境への道であつたかも知れないからです。けれども人間として足りない私たちはその儘で神の國へ踏み入るまへに、この地上に於ける生命を幾らかでもより良くするやうに努める義務を感じます。私はそれが生存本能に伴ふ良心の姿であることを信ずるのです。あらゆる悲哀と苦惱とに面接することが私を只最後にこの道に救つてくれるでせう。私は眞摯に之に思ひ及ぶ毎に心からなる涙の溢れるのを覺えます。

有島さんが社會問題に心を深く惱されたことも私にはそれが人間相愛の信念に根據づけられたものゝやうに見えるのです。氏が積極的に自分の財産を社會主義運動のために投じ盡されなかつたことで云爲するものあるやうですが、私は寧ろ有島さんのなされたことが社會問題解決の根本策に近づいてゐることを認めないわけにゆきません。人間の心を少しでも強制的に脅迫し煽動することが何になるでせう。そしてその力づよさで自分の主張を押し通さうとすることは、そも〳〵社會主義の眞意ではあるまい。新社會の基礎は相互人間の間の愛に依らなければならないからです。私は今これについて詳論する程の心の餘裕をもつてゐないので。それは他日に讓ります。

本當に有島さんを思慕する世の多くの人たちに取りて、又有島さんの血族の方々に取りて、その死は惜み悲しむべきものに相違ありますまい。併し暫らく自分たちの感情から離れて私は氏の嚴肅なる死を考へませう。私は氏の心もちに奥深く立ち入つて暖かい愛を同感し之を喜び讃へることが出來ます。

この嚴肅さを知らな世の人たちが利己的の所論にのみ陷つてゐることに私は憐れみと憤りとをさへ感ずるものがあります。甚しいのに至つては自殺を讃美することが之を奬勵する結果になるから宜しくないなどと云ふ不合理な說をなすものがあります。有島氏の自殺を讃へることが、氏の人格崇拜を實現せしめるなら、それはよいことです。非人格者がその行爲を表面的に眞似るのはわるいに違ひありません。これは眞似ると云ふ行爲それ自身がわるいので然うだからと云つて前のよいものをわるいと結論するのは明らかに不合理極まる事柄です。私たちはどうしてその不合理さを忍ぶことが出來るでせう。例へば數學の非常に難かしい理論を創つた人があるとしてごらんなさい。後の人たちは之を理解し學ぶことに困難を感ずるのです。併しこの結果を招くために、その理論の創始者は困つたことをやつたものだと云ふなら、それは

償ふべきことではありますまいか。困るのは後進者の教養の足りないためであつて、その責任は先輩者に歸せられてはならない筈です。丁度これと同様に自殺が果して獎勵せられるものであるかどうかは、世間一般の人格素養の如何に在ることであつて、一人の自殺者の責でないこと勿論です。私は世の教育家と云ふ人たちに殊にこの種の迷論をなして反省し得ないものゝあるのを苦々しく思ひます。人間の行爲批判はもつと鋭い良心をもつてせられなくてはならないのでせう。殊に死に關するあれ程嚴粛な行爲を軽々しく取り扱ふことは、人格に對すること上ない侮蔑でなければなりますまい。

梅雨そぼち降る輕井澤の一夜「森嚴とか悲壮だとかいへばいへる光景だが、實際私達は戯れつゝある二人の小兒に等しい」と云ふその人たちの有様をしみじみと思ひながら、私は漸くこれだけを書きました。やはり何等かの不思議な交渉がそこに繋がれてゐるやうな氣が私にしてなりません。

（七月十一日）

ブロンズの手

―(有島武郎君追悼手記から)―

秋田雨雀

私は有島氏の死に就いて批評をしやうとしてはゐない。私は唯あの人の生活――藝術家として、人としての生活を、あの人の最近に書いた二三の作物に就いて、思ひ出して見たいと思ふ。

私は、有島氏の死を聞いた時に、一種の怒りに類した感情の、私の胸の底からわき上るのを感じた。それは、私にはあの人の生活態度、或は思想そのものは、決して自殺といふ樣な行爲を、生み出しさうに思へなかつたからである。

若しあの人が、自殺をしたものとすれば、そこには何か、あの人をさうさせた外的な事情が、あの人を死に導いたに相違ないと直覺されたからである。それ程あの人の生活が、私達にとつては、合理的でそして彈力的に思はれたからであつた。

やがて、あの人の遺書が發表された時、その遺書の中に『自分の死ぬのは、決して外的の壓迫の爲ではない。』といふことを力强い調子で書いてゐるので、私は非常に安心した。

然し、それと同時にそれならば、あの人の生活そのものに何故に死を選ばなければならない必然性があつたかといふ疑を懷いた。

その疑は、始めの怒りの感じよりも、もつと內攻的に私を苦めた。

私はその理由に就いて、――非常な驚きと、失望の中から、それを發見しやうとあせつた。そして最後に得たものはあの人のした行爲が、あの人の全生活の總量から、生れて來て居るといふことを發見して、自分のものゝ觀方の非常に淺薄であることを恥ぢた。

人間は行爲に依つて、思想を支配して行く。然し、行爲だけを離して考へる時に、思想と行爲との聯絡がわからなくなる。他人の場合には殊にさうである。人は、他人の死を見て

その愚かさを罵つたり、笑つたりする。しかし、その人の行爲を生んだ思想の糸を、摑んで居るものは唯その人だけである。

その人にとつては、生死は、絶對の力がある。他人から觀て、死と思はれることは、その人にとつて眞實の意味の生の場合もあるであらう。

生物の自殺に關しては、哲學的に論ぜられる餘地が充分にあるであらう。然し人間に自殺の本能のあるといふことは、人間が自殺を選び得るといふことの自由を示して居る。

何の爲に人は自殺するか。

人間は自己の持つて居る生活意識を高唱する時に、死を選ぶことさへある。その人にとつては、死を選ぶことは、その人の生活の主張だからである。

有島氏が最近の或作物の中で『生活の高潮が愛になり、愛の高潮が死になるとは、不思議な矛盾である。』と書いてゐた。

人間が正しい生活を――あらゆる意味で正しい生活をするために、自ら死を選ぶと云ふことは、そこに何らかの意味がありはしないか。有島氏の書いたものでは、例へば『詩への逸脫』の中で云つてゐるやうなことは、最後にミステイシズムの境地にさへ逹して居る。

氏は、その境地を象徴の世界だと言つて居る。『詩への逸脫』の中で最近の氏の藝術的境地を說明するに、戀人の抱擁それからその抱擁が死に逹すると云ふことを論じて居るが、この短かい文章の中で氏の思想が全く、藝術と生活とを一元にして居ることに氣がつくであらう。

恐らく有島氏の今迄の作物を讀んだ人々ならば『詩への逸脫』を讀んで、最近にかなりな藝術上の變化が、氏の上にあらはれてきて居るといふことを氣がつくであらう。

その同じ頃に即ち三月十日に書いた『死を』といふ短かい詩を私達は讀むことが出來る。

…………………

目路のかなたに屈辱の凡てをかいやる死を、
我れの外なる凡ての人にはたゞ愚かしい死を、
その黑い焰の中に親をも子をも燒きつくす死を、
……おゝ生を容赦なくふみにじるその
不可思議な生命を。

と歌つて居る。

何事もなく吾々と談笑して居た氏の生活の中に、くひこんできて、そして氏の精神と肉體とを攻めさいなんで居た處の冷酷な死を、吾々は何も氣が附かないで過して居た。

氏の藝術的境地は、さきの『詩への逸脱』の中で説明してあるやうに、描寫の世界から表現の世界に達しやうとして居た。あれだけ緻密な描寫を愛して居た氏が、今までの全ての形式を打破して新しい表現をとらうとしてゐた時には、既に氏の生活の中に非常に大きな變動が、起りかけてゐたことがわかる。そして生活と藝術とが、全く一つのものになつて居る。然しこの境地を切り拓いてゆく事は、私達第三者から見てもかなりな困難な状態にあつたといふことは想像される。「泉」へものを書き出し始めた時代には、氏は、その境地を切拓かうといふ努力でいつぱいになつて居たらしい。然しその努力を裏切るやうな一種の懷疑をし―恐らくあの人の社會生活から生れた處の、アナーキスティクの思想がそれであつたらしい。

　この二つのものが絶えず氏の生活の中で戰つて居たらしい。

　戰つてゆくといふ力、全てから脱離しやうとする氣持の矛盾の中から、ナヒリスティツクな生の倦怠さが生れて來て居たらしい。『瞳なき眼』の中で云つてゐる。

……………

あからさまに云はう。
大千世界は瞳のなき眼だ。
みひらいたまゝ、瞬きをしない眼だ。

……………

の境地は即ちそれだ。

社會といふものに對する自己の無力、家庭、朋友、親子、といつたやうなものに對してさへも、氏は段々に絶望を感じて來た。そこへ襲つて來たものはたつた一つの力だ。この力こそ、氏の倦怠した生活に生命の火を投げつけたたつた一つのものだ。

『瞳なき眼』のその二『石炭のかけら』は、即ちその新しい火の燃えつく事に對する悦びと恐れの中で書かれたものではなからうか。

　私は實は、今度の事件の起らない前に『石炭のかけら』を讀んだ時、何の事だか殆ど意味を解するに苦しんだものだつた。たゞぼんやり別な意味にそれを解釋して終つたのであつたが、今その一篇の詩を讀んで見ると、驚くべき力をもつて私の胸に迫つて來る。

　火照つた赤い唇を冷たさと黑さとに近づけるな。
　いさなひに滿ちた横顔で荒くれた面に頰ずりするな。
いたづらを慎めよ。

石炭は火だ。
火は破却だ。
いたづらをつゝしめよ。

と言つて居る。此の時代の苦しみは、恐らく、他人の想像することの出來ないものだつたらう。殊に氏の樣なかなり嚴粛な省察をもつた人には、一層ひどかつたであらうと思ふ。

最後の「泉」(第六號)に載つてゐる『獨斷者の會話』の如きは、全く氏が氏の死に到る精神的苦鬪史であると言つていい。

若しいふ事が出來るなら現代に於ける「ヨブ紀」と云つていゝ位である。

この會話は、七篇の短い對話から出來てゐるものであつて自己と自己の影との悲痛な爭鬪である。

第一は、黑い影のBと、主人公のAとの深刻な、切迫した對話で、こゝではAといふ一人の人間が、自己の生活を反省する事から逃れたり、わき目をしたり、或はごまかしたりして行かうとして居るのを、Bがその首根つこを掴まへて、生活其ものに眼を向けさせやうとして居る。

第二は、一人の可愛い子供を生んで、それを、育てあげて居る所のCといふ女と、主人公Aとの會話である。Aは、そのCの育てあげてゐる子供の顏を見て、非常な不安に襲はれてゆく。此處では、人間の愛、親子、との間の、愛に對する虛無的な懷疑思想を抱いて居る。

第三は、主人公のAと、金を貰ひに來る無政府主義者との對話を描いて居る。主人公は、無政府主義者が、主人公を同志だと言つて、金をせびらうとすることを難じて、今日のアナーキストのとるべき道は、たつた二つしかない。一つはテロリズムである。一つは最少極限度のパンに依つて、大多數の人類と共に苦みながら、その中から仕事をなし遂げてゆくことである。と云つて今日のアナーキストが、テロリズムを他人に强ひて、自分は何時でも安全な地點に止まつてゐることを難じて居る。これは有島氏の最近の最も具體的な社會運動、及び社會運動者に對する警告と絕望とを語つて居る。

第四は、ドン・ジユアンの生活を讃美するAと、一人の女性との對話であるが、これは、私にとつては一番興味のある會話である。この會話は、私達の間に度々取りかはされた會話であるだけに、私には懷かしく思はれる。

普通人は、女性をAならA、BならBといふ一人の女性で代表させて、それに依つて滿足するけれど、ドン・ジユアンは一人の女性に依つて女性を代表させせない。ABCDの各々の

婦人から、いゝ性質を受け取つて、それらのいゝ性質に依つて完全な女性を作らうとする。そこにドン ジュアンの理想主義と勇氣とが生れに來るのであると云つて居る。

有島氏の様なフエミニストを私達は見たことがない。有島氏の生涯は精神的なドン・ジュアンであつたと云つていゝ。

第五は、子供に對するアナーキスティツクな思想、例へば自分は子供を愛してゐる、その子供を自分の思ふやうに教育しやうとすることの無意義である。又、大人が子供を教育するといふことは寧ろ潛越なことで、大人が多くは子供に依つて教育さるべきものだ。と云つて居る。

この對話の中で氣のつく事は、子供が、ある時が來たなら『親といふものは、親馬鹿だが兎に角、自分達を愛せずには居られなかつたんだと思ふ時があるかも知れない』と云ふ言葉だ。

此の境地は、有島氏の恐らく、かなり最後に達した境地ではなかつたかと思ふ。

第六は社會運動者が、絶えず社會的の壓迫にうけながら、お互にAがBを罵り、BがAを罵つて自ら力を弱めてゆく事に對する絶望を示して居る。

第七には、又最初の黒い影が現はれて來るのである。『未練を殘さずに死ね』とBは叫んでゐる。それに對して、『力が一氣に振ひ立つたら、貴様の指圖を待つまでもない』。『では暫くの間左様なら』『この力を一點に吸ひ集める磁石のやうな美しい力が早く私を救ひに來てくれ』とAは叫んで居る。その美しい力といふのは何であるか？

私達が最後に氏の部屋で逢つた時に、高村光太郎君の作つた左手のブロンズを見入つて、その彫刻の説明をしてくれた。その事は何か宗教上のインを結ぶ形だと云つて居た。其晩は非常に淋しさうにして蓄音器などをかけてくれたりした。其の時のブロンズの手は、やつぱりあの卓子の上にあることだらうと思ふ。「泉」を今開いて見ると、その手を歌つた詩が書いてある。

『孤獨な淋しい神祕……』

手……一つの手……
見つめてゐると、肉體から、靈魂から、
不思議にも遊離しはじめる手。
存在の莊嚴と虚妄——神か——無か。
おゝ見詰めてゐると、
凡てのものが手を殘して消え失せて
無邊際の空間に、
たゞ一つ殘りある手。
………………

三人の子を通じて見た有島さん

赤井米吉

有島さんには最近二回會つた。一回は五月十九日の父兄會の折であつた。その時有島さんは「泉」の六月號に子供の教育に關することを書くから讀んで、感想を聞かして呉れと云ふ意味のことを云はれた。私はその時何ともなしにそれは必ず論文の樣なもので、その中には私たちのやつてゐる事に就いても書かれてゐることの樣に思つて、一種緊張した氣持で承つたのである。二人の子を託されてゐるのであるし、その他親類の子達も可成紹介もされたのであるから、私たちの仕事に對しては相當理解して頂いてゐるうちだらうとは信じてゐたが、然し何と云つても不足がちな私たちのすることだから隨分失望もして居られやうし、かうして呉れたらとの期待もあられやうと思つて、恐ろしい樣な、樂しい樣な氣持で六月號の出るのを待つてゐた次第である。

愈よ出て見るとそれは「獨斷者の會話」の二〇頁から二八頁の會話であつて、私の豫期とは全然違つたもので一寸面喰つた。勿論私の豫期は全然根據のない想像であつたのだから、面喰つたのは全く私一人の業である。然し豫期に反しては居たが、別の方面から非常に有益なものを與へられた樣に思つた。有島さんの子に對する態度なり、考が最もよく伺はれて、普通の父兄會などで問答してゐるものよりも遙に深いところへ觸られた樣な氣持がした。

あれを讀んで、有島さんの實際を知らぬ人は隨分亂暴な親だと考へられるかも知れない。會話者のFもそんなに考へてゐるのであるらしい。然し三人の子を通じて見た有島さんは決してうつちやらかしの人ではない。あの中に、

F――君は一體子供を愛してゐないのかい。

A――人並位ゐの程度には愛してゐるらしい。

F――それでほつたらかしてゐるのか。子供の行末が心配にならないのか。

A――然し心配したつて結局なるやうにしかなるものか。

私には今日々々一番生きよくしておく外にどうしようもないのだ。

と云ふのがある。然し私から見ると有島さんは人並み以上に三人の子を愛して居られた様に思ふ。一人で父と母との二人分をしやうと云ふ様なところがよく見えた。丁度その十九日の父兄會の時にも三男の行三君の身體の餘り丈夫でないことを心配しておられた。それで私はこれ迄も時々本校でやつてゐる隣の至誠病院へ毎月通つて継續的診察をしてもらうことを話すと非常に喜ばれて、是非その手續をしてくれと依頼された。それで私は共翌々日係りの先生に相談してこの旨を至誠病院に通じたところが、先第一回には家の人も共に來てもらつて是迄の狀態を詳しく聽取つて診察したいと云ふことであつた。私はすぐこの旨を有島さんに通じた。するとその翌日即ち六月二十二日の正午近く、折からの非常な雨の中を傘一本で出て來られた。そして暫く職員室で話してやがて行三君を連れて至誠病院へ行かれた。これが私の會つた最後であつた。出かけられた時も雨は尚止まず降つてゐた。近道をする爲に運動場を橫切つて、父子二人が病院の裏手の方へ行かれた姿は今も私の前に髣髴としてゐる。確かに愛せられた、いたく心配されてゐた。うつちやらかしだつたとは決して思はれない。

尚この行三君がその後一週間程してから組の者と一しよに日光旅行をしたが、その時も有島さんは上野まで送り、迎へされたと云ふことである。有島さんが出て行く子供等と帽を振つて別を告げて居られたことを今になつて皆で云ひ合つてゐる。この後二日程して家出されたらしい。遺書にあつた樣に確に終り迄愛して居られたのである。

又母さんのない爲に子供が淋しからうと思はれては、三人の子を慰めやうと努められたのも一通りではなかつた。有島さんはよく三人を連れて遊びに出かけたり、見物に行つたりされたものである。昨年本校の兒童が初めてフツトボール大會に出場した時の如きは、丁度長男の行光君がその選手の一人であつたので、三人を連れて辨當をもつて朝から會場へ來て聲援された。そして三人の子の友達を又非常に可愛がり、よく宅へ招いて御馳走をして一しよに遊びなどされたので、本校の兒童の間には有島の叔父さんと云つて非常に親しまれてゐた。

三人の子の學業についても可成綿密な注意が拂はれてゐた樣に思ふ。何時か二男の敏行君が病氣の時に見舞に行くと、枕頭でその綴方の話なども出て、何時の作は善かつたとか、

何の文は面白かつたとか云ふ様なことも云はれて、子供の作物によく目を通され、又それをよく記憶して居られた。私は話しながら、大文豪の子の綴方を指導する自分の仕事の非常に怖しいものであることをしみ〴〵感じながら、有島さんが子供のことに深い注意を拂つて居られるのをうれしく思つた。「泉」の文には如何にも無關心な、ほつたらかしの様な氣分が見えるが、それは表面の態度である。裏面にはこの様に濃やかな愛情と綿密な注意が働いてゐたのである。私はこれが眞の教育と云ふものであらうと思ふ。家庭教育でも凡てかうありたいものと思ふ。所謂熱心な親や教師から屢々反抗的な不良兒の生れるのは熱心が表面に現はれて、干渉となり、束縛となり、生きた子供を人形の様にし、自主の人を奴隷の様にしやうとするからである。家庭教育や學校教育の研究が盛になるにつれて、親や教師に教へやうとする氣分が愈々多くなり、子供の自らなす仕事が次第に減じて行くのは喜ぶべきことではない。教へやうとするから理窟になり口さきになるのである。今日の親や教師に最も必要なものは、この教へやうとする氣分をもつと少くして、子供の友達となることである。父子の間にも、師弟の間にも友情がなければならぬ。有島さんは確に三人の子の友となられた様に思ふ。あの會話者のFには、やはりこの教へむとする氣分が極めて濃厚である。「本當は中々勉強してゐるのだとよく云つて聞かせる」とか「親を正當に理解させる」とか云つて居るが、全く常世流の親の行き方である。そんな事で子供は決してよくなるものではない。きつと「アカンベー」をやる。教へることが商賣である教師などもこの理をよく考へねばならぬ。

聊か議論になつたが、これが私の有島さんに答へやうと思つてゐたことである答ふべき人が逝かれてからこれを世間の人々に告げる様になつたのは何と云ふ悲しいことであらうか。

要するに私は三人の子を通じて、有島さんはほんとに良い父さんであつたと思ふ。かゝる父さんを持つた子は、よしやそれが暫くであつてもほんとに幸福であつた。よしこの度の父さんの死が三人の子に深い悲しみと、痛ましい傷を與へても、三人の子の心に映つた有島さんは必ず温かい、なつかしい父さんとして永久に殘るであらう。よしや世間に兎角の評が行はれても、それによつて父さんの姿には些のキズも、くもりもかゝらないであらう。子に於ける父は常に絶對である。官位によるにあらず、學識によるにあらず、たゞ愛にのみある。而して愛は永遠に朽ない。愛の人、有島さんはほんとによい父さんであつた。

三人の遺愛に

澁谷のぶ

孤兒になられた行光さん、敏行さん、行三さん、
　行光さんがまだ六つで、敏行さんが五つ、行三さんが四つのお小さい時に、あなた方の大事なマヽ樣が亡くなられたことを、きつと忘れることが出來ずに覺えていらつしやるでせう。あなた方お三人の伸び伸びしてゆかねばならない魂に少しでも大きな傷を殘すことを恐れられたといふお母樣が、血の涙を流しても、最後まであなた方に會はない決心をされて濱邊の病院へ行かれる時、何にも御存じなかつたあなた方はたゞ驚いて、マヽ樣を乘せた自動車を見ながら、兵隊のやうな擧手の禮をなすつていらつしたさうですね。その頃からあなた方は此世の中にゐた者の姿が、いつとはなしに此世の中からなくなつてしまふといふ不思議を何とはなしに考へていらしたことだつたでせう。その時分、あなた方のお父樣が、あなた方のために書殘されたものに次のやうな一節のあつたことを御存じでいらつしやいますか。

（雨などが降りくらして、悒鬱な氣分が家の中に漲る日などに、どうかするとお前たちの一人が默つて私の書齋に這入つてくる。そして一言パヽと言つたぎりで、私の膝によりかかつたまゝしく／＼と泣きだしてしまふ。あゝ何が、お前たちの頑是ない眼に涙を要求するのだ。不幸な者たちよ。お前たちが謂れもない悲しみにくづれるのを見るに增して、この世を淋しく思はせるものはない。）

　小なあなた方のお心が、時々どういふものか淋しくて淋しくてならなくなつてくる譯を、誰よりもよく知つて、いらつしたあなた方のお父樣！　そのお父樣がお傍にいらして下さる間は、行光さんも、敏行さんも、行三さんも、まだ／＼世の常の坊やに比べたら、どんなに幸福でいらしたかを、じいつと噛みしめて御覽になる時がくることでせう。

　ところが、七年前にあなた方が信州の山の上にいらつしやる間に、マヽ樣を永遠に連れだしてしまつた不思議なものが

今年もまた何處からかふいにやつてきて、あなた方が鎌倉にいらつしやる間に、お父樣を此世の外へつれ出してしまつたことを、どんなにか恐ろしく不思議なことに思し召していらつしやるでせう。

「お父樣はそのうち歸つてくるのだらう。」とさういふ氣持もなすつていらつしやるかも知れません。

けれども七月の九日、あなた方三人がお揃ひのカーキ服にお揃ひの喪章を左の腕に卷いて、お父樣と最後の告別式をなすつたことは夢ではなかつたのでした。

（お父さん、左樣なら！）

言葉を揃へて惜別の挨拶をなすつた時、會葬者が皆、涙ぐんでしまつたのもほんとうのことでした。あの時人々はなぜ涙ぐんでしまつたのか、あなた方にそれがお分りになりますか。それはあなた方のお父樣の毎日の生活がどれだけ眞劍な歩みであつたか、あなた方を正しく愛する爲にも、今迄どんなによい戰ひを戰つていらしたかをみんながよく知つてゐるからでした。

（人々はよく幼兒の顏を見て、天眞とか、純潔だとか言ふが、自分はよく眞夜中に目を覺しては三人の子供の寢顏をしみじみみつめる瞬があるが、その度にいつも感じるものは、言ひ知れぬ悲しみであり、恐怖である。かうして無心な者の上にも何時何時、恐ろしい人生の運命がふりかかつてこないとも分らないと思ふと、自分にとつては子供の顏ほど恐ろしいものがなくなる。）

さう仰言つてお父樣があなた方の爲めに恐れていらつしたところの運命が、案の如く、今突然思ひがけない形で、あなた方の上に振りかかつてきたことが烈しく人々の心に響いてきたからでした。それからお父樣からあなた方への最後の遺書が新らしく人々の心を捕へてゐたもの〻一つでせう。

三兒よ！父は出來るだけの力で戰つてきた、かうした行爲が異常な行爲であるのは心得てゐます。いま、皆さんの怒りと悲しみとを感じないではありませんけれど、しかたがありません、どう斷つても私はこの運命から脱れることが出來なかつたから。

……………………

ただ母上と三兒の上を思ふ時涙ぐみます。三兒は仲のよい三人です。三人で仲よくしてゐなければ淋しくて堪らないもの共です。

と、書きのこしてゆかれたお父樣は、あなた方のお心の傷が一日も早く癒えて、三人が元氣で仲よく暮してゆくことを何

よりも念じていらしたのでした。

七年の間ママ樣のないあなた方をお一人で愛していらつしたお父樣は又かういふことを仰言つていらつしやいます。

（何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生えだ。泣くにつけ、笑ふにつけ、面白がるにつけ、淋しがるにつけ、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷つく）

ママ樣を失つた子供の不幸を、こんなにも堪へられないものに、心を痛めていらした情愛の深い、纎細なお父樣のお氣持は世の常の父親の中からは容易に見出すことの出來ないものであつたことも、やがてお分りになる時がくるでせう。それだのにお父樣は何故あなた方と別れておしまひにならねばならなかつたのでせう。人生の謎はもう漆黑い、斑點を小さなあなた方の心に印すのかと思ふと恐ろしくなります。

お父樣からのお手紙の一つに自分達は今笑ひながら輕井澤の驛で話してゐるとおつしやつていらつしやいますやうに、愈々死を決心して、死を踏臺にされた人には、死ほど容易なものはあるまいと思はれますが、人生にとつて最も恐ろしいのは死そのものではなくて、死に至るまでの心の經過が苦しくて恐ろしくてならないものなのです。その心の經過によつて死の價値が高くも低くもなるものです。世間の人々は今、あなた方のお父樣が死をえらばれたお心持について、色々な言葉を交しあつてゐます。あなた方も今に大きくなられてから、世間の人々の言ひあつた言葉を一々吟味なさる時がくるでせうが、人間のする批評といふものは、結局その人々の性格や認識の假定の上から出發してゐるもので、そのまま、自分のものとして取あげるのは嘘だといふことだけは知つていらしていいやうに思ひます。

あなた方のお父樣は嘗てかういふことを仰言いました。

（自分は何時如何なる時でも自分の心に忠實でありたい。自分の立場を枉げたくはない。それと共に他人に對しても又その人の立場のあることを見てゆきたい。出來るだけそれを容れてゆきたい。）

あなた方が將來お父樣の生涯を追想なさる時、同時にお父樣のみが持つてをられた心の立場（要求）を時代と空間を超越した最も廣い客觀的な觀照の態度で、考へていらつしやることが一番大切だと思ひます。

あなた方のお父樣がブルヂョアかプロレタリアートか、どちらか一方に徹してをられたならあなた方はまだお父樣と別れずに濟んだであらうと言ふ人もありますが、お父樣の心の世界にはお父樣にしか分らない懐疑の世界がありました。藝術的苦惱の世界がありました。ブルヂョアが徹底しろと言ひプロレタリアートが徹底しろと責めても、あなた方のお父樣

は御自分の本質的な要求が動かない以上はどうしても妥協をなさることが出來ない御性格でした。だからある時お父樣は、

(自分の心が眞實に隣人のために働きたいと思ふ時がきたら自分は喜んでいつでも確信をもつてこれに當る。)

とおつしやつていらつしやいます。ですから主義とか、概念とか、道德とかいふもので、あなた方のお父樣の今度の死を批判することは、流れる水を器に入れて、水の流れを知らうとするやうな不自然さがあります。それと同時に、人情とか、趣味とか言ふ小さな主觀に捕はれてはならないことも亦大切で、時と處を超越した、嚴肅な觀照的態度が、あなた方のお父樣の死を觀る態度であつてほしいと思ひます

「子を思ふ親の心は日の光世より世を照る大いさに似て」

と、お詠みになつて今から七年前に亡くなられたあなた方のあたゝかいマヽ樣。それから

(お前達を愛することを敎へてくれたお前達に、私の要求するものは、たゞ私の感謝を受取つて貰ひたいと言ふことだ。)

と小さなことにも深く掘りさげて物をお考へになる情愛のみがかれたお父樣と、お二人の恩愛の翼から離れて、これから先の長い人の世の旅に登られる行光さん、敏行さん、行三さんにあてゝ、私は今一言、お父樣からあなた方におくられた言葉を書き添へて見ませう。

(深夜の沈默は私を嚴肅にする。私の前には机を隔てゝお前たちの母上が坐つてゐるやうにさへ思ふ。その母上の愛は遺書にあるやうにお前たちを護らずにはゐないだらう。よく眠れ。不可思議な時といふものゝ作用にお前たちを打任してよく眠れ。さうして明日は昨日よりも大きく賢くなつて寢床の中から跳り出して來い。私は私の役目をなし遂げる事に全力を盡すだらう。私の一生が如何に失敗であらうとも、又私が如何なる誘惑に打負けやうとも、お前たちは私の足跡に不純な何物をも見出し得ないだけの事はする屹度する。お前たちは私の斃れた所から新しく歩み出さねばならないのだ。然しどちらの方向にどう歩まねばならぬかは、かすかながらにもお前達は私の足跡から探し出す事が出來るだらう)

七月の九日にあなた方の小さな胸の底に投げられた一つの黑い謎は、これからあなた方の成長につれて、だん〳〵疑ひの波紋を大きく廣げてゆくことでせうが、出來うるならお父樣を踏み臺にするところまで屆いて、(お父樣を正しくお知りになることがお父樣をお愛しになることでせう)三人で仲よく何か充實した立派なお仕事を創めて下さい。そして出來うるならばお父樣よりももつと英雄的に!お父樣よりももつと偉くあなた方の成長に努めて下さい。 (七・十二)

運命の犠牲者よ

加藤一夫

大いなる　運命の手が
つひに
あなたたち二人を
この世から　虚無の世界へ
かつさらつて行きました
残された　あなた達の
親　兄弟　子ども　友人達に
悲しみと　嘆きと　驚きとの
異常なる神経の波動を　傳へて
わたしは
あなた達の　行動に關して
是非の批判を　下さうとはしません
たゞ　如何ともし難い
運命の力の　はたらきを見るばかりです
人間の　一切の努力にも拘らず
人間の　不可抗の慾望にも拘らず
いや　それらのすべてが
錯綜して
それらを　跡かたもなく
ふみにじり　打ちくだき
永劫の　虚無が人生に
君臨するのです

人生は戰場です
人生は　生命の悲痛なるいとなみです
蒼白い　憂鬱の月光に光被される
生ける墓場です
それは森嚴なる場面！
けれどまた
虚無の傀儡の――人間たちの
絕望的な兒戯！

そしてあなた達は
その痛ましい戰士
月光のもとに　舞踊する慾望の焰
凄慘なる微笑
絕望的な哄笑
虚無が支配します
その虚無を　あなた方は

征服しました
あなた方には
道德がありません
道德はあまりに小さすぎます
あなた方には
死がありません
死はあまりに無力です
あなた方の虚無が
死を征服したのです

あゝ　そこにあるものはたゞ
悲愴なる詩
悲痛なる笑ひ

あなた方は
運命に　素直でした
では　その運命とは？

一方では
嚴格なる家庭
基督教の　ストイシズムの洗禮
他方では
熾烈なる慾望
ヘレニズムの　解放

あなたのうちに　この二つのものが
つねに鬩つてゐました
あなたはそれを
どちらか一方に　片つけるほど
それほど眞實を　蔽うものではありませんでした
あなたは　人間でした
そしてその人間は
あなたの思想と生活とを
もつれ合はせ
行きつまらせました

一方には　また
まだ　殘されて居るブルジョア意識
他方には
現在の一切を破壞し
否定する
プロレタリアのこゝろ

あなたは　自分の地位を
知つて居ました　けれど
あなたの衝動は
プロレタリアの行動に
參加しないでは居られませんでした
あなたは
分裂せる自我でした
あなたの生活は

矛盾した兩極の爭鬪でした

相反せる　二つの要素よ
それこそは　悲劇の父
不可抗の　運命
あなた方は
その運命に　從順でした
そして
最後の詩を　血で綴りました

あなた達の死が
新聞で報ぜられたのは
解放戰の最初の犧牲者
プロレタリアのうちのプロレタリア
高尾平兵衞の　葬式の日の朝でした

一つは　プロレタリアから
一つは　ブルジョアから
解放戰の　偉大なるいけにえ

あゝわたしは
高尾の死を知つた朝の
わたしの昂奮を忘れるものではない
新聞をまへに
彼の寫眞を瞶めつゝ
わたしは　ボロ〳〵と　涙を流しました
そして　わたしは今
あなたの遺書をまへに
異常なる昂奮に　おのゝいて居ます
告別式の日の
あの光景──
花輪の山の中に
今はすでに
此の世のものでない　あなたの寫眞が

寂しい面影を残して居ます
あなたの　著書が
聲もなく　弔問者に囁いて居ます
焼香の煙が昇り　消えて行きます
年とつた　あなたのお母さん
ほんたうにまだ
人生を知らぬ　哀れなる
あなたの　三人の子たち
親しかつた　あなたの兄弟達
ずらりと並んで
弔ひの客を迎へて居ます
涙なくして　誰が此の光景を
見まもられませう

だが　いとしい子達よ
あなた方の　この悲しみも
所詮は　人生の運命であれば
たゞ　忍んでお呉れ
恐らく　あなた方の成長とゝもに
あなた方の負ひきづも成長するでせう
だが　せめては　あなた方の
人生のまことの相を見る眼の
少しでも早く　ひらけるのを喜んで下さい
わたしとしては
最後のどたんばでは
死は　全く無力であるのを見て
勇氣づけられ
はげまされたことを
心から感謝します

知己として一言

藤森成吉

今度の有島氏の死については、私は今何も云ひたくない氣がする、もう少し待つてたら。時がすべてを明かにするだらう、そればかりでなく、近く「泉」の紀念號に於いて、足助君がその事實を殘らず發表する筈になつてゐる。

が、いろんなことを考へれば考へるだけ、又足助君の話なぞを綜合すればするだけ、我々故人と親しかつた者としては、如何にしても殘念な氣がしてたまらない、外の人は何と云はうと、私だけは、どうしても今度有島氏を死なせたくなかつた者だ。

私は、對手の波多野氏とも二度ばかり會つたことがある、勿論雜誌の用で、話をした時間も極わづかきりだが、彼女がどんな婦人かと云ふことは私は一見して知つた、殊に藝術家に取つて、そんな意味の第一印象はほとんど絶對と云つていい。

「標緻を種にするなんて、まつたく滑稽ですね。」

去年の初めあたり、ふと彼女の話が出た時、有島氏は私へ向つてそう云つた。

「それほどの緻縹でもないぢやアありませんか。」

私はいつもの癖で云つた——。

そんなに云つてゐた氏が、それから一年半近くの後に彼女と一緒に死なうとは——。

私は、今もなほ有島氏の人としての、又藝術家としての認識力を確信する者だ、そうしてその奥底の認識力を信じれば信じるだけ、今度の、彼女の誘惑に負けた後の——記憶せよ、氏は六月四日に到つて初めて肉體的に敗れ、九日の未明にすでに絶命してゐることを、——氏の執つた方法を、深く理解することの出來る氣がする者だ、ここに到つて、初めて有島氏の全生涯と最後とが、何等の撞着なくハツキリと私の腦裏に浮びあがる。この事は、いつかずつと時が經つてから、ちがつた形式のもとに書いてでも見るよりほか仕方がない、

が、さう思へば思ふほど、それはヨリ悲劇的だ、さうして、友人達をしてあくまでも口惜しがらせずにはおかない事件だ。繰り返して云ふが、これは決して有島氏の認識力の弱さを證明する結末ではなく、氏の別な殉情的方面を物語るものだ。私達から云へば、どうして何とかあそこでもう一遍踏ん張らなかつたか、と思ふが、さうして、さうさへしてくれたら後でこんなに我々を口惜しがらせずに濟んだらうものを、と思はせるが、氏としては恐らく、やむを得なかつた道だらう、氏の生前云つてゐた「宿命的」「先天的」の力だつたのだ、單に性格、又は行爲の上から見ても、それは人間的非難に値ひするものではなく、或る意味では人間的美點だとも云へるだらう。

私達は決して、又獲ることの出來ない知人を失つた爲めに、否、失はせられた爲めに、その對手の婦人を怒つたり傷つけたりしやうとする者ではない、そんなことは、あの遺書どほり誰をも傷つけまいとして死んで行つた――然も故意でなく本心から――故人に對しても、あくまで愼しまなければならないことだと考へる、が、知人を知つてゐる者はやつぱり知人だ、あまりに見當ちがひな論評や臆測の盛んに語られる時、一言このことを云つておくのはやまれない氣がする。

人の死

田原梅乃

ゆえわかぬ口惜しさの湧き來るをおぼゆ。

相語り笑ひつゝ死につけりちふ
痛き言の葉殘すものかな

○

悅びて人や死に得べき其の子等を
親を忘れて人や死に得べき

○

死につける一途なるそのひた心
せつなかりけむそのひたごゝろ

殉教者へ

田中純

數ケ月前、竹内仁君の事件が起つた時、私はそれを、すぐ隣りの町に起つた火事のやうに感じた。が、今度の有島武郎氏の事件は、私には、同じ町内の火事だつた──あぶない！あぶない！──と、自分の身に水をぶつかけてゐる私は、同時に赤熱の火焔に、五體をあぶられてゐる私だつた。

七月八日の夜半、尊敬すべき時代の殉教者の遺骸は、降りこめた雨の中を、ごく少數の近親や友人に取りかこまれて、靜に黒布の上に安置されてゐた。その朝、鎌倉で、初めて變事を知つた久米と私とは、實は、戰場のやうな席を豫想して出て來たのだつたが、來て見て、その餘りに靜かなしめやかさに、先づほつと息をついた。巨星の隕ちた後にふさはしい靜けさだつた。

その夜生馬、弴、行郎の諸兄から、こま〳〵と今度のことを聞いて、通夜の席を辭したのは十二時過ぎだつたが、しばらく、二人とも、何うしようもない亢奮に苦しめられてゐた。

□

私が武郎氏に可なり繁々とお目にかゝつたのは、大正七年の春から、凡そ一年半か二年ぐらゐの間であつたと記憶する。その頃「新小說」の編輯をしてゐた私は、その雜誌に原稿をいたゞいたり、口繪の御相談を願つたりした關係上、絕へず生馬氏をお訪ねしてゐたものだが、そのうちに武郎氏ともお會ひするやうになり、やがて、小說や論文の執筆をもお願ひするやうになつたのであるが、さうして最初に出來上つたものが、實にあの「カインの末裔」であつたのだ。

好い原稿が出來上つて來た時、あの他人事でない喜びは、たゞ雜誌の編輯の經驗を持つたもののみが知つて居る。實際私は、あへぼざり〳〵とした、しかし何處か味ひのある文字で書かれた原稿を通讀した時には、驚喜した。早速、印刷に

起して、翌月の雜誌に出したのであつたが、果然、同じ月に「新潮」で發表された「小さきものへ」の一節と共に、過甚の好評を受けた。有島氏の文學者としての聲價がこの時に確立したといふやうなことが、この二三日の新聞に見へて居るが、少くとも、氏の作品が、これまでよりも一層廣い社會に呼びかけるやうになつたその緒は、矢張りこの時に開かれたのだと思ふ。

□

後のことは知らないが、その頃の武郎氏の原稿には、その餘白に、隨分面白い樂書が多かつた。大抵、ペンで描かれた繪で、多分、書き倦んだ時に、一寸息拔きするために描かれたのだらうと思ふが、その繪が原稿の一部をなしてゐると言つても好いやうな、作品にくつついた面白味のあるものも甚だ少くはなかつた。例へば「カインの末裔」には、二三ケ所に皺だらけの老爺の首が描いてあつた。勿論これは、あの作の主人公重右衞門の顏を作者が想像して描いたものか、或ひはあの作のモデルを思ひ出して描いたものに違ひないが、その未開人らしい剛嚴な顏つきは、今でも、私の眼に浮んで來る。それは、繪としても、たしかに好いものだつた。が、それよりも、有島氏が、作中の對象を、はつきりしたギジョンにして摑んでゐられたその用意に、私はむしろ驚いたのであつた。

が、かうした樂書の中で、有島氏の作品の傾向に結びつけて考へて見て、最も多く私の興を惹いたものは、ところどころに、會話中の一節が、英語で、欄外に書いてあつたことである。これは多分、最初の發想が、英語で作者の頭に浮んだのだらうと思ふが、これは、有島氏に取つては、さう珍しいことではなかつたらしい。現に、矢張りその頃に氏が書かれた或る論文（それは調べて見れば解ると思ふが）の如きは、最初に全部英文で書き上げて、その後にまた日本文に譯されたことを私は知つて居る。手數はかゝるが、何うもその方が具合が好いと云ふことを、氏自身私に話されたことがある。

勿論、それは、その頃だけの習慣であつただらうと思ふ。その後、仕事が急に急がしくなつてからは、まさかに、さうした手數のかゝる方法を取られたらうとは思へないが、しかし、英語による發想の痕跡は、最後まで氏の文章に附きまとつてゐたやうに思ふ。實感からの適度な控へ目に或るよさを感じて來た日本文學の傳統に馴れた者の眼に、有島氏の文章が、やゝともすれば、實感から一歩先走つてゐたやうに感じ

られたのも、或ひはさうした發想法の相違からではなかつたかと、私は今になつて思ふのである。

□

私たちから言はせれば、有島氏のこの發想法は、むしろ一種の奇癖であつたやうに思ふ。そして、さう云ふ點からは、相當に奇癖を持つて居た人のやうに思ふが、しかし、日常の實生活の上では、割りに奇癖の少い方の人で、從つて、普通の意味での逸話などは、餘り多く持つてゐなかつた人のやうに思ふ。實際、私は、有島氏に關する美談は相當に聞いたが、しかし、逸話と言つたやうなものは聞かない。私が現に見たことで、多少奇癖らしいと思つたのは、有島氏が並外れて漬物好きだつたと云ふくらゐのことだが、これも或ひは、私自身が漬物嫌ひのための僻目かも知れない。が、それにしても、有島氏が漬物好きだつたことは事實で、或る日、氏の書齋で晝飯を御馳走になつた時、大きい丼に盛られた漬物を、殆んど一人で食べてしまはれた時には、私は一寸驚嘆したことがある。それも、普通の食べ方ならばまだ驚かなかつたのだが、決して尋常一樣ではないのだ。先づ膳のものをすつかり食べて、お茶を入れて、普通の人が箸を擱く時になつて、初めて、「さて、これから」と云つた調子で、また第二の食事でも始めるやうに、漬物をむさぼり食ひ始めるのだから、私としても驚かざるを得なかつたのである。

□

食事と云へば、これは武郎氏としてさう多くない出來事の一つだつたらうが、一度、新橋の新喜樂と云ふえらい待合で、一座したことがある。

その頃、私たちは、末日會と云ふ一つの會合を作つてゐた。毎月の末日に、文學者その他各種の職業、階級の人たちが集つて、一夕の晩餐を共にしようと云ふのが趣意だつたが、なにしろ、當時は、デモクラシー運動の白熱期で、而もその發企人が、大山郁夫、生田長江、室伏高信と云つたやうな、その方面での闘士揃ひであつただけに、勢ひ、當初は、デモクラシーの實際運動と見られる傾きがあつたし、事實、私たち發企人の心持は、初めはそこにあつたのである。で、有島氏も、最初の幹事の一人として、しば〳〵その會合に列せられたものだが、その頃に、一度、中日實業の尾崎氏から招かれて、あの廣間の客になつたことがある。

大山、有島、生田、室伏などの諸兄と共に、あのブルジョ

アの牙城に集まつたことを考へると、今では隨分珍奇な思ひもするが、なにしろ、その頃はまだ、政黨政治だの普通選擧などと云ふ問題が、僕等の眞面目な話題になり得たのだから止むを得ない。勿論、その日も、さうしたことが主要な話題になつたに違いないが、さうしたすべてを忘れた今、私の記憶にはつきりと殘つてゐるものは、その時の武郎氏のお客ぶり、と云ふよりも、藝者やお酌たちに對する、温厚な叔父さんらしい態度だつた。

もし、花柳界好みの言葉を用ひるならば、その日のお座敷は、すつかり有島氏にさらはれた形だつた。勿論、有島氏は酒を飲まなかつた。が、絶へず、微笑しながら、愉快さうに靜に談笑してゐる有島氏の周圍に、何時の間にか、一座の女たちがすつかり集つて行くやうな形になつてゐた。

「これを、よく考へて當ててごらんなさい」

座にあつた筆と紙とを取つて、簡單な判じ物を考へては、お酌たちにやらせてゐるのだ。

「叔父さん、解らないわ」と、女が言ふ。

「まあ、もつと考へてごらんなさい」

――――大體、かう云つた調子なのだ。これがもし、普通の人であつたならば、かうしたお座敷の持ち方は、實際、鼻持ちのならない厭味なものであつたに違ひないし、多少年功を經た妓ならば、忽ちふゝんと皮肉な笑ひでももらすところだが、有島氏には、さうした厭味は寸分も感じられなかつた。實際、あるが儘の、愉快な有島氏だつた。

「なるほど、これは一等俳優だな」

私は、その時、正直に、さう感じたのであつた。

□

その頃の夏、私は一度、輕井澤の別莊に、有島氏を訪ねたことがあつた。別にこれと云ふ要事があつたのではなかつたが、恰度、神戸の病母を見舞ふついでに、相馬御風氏を越後に訪ねることを思ひ立つたので、その途中に、有島氏や里見君を訪ねるつもりで、輕井澤に下車したのである。折あしく、里見君は、その前日に東京へ歸つたところだつたが、停車場からの可なりの道を歩いて、漸く、あの瀟洒な山腹のバンガルウに辿りつくと、私はすぐ、屋根裏の武郎氏の書齋に案内された。

「何うも、今年は、この家も大入滿員でしてね。屋根裏までも書齋兼寢室に使つてあるんですよ」

私の顏を見ると、武郎氏はすぐ、さう言はれた。勿論、私

は、その夜の夜行ですぐ越後に立つつもりだつたから、その御心配は無用だつたのだが、有島氏は、歸る時までもそれを言つて、私を引きとめることが出來ないのを氣の毒がつて居られた。

涼しい、眺望の好い窓のそばで、私たちは三時間も話して、それから階下の客間で、武郎氏や母堂と御一緒に、里見の奥さんの御給仕で、夕食をいただいた。勿論、立派だと言へるほどの部屋ではなかつたが、火山石をそのまゝに築いて作つたストオヴは、幾らか不調和な、グロテスクな、少々陰慘な感じはしたが、私には、珍らしかつた。

その夜私は、提灯を持つた有島氏に町の停宿まで送られて、輕井澤を發つたが、その後、數年を出でないうちに、あの梁の多い家の、あのグロテスクなストオヴを持つ部屋に二つの白骨の棺はつてゐることを何うして想像し得ただらう。實際、それは、宿命と云ふには餘りに慘ましい。

が、今になつて考へれば、有島氏がその死を思ひ立つた時、先づ、この家を思ひ浮べたであらうと云ふことが、非常に當然なことにも考へられて來る。あの家の第一印象が屋根裏であつたためか、私は、あの家がいやに梁の多い家であつたことを、今、思ひ起す。實際、部屋の中にあるただ一本の梁だつて、吾々に、死を思ひ起させることが珍らしくない。いはんや、あの梁と、あのストオヴ！

死んで行つた人たちに取つて、あれは惠まれた墳墓であつたかも知れない。

しかし、あゝ、遺された人々に取つては？

死の家よ、呪はれてあれ！

「あの家が、大さう君のお氣に入つたさうですね」

その後、私が、何かのついでにあの家のことを聞いた時、武郎氏が私にさう言つたことがある。

しかし、私は、あなたの墳墓にするために、あの家が氣に入つたのではなかつたのだ。

□

私が最後に有島氏に會つたのは、昨年の秋の暮れだつた。當時、或る戀愛事件の渦中にあつた私は、なるべく知人に會ふことを避けてゐたのだつたが、これから鎌倉に歸らうとする有樂町驛の人ごみの中で、久しぶりに、ぱつたりと有島氏に出會つたのだつた。

正直に言つて、その時、私は、有島氏のやうな人に或るひけめを感じてゐたので、何となく、惡い人に會つたと云ふ

氣がしたが、しかし、知らない顏をするわけにも行かなかつた。

私は、「しばらくです」と言つて頭をさげた。と、武郎氏は、何と思つてか、しばらく凝と私の顏を見てゐられたが、やがて、

「君、元氣ですか」と一語言つて、また例の親愛に滿ちたまなざしで、私の顏を見つめられた。恰度、そこへ、電車が來たので、私たちはそのまゝ忙しく別れてしまつたが、私に取つて場合が場合なだけに、また、氏の意識の中に、私に對する或る慰問の意のあることが明らかなだけに、私はその時、何となくいやアな氣がした。實際、他人に憐まれることは、如何なる場合でも、堪らないことだ。と、その時、思つたのである。

しかし、今になつて、私には、その時の氏の凝視の意味が少しづゝ解つて來る氣がする。それが、私に對する非難であつたのか、それともまた勵ましであつたのかは知らないが、しかし、斷じて、憐れみではなかつたと云ふことが、次第に解つて來る氣がする。

□

その後、私は遂に有島氏に會はなかつた。勿論、氏に、さうした戀愛事件のあらうことなどは、想像にさへ浮ばなかつた。たゞ、この一ケ月ばかりの間、里見君たち兄弟の間に、何か、非常に重大な心配事があるらしいことや、それが武郎氏の身邊に關する事柄であるらしいことだけは、ひそかに察してはゐたが、私たちが立ち入るべき筋合のものでもないので、いろ／＼想像はしながらも、たゞ見てゐたのである。而も、それが、あゝした新聞記事になつて現れやうとは！

有島武郎氏は死んだ。悲痛な殉教者の死を選んだ。最も有島氏らしく死んで行つた。私は今、その生に對しても、その死に對しても、これを非難する氣にはなれない。勿論、その死を憐れんだり、悼んだりする氣にはなれない。憐れむには餘りに尊い死だからである。

しかし、讀者よ、私に愚痴を語ることを許してくれ。

有島氏は何故、死なゝければならなかつたのだらう？ 何故、死なないで、生きて、戀愛の悲痛な現實を解きさばいて見せてくれなかつたのだらう？ 人生そのものの如く古くして新らしいこの悲劇、幾萬幾十萬の古人今人が、血みどろになつて解かうとして來たこの悲劇を、有島氏は何故、現實的に、社會的に、解きさばいて見せてくれなかつたのだらう？

私は、かうした場合の死が、それほど容易なものでないことを知つて居る。しかし、世には、死よりもなほ痛い生で、最後の「意志」を貫かうと努める者もあり得るのだ。

しかし、有島氏は、それを徒勞だと見たのだらうか？

彼の愛は、何故もつと惜しみなく奪はなかつたのだらう？

しかし、讀者よ、これは私の愚痴だ。彼ほどの人の死に、何の錯誤があり得やう。

はだか身になつて、世と戰ひ、人と戰ふには、餘りに重いものを背負つてゐた彼だつたのだ。――それを思ふと、私には言葉がない。

（大正十二年七月十一日記）

血の力

片上伸

斯う云ふ事件は非常に複雜で、表面に現はれたゞけでは、眞相は到底解るものではない。故に、具體的の批評は困難である。

いかんなき具體的の批評は、有島氏の生活を藝術の題材として取扱ひ得た場合に、始めて成り立ち得るであらう。即ち全體的の批評が成り立ち得るであらう。

若し有島氏の、個人の性格を中心として考へて見るなら、作品も、生活態度も、キイノオトは、自分の内部に秘んでゐる血の力に對する戰であつたと云ふ可き點が多い。それを戰ひながらおさへ／＼して來た結果が、一般の世間の眼には、或は僞善者と見えたり、温良の君子人と見えたりしたと解せられる。

今回の事件は、有島氏自個の内部に對する戰の最高調に達した形と思ふ。

對世間的には破綻である。然し、氏自身としては、その戰の極、最後の決心をして後は、恐らく、今までの有島君とは違つた心持になつて、一つの統一のある、新しい世界を想望する悦びを感じてゐたかと察せられる。

二つの障壁

（氏は自己の死の豫言者であつた）

鷹野つぎ

有島氏はいつぞや、『自己の要求』と題する一文の中で、環境といふことについて可成り詳しく論じて居る。環境と云つても廣い意味の、對社會的考察ではあるが、もし自己を低下させ、墮落させて行くやうな環境に對しては、自己が環境に禍すると同じ意味で、責任を持ちえない、と云つて居る。そこには反證的に氏のブルジョア意識の、働らいて居る事は云ふまでもないが、色々な對社會的な苦惱、有產階級者の自耻心、生活更進の努力――然うした內的な苦悶から、果てはつく／＼環境の、ぬきさしならない事を自覺しての、深い考察によつたものではなかつたかと思ふ。

氏は然うして、徒らな焦慮の氣持ちから、も一度自己にかへつて、そしてすべて自己發心による、生活を築かうと、心がけて行つたやうであつた。それは氏も云つて居るやうに『私は飽くまでも自己本位』であるやうに見えた。しかしながら其れは決してイゴイズムと同一にすべき、自己本位でない事は明らかである。爾來、最近にかけての氏の作品を通じて見ても、此の心がけは儼として一貫して居たやうである。此の間にあつても、どうかして生活改進の爲めには、公人としても出來るだけの事はしよう、と絕えず努めて居られた。土地無償分譲だとか、私有財產の分配だとか云ふことにまで氏は全然その實を擧げるまでには、至らなかつたとしても、實行に移した人であつた。それほどの努力も、對社會に照らして見れば、或一部からは、僞善者の名をもつて呼ばれたりまた要するに自己滿足の一端に過ぎない、などと評された。

氏はもとよりそんな噂は、風馬牛に聞き流して居た事であらう。しかし少なくとも心理的には理否曲直をなほざりにし

て置けないやうな、潔癖であつたらしい氏の性格では、環境意識からの脱却は、當然でなければならない。

斯う云ふ意味の氏の『自己本位』は、何んとしても文字通りに解釋すべきものではない。氏が環境を怖れ、避け、無視すればするほど、いかに社會意識に囚はれて居たかを、思ふべき性質のものである。氏としても斯う云ふ決心をするまでには、本然の謙讓な心持ちに立ちかへつて、なされた事は疑ふ餘地がない。要するに何をするにも、先づ自己の要求より發するところによらなければならない。力を養はなければならない。人間として深められるだけの生活を經て行かなければならない――。

私は斯う云ふ氏の決心を窺ひ知る時、寧ろそれが廣い意味の、人間としての愛他主義である事を思つた。

氏は氏の生活を深め、更らにそこからずん／＼廣い道に、確りと踏み直して行くに違ひない。私は氏の使命、と云つては語弊があるが、實際氏の如き人が、一度び廣い地盤に足跡を表はしながら、それきりで單なる小さき自己の殼の中に、踏み止まるべき人ではないと思はれた。

今度の氏の死については、私は愕ろきよりも自然の偉力、人間性の脆さを感じた。私は愕ろきのあとには、悲しい淋しい氣がした。恰も放たれやうとした矢が、弓弦をはなれて力なく地上に墜ちたやうに思つた。

けれども更らに思ひかへしてみれば、それも氏の謂ふところの『自己生活』の、途上にあつた。大きな暴風雨に例ふべきものであつたかもしれない。それは餘りに力强かつた。疾風の勢ひで氏をなぎ倒してしまつた。氏はそして踏み切る事が、できなかつたものと思はれる。

私は氏の遺書の一節にあつた『できるだけ闘つてきたよ』といふ言葉の中に、私としては、無量な意味を思はずにはゐられない。ある一面の見方からすれば、氏は社會的にすでに闘ひあぐねて居た人であつた。そしてまた漸く個人の生活に立脚しようとして、その半ばにも至らずに、又もや氏は闘ひに力盡きた人となつた。

氏はいかにその環境の偏狹兩端に亘つて、此の時代の人として脅かされた人であつたらう。熱烈な求道家として、理想家として、また情熱即神の、信仰をもつてゐた人としても、氏はつひにその實際の生活に於ては、何れとも全き勝利者と、なりうる事ができなかつた。

死の刹那に於ても、私はあのホイットマンの詩の愛誦者と

して、戀愛の至純に耳を傾け、死の欣仰に耳を傾け、愛人讃美に耳を傾けたやうな氏であつても、環境をかへりみ・また氏の透徹した理智を透して、實際現狀の生活に、全然無關心ではゐられなかつたらうと思ふ。それは氏の遺愛に注がれた、涙ぐましき遺言によつても明かである。私は戀愛感の極致・その統合的心境の、氏にありえなかつた事を思へば　そぞろに悲しみを禁めえない。

　父親の苦を懷き、同胞の苦を懷き『しばらく世の習慣からはなれて考へてくれ』と、云つて死について行つた氏を・私は決して自己の分裂でなかつたとは思はない。斯う云ふ意味で私はまた、今度の氏の死に至るまでの消息を察して、舊套を脱してゐないと云ふ人々にも、異存をもたねばならない。氏の人となりとしては、寧ろそれほど切迫詰つた刹那に於てすら、その『追ひ詰められた死』と評される以上に、もつと深い自己心内の苦悶がありさうな事は、當然だからである。

　若し斯う云ふ心持ちを、氏が廣い意味に統一して行くことができたとしたら、非常なものであつたらうと思ふ。けれども氏のやうなどちらかと云へば世ずれのしない、非常にナイヴな處のあつた人としては、氏の撰んだ道は、一面から云へばありさうな事である。然うした自己の分裂や、いろ〳〵な反省や考慮につきまとはれながらも、なほ死に導かれる分子が多かつたとすれば、そこに氏の性情・育ひ立ち——、然うしたものが、胸にはつきりと投影されてくる。しかしながら斯うした立脚點から、氏を人生に於ける、最も幸福感に導いて行つたものとしたら、僅に氏ほど祝福されたものはないと云へる。ともかくも遺書にもつた通り、愛兒にあれほどの哀別をもちながら、同時に氏は決して何等の外界の指たなく、全く自己の歡喜によつて、死について行くと云つてゐる。これが信ずべき氏の最後であつたとしてみれば、死んで行つた當人たちにとつては、これほどまた幸福なことはなかつたと云へる。

　斯う考へてくると、そこにどちらにより強いものがあつたか、氏の實際の行爲に照らしてみて、判明である事は爭はれない。氏等としてはそれは當然幸福であつた。自己の要求として、實行に移した氏の行爲としては、何らの手すきもないことになる。

　けれども此處にたち到る前に、氏には强烈な運命愛があつたやうである。此のことについて、私は稍卑近なきらひはあるが、氏の當時の消息を、新聞の報導などでつゞり合せてみる氣になつた。それによると眞僞のほどはまち〳〵で、信じ

られないとしても、何んにしても氏は色々と切迫つまつた環境にあつたらしい。自分が死ななければ、相殺するやうな激しい手蹟も現出されなければならない。然う云ふ立場にもあつたらしい。此の間にあつて氏がその文章の上に、また實生活上に、死に關して深い理智の力を透して、考へつめて居た事は事實であつたらしい。

斯う云ふ考慮の間にも、同時に自己要求の障害となるべき色々の反省があつても、なほ氏に戀愛の歡喜が高く持ち續けられたとすれば、その異常な力であつた事も、また察しられないでもない。

けれども私はそれをもつて　死に至る道を運命に結びつけた氏の心持ちに、云ひがたい悲痛を覺えるのである。運命と云へば人爲の如何ともしがたい力、自然への不可抗力と解してもいゝ。これは重大なまた人生に於ける、嚴肅な意味になる。しかし實際の言葉に從へば、生きるに堪へない、また動きがとれないところまで、自己を引摺つて來たのが、既に誤りの第一歩である、と云つてゐる。若し生きてゐたならば、彼れは實際に戀愛關係からはなれた、種々のむづかしい罪惡感に斷り立てられねばならぬ、同時に眞の自己の要求を、自ら死に至るほどの切迫つまつた方面にとつた、その重大な自制心の消失については、少しも看過する餘地がない――。

氏ほどの人が、斯う云ふ點に氣がつかないとは思へない、斯う思ふとき私は氏の自己より發した運命感が、矢張りあの環境より投ぜられた同じの意味の、絶望に類してゐたものではなかつたかと思はれるのである。私の思ふところに從へばこれは氏にとつては、悲痛なる自他二面生活の崩壊である。

斯う云ふ考へ方から、ごく手近な話柄に移つてみても、氏が愛兒を殘して、路頭に迷はせるやうな苦慮があつたとしたら、此の一面の崩壊は、他のものによつて立て直されてゐたかもしれない。少なくても一種の回避、或ひはイゴイズムの表はれともとられさうな、斯うした行爲には陷らなかつたかもしれない。

しかし何んと云つても氏の心底には、それだけの餘裕があつた。子供たちはともかくも飢ゑさせる事はない、斯う思ひえた一事だけでも、幾分氏としての責任感にはゆとりがあつたに違ひない。實際に親としては財力もなく身よりもなくて子供を路頭にうつちやるやうな破目を知りながら、自己の歡喜に陶醉するなどと云ふ事は、普通の人間としてはできえないことだ、自己を歡ばせると云ふ心持ちは、同時に他を憐れむと云ふ心持ちにも、たやすく通じうる。斯う云ふ點では氏

の環境は、逆に氏に祝福した事になつてゐる。

斯う云つても私は決して、死屍に鞭つつもりではない。先づありふれた人間としては、一般にそんなものではなからうかと、自分を通して判斷するばかりである。

要するに斯う云ふ問題は、深く立ち入れば入るだけ『彼と彼女』の間の事で、絶對に第三者の關り知る事のできない、境地に到るよりほかはない。そして第三者として云ひうる事は、一口に云つてみれば當事者たちの、餘した問題についてゞある。社會風敎上から見て、人道上から見て或は人間性から見て、いろ〳〵とある。また論ぜられる立場としても、それを是として諒解するもの、また危險どして解さねばならない者、いろ〳〵と出てくる。私としては斯う云ふことになつてくると、確りと各々の心境に訴へねばならないことは、とにかく第三者の何人も、その當事者と同一の心境、自己環境にあるものではないと云ふことである。それを土臺として各自の判斷に任せるよりほかはない。恐らく斯う云ふ風な立場をとれば、たやすく雷同したりするものも、批難するものも讃美するものも、自己をはなれてはありえない事になるであらう。

何んにしても私としては、有島武郎氏の死を限りなく惜しく思ふ。もつと〳〵何らか廣い意味で、力強く歩み踏みしめて行く人ではなかつたかと思ふ。

附加

此の一文を書いてから私は、讀み洩らした氏の作品にできるだけ眼を通してみた。すると一つの新しいことを發見した。それは氏が既に早くから氏一個の『死』の問題について、恐らく我國には比類なき、探究者であつたと云ふ一事であつた。所謂『定命の死』の無意味であることを、氏ほど瞭りと言明したものは、私の知れる限りではなかつたであらう、けれどもその『不時の死』に生命の極致と目たであらう、己の浪漫性とを附與した、氏の見識に對しては、たやすく肯定しえない人々もまた、澤山にゐるに違ひない。

それは別のこととして、氏が氏一個の死について、的確なる豫言者であつたといふ一事は、驚歎すべき事である。その死後の醜骸にまで誤たぬ豫言をしたに至つては、奇怪な感さへ伴つてくる。斯うした氏のやうな一存在に對しては、寧ろ一局面に執しての批評は、或ひは意味をなさないものになつて來るかもしれない。

私は何人にしても人生の歡喜を追及した所の、一大夢想家としての氏を發見する前に、氏の長い苦難の生活について、先きに云ひたい事を云つて居た自分を、仕合せであつたと思つた。

七、十、

有島氏の死と外界の壓迫

生田長江

死者に對して特別に寛大な態度を取るといふ、我々日本人の習慣は決して惡くない。もしも外國人にして其美しさや氣高さが呑み込めないといふならば、それは單に彼等自身の不名譽であるに過ぎないであらう。

しかし乍ら、有島氏等のこの度の事件なぞに於ては、それに對する餘りにも遠慮ぶかい觀察や、お座なりに過ぎる好意的批判やが、一般社會へよからぬ影響を及ぼしたり、事件その物の未來の惡影響を、ゆゆしき程度にまで手傳つたりするかも知れないことを思へば、私共は此際幾分の因襲的禮儀を犧牲にしてでも、十分正直に、忌憚なく、ありの儘なる所見を述べなければならないであらう。

勿論、私は七月十二日朝刊までの、各新聞紙上に現れたただけの材料により、ほんの間に合せの觀察なり批判なりを加へるに過ぎない。そして非常に有力な新材料の提供された場合、所見の謬を正し、足らざるを補ふに吝ならぬことを約束して置かう。

有島氏とはあらゆる意味に於て無二の親友である、足助素一氏の談話によれば、有島氏の『心持——それは思想的には近來行つまつてゐた』とのこと、又其事は氏の書かれた『宣言一つ』『文化の末路』『獨斷者の會話』などで凡そうかがへるとのことである

行きつまつたと云ふのは、恐らく、過去の數年または十數年に亘つて歩きつづけて來た氏の理想主義的乃至人道主義的進路を、その儘に追ふて行くことが出來なくなり、謂はば人生の肯定から否定へ、少くともナイイフに單純な肯定から、虚無主義的な否定的肯定へ過渡することの必要にせまられたといふほどの意味に於て、實際の事實であり得たであらう。

勿論虚無主義的な人生觀は、必ずしも積極的な死の憧憬を生むものではない。しかし乍ら、それが非常に緊張した切實

たものである場合、つひに實際の自殺にまで導くといふことと
ふ稀有の事ではない。加之、もともとからの死の憧憬や自殺への衝動やが、その爲めにより力強いものになつて來るのは、むしろ當然すぎるほどの事柄であらう。

有島氏が其弟妹達へ與へた遺書の一節には『私のあなた方に告げ得るよろこびは、死が外界の壓迫によつて寸毫も促されてゐないといふことです』とある。

私共は平生から、氏が常識的な意味に於て、所謂世間人として、紳士として、十分に正直な人格者であることを信じながら、尚ほ且つ思想家としての、內觀者としての氏の正直さを、同じ程度に信ずることが出來なかつた。換言すれば、どんなに嚴肅な態度の下になされたる氏の言說にも、常に善き良心を伴へる、何等かの虛僞の擦り殘されてゐることを看過し得なかつた。

右に引いた遺書の一節にも、遺憾ながらさうした性質の、極めてデイリケエトな虛僞がこつそり忍び込んではゐないであらうか。

波多野秋子氏が世上傳ふところの如き人物であり、直接間接に有島氏を脅迫したり、數字をあげてまで賠償金を強要したりしたのであるか、それとも現在のところ石本男爵夫人ただ一人の、甚だ心細い辯護によつて保證されてゐる如く、そんなさもしい態度に出さうもない立派な人物であるか、かうした問題の決定は殘念ながら今日に於て望みがたい。けれども最初の內『有島氏にもし私が會つてゐたら、こんな痛ましい事はなかつたらうに』云々と淚まで流して言明した波多野氏自身も、既に今日ではその言明を抹殺して、明白に有島氏を呼び附けて面會したこと、及びその夫人との關係を承認させたことをさへ告白してゐる。そして單にこれだけを事實として推測して見ても、有島氏の死が少くともあんなにまで急がれたる死が、外界の壓迫に寸毫も促されてゐないとはどうして云へようぞ。

氏の言葉は、氏の自殺の動因が波多野氏との直接交涉なぞに先きだつて、既に包芽をもつてゐたといふ、或はかなりの成長をとげてゐたといふ意味に於てのみ、幾分の事實をまじへた虛僞であり得るのである。

しかし此場合、波多野氏との直接交涉なぞを近因として舉げ、有島氏の餘程前から抱いてゐられた、そして虛無主義的傾向をいよいよ濃厚になつて來たところの、死の讃美憧憬を遠因として舉げ、單にそれだけで以て氏の自殺の動機を說明したるのは、まだまだ本當に十分であると云はれない。

なぜと云つて、波多野夫人にして若しああした性格傾向をもつてゐなかつたなら、他のそれらの事情にもかかはらず、有島氏の自殺は果して實際の事實となつたかどうかをさへ疑はせるものがあるのだから。

直接にはたつた一二度會つた位の人ながら、色々な材料にもよつて想像して見ると、夫人は肉體的にそれほど放逸な性格ではなかつたらうが、精神的には隨分いたづら好きな、芝居氣澤山な人であつたらしい。

しかも、さうした危險なロマンティシズムを有つた婦人にして、文學とか、音樂とか、美術とかへ一身を打ち込んでしまへるなら格別、でなければその實際生活の上で物騷な藝術的創造をやり出し、自分自身は大變なロマンスの女主人公にしたり、自分のあらゆる周圍を文學通り悲劇の舞臺にしてしまふのが常である。

ところで夫人の場合を云へば、夫人の良人はよし、どんなに若い異性達を誘惑したといふやうな閲歴があらうとも、成長して後の夫人のロマンティックな要求を滿足さすべく、餘りに世俗人であり過ぎたらうと想像される。

殊に夫人が、或は先天的に、或は幼少の時分からの境遇の爲めに、或は双方の原因から、死に對する憧憬といふやうな陰鬱な芝居氣を、ロマンティシズムを抱きながら、さうしたものにまで全然別世界の人間であるらしい波多野氏とゐたことは、少くとも彼女をして一層孤獨を感しめ、一層死の憧憬へ深入らせ、その憧憬を中軸にした芝居氣へ、いよいよ惑溺させないでは置かなかつたであらう。

そして斯うした傾向の、斯うした情態にゐる波多野夫人が折りも折りとて、虛無主義的に人生を否定するやうな氣分に陷つてゐた有島氏とぶつかつたのである。

双方に共通した死の讃美及び憧憬と云つたやうなものが、よりたやすく相手を理解させ、より高く相手を評價させたであらうことは、想見するに難くない。

その上、かうした理解と評價とから、久しく飢えてゐた夫人の芝居氣が十分の食物を與へられ出したのみなら、有島氏の側にさへ思ひもかけぬロマンティックな心持が目覺め出したであらうことを誰が不自然だと云ひ得るだらうか。

有島氏が夫人を亡くして後、久しく獨りでゐたことを、今度の過ちの最大原因に數へる人達は少くないやうだ。しかし乍ら、不見轉買ひ位で以て戀愛の代用にすることの出來ないやうな、大野暮にして且つ非常識な（これは勿論眞面目な反語だ）我々藝術家種族は、少くとも女房が亡くなつてからよ

りも、亡くなる以前に於て、より不品行で、性的生活により危險人物であるかも分らない。

又有島氏が、一寸位『魅力』のある異性にぶつかつたからとて、たやすくその囮となるやうな人物でなかつたことは明白である。なぜと云つて、妻帶者であると獨身者であるとを問はず、大抵の人々ならば直ぐに間違ひを起したり、起したいとねがつたりしさうな、それほど魅力をもつた美しい異性達が、氏の周圍に群り集つてゐるといふのは、餘程もう以前からの事なのだから。

有島氏が『どう戰つても私はこの運命からのがれることが出來なかつた』と告白しながら、その運命に打ち負かされたことを恥ぢともせず、結局自己の罪過ともせずにゐられるのは、私共の十分共鳴し得られる點ではない。けれども私共第三者から見る場合、それほどの人とも思へない波多野夫人位にぶつかつて、有島氏ほどの大丈夫らしい人が、あんなに脆くも落城してしまつたのは、成程これは運命だなと、長太息をもらさせないでは置かないのである。

所謂『生の焦點としての死』の憧憬から結びつけられた二人の愛は、それが深化するにつれて、一面にはさうした憧憬自體を忘れさせてしまつたこともないではなからう。けれども、兎に角一方が有夫の婦人であり、また一方が三人の子供の爲めに出來るだけ再婚を避けやうとさへして來た中年の男子であり、殊には二人ともああした陰鬱な空想の耽樂者であり得た點から考へれば、有島氏の、否あの二人の愛が大體に於て、その享樂の最高頂を死の瞬間に求めやうとする傾向の方へ、一歩一歩深入りして行つたことは疑を容れないと思ふ。

有島氏はその弟妹達へ宛てた遺書の中に書いてゐる、『私達は最も自由に歡喜して死を迎へるのです。輕井澤へ列車が到着せんとする今も、私達は笑ひながら語り合つてゐます』と。また足助氏に宛てた遺書の中にも書いてゐる、『森嚴だとか悲壯だとかいへばいへる光景だが、實際私達は戯れつつある二人の小兒に等しい。愛の前に死がかくまで無力なものだとは此瞬間まで思はなかつた』と。

私は固より、此場合死がわざわざ誇張するつもりで誇張したり、故意に訴へるつもりで訴へたりしてゐるとは思はない。けれども氏の平生の言說にも幾分見られてゐたところの、惡意なき狂信家的虛僞が、特別に大きくされてそこに露出してゐることを見逃がせないやうに思ふ。

死の前に死を超越したさうした完全に自由な悅ばしい瞬間

は、たしかにあの二人の人達からも夢想され期待されてゐたであらう。だが、その事を疑はない私共も、彼等のつひに引き返し難くなつた絶壁の際まで來て、よくそれらの夢想と期待とから裏切られないことを信ずるべく、餘りに多くの反證をつきつけられてゐる。取り分け有島氏の老いたるその母堂と、幼き三人の令息達との上に執着した、あの悲みの聲は聞くに堪へないではないか。

かうした事件の度每に、めづらしくもない話ではあるが、ある人達はまづ、自殺が罪惡であると賢げに說敎してゐる。人間の頭數が一つ少くなるといふ意味に於てならば、わざわざ獨身でゐて子供を作らないなぞも、自殺にゆづらないほどの罪惡であらう。

「自己の生命を尊重しないと云ふ意味に於てならば、さまざまな不養生によつて自ら殺すものと、所謂自殺との間にどんな差別があるか。肉體を殺すものと、精神を殺すものと、二者いづれの罪を重しとするか。

自殺によつて他人を不幸にする場合を云へば、それは自殺その事がつねに必ずしも他人を不幸にするのでなく、從つてつねに必ずしも罪惡でなくて、他人を不幸にすることが罪惡なのであらう。自ら殺さないでゐたら、更により多く他人を不幸にするとしたらばどうするか。

某醫學博士の御高見によれば「歐米先進國」では情死といふやうなことは、詩人が詩として讚美する位に止まり、決してそれを實行する如き無分別はやらないとのこと。

實行するが故に無分別なのであるか。それとも先進國の詩人とやらは無分別な事を讚美してゐるのであるか、重ねて御高見を仰ぎたいものである。

私は此場合、聊かも情死を讚美したり、奬勵したりしようといふのではない。ただ今日の識者と稱する愚人等の考へてゐるのと反對に、現代人一體にだんだんと情死をするやうになるよりも、寧ろそれを馬鹿らしく感ずるやうになりつつあるといふこと、云ひ換へれば、命懸けでホレたりハレたりすべく、餘りに利口に、勘定高く、輕薄になりつつあるといふことを、注意して置きたい。

現代の青年が戀愛神聖論でもふり廻してゐると邪推するのは、さう邪推する中年老年の「識者」達自身が、その青春期に於て內々、さうした流行思想にかぶれてゐることを、それとなく告白してゐるにすぎないのだ。今日の青年その物は、戀愛を神聖視するどころか、それを所謂性慾或は獸慾との間に、何等の差別をさへも立てず、沒理想主義的に極度の徹底

を示してゐる『神聖』といふやうな概念ならば、彼等にまで單なる嘲笑を値してゐるにすぎないであらう。

云ふまでもなく、有島氏の今回の事件は、單なる自殺や情死としての問題であるよりも、むしろ姦通としての問題である。

一切の道徳といふものを認めないならば格別、苟くも道徳――社會的意義をもつた、本來の言葉遣ひに於ける道徳といふものを認める以上、姦通が罪惡でないと主張する人は極めて少いであらう。殆んど皆無と云つてよいかも知れない。

私は私自身の性的道徳に對する根本的見解を、今ここに體系的に叙述することを許されない（特志の方は拙著『ブルジヨアは幸福であるか』に收めた『愛の本質に就いて、』『性及び性的なもの』等を讀んで見て下さい。）そしてただ、私も亦姦通といふ行爲を決して是認しないといふことだけを言つて置く。

姦通がよくない行爲である以上、人はさうした行爲に陷らないことの爲め、然るべき注意を拂つてゐなければならぬ。

しかし乍ら、さうした注意の一通り以上に拂はれたであらうことを推定する私等として有島氏の上にそもそも如何なる譏を加へることが出來るか。

有島氏の地位にゐたなら、有島氏よりももつと不用意であつたかも知れないやうな、もつとたやすく過ちを犯したかも知れないやうな人達は、氏の過ちをさばくことの僭越を敢てするよりも、寧ろ自分達のまだまださうした危地に置かれないでゐることの幸福を、慈悲深き運命の前にでも感謝すべきであらう。

之加、姦通は如何に大きな罪惡であらうとも、政治家にして節を賣り、官吏にして職を瀆し、學者にして學を曲げ、私慾に走り、權勢に媚び、世に阿ることの、醜惡陋劣ほどに耻づべきものであるかどうか。それらの醜惡陋劣に對して割合に寬大らしく見える、鎌田文相、山川健次郎博士等にまで、眞面目に御尋ねして見たい。

傳ふるところに依れば、有島氏は其友人の一人にまで打ち明けて言つたとのことである。――『秋子の良人にして、あんなにも陋劣唾棄すべき人物でなかつたならば、自分は生きるにも生きられず、死ぬにも死ねないであらう』と。

如何にも有島氏らしい言葉である。私共の理解してゐる氏は、たしかにさうした立派な感情の持主であつた。

氏の過ちはまことに痛ましい。その事によつてまたそれをふ爲めの氏の行爲によつて、周圍の人達の受けられた打擊は、更に一層痛ましい。けれども、流石に有島氏だけあつて、ああした過ちのあとに兎もすれば續出がちな、より見苦しい過ちの聊かも犯されないでしまつたことを以て、此際の私共の切めてもの慰めとしたい。

――一九二三年七月――

自己決定に於ける奉公的意義の有無

杉森孝次郎

わたくしは有島氏とも、波多野女史とも、一面識もない。有島氏の書かれたもののうちでも、「宣言一つ」を一讀したほか、なに一とつ讀んでない。今度の事件に關聯して、新聞紙上に讀む機會をえた一とつの詩と、二三の遺書、書信類とをほかにしてはだ。

情死は自殺の一種だ。自殺は人に於ける自己決定の一樣式だ。自殺は、實に、人にとつての一とつの生きかたにほかならないのだ。人が死を敢てするといふことは、すなはち死を進取するといふことは、決して輕い問題ではない。自己決定力は、すなはち、自己の意思によつて自己のありかたの上に選擇をほどこす能力は、心理學的に人の特徴ともいへるのだが、その代り、その自己決定力すなはち自由意思に、いかなる決定樣式を與ふべきであるかといふことは、人にとつて至大の責任を意味する問題でもあるのだ。

自殺すなはち選死の目的が、公利的、社會善的、普遍益的であるほど、それの價値は高い。最近の高尾氏の死は自殺とはいへまい。氏に關するわたくしの知識は、このごろの新聞紙上で讀んだ材料だけに限られてゐる。しかし、いはゆる左傾者であらうが、右傾者であらうが、純眞に現代の制度や習慣や觀念やについて、社會的見地から欲するところ、意思するところ、望むところ、憤慨するところ、悲憤するところ、反省するところ、批判するところの心的內容があつて、意識的事實があつて、それのために、敢死する人があるならば、それが、見解と思想とに於いては左と右との相反する兩極に

代表するどちらの型の人であらうとも、動機が私的でなく、一己的でなく、社會善的であるがゆゑに　かれの選死には、いはば一種の崇高さも、偉大さも、要するに道義價が帶ばれ、要請される。

科學者が、科學的眞理の研究と發表のために身命をささげ、藝術家、思想家、政治家、社會理想家、社會改良家、教育者等のおの〳〵が、またそれぞれの立ち場から同樣の態度にいづるが如きは、いづれも、それの結果、目的、意義、歸趨に於いて、本質的に普遍善であり、現象的にも、多少の程度に於いて社會萬人の幸福と利益だ。

しかるに戀愛は、及びそれの成長としての廣義の結婚は――ここでわたくしは、戀愛にもとづく性交のすべての形式を、したがつて有島、波多野兩氏間の場合をも、結婚の一形式とみとめる――かならずしも社會善を意味しない。それは、しば〳〵、愛し、婚する兩人だけの私善を意味する。いふまでもなく、善とは欲望の滿足の別名だ。有島、波多野兩氏間の愛、婚は、事實が明白に示す如く、要するに兩氏の私善以上の價値を持たない。社會は、すなはち、現代の制度、慣習のかたちに於ける社會も、すなはち、姦通を非認すハ觀念及び行動に代表される社會も、子供を自治の有能者として社會に向つて準備するまでの親の責任によつて代表される社會も、なほその他のいく多のかたちと特徵とに於ける社會は、兩氏の愛を非認しえないとしても婚をば確實に非認する――されぱこそ、卓越せる品性者であつた有島氏は自殺をしたのだ！

戀愛は本質的に自由だが、結婚は、すなはち性交は、それの主要なる一特質に於いて責任でなくてはならん。戀愛は天才だ。奮發して惚れることも、克己して惚れないことも至難であるといふ單純なる事實がすでにこれを意味する。戀愛は主觀の形式だ。人は、なに人かを、なにものかを、なに事かを戀愛せずには自己が成り立たない。しかし婚交は、第一に、文化の進化的保存の一要件たる次代の人格を創造すると、その生物學的人格を文化學的人格に保育することに代表される責任を意味する。勿論、責任とは、行爲者が、かれの行爲の結果を、かれの行爲の動機に機會を與ふると同時に選んだことを、觀念的及び行動的に自認することにほかならない。結婚は一行爲だ。その行爲の一結果が子供だ。戀愛は、しかるに、

それ自身としては行爲ではない。

人は、右傾的殉死者の途を進まうが、左傾的殉難者の途を進まうが、中正道の保持者としてのかたちに於いて死を怖れずに進まうが、とにかく、動機が公益の保護、公害の除去にあるならば、かれの選死には、社會的人間的意義が積極的に看取される。死を決して、しかもわづかに自己及び相手の一異性の内的必要を滿たしうるにすぎずとせば、かれの自決能は、すなはち自己決定力としての意思能は、決してかれによつて正遇され、善用されたとは評されない。いはんや、そのかれが、境遇上惠まれたる文字、教養、知識の所有者たる場合に於いてをや。

左傾派の社會理想、社會運動上の戰士であらうが、右傾派のそれであらうが、また平凡に穏和に農、工、商、學、事務、技、藝、教育、あるひは家庭の雜務になりとも、道路や公園の掃き浄めになりとも、汚物や塵芥の始末になりとも、默々として生の意義を充たしつつある正業の人、良民のともがらであらうが、社會を忘れず、責任を思ふ生活に、それらにこそ、非社會的な、無責任的な選死よりも、眞に人の涙を要求すべき犠牲も、忍耐もあるではないか。

若き人々の憧憬

斷想のまゝを

高田登美

有島氏の死は餘りに思ひ掛ないことでした。殊に氏の平素に就て、何程の知識も持たない私にとつては、到底纏つた批判や感想が生れやうはづもございません。

けれどそれ程遠い所にある私の胸にも明らかに何かの波動の傳はつて來た事を覺えます。そしてそれがどんな波動なのか適確に握ることは出來ませんが、ほんの　れ〴〵のまゝ順序もなく一つ二つの感想を拾ひ上げて見たいと思ひます。

×

心中、それは主觀的に云つたなら殆んど絶對的なもので第三者の容喙を入れないものでせう。「何う戰つても私はこの運命からのがれることが出來なくなつたのですから」と氏の遺書にも見えてゐます。恐らくそれは心中する人の誰もが持つつきつめた心持なのでせう。しかしそれが脇から考へると案外涙もろい理性を忘れた感情であることがあります。氏の場合がさうだつたと思ふのではありませんが、今まであれほど着實な歩みをして居られた氏として、何となくあつけない物足らない氣持が致されます。

×

しかし、どちらを向いても全く享樂的な、そして醜い一つの生命を弄んで恥ぢることを知らないやうな人々をしか見出せない今日に於て、たつた一つ、私は眞面目な心に接したと云ふ喜びを持ちます。

誰々氏も明言して居られる通り、其行爲はどこまでも「異常な行爲」であつて、誰もがさうした場合いつでも取るべき道ではない、と云ふことだけは忘れたくないと思ひます。又氏としても、他の人々の上には決してかうした「異常な行爲」の無いことを祈つて居られたらうと思ひます。

×

氣の毒なお子様方のことを思ひ、天にも地にもたつた一人の父であり母であつた氏であると思へば、歸らぬ愚痴も言ひたくなります。

父であり、母である事の爲には、死より幾層倍険岨な路をも、尚ほ撰ぶことがゆるされなかつたでせうか。それにつけても生に徹底することの如何にむづかしいかと思はれます。

×

「私の貴方方に告げ得る喜びは死が外界の壓迫に依つて寸毫も促されてはゐないと云ふことです」と。この氣持は或いは徹底的な、唯一本な氏の一面の現はれではないでせうか。どこまでも自己の心持を尊重する氣持と、自分の行爲に對してすつかり責任を持たうとする氣持とではなかつたでせうか。

氏の死を本當に解する爲には私共は長い氏の心の經過、思想の變化を辿つて來なくてはならないのでせう。そしたら又そこに、どんな社會の缺陥が又氏一個の缺陥が或いはどんな「質實なもの」が明らかになつて來るかも知れません。

けれど今私にはそれだけの力がありません。唯私共はかうした死に對して、出來るだけ間違はない解釋を持ちたいと思ひます、又極く外面的に簡單に片付けてしまはずに、人の世の不幸の一つを悼んなして冷靜に反省して見たいと思ふのです。

先生の死を始めて知つた刹那に

松下八重

七月八日の暮れ方、改造社からの御知らせで私は始めて先生のおなくなりになつた事を知りました。私の様な端くれの

者が今度の事件に就いてとやかく批評がましいことを申し上げるのは、あんまり潜越でございますけれど、たゞ悲しい悲しいこの心を誰かに話したり書いてみたりしたら少しは胸がはれはしないかと、頭の亂されたまゝをとり止めもなく書き出しました。

今朝の新聞（讀賣）ではたゞ輕井澤の山木とかいふ人の別莊に死體を發見して、それが先生のおもかげがあるといふ記事だけが載つてゐて別に氣にもせず、たゞそんな男の死體が先生に似てゐるといふのが一寸いやな感じがしたきり、あとはすつかり忘れてゐました。それなのに夕方お手紙を拜見してそれと知つた時私はもう何が何だかわからなくなつて、本當に讀み終りもせず投げ出してたゞあつけにとられました。一人ぼつちで暮れる、山では梟がなく、遠く雨に暮れてゆく海の面を眺めながら涙も出ずに幾分かを過しました。まさか間違ひではと又手紙をとつて讀みかへしても同じ事。有島さんがなくなつた。あの有島さんが。――――本當になくなられたのだ、さうはつきり思つた時ぼんやりみつめた眼が何にも見えなくなつて、手紙をもつたまゝしばらく泣いてました。學校に居た頃幾度か同じクラスの友達が死んだといふ知らせをきいても時他の人と一緒に泣く事の出來なかつた私が、未だ一度もお目にかゝつた事のない先生の死を知つてこんなにも悲しいのは、意識して居る以上にお慕ひして居たのかと今更ながら思はれます。あんなにも愛していらした三人のお子さんを置いて、まあどうして死ぬ様なお氣になつたのかと、人一倍おやさしいお父様であつただけ、不思議にさへ思へます。とにかく、夕刊でも見たらば少しは事實も瞭つきりすることゝ停車場まで取りにやらせ、今一通り讀みました。先生の事もかうした悲しい事實が最後で、もう永久にその消息は絶えたのかと思ひますと、又新聞を前に擴げたまゝ眞暗な道に一人置かれた樣な淋しさ悲しさがこみ上げてきます。

先生！、有島先生！、これが夢であつたら、間違ひであつたら……あゝいくら思ひかへしたつて本當は本當なのだ。今日のたつたさつきまでも「生れ出る惱み」を何年かぶりで讀みかへして先生の事を思つてましたのに、もう一月も前から私達とは遠く〳〵離れた世に行つておしまひになつたのですねえ。

「死」によつて人は救はれるものかしら、喜んで死んでゆくとはおつしやつても、やつぱりそれまでに決心遊ばすまでのお心はどんなにか〳〵お辛いことでしたでせう。それも一人

身ならまだ死を選ぶことも易いでせうけれど、子を持つ親の身にとつて一人死んでゆくのはよく〱の事情とそれだけは私の様なものでもお察しが出來ます。本當に〱思ひあぐんだ末例へどんなに細くても一條逃れ道さへ見出せばこんな結果にはならなかつたものを、あきらめながらもつい愚痴が出ます。今度の事が前の野村隈畔の様な思想の人ならそれ程驚きもしなかつたでせうけれど、作家としてよりも得難い人格者として誰でもが寛してゐたあの先生が、かうした最後をおとりになつたことが本當に意外でした。でもよく考へてみますれば、先生ですから一番眞面目な道―死をお選びになれたのでせう。あやふやな人達にはとても寄りつけない厳粛な死を。眞面目な戀の出來ない人にはとても想像も出來ない事實です。美の權化は心中だと云ひます。でも近松物の中などに、今の人なら死なくてもよいものをと思ふのに、惜し氣もなく死んでゆくのがありますけれど、先生のは思ひも果て、全く考へもつきて死をお選びになつたのですから端でとやかく申し上げる事もないんですけれど、たゞ未練がましうございますけれど、やつぱり結極は何とか他に方法もと、つい云ひたくなつてしまひます。死んでゆけばあの世とやらで一緒になれるものかは知れませんけれど、まあ俗人が考へれば例へ靈は殘つても凡ては終つてしまつたものと思はなければなりません。「死んで花實が咲きはせぬ」生きてゐりやこそ喜びも樂しみもあるもの、いくら苦勞はしても、死んではつまらないと思ひます。そこに二人のみ知る複雜な事情はお有りでせうけれど、返らない事ながらいくら思つても殘念でございます。「死と其前後」や「小さき者へ」を讀んだ時、かうしたお父さまを持つお子様を幸福な方々だと思つてました。お母様のお有りにならない故一層不憫がつていらしたお子様をのこしておなくなりになつた事が、何ですか、つれない様にさへ思へます。

波多野さんには御子さんも無し、御主人は理解のある方の様に思はれますし、少し位の障りはのけても有島さんと結婚が御出來にならない事は無い様に思はれますけれど、たとへ御主人が不承知でも離れてゆくものはどうすることも出來ないんですから、先生がもつと道徳なり法律なりを無視する事がお出來になつたらかへつて幸福でいらしたでせうに。上流社會の束縛の多い生活になれていらつしやる先生は、いくら無產階級の人達に交るおつもりでも、さうした道徳觀念までプロレタリア化する事はお出來にならなかつたのではないでせうか。今度の有島さんの様な事情は、さうした社會には幾

らでもある事ですけれど、それでお好な二人が一緒になつて割合に事もなく過ぎて行きますものを、それをかうした人達は道德觀念にとぼしいから出來るのでせうけれど、とにかく戀の勝利者には違ひありません。でも今度先生が、心中なさらないで波多野さんと一緒におなりになつたら、やつぱり世間は、あゝした人格者が人妻と道ならぬ戀をしたとか何とか惡く云ふに違ひありません。人の噂も七十五日、云ひ倦きればそれで忘れてしまひますし、又そんな世間の批評でお苦しみになる樣な先生でもないんですのに、全く第三者にはわからない事情がお有りなのでございませう。又「或女」を出す樣ですけれど、小說にはあゝした御考へをお書きになりましても、御自分の事となりますとやつぱり周圍といふ事をお考へになつたのでせうか。又そこが人間らしい美しさ、人間のみ有する感情かも知れません。心のまゝに人の妻をとつて平氣でゐる人は、ノーブルな人間社會から遠ざかつてゆく人かも知れません。それを思ふとやつぱり、心中は美の權化であると云はれます、何が正しいのか何が本當か今の私にはわけがわからなくなりました。やつぱり先生は、死が光明であり自然の道でありましたのでございませう。

でも多くの人が尊敬し、お慕ひしてゐたあの先生を波多野さんお一人が永久に私達から奪つてしまつたかと思ひますと死んだ方にすまないんですけれどついお恨みしたくなります。女同志のねたましさからかも知れませんけれど、たとへそれが先生の本望であり、先生を思へば先生の幸福を喜ばなければならないのですけれど、本當の心はやつぱり理知を離れて情にのみ走ります、決して私は先生は幸福でいらしたと、心から喜ぶことは出來ません。先生にはすまないんですけれど、私は限りない悲しみと共に、永久の道づれをした波多野さんが、羨ましくもあれば又ねたましくもございます。でもなくなつた方をお恨みするのは惡うございました。どうぞお二人共、人間界を脫した清い世界に、幸多くお暮しになります樣祈つて居ります。（十二年七月八日稿）

最後の眞劍さを考へたい

山原たづ子

彼の美しい輕井澤の山莊で、現實の夢を永遠に生かさうとして靜かにゆかれた有島武郎氏の死は、これを所謂の論理や道德にあてはめて、輕卒に批判することの出來ぬ大きな問題だと思ひます。……。勿論有島さんひとりの場合とは限りませんが……。

その意味に於いて私は、今この問題については何も云ひたくない、たゞ默つていつまでもいつまでも美しい、いたましい事實として、考へて居たいといふ氣がするのです。人一倍聰明な理智の所有者で、而もあれだけの子煩惱の有島さんが、何故に總てをなげて死をいそがれたかといふことは、有島さん自身にとつても判らない苦しい運命の謎であると思ひます

私が有島さんに親しく逢つて話を聞いたのは、今から四五年も前の目白のある懇談會の時でした。そうしてその頃書かれた氏の「石にひしがれた雜草」や「或る女」について、いろ〳〵の雜感を話しあつたのでしたが、非常にすぐれた洞察力をもつて、何人の心の奥をも見拔かねばやまないするどさと、極めて冷靜な理性とをもつて、世の中の罪といふことを何處までも追求する、强い善の力のみなぎつた作家だといふことを思ひました。

それから以後、此頃になつて氏の作風が著しく變つたといふことを聞いたり感じたりしてゐたが、つい此の間慶應で開かれた文藝講演會の折りに「描かれた花」と云ふ題で、話を聞いたのが、氏を見た二度目であつて、今から思ふと實に最後であつたのでした。その時私には四五年前に逢つた有島さんよりも非常に變つたといふ感じを話の上に感じました。しかしこの人が一ケ月たゝぬ後に自殺されやうとは、夢にも考へることが出來ませんでした。

たゞ人生の寂しさが、だん〳〵近い所に歩いて來るといふ感じを今更ひし〳〵と持たされます。

有島さんの死は誰によつてでもなく、また誰が悪いのでもなく、人間の理智善悪の力以上のある不思議な自然の力が支配したのであると思ひます。これがはたして有島さんにとつて「愛の極致が死である」と云ふ信仰から出たよろこびの死であつたかどうかは疑問であるが、世間一般の所謂習慣や、道徳といふものに關係なく生活しやうとする藝術家としての有島さんが、なほ世間一般の所謂習慣や道徳に切り離されない普通人間の世の中に於ての苦しみと矛盾が、たゞ一つ死といふ寂しい運命にいたつたのではないでせうか。しかしそれがどちらにしても、此の場合死を選んだといふのは、有島さんが眞の人間であり、眞の藝術家であつた故であらうと思ひます。たとへ其處には世間の道徳の上から、多少あやまられた行爲があらうとも、私はこの美しい静かな死の前に、無反省な人々の、いゝかげんな理窟をならべて非難する世間に對して、いやな氣がします。

私は決して世の中の道徳を無視するものでも、有島さんの死を讃美するものでもありませんが、たゞ一つ人間の生命をもつて、つぐなはれた最後の眞劍さを考へてゆきたいと思ひます。

詩への逸脱

藤井國武

有島先生の華々しい死に接した私達は、嘗て體驗した事のない悲歎と、詩的讃仰の聲を漏らさずには居られません。それと同時に、父子の愛の樣にこまやかな愛の師弟の間柄であつた私に取つて、それは實に、怖しい惱みのどん底に蹴落されてしまつたのです。

私は毎日、只淡暗い屋根裏に引き籠つて、先生の御手紙や新聞記事など、繰り返し繰り返し讀み乍ら、終日先生の幻影を見詰めて居ります。涙が出るにも、もう出なくなつてしまひました。友人等がやつて來て慰めてくれますけど、最後にお別れした日（五月二十五日金曜日）の事等考へ出されると

實に堪らなくなつてしまひます。

　さうです。五月二十五日……考へると涙が溢れさうになり筆を進める事が出來ません。何んだか要領を得ないものになりさうですが許して下さい。……その日、例のやうに先生を御訪ねして、詩の話をしたり、新聞社や雜誌社に紹介狀を書いてもらつてゐる内に、自殺の話が出たのです。其時、誰かが戀に死んだ男の話をしてゐたやうでしたが、先生は堪らなささうに「あゝ、さうですかね、戀といふものは實に恐しい力を持つてをりますね」と言つて深い溜息をなさいました。それから自殺の方法について各々意見をのべたり、經驗を語つたりしてゐました。其時私は冗談半分にこんな事を言つたと思つてゐます。「戀人の緋縮緬の下帶で松の木にぶら下つて幾晩も幾晩も星の雫にぬれてゐたい。」と。すると、先生は背き乍ら「ええ、私も冗談に一度絹ハンカチフで首を絞めて見た事がありますよ。何んでも灯を見て居て、見えなくなる頃に手を離せばいいといふので、さてやつて見たら、迚もいい氣持がして、手を離すどころか、ぶつ倒れて、机の角で頭をしたたか打つて漸やく目が覺めた事があります。なんでも首を縊つて死ぬのは樂ですよ。アハヽ……自分で首でも縊つたかのやうに樂ですよアハ……」こう言つて先生は大聲で笑つてしまはれました。

　あゝそれきり私達は再び會ふ事の出來ない間柄になつてしまひました。しかも首縊りの話をして別れてしまつたのです。考へれば考へる程、私は凝乎として居られない樣な氣持がします。然し私は先生がその時、死を覺悟していらつしやつたとは信ずる事は出來ません。先生は現實の肯定者であり、より以上に大自然を愛する詩人でした。

　以上は先づ私が最初にお會ひした日の事をその儘しるしましたが、三ケ年の間、色々御世話になつて來た私に取つて實に數限りない思ひ出が浮んで來ます。面會日には、先生の書齋は朝から滿員になつて、煙草の煙が渦を卷いてゐました。その中には、社會主義者も、藝術家も、朝鮮の青年も、尾行をつれた男も、工場で馘になつて一文なしで困つてゐる男もセンチメンタルな文學青年も、クリスチヤンも、雜誌記者も實に書きつくす事の出來ない程、廣い範圍の人々が集つて、色々議論を鬪はしてゐました。先生はそれらの議論に對して、假令、それがどんな分り切つた幼稚な話であらうと、初めから嚙んで含める樣に、諄々と說明して行かれるのが常でした。一度、私は餘り齒痒くなつて先生に食つてかかつた事がありました。「先生！私は神田の通りで、バナナの皮に乘つ

て、滑つて轉んで、腦天を打つたとき、死ななかつた事を何より幸福に思つてをります。何をそんなに議論する事があるのでしようか、私達はいつこの天井の下敷にならないとも限りませんのに、そんな七面倒臭い事をいつまで人人は考へねばならないのでしやう?」その時の先生の御答へに私は、どんなに思想的に惱んでゐらつしやるか、又どんなにブルヂョアの生活に倦怠してゐらつしやるかが、うす〳〵解る樣な氣がしました。「ああ!ほんとにさうです。然しそんな思想はブルヂョアでなくては起りますまい。ブルヂョア敎育を受けた人が、どん底の惱み悲しみ苦しみ、を體驗して初めて持つ所謂ダダ的な精神でしやう。實際、私達ブルジョアの落ち行く先は其處でしやうね」と、その惱ましさうな溜息を私は聞きました。

先生の最近の小說「ドモ又の死」「骨」に就いて先生にお話した事もありますが、これ等小說の中にダダ的な精神を發見する事も出來るでしやう。これ等の事に對して考へて見ても、最近における先生の傾向及惱みは想像出來るやうな氣持がします。

兎に角、私は先生に對して、徹頭徹尾、詩人有島武郎として接して來たのですから(どうして私が三年前に先生を詩人と感じたのかわかりませんが)……泉(第二卷第四號)で初めて、數篇の詩及「詩への逸脫」を發表なさつたときは、自分の事の樣に嬉しい氣持がしました。然し今、再び讀み返して見るとき、私は只むせび泣かないではゐられません。

ああ、何んたる愛の惱み苦しみの詩!

先生は自分の墓場への道に眞赤な薔薇を振りまいて居られたのです。

「詩への逸脫」は實に死の門出であつたのです!

何も知らない私は只喜んでばかり居ましたが……

餘り長くなりますから、これでよします。

七月十一日午前三時

一人の勞働者より

白瀬晋三

眞夏へかけて、多くの富裕な人々が自分達の下劣な慾望を滿たすために、又自分達がより以上快い生活が出來るやうに、彼等は何處かいゝところへ涼しい旅に出ようとしてゐる。勞働者達が日射病にかゝつて、飢ゑてゐても彼等は自分達がより以上贅澤な生活が出來るのを誇りでもあるかのやうに、それをあたりへ言ひふらしてゐる。このやうに人々が血を吐くやうに苦しんでゐる時、この泥のやうに濁りきつたみじめな世の中を見捨てゝ、利己主義的な虚榮な女と情死してゆく人を誰が心から讃美しえられよう。けれども有島氏の生れながら善良な、優しい氏が、又持つてこられた、すぐれた良心について思ふとき、私達はどうしてまたあの人を咎めえやう。しかし私達がさうして善良であることも結局人間の本能の義務ではなからうか。有島氏よりももつと貧しい、否賣笑婦の中にでも本質的には氏ほどに美しい善良な人々を見出すことが出來るかも知れない。何故に有島氏は、不幸な人々の爲に逸早く自分の財産を投げ出してゐなかつたのであらう。私達はかゝる藝術家に對して十全の敬意を表することが出來ない。自分達が敎へ導いてゆかねばならない一人の虚榮な女と、愛に溢れた弱い、如何にも家族的な氏の性格が今更氏の平常や肖像などの中から、うかゞはれるやうだ。もつと嚴肅に、何物にも犯されたい英雄的な藝術家を私達は双手をあげて迎へたい。

多くの年若い未來の人々の中には肉食もなければ、斬髪もせず、一錢でも多く同胞のためにと心の底から、血あり、涙ある、博大な人も多い。これら若い無名な人達が夢想に耽りながら、街を歩いてゆく孤獨な神々しい姿を眺める時に誰でも涙ぐましい悲痛な感に打たれるであらう。私達は決して物質的平等を説くものではない。私達の眞に願つてゐるのはこの世により具體的な慈善事業が生れ、學校を中心とした社會經濟事業が行はれることである。私達は富裕な凡ての人々に社

會革命家になれ、或は放浪者になれとは言ひたくない。何故なら、私達はかうして自ら勞働者になつたことにその不幸を、否未來への平憺な、火の出るやうな戰ひが、どんなに恐ろしく、手ひどいものであるかを知つてゐるからである。

私達が今日のやうな懺悔の生活に入らない前、どんなに柔和なのび／＼した感受性を持つてゐたことであらう。

物靜かな人の心を恐れしめるやうな花の咲き亂れる頃、私達は方々をさまよひながら、その心はどんなに烈しい動悸をうつてゐたことだらう。そして私達はどんなに樂しい暮しをしてゐたかを知つてゐるから。

物靜かな魅力ある歌よ。
貧しく孤獨なる人よ、
歌を歌はふ。

私達は無表情な街や、あらゆる不自然な此の世の形式を破壞するやうに、美しい自分達の歌を歌はふではないか。

さうして有島氏が、自分達と共にこの歌を、より力強く、互に手をとりながら歌えなかつたことを心惜しく思ふ。

——芝浦の人夫部屋——

秋子さんの印象

波多野秋子の靈に捧ぐ

石本靜枝

私の此文がどうぞあなたによつて讀まれる樣に、あなたの一番親しい友の心情から、あなたがまだ生きて居て下さる事を祈りながら書いて居ます。

ボンヤリの私は、あなたが六月に訪ねて下さつた時に事件は非常な勢ひで進渉して來た事には氣付いて居りながら、もう私の親しい〳〵あなたとあれ切り會はれないのだらうとは思ひませんでした。今も今私は私の利己的慾望、――あなたと一緒に眺めた人生の樂しかつた瞬間を探り返し度いと云ふ――あなたを愛して信じ拔いて居られる波多野氏の爲に、どうか生きて居て下さいと願ひ、そしてあなたのお顏や、あの明るいあなたの瞳の輝きが私の頭から離れないのです。

あなたが、前から私に云はれた樣にあなたの運命が近く來らんとする死であり、そしてそれがあなたの絶對の幸福であるならば、私はあなたがたとひ水に飛び込まうとして居るのを知つてもそれを止めないと誓ひ度い程、私は私の親しいあなたに忠實な者でした。けれど人の情として他人の私でさへ波多野氏の心情、妻は自分の懷ろを去つても此の世の者にして置き度いと願つて居られる切な願ひを思ふ時に、ほんとに泣かないでは居られないのです、あなたは此事件の最初から波多野氏の爲にどれほどの涙を流された事でせう。そして若し今あなたが此の世に亡きものとしたら、波多野氏に對するあなたの涙は最後まであなたを苦しめたに違ひありません。いえ、私はどうぞその涙によつてあなたが死なずに居て戴き度いのです。私はどうしても、矢張り私が一生にたゞ一度信

じ合ひ愛し合つた同性の友を失ひ度くないのです。

有島家でも佐馬氏を初め皆さんが御心配の様子です。それはほんとうにお氣の毒です。けれど波多野さん、――あの冷靜な自己を表現し解放する事を爲さない男の言葉の裏に覗はれる大きな苦悶はそれは何物にも比較は出來ません。如何に理智に輝いた人でも矢張り人間は弱いものです。人間の弱さと云ふものを私は今度云ひ表はされない言葉、深く秘め包む舊劇中の男の樣な波多野氏より見られた時に、私はお腹を絞られる樣な氣がします。あなたと三人で居た時に洋酒を舐めては靜かに人生の樂しみを語られた氏は、獨り中野の家に居て夕暮の寂しさをやり樣もないと云はれた。夕刊朝刊を手にする每に若しや心中沙汰でもと氣が氣でないのは波多野氏ばかりではありません。されどどうか此苦しみの時を短くして上げて下さいませんか、私の願ひです。あなたから死の相談を打明けられた時分にどうして私はもつと強くその運命をさゝへる力を持つて居なかつたか自分が恨めしいのです。

（六月十一日記す）

あなたの消息不通となつてから早くも二十日たちました。あなた方に取り殘された人達は、夢うつゝの樣な日を暮して、あてにならない事を每日〳〵あてにして居ます。易者に判じて貰つたり、ほんとうに人間は弱いものだと云ふのをあらゆる方面から知らされました。最初の十日ばかりはお二人の死を知るのに今日か〳〵と知る事を望む樣な、又いつまでも事實として知り度く無い氣持ちがつゞきました。

私は今こんな事を考へて居ます、あなた方は今どこかで生きて居られる。そして二人は幸福の絶頂に生活して居られ、二人のすべては眞實でウソが一つも無い。ウソと弱さの此私達の生活から徹底してしまはれたあなた方二人を私は祝ひ度い氣持ちでゐます。

とう〳〵悲しい事實を知る時が來ました。有島氏の盛大な告別式に列してから雨のしつきりなしに降る中を、中野のお宅へ行きました。取り次ぎに出たお八重さん（女中）が斷るのもきかないで私はあなたのお書齋へ通してもらひました。

あなたの文机の上はすべてがきのふのまゝであなたの硯箱やペンが其まゝに置かれてその間にあなたの美しい肉體は見るも傷しい白骨と變つて質素な壺の中に無造作に置かれてありました。細いお線香が申譯けの樣に一本、小さな硝子コップに白い天竺牡丹がたゞ一輪供へてありました。あゝこれ

があの美しい〳〵肉體と純眞な心の持主の最後を飾るものであつたのです。

固苦しく僞り多い道德や偏頗な宗教が權威を持つ世間と云ふものに對して「不貞の女」の死はかくもつれなく拂はれねばならないのでせうか。これはあまりにむごく痛ましいものです。あなた御自身は歡喜の絕頂で死につかれたのを知つて居ても、そしてその法悅を同感して上げるとあなたに約束はしたものゝ、あなたの亡骸ともうこれでお別れすると云ふ事が私にとつては全く悲しくて悲しくて堪らなかつたのです。此寂しい〳〵靈前へ、あなたを最後まで愛して、又尊敬した友の淚はたゞ一つの熱い手向けです。

女中さんがあなたのお骨を電車でお寺へ運ぶんですからと云つて、せめてお寺までお送りさせて下さいとたのんだのも斷られて私はあなたの亡骸とお別れしてしまつた。けれども私達二人の間に培れた温い友情は私の命の續く限り尊い美しい思ひ出となつて私の胸に抱かれて行きます。（六月九日葬儀の日に）

波多野氏とかけ違つて會へなかつたので、私に宛てゝ殘されたと新聞紙上で報じられたあなたの遺書は今日波多野氏から渡されました。有島氏とあなたの死は二人の戀の熱烈さと眞實とを裏がきしたのでしたけれど、あなたが死の間際まで抱かれた波多野氏に對する心の悶えは切ないものでした。あなたがあなたの戀を語る時に波多野の爲に泣けて〳〵仕方がないと云はれた。「私は武郞に對する自分の心持ちを全部波多野の上に移して好い奧さんにならなければならないと思ひました。二人はもう逢ふまい。もう手紙もやめやうと約束致しました。さうお互にはつきり誓ひ乍らいつの間にか、どちらが破るともなく破つて居たのです」とこの遺書を讀むだ時にあなた方がほんとうにこう云ふ努力をして居られた頃を私は思ひ出します、波多野氏とあなたの十二年間の愛の生活は溶ける樣な温味を持つてゐました。又それは血と淚の歴史を持つてゐました。あなたは波多野氏を純な氣持で愛された爲に四面楚歌の中をも着のみ着のまゝで結婚されたのでした。父上の社會的地位も財產も純な〳〵あなたの心には何等の魅力を持たなかつた。あなたの母上はあなたの此結婚に同意された爲に尼の樣な寂しい生活に入られた。こう云ふ犧牲の礎の上にたてられたあなたの家庭生活をあなたは大切にした。「春風の樣な氣持を抱いて家に歸つて來ます。そして夫と云ふよりは兄らしい人から靜かな言葉をきいて初めて和やかな

風一つたゝない平和な氣持にさせられます。私にとつて家庭はほんとうのレフユージなのです」と私に便りされたのもあつた。レフユージに於けるあなたは無邪氣な赤ん坊でした。けれど職務に携つて居る時のあなたはあなたの責任觀念が強く働いて忠實な老練な婦人記者であつた。親しい間柄の私にでさへ原稿をたのむ時には少しもズルケル事を許さない手嚴しさでした。それが私に何か思ひ惱む樣な事でもあつた時はあなたが諄々と說く態度は世の酢いも甘いも知りつくした姉御の樣な感じでした。

そのあなたは家庭に入るとわがまゝのありつたけを盡された。夫婦生活と名の附くものであつたらあなたのあのわがまゝは到底許されない程度のものでした。けれど波多野氏はそのグウタラなあなたを愛して居たので、貞淑な妻となる事を强ひられなかつた。そう云ふ空氣の中で純眞なあなたの性格は少しも損はれずに育つて行きました。兄の樣な波多野氏の手によつて素直に成長したあなたは有島氏によつて初戀を知りました。それはあなたの言葉を借りて言へば「武郎に馬鹿で正直な處を見出したから」なのでした。

平和な家庭でウソと云ふ事を知らなかつたあなたは有島氏の情熱をどう逃れる事も出來なかつた。自分の戀を僞るにはあなたはあまりに正直でした。そして波多野氏に對するあなたの純な愛はあなたの戀によりて少しも傷けられなかつた爲に一層あなたは苦しまなさければならなかつた。

されどこの苦しみはプログラムが終りに近づいた時に「何もかも其條件で許して昔の通りに愛して行ける」と寬大な兄の心持を誓はれた波多野氏の言葉によつて、すつかり安心された。

あなたが死に面接された時に波多野氏との別れを惜む涙は眞に清い澄んだものであなたの心が完全に平かであつた事を私は知つてゐます。

秋子樣！徹底した享樂家！眞劍なエゴイスト！、あなたの享樂は苦しい享樂でした。眞劍な自己の心に忠實ならんとされたあなたの努力は眞に勇ましいものでした。けれどあなたは最後まで大膽に勇敢に戰つて行かれた。あなたの凡てが愛で充滿し切つたときに、あなたの歡びはあなたの命を斷つた。

最初から最後まで純であり眞であつたあなたの靈に私は衷心の讃美を呈す。　（六月十二日夜）

永久に若い人

上司小劍

私の又從妹にあたる娘に愛人が出來て、頑固な親類たちから包圍攻擊を受け、始末がつかずに上京してきて、私によつて活路を求めようとしたらしいのが、打明けることが出來ないで、先月の十一日から廿日頃まで、私の家に滯在して、空しく東京見物をしたゞけで、大阪へ歸つて行つた。それが、今月の三日に自殺したといふ電報がきて、私は大いに驚いた打明けてくれゝば私の力によつて救ふことは出來なくとも、出來るだけの後援はするのであつたのに、殘念なことをしたと思つてゐる矢先に、波多野さんのことがあつて、何だか變な氣持になつてしまつた。

波多野さんも、私の又從妹も、私の書齋の同じ椅子によつて、女性としては極めて快活な話をした面影が、まだ目の前に殘つてゐる。波多野さんは、婦人公論の原稿のことで見えたゞけで、仕事についての話以外は餘りしたこともないが、洋服を著るのは厭だとか、世話女房になる位なら死んだ方がいゝと思ふといふやうなことは、よく言つてゐた。今年の一月だつたか、雪のひどく降る日に來て、コートの上へ大きな釦のついたショールをかけて、ひどくハイカラな姿で、降る雪につゝまれるやうになりながら歸つてゆくのを、玄關に見送つた私が、「伏見の里の常盤御前のやうだ」と言ふと、波多野さんは道の眞中で大きな聲で笑つて、「でもわたし、子供はありませんわ」と云つてゐた。この常盤御前云々の話には一寸感動したと見えて、社へ歸つてからもそのことを同僚の人に話してゐたさうな。

私の家へ初めて見えたのは、五六年前の暑い盛りで、派手な明石の着物に、絽の丸帶をしめた姿は、まるで貴族の令孃のやうで、普通の婦人記者とはよほど趣きが變つてゐた。それ以來度々見えたが、私にとつて最後の訪問を受けたのは、五月の二十四五日頃で、やはり原稿のことであつたが、「非常に忙しいから今度だけは許して下さい」と、言つても「先生そんなこと言はないで短かくていゝんですから是非書いて下さい。ねえいゝでせう、さう決めませう」と言つた風で、い

つでもこんな具合で波多野さんには、必ず書かされてしまつた。その時丁度宇治から新茶が來てゐたので、それを入れて飲ませると「わたしの社には、お茶好きが多いからこれ少し頂戴」と言つて、その新茶を原稿紙に包んで持つて歸つた。その時の原稿は六月の五日迄と云ふ約束で、その日に波多野さんの手紙を持つてきた使ひに渡したが、原稿と新茶との禮狀がきたのは六月の七日で、丁度亡くなられる二日前だと思ふと、最後までよく落着いて、何時もの通りテキパキと仕事を片附けてゆかれた敏腕ぶりがうかゞはれる。併し最近には何處となく容貌に哀愁が漂うて、大分窶れてをられたやうであつた。いつまでも若くてあるやうにと、努めてをられたらしい波多野さんは、その尊敬すべき愛人と共に、明るい道を、暗い中に辿つて遂に永久に、若い人として生きられることゝなつた波多野さんにとつては、定めて滿足なことであらう。この美しい人を、今しばらく此世にとゞめてをきたかつたと希ふ者にとつては、波多野さんに、原阿佐緒さんの強さがほしかつたとも思ふけれど、それは思ふ者の愚痴で、波多野さんの永久に生きられる道は、あのほかになかつたのであらう。

唐辛の感じ

室生犀星

眼のひかりが虹のやうに走る感じの人。誰かゞ新聞で言つてゐた牡丹の花の感じではない。ひよつとすると唐辛の感じだ。

だが、本當は辛いかどうだか能く知らない。或は甘いのかも知れない――。

東洋趣味

芥川龍之介

何時か、趣味の話が出た時に、秋子さんは日本趣味、――東洋趣味のものが好きだと云ふことを云つてゐた。兎に角怜巧さうな人で、多少ヒステリックの處があつたやうだ。

一度見た波多野さん

須藤とみ

——それは冷たい雨の夜でした。

たしか昨年の十一月末であつたか、パリー院の招待を受けて、あの華麗な東京會館の三階に初めて見た波多野さんは、靜謐そのものゝやうな深く澄み切つた、黒曜のやうな瞳の底に、云ひ知れぬ強さを持つた方でした。

スラリと流れるやうな楚々たる容姿と共に、あの魅力ある眼は到底忘れることの出來ないものです。

目も覺めるやうな輝く夜會服に、孔雀のやうな足どりで集ふ多くの婦人記者の中に、東洋趣味の讃美者であるあの方ばかりは（その夜自らさう話されたのであつた）髪も素直な、結び方で、オツトリとした擧止のうちにも何處か人を射るやうな強さが感じられました。

仕事にかけては稀れな敏腕家であることは、何にかの折りにふれて耳にしてゐましたが、あの溢れるやうな聰明さと、而かも纎細な美と、柔かい感觸を對手に與へる、惠まれた天質の持主であるあの方にして、初めてよく出來るのだと私は獨りでうなづきました。

この夜、どうしたものか波多野さんは、ポツト出の私に頻りと接近しやうとなさるのでした。そして遲く會がはてゝのかへりをワザ〳〵私のために泥濘の暗い雨の中を、反對の方向である新橋驛まで見送つて下すつたのでした。その時電車の窓口に立つて車が動き出すまで、いく度も〳〵再會を約されたのでしたが、さうしてその後數回お逢ひする機會はあつたのでしたが、おつくうがりやの私は遂にそれつきりお目にもかゝらず、日々のガサ〳〵した忙しさのうちに忘れるともなく忘れやうとしてゐました。

初めて逢つた私への、あの親しさうな態度と、スツキリとした社交振りは、とても私なぞの眞似も出來ないもので、眞に人に喰ひ入る天才的力の所有者であつたことを、今、しみじみと私は感じます。

かうした熱烈しい戀愛の女主人公には相應しい女性でした。イヴの誘惑と魅力を秘めた部分かな、そして純一な女性であつたと今更思ひ返さずにはゐられません。

童話の話

宇野浩二

波多野秋子女史の印象に就いては、既に婦人公論社から求められて、口述をした後なので、私の小説ではあるまいし、そんな同じ題目を幾度も語る譯には行かないが、强ひてと言はれて、それを思ひ直して、私はここで彼女に會つた最後の日の思ひ出を書きつけて見ようかと考へた。多分、有島氏に就いては色々な人たちがその思ひ出や印象やを語るだらう、だが、彼の告別式の日に千人の弔ひの人が集まつた時に、同じ日に彼と死を共にした彼女の遺骨は一人の女中の手に依つて、殆ど弔ひに來た人なしに教會堂に送られたといふことであるが、この雜誌の記者の話に、彼女に就いては語る人が少なくて困つてゐると聞いて、私は乏しい材料からでも何か書いて見ようと思ひ直した所以である。

確か田山花袋氏の談話であつたか、彼女を家の人が大變好いてゐた、といふやうな記事を新聞で見たが、私の家でもさうであつた。あゝいふ謂はば新しい女の人は、我々の家にゐるやうな老人とか無智な女たちからは、普通は餘り好感を抱かれないものであるが、彼女の場合ではそれが反對であつたと見える、つまりどんな階級のどんな質の人たちにも、彼女はいい感じを與へる人だつたのであらう、現に私は今執筆や何かの關係から、家を離れると同じ東京の市内で下宿をしてゐるのであるが、丁度あの事件の新聞の記事に出た翌日、用事があつて私の家に歸ると、私の家の押入の中にしつらへてある簞笥を佛壇の中に、私の母と婆とがどうしたのであらう、時ならず燈明と線香が上つてゐて奥に一枚の寫眞が立てかけられてあるのを見た、それはずつと以前私の友達のK——氏が彼のところへ波多野女史が原稿をとりに行つた時、丁

度彼が寫眞機を買ひ立ての時分だつたので、早速彼女にモデルになつて貰つて撮つたのを、よく寫つてゐたので私が貰ひ受けて來たところの、彼女のベスト型の寫眞だつた。例に依つて私は私の物言はずの癖で、その時家の者には何にも言はなかつたが、心の中で一寸いゝ感じがした。

　言ふ迄もなく、私と波多野女史とは單に寄稿者と記者としての附合ひの外に何の交渉もなかつたのであるが、私は大正十年と十一年の二ケ年に渡つて、彼女の屬する婦人公論紙上につづき物の小説を書いてゐたことがある。それには、何でもあそこの社では、誰それは誰それと云つた風に各々の寄稿者にそれぞれ係の記者が當て嵌めてあつたらしく、それが私の係が彼女であつたのだつた。もつとも、私のその小説といふのは、曾てあんな苦しい厭な經驗を覺えたことがない程、自分で持て餘してゐたものなので、と言つて中途で止める譯にも行かず、終ひにはそれを出してゐる雜誌の記者に會ふのさへ厭になつた、で、なるべくその私の係の記者である波多野氏をも避けるやうにしてゐた。それでも、矢張りつい締切期日に遲れるので、屢々彼女に催促に來られたり、手紙を貰つたりして、絶えず交渉があつた譯だつた、が、實を言ふと、彼女はあゝいふ見たところさばさばした氣象の人で、私も亦先のやうな理由で長話などをしてゐて、私のその愚小説の話に落ちると困ると思つたので、いつの時でも大抵玄關で用事だけ聞きそして話すと、そのまま別れるのが常であつた。從つて彼女に就いて書くことなど殆ど持合はさないのではあるが。

　そのうちで唯二度だけ、一度は私が森ケ崎へ原稿を書きに行つてゐた時のこと、或冬、灯ともし頃に突然彼女の來訪を受けて、その時小説の催促の外に、その頃私は「文藝閑話休題」といふ隨筆文章を二三の雜誌に幾つか書いてゐたので、あゝいふ風の文章で、何か女性に就いて書いてくれと注文された時と、それから今年の三月頃だつたか、童話を書いてほしいといふ注文を持つて來られた時と、その二度だけ多少時間長く、雜誌の用以外の雜談をしたことがある。前の時は彼女が私に頼みに來られた文章の題目が、つまり女性に就いてといふやうな題目だつたので、さういふ風な話題で話し合つたやうに覺えてゐる、私はさういふ場合にいつも言ふ通り、自分はオツトオ、ワイニンゲルの弟子だから女性非尊重主義である、さういふ考へを持つてゐる者などが、婦人雜誌に女性に就いての感想を書くのは異なものぢやありませんか、などと冗談を言つた、が、彼女は初めのうちに雜誌記者らし

「いえ、それは又それで結構です、殊にうちの主幹は先生の『閑話休題』式の文章が非常に好きなんです。」などとお世辭を言つた。が、その時の話はそれだけにして、初めに言つたこの三月に（それが私が彼女を見た最後であつた）彼女に會つた時の思ひ出を少しばかり書いて見やう。

　何でもその時は寄稿を一度引受けて、後から手紙で斷つたので、改めてそれを催促に彼女が來られた時だつたかと思ふ、或ひはその初めの時だつたかも知れない。私はこれ迄大人の讀む童話などといふものに就いて考へたことがない、然し婦人公論などといふ雜誌には、多少さういふ調子のものでないといけないでせう、僕は小説を書き始める前に、子供の雜誌に、編輯者の意向を伺ひ伺ひ書いた爲であらうか、どうも有り來りの、つまり熊が物を言つたり、百姓の子が魔法の杖を授かつたり、人間が星の世界に出かけたりする流儀ものしか書けない、それも唯それだけの他愛のないことを他愛なく書くのなら贊成だが、それをどうかすると豆腐のにがりのやうに、多少敎訓めいたテーマで結ぶといふ風な癖が出勝ちで、自分でも持て餘してゐるといふやうな事を述べると、彼女はいつものやうに、「それで結構なんです。」と言つた。

　その時私は著しく氣がついたのは、彼女がこれ迄の私の持つてゐた彼女の印象と甚だ違つて、元來が美しい顏の人ではあるが、以前の無化粧だつたのに比べて、化粧など叮嚀に施して、甚だ派手やかに見えたことだつた。

「もうちやんとあてにしてあるんですもの、どうしても書いて下さらないと困るんですもの。」と言ふのに、彼女は身體を捩ぢて、膝の上で手と手を叉の字に握り合はしたりする樣子が、以前のこの人に一度も見たことのない、遠慮なく言ふと、甚だコケテイツシユな感じを私に與へた。

「然し、僕は童話といふものに就いて、少しばかり意見は持つてゐるんですよ。」と私は言つた。つまり大人の讀むものとか、子供の讀むものとか言ふ區別を僕は考へたことがない代りに、どんな大人でも老人でも、猿蟹合戰とか、かち〱山とかいふやうな話を、時として非常に面白く讀むことがある子供と同じ心持になつて、子供のやうな氣持になつて、面白く讀んだり考へたりすることがある。よく近頃の新聞にコドモの欄といふやうなものがあつて、そこに漫畫で動物の運動會とか、魚の芝居とかいふ題で、熊が燕尾服を着てゐたり、象が鼻をバツトの代りに振つてゐたり、兎が電話の交換手になつてゐたり、章魚が役者になつてゐたりするのを見るが、あゝいふものを實に愉快な氣持で樂しんで見る、等、等とい

ふやうな話をすると、彼女はいつになく膝を乘り出して、
「あゝ、それは本當ですね、本當ですね、私もさうです、實際さうです」と心から同感したやうに叫んだ。
　つまり、人はどんなに大人になつたり、大臣になつたり、實業家になつたりしても、時々は子供のやうに星の國のことを考へたり、動物の世界のことを考へたりするものだ、といふ私の常の意見に、彼女はひどく同感しながら、
「ちやあ、今度は童話で、この次の號位に是非さういふ感想文をいたゞかして下さい。ね、ね、約束しておいて下さい」と言つた。
「相變らず凄いですね、」とそこで私が冷かすやうに言ふと、
「さうさう、あなたは私のことを恐い女だと言つてらしやるさうですね、私、或所で聞きましたよ、」と彼女は何を思ひ出したのか、そんな事を言ひ出した。
　私は一寸狼狽した、然しそんな覺えがない氣がするので、考へながら、「そんな事を言つた覺えはありませんね、若し言つたとしたら、それは言葉が違ふんでせう。それは屹度しつかりした人だとでも言ふつもりの、何か外の言葉だつたんでせう、どうしてあなたのやうな綺麗な人が恐いもんですか、」と少し困つたので、冗談めかしてこんな風に言つた。
「ちやあ、恐くつても、えらくつても何方でもよござんすから、兎に角あてにしてゐるんですから、ね、是非書いて下さいね、二十五日までに、二十五日に使をよこしていゝでせう？」
――と、大體そんな事であつた。もつとも、こゝの童話に就いての會話は、こゝに書いた十倍ももつとも、色々なことを話し合つたのであるが、くどいから省くとして、兎に角、この前の時女性に就いての感想を述べた時に、彼女は多分心の中で私のやうな不逞な、そして彼女から見ると飛んでもない意見に違ひなかつたところのものを、雜誌記者として「それで結構です、」と通り一遍の挨拶をしたのに比べて、この時の童話の國の話では、彼女は彼女自身の意見も述べそして、私の言つたことに大いに同感したらしいことは、確かであつた。
「ちやあ、お願ひします、二十五日迄にね、」と最後に言つて彼女は送り出して行つた私に、玄關のところで一度お辭儀をして、格子戸を閉めてもう一度お辭儀をして、大跨の派手な歩き方をして、彼女は私の目から消えて去つたのである。童話の國へか？

中西伊之助作

長編小說

農夫喜兵衛の死

四六判 上製

定價壹圓七拾錢 書留送料拾五錢

農民小說の魁をなせる本書を讀んで下さい。

◇小作農喜兵衛の伜は兵に徴されて滿洲で戰死し、その娘は賣られて朝鮮に赴きました、そして朴訥の聞え高かつた彼は地主からいぢめられて水に溺れました。◇本書を讀めば小作人がいかに地主にいぢめられ、そして小作人の娘や、伜が悲しい人生觀を抱いて離溢するか農民生活のみじめさがしみじみと身にしみて來ます◇農村は年と共に荒廢して行きます、そして地主と小作人との階級意識も年と共に熾烈になる、經世家が第一に注目すべきは此點です◇彼等はしかくいぢめられて死より强き反抗心を子々孫々に傳へます◇そして一面蹴られ。擲ぐられても戀愛は娘自身の好きな方面に芽生え、生長して行きます、彼の戀愛の前には資本家の猛烈な壓迫も及びもつきません◇プロ文壇の第一人者たる中西君のメスがいかに鋭く彼等の叫ばんとする處を突き刺したか精讀して下さい◇時代に魁せんとする人々はこの虐げらるる人々の眞相を了解して下さい。

中西伊之助著

長編小說 赭土に芽ぐむもの

十版

定價三圓 送料十九錢

中西伊之助著

長編小說 汝等の背後より

十版

定價二圓卅錢 送料十七錢

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

世界三大偉人評傳と學説

山川均著　十一版

レーニンとトロツキー

曠世の大偉人──世界歴史に一大記錄をつくつた彼レーニン、プロレタリアートの爲めに萬丈の氣を吐いた彼レーニンは帳中漸く病の篤きを傳ふ、日露の折衝漸く捗きとき、我々は本書を携へて彼レーニンの偉業を瞑想してゐる。

定價一圓九十錢　送料十五錢　四六判上製

文學博士 鹿子木員信、饒平名智太郎共著　十版發賣

ガンヂと眞理の把持

東洋が現代に有する最大の哲人として、又た印度革命の大立物としてレニンと並び稱せらるゝガンヂ氏の哲學の體系たる「眞理の把持」と最近印度に横流する理想主義的革命の本體を明にす。

定價貳圓卅錢　送料十九錢（四六判）

饒平名智太郎編　第六版發賣

ガンヂ審判の日

定價壹圓五十錢　送料十五錢（四六判）

理學博士 石原純著　三十七版

增補（アインスタインと）相對性理論

ニユートン引力を否定して全科學界を革命せる氏の人となりと、「相對性理論」とを知ることの出來る一番評判のよい書物は本書です、著者が石原氏であることが何より本書の權威です。

定價貳圓貳拾錢　送料十七錢　四六判上製

片山潛著

自傳

（七版）

定價壹圓八十錢　送料拾五錢

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

黒人ルネ・マラン作
高瀬毅譯

参拾五版

バツアラ

（黒人の赤裸々な戀愛は我々をしてゾッとせしむ）

定價壹圓五拾錢
書留送料十五錢

我國に唯一無二の黒人生活の記錄、そして筆者は黒人中の唯一の大創作家です、彼等の原始的生活、原始的戀愛を知ることは、文明と稱する歐米人や、我國人に比して一段の妙諦を覺ゆる。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

沙羅の花

芥川龍之介作

定價貳圓八拾錢

◇送料十九錢◇

◇四六判美裝◇

第五版

精錬されたる藝術家として、一代の天才兒として芥川氏の存在は慥に文壇の大きな光りである、本書は氏が近業の短篇小說、童話、紀行文、小品、隨筆の傑作集である。氏の藝術によりて眞の藝術を味ひ、眞に創作としての天才肌な、そして奥深い味ひを味ふことが出來る、その典章の鮮かさは一世の儀範とし、そして趣味の凝結せる絶品として大正の新青年の三誦に値する。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

矢崎美盛著（新刊）

現代哲學思潮

定價壹圓五拾錢
送料十五錢

哲學入門の新刊

哲學に入らんとする人の多くして、「哲學入門書」のないのを遺憾とした著者は、幾多の苦心を經て本書を公刊しました、本書は現代佛、獨、英その他に鳴りひびく哲學者及その哲學について懇切なる解説を與へたものです、矢崎氏は東京大學の生める新進氣鋭の哲學者で、特に近代哲學思潮の權威者です。

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

刊

に深く喰ひ入る。

吉田紘二郎作

芭蕉

價1圓50錢
送料15錢

槇有恒著

登山寫眞數十頁挿入

定價三圓二十錢
送料十九錢

高頂を味ひ、山靈によりて人生の最高敬虔を



實感に就て

武者小路實篤

私達は自分の頭を自分で作つたのでは無い、夫れと同時に、物を感ずる事も自分が何かに依つて夫ういふ風に感じなければならぬやうに作られた、其儘に感じない譯には行かない。或る事を見て夫れを若し不愉快を感じても不愉快といふ事が自分では嫌であるから成る丈け美しくしやうとする、併し、不愉快を感じなければならぬ場合はどうしても不愉快を感じなければならないのです。勿論夫れは其の時の頭にも依る。又その人の考が段々進むに從つて初め不愉快に感じた事が不愉快を感じないで濟む事もあるでせう。また、初め愉快に感じた事も段々不愉快に感ずるやうになる事もあるでせう　また、病氣をしたり、其他、種々の事情から或る時は愉快を感じた事が、或る時は不愉快を感ずる事もあるでしやう。しかしどつちにしろ自分で物を感ずるには自分に勝手に感じ度いやうに感ずる事は出來ない。

或る物を間違つた見方、間違つた考へ方に依つて其物から人間が受けなければならない感じが受けられず、感じてはならない感じ方をすると云ふ場合も無い事は無いでせう。併し、夫れは自分の頭の値打と、其感じられるものとがうまくぴつたりぶつかつた時に感ずるのであつて、我々は、感じ度いやうに感ずる譯には行かないと思ふのです。

假令は、或る病氣の人があるとして（露骨に言へば癩病のやうな）此方がそれから受ける感じが初めは非常に不愉快なものがある。夫れを見て不愉快な感じを受けるのは人間として自然の事であつて、人間をして此病氣を此世から全滅させるやうに努力する爲に必要である。もしある病氣を人間が愛するやうにつくられたらそれは人類にとつて禍にちがいない。併し、或る特別に宗敎心の强い人は夫れを見ても不愉快を感じないで、尙夫れに愛を感じ、癩病の食ひかすを平氣で食つた聖者もある。是が出來るのが自然であるか、出來ないのが自然であるかはその人の愛の强さできまるとも云へる。しかし、兎も角實際に於て不愉快を感じた場合それを感じないふりをするのは嘘をつくのであつて、我々は斯ういふ場合若し不愉快を感じた場合はそれが自慢になる場合でも、不名譽になる場合でも正直に感じた通り感じた顏をするより外仕方が無いと思ふ。是がぴつたり感じられないで何か先入主だとか、何か主義だとかに依つて自分が感じた感じをちつとでも嘘を吐く時は其人が文學者としての値打が半分以上失はれた事になる。

そうなりだすと、段々眞實と云ふものがわからなくなり、嘘を吐く事が平氣になつてくる。直接物を感ずると云ふ事が出來なくなつて、筆先で胡魔化すやうになる。斯ういふ風にして書いたものはわかつた人が見れば非常に不愉快を感ずる。何か嘘を吐かれたやうな、胡魔化されたやうな感じがする。殊に自分に取つて大事な問題であるとか、直接關係のある場合とか、見逃す事の出來ない事實に觸れた場合には尙更ら其嘘が判然と解つて其人の頭を信用する事が出來ない事になる。物の本當を見るといふ事は是は非常にたやすいやうに見えて實は甚だ六ケ敷い事であつて、我々が何か或る事件に就き或は新聞で見た種々の事件に就き我々は大概の場合無關心ですぎることは少なく、何か考へる。しかしそれが正當だと

云ふことはむづかしい。一體新聞記事と云ふものは噓が多い。本當のことがはつ切りわかるまで記事がかけない記者許りだつたら新聞は出せない。新聞を毎日出さうと思へば、噓位い平氣でかける人々が集らなければ駄目である。だから毎日新聞を見たい人は新聞のある程度の噓は認めなければならぬ。本當を見拔くといふ事は非常に六ケ敷いものである。良心の鋭く頭の良い人ならば或る點迄解るが頭は良くても良心が鈍かつたら物をぴつたり感ずる事は出來ない。新聞記事の場合は職務上仕方が無いものとして許すより仕方がないが、是が文藝となつては許す事は出來ない。何となれば文藝で食はなければならない今の時代にあつては毎月何枚書かねばならぬとか、或は其他の事情で催足されたり、せかれたりするので急いでかゝなければならない場合もあると思ふが併し、我々はどんなものでも書かなければならないと云ふ事は無い。文學者は自分がぴつたり感じられること丈けを書けばよいのであつて新聞記事や何かのやうに與へられた題材に依つて書く必要は無い。我々文學に携はる者は自分で解らない事は書かなくてもよい權利を持つて居るのである。無理に書かないところに我々の權利があり、誇りがあるのである。事實の眞相を摑まないで創作したり、批評したりする必要は無い。一人でも解つておれば其解つた事を書いて居ればよい。

ところが實際は、却々斯ういふ人は少ない。世間には正直な人も多いだらう。自分の知つて居る人でも二三人や六五人は居る。さういふ人がもつともつと世間に澤山ゐてよいと思ふが、實際に於ては却々居ないのは仕方が無い。我々は人間はみんな正直なものだと聞かされて此世に生れて來たのではない。我々は、初めから惡口を叩かれたり、誤解されたりする事を百も承知で厚かましく文學をやる。やる以上は正直にやらなければならぬと思ふ。併しそんな人間許りが此世に無い事は當然であるにしろ、自分がそんな仲間に入ることは恥ぢなければならない。諸君の中に創作家、批評家として立たうといふ人は間違つた事を書かないで、本當に解らない事は解らないとして書くやうにして行くより仕方がない。解らない事を解らないと知り乍ら、筆先で胡魔化して了ふといふ事は其人に取つて決して名譽な事ではない。文學は事實ありさ

うに書くといふやうな考は今は殆ど廢つてしまつて斯ういふ考へを持つてゐる人はないであらう

昔は事實らしくかいてあるものを見れば滿足出來たかもしれない、しかし我々は、既に其時代から通り越して居る。此頃の文學は西洋でも何處でも段々正直になつてもつと本當の事を望んで居る。自然主義の作品でも本當によい作品は、事實ありさうにかけた點に價値があるのではなく、よむ者の心がその作品から直接に強い感じをうける。その感じが眞であるからである。

その受ける感じが眞ならばいゝのである。音樂家が都合のいゝやうに音を支配する。その音は自然の模倣でないかも知れない、しかしその心の動きが眞ならばそれでいゝ。聞くものを眞に純粹に感動さすことが出來ればそれでいゝ。

自分は、音樂家が音を使ふやうに、作家が人物や事件をあつかつても構はないと思ふ。それから受ける、感じさへ本當ならば。元より文學には種々行き方がある。彫刻的な行き方や、音樂的な行き方がある。兩方がごつちやになつては勿論面白くない。文學の上には行き方は、幾らでもあるからどの行き方にしても、夫れが本當であるとか嘘であるとか考る暇無しに我々の心を動かして呉れ喜ばして呉れさへすればいゝのである。併し少しでも嘘があつたりする場合は我々は夫れを見逃す譯には行かない。假令は調子よく書けても、其處に出て來る人物がどうしてもその場合考へる譯のない事が書いてあつたりしては氣持惡くなる。たとへば、人が或る場合に死ぬやうな苦しみをして戰つてゐる時のことを書いて、その人がその時考へねばならないことがかけずに、作者の机の上の考へがながく／＼とかいてあるとする。するとそんな馬鹿なことがあるものかと云ふ氣がしないわけにはゆかない。いざといふ時に一人の人の感ずる感じ方といふものは、一種特別なもので其處に出て來る人物と、その人物の感じ方がまるで別種のものであつたら、我々は不愉快を感じない譯には行かない。其場合作者が机の上で作つたやうな感じを與へられたら、我々はそれを見てどうしても滿足する譯には行かない。矢張瞞されたやうな感じがする。我々が創作を見ても批評を見ても是が本當の物であるか、嘘であるかを見る事は六ケ敷し

い事では無い、批評にしても、創作にしても其書く動機がはつきりと解つて其動機に氣持の惡い事が少しでもあつたら、夫れは嘘だと見て差支へ無い。本當の批評であるとか、本當の創作であるとかいふものには必ずその人の眞實にたいする良心があらはれてゐるもので、其人の意識によつて眞實が左右されることを恐れる。嘘ものは鍍金するのに苦心して、眞實の感じが自から生れると云ふ處がない。つじつまがあつても、生々した面白さが出て來ない。そしてごまかすことを心がけてゐる。一々事實にてらして見て眞實にたいする良心のゆきわたつてゐないものは、嘘物と思はない譯には行かない。トルストイがチエホフの「愛らしき者」と云ふ短篇の序文の中にチエホフが本當の詩人であつたからその小説を書く前には當時の思想に媚びてその小説に依つて女といふものがどの位定見が無く、自分の愛する男によつてどうにでもなるもので、自分といふものを持つてゐないといふ事を非難しやうとして書いたものだが、夫れにも拘らず事實は女の惡口にならないで、却つて是を讃美するやうになつた。

それはある豫言者がユデヤ人を呪ふことをたのまれて、祭壇にたつていざ呪はふとしたら、祝福しないわけにはゆかなかつたやうなものだ。いざと云ふ時までは時代の思潮や、ある主義に媚びる氣でゐても、いざとなると眞實感じさせられることより他かくことが出來ない。それが眞の詩人である。そしてチエホフもこの場合これと同じことを經驗したと云ふ意味のことを云つてゐますが、日本の創作家や批評家は自分の主義や、時代の風潮に媚びるためには自分が眞實に感じることをけとばすこと位いなんとも思つてゐない。

我々が創作家として立つ以上は、自分が何物かを感じた時は其の感じた處を出來る丈け正直に書きさへすればよいのである。夫れには非常な勇氣が要る。我々の頭は、自分の頭ではあるが其時代の空氣、或は先入主といふものに隨分よく掻き亂される恐れがある。種々のものが這入つて來て、自分の感じを素直に書くことは決して容易の事ではない。自分でもうつかりするとつい自分の好き嫌ひや先入主に支配されかけておどろくことがある。成る可く忠實にならうと思ふても夫

れには可なりの努力が要る。是は非常に六ケ敷いものであるけれども、さういふ人のみを我々は本當に信用する事が出來る。どういふ時代が來ても、どんな嵐が來ても其人を信用する事が出來る。そして其人が成長するに從つて段々眞理に近づいてゆくことが出來る。かゝる人で始めて本當に成長があり進歩があると云へると思ふ。夫れが自分の感ずる事に正直になれず何か他のものに動かされる癖がついたら其人は進むに從つて益々落ちつきをうしない、何處に落ちついていゝか判らなくなる。

或時は、其人の作品は流行に副ふかも知れないが、併し夫れは眞の生命のある作品では無い。若しさう云ふもの切り此世になかつたら、我々は何を信じて生きてゆけばいゝかわからなくなる。より所がなくなり甚だ不安である。その時は人類がどういふ處に據つて立つていゝかわからなくなる。我々は、此世に生きて居るといふ事は甚だ賴りどころの無いものになる。これに反し、本當に正直に自分の感じをつたへるものがあれば、それが自分の感じと違つても其處に一個の正直な人間を認める事が出來る。その人間を人格者と認めることが出來、その人の感じたことや考へたことは人間の感じること、又考へたことゝして我々と生きた交渉をもつことが出來ると思ふ。つまり、我々の感じた事が本當であるか、噓であるかといふ事を自分でよく知る事が必要で、知つた以上は夫れに忠實になる事が必要である。我々は、何が爲めに物を感ずるやうに作られたか知らないが、我々はそれに忠實になるより他仕方が無いのである。たとへば物を見ても、すべての物を美しく見る事が出來ない。此世にはまだ醜いものもある。そして本當に美を感じるものは美を愛し美しいものをより多くこの世に作りだすことが出來るが、本當に美を感じることが出來なくなつたらそれまでゞある。醜を美に無理に思はなければならないと思つて、この世に醜をつくつて得意な人間があるとしたらそれは馬鹿ものである。

自分の實感に正直になれないものは、美の價値も眞の價値もわからなくなる。嫌惡すべきものを嫌惡せず、好きなもこを好きになれないものはこの世に何を生んだらいゝか、この世をどうしたらいゝか、又どんな作品をつくつたらいゝのか

自分でわからなくなるであらう。美しいものを地上に多くしやうとする事が、美を本當に感じられなくなつたものがどうして美を生むことが出來やう。そして人間の喜びを出來る丈け此世に澤山生むには、何が人間を喜ばすかを眞に知らなければならない。自分の主觀、感じに不忠實になりだしたものは、なにゝよつて自分の考へが正しいか、不正かを知ることが出來るか。理窟だけでものを見るものは遂に人間をとんでもない淺薄なものにつくり上げてしまふだらう。

人間は自分の感じに正直になり、そして自分の眞に望むものに向つてすゝんでゆくことで、生活により所が出來るのである。初めはつまらないものに段々喜びを感じることも出來るかも知れない。しかしそれも自己に正直になり切つてその域に達したのでなければ何にもならない。眞に傑れた人間や、作家は自分の實感になり、そして本當の喜びを感ずる様になり其中に段々自分の實感が生長する道をこつこつ歩くものだ そしてその道を忠實に歩いた本物丈けが殘つて行くのである。

我々が、實感に忠實になつて進む事に依つて我々の實感は進歩して行き、そしてその人の世界は進歩するのである。すぐれた人間の、すぐれた點は實感が深くたしかな所にある。實感をはなれて議論で物を見る人には人生問題はわからない。人間と云ふものがわからないからである。すべては實感を基礎にして始めて人間は如何につくられてゐるかと云ふことがわかるのである。實感しないことをかくと空虚になり、噓になる。そして第一本當と噓がわからなくなる。

今の多くの文學者は實感を生長させることを知らない、そして自分の實感の不足を理窟や、主義でぬりつぶさうとする。だからかゝれたものが、つくりものになり、虚僞になり、机の上の空想になる。よむものが本當のことが感じられない人はそれでも一時はごまかせるかも知れない。しかしそれでは味もそつけもなくなる。實感を生長さすることを理解すれば文壇にも本物が澤山出てよい筈だと思ふ。その人のものの見方、感じ方は正直に直接にものを見、感じることが出來ると己づと進歩してゆくものだ。そして實感が豐富なれば創作する事は決して六ケ敷いものではない。ただ大事な事は實感を、自分の感じを正直に眞つ直に表現することをのみこむことだ。そして事件や、理窟や議論に出逢つた時、一々く

實感にてらして見ることだ。そして虚僞なものはすてて眞實に忠實に忠實にとすゝむことだ、それが出來て十年二十年と其實感に忠實になつて進んで行つたら其人は、他人の入れない世界に入つてゆくであらう。ただむづかしいのは本當のことをますます深く感じることだ。深く入つて感じることが出來ないと段々惰勢でものを見るやうになつて、眞實と云ふものに段々無頓着になる。

自分は、多くの人が實感でものを想像する力がない爲めに、理窟や先入主で、ごまかして、段々本當から遠ざかり人間にあり得ないやうな不正な人間をつくり出してよろこんでゐる創作や評論を見ることがある。さう云ふ時に馬鹿につける藥がないと云ふ言葉の本當さを知る。實感なくしてものを見るものに本當のことを知らせることの出來ないのは、砂糖の味を知らないものに、砂糖の甘さをきかせるやうなものだ。さう云ふ人は人生をありのまゝに見ることが出來なくなつて人間と云ふものを全く型にはめて見る。そして型にはまらない人間があると、人間の方を虚僞にして型の方を本當にする。そんな人には人間の面白さはわからない。又人生はわからない。人間の内の矛盾したやうに見える内にある面白さはわからない。そして人間を一面的な偏狹なものに見る。

しまひには人間を何か全く別の淺薄な、安ッぽいものにする。そして事實にぶつかると急におどろいて、人間に愛想をつかしたり、失望したりする、そのさきの面白さがわからない。

實感でものを見るものにして始めて人間の人間たる所がわかり、人間がいかなるものをよろこび、いかなるものを嫌ふかがわかり、その他、微妙な人間の心の動き、感じの動きがわかり、其處に、人間の生きてゆく道が暗示される。

罪から德が生れ、淋しさから勇氣が生れ、失望から希望が生れることも實感を知るものにして始めて出來ることだ。又この世で何が最も缺點であるか、人間はいかに生きたがつてゐるものかも本當に知ることが出來る。實感をはなれたものは遂に道を迷つたものだ。求めてはならない處に求め、求めなければならない處に求めない。自分は今の世により所となるものは自分の實感であることを知る。その他の上に築かれたものは要するに空中樓閣である。やがてくづれるものである。

(或る處は演說の時と少しちがつてゐます。當時しやべつた通りを思ひ出せないので)――女性改造文藝講演會にて――

新興階級の婦人に與ふ

千葉龜雄

近代世界の偉大な事實の一つは、人類の自我の發見であるといはれる。發見といふ語彙は、それが今まで埋沒されて居たことを意味する。さうだ。それはまつたく埋沒されて居たのである。彼等下づみになつて居た社會層は、始めから、斯く運命づけられたものと諦め切つて、隨分と長い世紀を、默々として家畜のやうに働きつゞけた。その長い間に亘る、正しくない地位を彼等にさとらしめ、正しい自我に目ざめしめたものが、即ち近代教育組織の發達である。かくして俄かに目ざめた大衆は、何を置いても、先づその長い間奪はれて居たところの、自我の取もどし運動に取りかゝつた。近代から現代にわたる世界の動亂と不安は、みなこの自我取もどし運動の波動でないものはない。そしてこの生存權取もどし運動の陣地に據るものは、女性である。子供である。勞働者である。農民である。虐げられた民族である。また分割された國土である。

で、なるほど、自我の發見されたことは、發見されずに終つたのにくらべて、どれほど人類の幸福であるかわからない。けれども、それが單に發見されただけでは、何の役にも立たぬものであることは、鑛脈を發見しただけで、その鑛山が直ぐそれほどの値うちを持つかどうかがわからないと殆んど同じ程度の話である。かくて自我の發見は、たゞ完全に實現をはかるに至つて、始めて純な値打ちをもつて輝やいて來る。さらば自我の實現とは何であるかと云ふに、自我とは、永遠に流動し、創造して止まない生命の姿である。その流動し、創造する生命を、窒息させ、搾取するやうな何ものも無いところにこそ、自我は始めて或る部分まで完全に實現され

る。そしてその自我の流動が、ゆめにも窒息させられないやうな自然な境地に置かれるのが、即ち自由そのものなのである。故に自由は、自我の實現と離れられない必然な有機的關係を持つて來ると共に、平等といふものも、有りやうは、その自由を達成する一つの道具に過ぎない。だから自由といふものが、すべての語彙をふみこして、近代新興階級の、唯一の合言葉となつた事に、少しも不思議がないのである。

けれども、自我の實現は、それだけではまだまだ完全なものに成り得ない。外に大切な二三の條件が見のこされて居る。第一に自由とは、或る創造性の流動する形をいふのであるが、大切なのはそれが流動することよりも、先づその流動する本元の創造性の本質、價値いかんが問題である。或は自由の形を利用して、創造性に似ても似つかないいかさまものが、いつ大つぴらに流動して居るかも知れないからだ。そこで流動する創造性であるところの、即ち自我を嚴肅に凝視し、討檢する事が必要になつて來る。そして自我を嚴肅に討檢することは、やがて當然に他我を討檢することになる。なぜなら、他我がなくて自我が成り立つ根據がないからである。そして彼女は他我を討檢することが多ければ多いほど、彼女の自我の內容はますます豐富にされ、その凝視はますます、對社會的に、また合理的にあてはまつて行く。眞の自我の討檢者が、絕大な批評心を持たねばならぬ理由がこゝにある。またそれは時代を洞察し得るところの、聰明な理智が必要な理由でもある。

第二の條件は、自我を徹底的に實現するためには絕大な意志を要する。一たび斯うであると進んで行くべき途を定めた上は、どんなむづかしい難儀に遭つても、それをやり遂げる信念的勇氣がいる。誘惑が多く、行き惱みの可能性の多い現代において、かういふ意志はますます必要である

第三の條件は、自分を絕えず革命して止まない極度な潔癖と、正しい地位に置かれない自己に對する、火のやうな正義の熱情がいる。それはどんな妥協にも目をくらまされないところの、聰明を道連れとすべきことは勿論である。

第四の條件は、少しは傲慢であり、奇矯であるといはれようとも何であらう。彼女は、どこまでも自分の個性と創造性

を大事にもり育てゝ、大膽に、怖れ氣なく、突進して行く自尊心がいる。創造性は、他のものと違ふものであればこそ始めて創造性なのである。だから創造性は模倣性の正反對であつて、同時に奇矯性と隣り合ひになる。「着物なり、生活の樣式なりに、何等かの奇矯性をいつも歡迎する」といつたのは、ジョン・スチュアアト・ミルであるが、それは模倣性の單調を打破る事になるからだと云ふのである。

　そこで我國近代の女性も、また、御多分に洩れず、時代に目ざめた少々の人々は、爭つて自己の新實現に急がうとする。その實現の過程として、家庭に、社會に、いたる所に鬪爭の渦を多くか少くか捲き起して居るのは家庭も、社會も、今日では、まだ傳統の精神が、可なり深く喰ひ込んで居るからである。そしてこの鬪爭の姿はいかにもみじめである。同情すべきものも多い。それにかゝはらず、全體から見て、前に舉げたいくつかの條件に對して、まだまだ物足らない空虚が感ぜられるのは何故であらう。

　けれども、正しい地位に還らうとするものの悩みは、單に新興階級に止まるわけのものではない。なぜなら、正しい地位に居なかつたことは、新興階級を虐げた特權階級とても同じことであつたから。たゞ違つたのは搾取するものと、搾取されるものとのそれだけであつて、それだけ現代における舊階級の心の悩みも、また相應な量であるには相違ない。けれども、かゝる場合にすらも、舊階級思想の臆病と頽廢とは、充分な凝視の眼を、あまりに怖ろしい現實の世界に、見ひらかせることに尻込みさせる。何かしら、一刻でも、一時間でも、その苦しみを引き延し、自慰させるやうな機緣にすがりつき、自分の正しい感情を自欺して、苦痛を意識的に忘れやうとつとめる。その結果として、センチメンタルな藝術や、サツカリン入りの新宗教に、陶醉するやうになるのは自然な話で、その生ぬるい氣分に容易に麻痺されるのが、即ち彼等の心理の特殊性であるが、それはつひに救ひ得ない。だからそれは別として、新興階級女性の上についても、やはり滿たされない多くの空虚である。

　事實から云へば、先づ現代のやうな思想革命の時代にあつ

て、我國女性文明批評家の數へるほども少ない事は何を示すか。たとへばその少數すらも、時代の眺め力の行き亘りや、思索を潛める深化の度合においては、量においても、質においても、男性評論家に、まさる人々の少ない理由はどこから來るか。また特に目につくのか、彼等の時代觀察の眼が、とかくより多く後方に向けられて、將來に對する燃燒があまりに微弱であることである。これはあるが儘の時代に反應して見ると、あまりに痛ましい皮肉ではあるまいか。なぜなら、現代までにおける我國女性は、男性の置かれた地位に比べて殘酷なほどずつと劣つて居た。だから、男性が正しい地位に跳ねかへるべき力を十とすれば、女性のそれは更に二倍し三倍した廿卅でなければならない。それと同じ理由で、女性の過去に反抗する反逆心が、男性に比して三倍も四倍もに燃え立つことは一向何等の不思議がないのである。けれどもかゝる反逆心は、現代に於いては必ず何等かの犧牲を伴はねばならないのであるが、それが新時代の正しいものを信ずる彼等にとつて何であらう。顏も赤めずに嘲罵の面に向つて立つこそ、彼等新興階級の女性の誇りでなければならぬ。正しい自我の信仰と、その自我の實現に忠實なものは、誰もみな斯くあらねばならぬからである。私はその悲壯美を、反軍國主義の長歌をつくつて、ショウギニスト達の眼を廻さした。かつての與謝野晶子夫人に見、また原始女性の尊嚴を唱へ、傳統の破壞を勇敢に實行したかつての平塚明子夫人に見た。そしてそれは少くとも、將來と過去の過渡思想に對する、鋭どい批判心と社會知識と、獨立した創造性の人格と勇氣とを據想しなければなし得ないものであつた。けれども私はそれを除いてはその後において、さうした鋭い批判の眼と、正しい反抗の勇氣をもつて、女性界を指導する女性を一二人の外あまり見出す事が出來ない。

私はもとよりその點において、社會主義を懷いて戰つて居るところの、一團の女性を忘れることが出來ない。彼等の熱情と勇氣はまことに多とすべきであらう。けれどもその極めて少數を除いて、その實行を理性づける社會批判眼の深さや、廣さについて、彼等がどれほどの容量を持つて居るかを知り得る機會を與へられなかつたのは遺憾である。理論は知識階級の管掌である。無產階級には、たゞ生活があるだけだと云

つてはいけない。これはもう理窟にならぬ。私共の說く中には、もはや、知識専有であるところの、知識階級の存在を認めぬ。認めぬと同時に、凡ての人類の生活には、奪還された知識が始めて恨みつこ無しに平等に入り込むべきものであり、かくして凡ての生活は、その原理によつて指導さるべきものである事を主張する。まことに現代の如き時代にあつて、批判精神のないところに、果して何の合理的な生活が生ひ立ち得やう。だからすぐれた批判力を示し得ないものには、決して大きな創造的人格を期待することが出來ない。

また現代までの社會にあつては、人妻たることは一つの商賈であると見られた。そしてその商賈の屈辱から解放されるものとして、獨立した職業婦人が非常に祝福されて居るが、その祝福された職業婦人がいつしらずその誇りを失つて了つて、職業婦人たるよりももつと屈辱の多い家庭の婦人に早變りする人々の多いのは何故か。さういへばとて、私は婦人に妻たるの職能を拒まうとするのでは決してない。たゞ職業婦人にでもなる人々は、現代の不合理な結婚生活を否定して、戀愛の共同生活を理想とするが故にこそ、その新理想の準備として、確かな信念のもとに、さうした生活に入り込んだものだと考へたい。また職業婦人が、現代で祝福される理由も實にそこにあると思ふ。もとよりこんな時代組織の下に棲む職業婦人が、職業婦人としてそんな愉快なものが多く在る筈はない。たゞその苦痛に堪へてすらも、日本女性の新世記を切り拓かうとするそのけなげな意志を尊むべきものと見るのである。然るに我國の職業婦人が、そこの大事に大した批判もなく、たゞ因襲的な結婚に急ぐために、いつかの外務省のタイピスト問題の如きを惹き起す如きことは、我が新興階級婦人の心理において、まだまだ社會改造の熱情と意志に乏しいことを思はせざるを得ぬことにもなる。

アメリカの女性作家オリイヴ・シュライナアの書いた物の中にかういふ一章がある。『私は睡つて居る一女性を見た。』人生」が彼女の夢枕に立つた。雙方の手には一つづゝの贈り物を持つて居る。一つは「愛」である、一つは「自由」である。どちらかを擇べといふので、彼女は長い間考へてから「自由」

をといつた。すると「人生」が言つた。「お前はよくこそ「自由」をえらんだ。もしお前が「愛」とでもいふものなら、それをお前にやつた後、俺は永久にこゝから去つたであらう。處がお前は「自由」をえらんだ。だから俺は今に歸つて來る。歸つて來る日には、片手にこの二つの贈り物を持つて來るぞ」私は彼女が睡りながら笑ふのを聞いた」と。

女性の唯一事業である戀さへも、愛さへも、すべては自由を獲てからの事である。自由を獲た後でなければ、またすべての完全なものは求められ得ない。先づ自由を…であるが、さてそれがまた生やさしい努力で求め得られるわけのものではない。といつて、私は我國の女性達の自由の求め方が、決して贋ひ物であると思ふ譯ではないけれども、たゞこれほどの一大事の當面に立つものとしては、その迫力があまりに弱く、かつ感傷的であり、ソリダリティの用意のあまりに手うすな事を淋しく思ふものである。また土臺にしつかりした確信をもたない爲に、むやみに世間體にばかり氣兼ねして、自己の熱情をむき出しにする創造性の影うすさをも悲しく思ふものである。もし人々がこの改造の時代に立つて、本當に自我を見つめ、どうでもかうでも實現せねばならぬところの、偉大な自我の要求に驅られるものならば、決して斯る微溫と手答へなさは萬無かるべき筈なのである。之をすくふものは、たゞ自我凝視の建て直しと、凝視の深化とでなければならない。新女性解放の黎明は、そこから來る徹底と、深刻と、聰明によつてのみ、始めてその扉が開かれる。

隣人運動に就いての感想

―シカゴ・ハル・ハウスの思ひ出―

賀川豐彦

△

ミス・ゼーン・アダムスが日本に來られたので世間では、ミス・ゼーン、アダムスがどんな人であるかをよく知らんとして居る。

アダムス女史は所謂殖民館事業の先覺者であり、世界婦人平和運動の指導者であることは、みな新聞で紹介されたことであるから、私は女史のことに就て多く書きたくは無い。ただ、隣人運動の精神とその効果を少しく考へて見たいと思ふのである

アダムス女史の三十數年間も經營して居られる會館は富豪のハルと云ふ人が寄附した會館であつて、そこに行けばシカゴの移民、下層民の精神的教化に必要な凡てのものが備つて居る。

私の訪問したのは一九一六年の夏の終りであつたが、その大きいのに驚いた。劇場もあれば、音樂室もある。體操場もあればアトリエもある。三百人位が每日食事に來るような大食堂もあるかと思へば、織物工場もあると云ふた調子でまるで、社會事業の百貨店であると云ふような氣がした。

場所は伊太利人の多い貧民窟の區域で、その周圍の人々はいつも轉換して居るのである。私はニューヨーク市ではホワイト博士が經營しておられる第百〇四街のプレスビテリアン教會の一町四方に跨る大きな殖民館を見たが、シカゴのハル、ハウスの方は更にそれより大きなものであつた。その他私は小さいけれども最も有効に利用せられてゐると思つたのは紐育市のユニヴアシチー・セツトルメントであると思つた。

ユニヴアシチー・セツトルメントはクラブ事業を主としてやつて居て、シカゴ・ハル・ハウスのやうに民衆娯樂の方は二段にしてゐるやうに思ふた。

なにゝしても、米國のニューヨークやシカゴに行くと始めてセツトルメント・ウォークの有用なことが必要だと心から思はされるのであつた。

△

勿論それは社會組織を根本的に改造しようと云ふ革命運動では無い。それはまた一種の經濟運動では無い。それは一種の教育運動であると云ふのが最も當つてゐるであらうと私は思ふ。

近世都市は、資本主義の投機的慾望の結晶したものである。それは不具者でも「見せ物」に出せば相當に儲かる不思議な社會である。この投機的僥倖の世界に少しの儲け口でもあらば「見せ物」の番臺にでも坐りたいと集つて來た無數の窮民が、經濟的に、社會的に、人種的に、職業的に集つてくるのが、貧民窟である。之はどこの都會にでも發見することであるが、歐米の貧民窟は全く萬國的であつて、ユダヤ人區、ボヘミヤン區、黒人區、イタリヤ區と世界各國の人種が各々區廓を立てゝ集團を作つて居るのである。之から思ふと日本の貧民窟と稱せられるものなどは、實に簡單なものである。

△

それらの集團が職業的に、社會的に、階級的に同じ市の中に生活してゐても、何等の連絡が無く、社會の中に別個の社會が存在し、彼のハクシユレーが云ふが如くに、文明都市の最大野蠻國として、都市の伏魔宮を形造るときに、何等かの方法をその區域に對してなすべきことを考へねばならぬことになるのである。

事實上、今日の資本主義の都會は壁一つ隔てゝ居れば、あかの他人であると云つた調子で、病氣の時でも、窮乏の時でも決して隣人は助けては呉れ無いのである。元來が、「見せ物」の番臺に坐るつもりで、凡ての人が出掛けて來てゐるのである。それで、隣人同志で親切な言葉をかけ會ふ道理が無い。ものを云ふたところで、それはたゞお附合だけの話である。かうした階級的な、職業的な、經濟的な區分を撤退して、隣

人が仲善くしようと云ふ運動が牧師サムエル・バアネットの東ロンドンで最初始められた隣人運動であつた。

サムエル・バアネットが數年間努力してゐる中にあの美しき性格の持主であるアーノルド・トキンビーが參加したのであつた。

トキンビーはオックスフォードの秀才として大學の講師をしてゐたが、自ら貧民窟に投じて、貧民事情を研究し、その救濟策に就て考へたのであつた。然し彼は數年ならずして斃れ、その友人は彼の志を繼いで、トキンビー紀念館を貧民窟に建てたのであつた。

トキンビーの名はそれより一層美しき響きとなつて、世界の際にまで傳はるようになつた。トキンビーの足跡をふむものは漸く世界に多くなり、米國の各都市にもその志を繼いで善隣運動に出發するものが多くなつた。ミス・アダムスの如きがその一人であつた。

△

然し實際から云へば隣人運動が起らねばならぬような世界は不祥な世界であつて、それは根本的に改造せられねばならぬ世界であるのだ。

階級が對立して居る間、それはたゞ善隣運動位で、社會をよくすることは出來ない。

私が貧しい人々の區域に定住したのは、最初全く研究が目的であつた。そして私は多年貧しい人々の間に生活することによつて、實に大きなことを發見した。それは貧民と云ふものと、プロレタリアと云ふものが全々別のものであると云ふことであつた。カール、カウツキーなどもそのような意味のことをそのプロレタリア論に云ふてゐたと思つたが、私は自ら體驗してそれを痛切に感じたのであつた。

プロレタリアは性格的に、心理的に、生理的に破產者では無い。それは最も優秀なる勤勞階級である。たゞ彼等は生活に於て不安であり、職業に於て從屬的であり、社會的に信用なく孤立してゐるだけである。貧民はさうでは無い。プロレタリアの更に一段下である。その多くは性格的の破產者、心理的の變質者、生理的には病人であるか、不具者であるか、癈疾であると云ふ人々が多いのである。ところが近世資本主義の都會では、性格の破產者でも効用があり、「見せ物」の

番臺に坐る資格を持つて居るのであるから、彼等は賭博仲間で幅をきかせ、女郎屋のグズリ押へとなり、ストライキ破りを務め、狂犬の必要のある場合には狂犬となり、「見せ物」の番臺にいつも坐ることを希望してゐるのである。

面白いとは天下廣しと云へども、何處か日本でも支那でも西洋でも、博徒の意張つて居らぬ貧民窟があれば、それは驚くべき事實である。私はシカゴの街でも、貧民窟で勢力のあるのはミス・アダムスでは無くて、貧民窟のボッス（破戸漢の親分）であることを知つてゐる。

彼等掠取階級は、資本主義の世界を善いことにして、貧民と資本家の兩方から掠取して居るのである。若し資本主義の時代では、彼等のような狂犬でも必要があることがあるから飼ふて置くのである

之は一例であるが、何處の貧民窟もよく調べてみると、性格破産者の人々が非常に威張つて居て、反つて順良なる勞働者がその下で喘いで居ることに氣がつく。博徒の威張るとは勿論のこと、賣淫に關係ある人々、牛太郎、銘引、媒合者などが群をなして生活して居る。

そこまで腐敗しないにしても、不熟練勞働――繩拾ひ、屑拾ひ、鼠取り、葬式人夫、飴賣り、溝浚ひなどは善い方で、乞食の群、不具、癈疾者の群――私の住んで居る二千戸ばかりの貧民部落に八百人に近い不具者があると云ふ事を見ても如何に之等の人々が、社會のドン底に悲哀な生活を送つて居るかがわかるのである。

△

これを思ふときに、たとひ社會主義の時代が來ても之等の性格の破産者、不具癈疾の群が世に浮び上ることが出來るであらうか否かを私は疑はざるを得ないのである。或人はもうこんな人々は殺して了つた方が善いのだと云ふ。

之等の人々を見殺しにすることは容易である。然し之等の人々を科學的に助け、善き友達になることも、人間愛から見て全く惡いことでも無い。

私は之等の社會のドン底に住んで居る人々は純心なる勞働者と、全々性格を異にして居ることをつく〴〵思ふのである。

勞働階級に對して、善隣運動をすることは必要の無いこと

である。彼等には善き勞働組合を與へさへすれば善いのである。彼等は自己の地位を階級爭鬪によつて高めて行く。

然し、自己の生理的、心理的、精神的の不都合よりして、自ら解放の道に登れ無い人々に對して、善隣運動はなくてならないものである。

△

それには云ひ知れぬ困難がある。善隣運動は金だけの運動では無い。金だけの運動であれば金持であれば出來る。然し善隣運動は財産の外に性格的に接觸して行く運動である。それで、社會的に能力あるものが、比較的社會的に落伍して居る人々の間に這入つて行つて住むと云ふ大きな犧牲が含まれてゐるのである。私はそれを犧牲であると云ふ。なぜなれば、それは脅迫と、誤解と、窮迫と、困難に年中せめられてゐるからである。

△

社會主義の運動のような派手な運動であればすぐ社會の注目をひく。然し看護婦の仕事は決して社會の注意をひか無い。そして一人の病人の爲めに一人の看護婦が必要である。それと同じく、社會の病人に對して、矢張り奉仕する看護婦が必要であるのだ。それは勞働階級のような健全な人々では無い。永遠に病人として社會に殘つて行く人々である。その人々を殺して了ふと云ふのであれば問題は無い。傳染病患者を全部殺して了ひ、出獄人を全部殺して了ふと云ふのであれば世の中は面倒臭く無い。然し、その壞れた土器をも修繕して比較的善き方に引き返さねばならないと努力するところに、病院があると同じように、社會的疾患に對しての苦勞が始まるのである

少なくも、傳染病が傳染しないように、疾患を輕く止めると云ふ努力が必要となる。その運動の爲めには多分社會主義の時代が來ても必ずや救濟的制度を必要とするであらうと私は思ふのである。保險制度は名こそ變れ、一種の救濟制度である。然しこの救濟制度を教育的に長屋に持ち込まうと云ふのが隣人運動である。

△

殖民館運動の根本精神は、隣人に對する親切と云ふことである。たゞ隣に氣の毒な人が居るからその人を近所の人とし

てお助けすると云ふまでのことである。

で、殖民館運動は必しも大きな會館を建てる必要は少しも無い。質素な生活に甘ずる人が澤山出來て欣んで、貧乏長屋へ雜居してくれるならば、それで善いのである。どうかすると廣告の爲めに、大きなものを誇る癖があるけれども、それは殖民館運動の精神では無い。金によつてする運動もまたその精神では無い。たゞ丸裸でお隣に對して親切をさせて貰へば善いのである。

それは、宗教とか、教義とか、信仰とか、哲學とかを八釜敷云ふ可きものでは無い。それは傳道の方便でも無い。たゞ近所に對して親切でありさへすれば善いのである。卽ち路次にある捨てられた兒童の爲めには子守となり、夜學に行くにも恥しいような年長者の爲めには讀み方を敎へ、裁縫の敎授をなし、身の上相談にのり、不自由をしてゐる人々に友達となつて行けば善いのである。

それは必しも樂な仕事では無い。然し、無理矢理に苦しみながらすべきものでは無い。荷を輕くして、いつも撓まず追いて行けば善いのである。

私はトキンビー、ホールの副主事キヤッチプール氏を知つて居るが、トキンビー、ホールでは最近九つの不熟練勞働者の組合を作つたと云ふて居られる。つまりトキンビー、ホールを中心として、貧民區域を研究してゐる中に勞働組合が必要だと思ふたものだから、内職をして居る婦人を一纏めにしたのである。こんなことが隣人運動としては模範的のものである。

△

あまり大きな救濟事業をしようと思ふと資本主義に降參せねばならぬ。殖民館運動が資本主義に墮落するなら、その效用は無である。それは近隣の人に最も親切な方法を取らねばならないのであるから、勞働組合が必要だと考へたならば、資本主義に反對する運動をする必要がある。それで隣人運動は資本家に束縛せられてはならない。

何にも無理をして隣人運動をする必要はない。務めて自由な心持ちで盡せばそれで善いのである。

私はミス・アダムスに『あなたの所には報告書はありませんか？』と尋ねられたので、『報告書はありません、私一人の

仕事ですから何にも作りません」と答へたことであつた。

私の隣人運動は私一人の小さい仕事である。それに共鳴してくれた少數者が心盡しの奉仕である。シカゴ・ハル・ハウスのような大仕掛なことは金の無い私にはとても想像もつか無いことである。私はハル・ハウスのような仕事が凡ての人に出來るとは思はぬ。然し私のような小さい仕事であれば萬人に可能であるように思ふ。金があれば、金がある間だけは色々な仕事もするが善い。金が無ければ、肉彈で行く。この心持ちは私が十四年前に貧民部落から持つて居ることだが、今も變らず持つて居ることである。

△

たゞ隣人運動で特に婦人にこの事業が理解せられたいと思ふことは、婦人の性格がこの種の事業に向いてゐるからである。ミス　アダムスの事業の如きが成功したのもその經營者が婦人であつたからである。ニューヨーク市には貧民窟の特志看護婦會を作つて、米國式一燈園をやつて居るヘンリー、ストリートのワード女史の仕事が同じく世間に尊敬せられて居るのも、同じく善隣運動には婦人のような感情のデリケートに出來てゐる優美な心の持主が豐富してゐることを思はされる。

△

で私のような心持ちで、長屋生活を始められる方は少しも金の心配をし無くてもよいので、今日からでも出來る仕事である。かうして教育ある大學卒業生が、ドン底の婦人や青年と共同生活を實行して、共愛の生活に入るなら、私は社會は必ず變つて行くと信ずる。

短篇小說募集

先月號に短篇小說募集の件を發表して以來今號〆切日までに、その應募原稿はかなり多數にのぼつて居ります。優秀と認めた作品は何篇でも採用して、月々一篇乃至は二篇づゝを揭載してゆく本誌の主意でありますから、更に多數の御投稿を待ちます。尙、今回の成績如何に依つて、第二、第三回と此の企てを續けるつもりです。

左にもう一度募集要項を記して置きます。

一、**枚數**　四百字詰原稿紙二十枚以內
一、**〆切日**　七月二十日
一、**原稿料**　一枚に付二圓五十錢以上
一、「**短篇小說**」と封筒に朱書のこと
一、**宛名**　女性改造文藝係

女性改造編輯部

女性改造談話會

現代婦人と信仰に就いて
女性より男性への要求

帆足理一郎
三宅やす子
奥むめお
磯貝ふさ子
芥川龍之介

與謝野晶子
石本靜枝
鷹野つぎ
佐藤春夫

○本誌は六月三十日の午後六時から十時に渡つて、現代婦人問題について、談話會を開きました。御出席をお願ひしたのは右の諸氏で、與謝野氏を始め生活内容を裕かに持つて居られる御婦人の方々に多くお集まりを願ひました。帆足理一郎氏は第一問題の（現代婦人と信仰について）お話を頂く爲めお忙しい時間を特におさきを願ひました。佐藤氏や芥川氏が、事實と人性とに對する本質的な見方から自由に鋭利に突こんで下すつたのは幸ひでした。
それから司會が、まづかつたので話の内容が、時々脱線しましたが、フランスの庭のやうに小綺麗な手細工をしては却つて味がなくなりますので、大に載せたものは殆ど雑駁を生かしたものですからそのおつもりで玩味批判をして下さい。

（一）現代婦人と信仰に就いて

X（司會者）今夜かうしてわざ／＼お集りを願ひましたのは社會狀態も動搖し、思想問題も混沌としてゐる今日、現代の婦人が何を生活の信條として、どういふ道に自分の生活の中心をおいたらいゝかを、お話願ひたいからでした。問題の現代婦人と信仰と申しますのは、何も宗教上の信仰といふ狹い意味ではなしに、もつと一般的な生活信條といふ意味で、力のない思想や、遊離した思想、空華な落想の中にある現代婦人達に、彼女達の生活の全體を統一してゆく、ある思想上の根柢を與へる意味で何等かの暗示を頂きたいと思ひました。内化されず、把握されずに、唯意識の表面を掠めるものしか持たないで、眞正の自己の生活を經驗してゐないと思はれる多くの現代婦人達が、それ／＼實行生活の中心を摑んで自分の思想を統一する信仰を持つとしたらどうしたらよいか、又現代婦人はこれを要求してゐるかどうか、これから色々御意見を伺ひたいと思ひます。

帆足　自分の覓むるものは神の概念ではなくそれなしに生きられないものだと言つたトルストイのやうに、自分がそれによりかかつてゐるものを信仰だとしたら信仰の無い人はありますまい。併し神とか絕對とかいふ特種の對象に向けられた各々の心や、さういふ對象を中心としての生活を指

して信仰とするなら、現代の婦人はどれ程信仰を持つてゐるでせうか。或は宗教的信仰といふものはなくても唯自分が生きてゆく愛だけあれば澤山だと考へてゐるでせうか。

芥川　司會者が問題にしてをられるのは、宗教上の特種な信仰よりも、一人々々の生活信條と云つたものなんでせう。

帆足　自分々々の信念といふ意味でしたら、廣い意味で何等かの信條なしに生きてゐない人はありますまい。

佐藤　嚴密に、むづかしく信仰を解釋して却つて意味を失ふことがないでせうか。

帆足　信仰を合理的に三段論法式につきつめなくては滿足出來ないやうな人は突詰めて却つて信仰を失ふことがあるでせうが、漠然とではあるが何かを渴仰して、その中に情的生活を集注することの出來る人は却つて信ずるものを失はないと思ひます。一體に婦人の方は情的で、或る力に賴つてその中に情操を集注して生きる傾きが男子より強いものではないかと思ふが如何でせう。

與謝野　指揮者が、初めのうちはたゞ漠然と鞭を振つてゐても、後には立派な規律のある韻律を見出すやうに、初めは何かしら模索してゐるうちに、しつかりしたものを掴むやうになるのでせうね。

帆足　從來の婦人は男性主義に壓迫されてたた結果として、いつも柔順に何かに賴つてゐなくてはならぬといふ習慣から慣らされてきたのかも知れませんが直覺的な信仰に賴る心が男よりも強かつたと思ひます。それが今日のやうに男女の階級的差別が段々なくなると、或は今までの直覺的な氣分が次第になくなるかも知れませんが、婦人の本性として生れつきさういふ特徵を持つてゐないとも限りませぬ。

與謝野　さういふ特徵のある人は男にも女にもありますね。

帆足　それはさうですが一體に男の方は論理の筋道を辿つて合理的でなければ受けいれまいとするところがあるが、婦人の方は直覺的に是非の判斷を下して、物を掴んだり、捨てたりする傾きがあると思ひます。

與謝野　直覺ですか迷信ですか知りませんが……

帆足　迷信かも知れませんが過去及現在では、直覺的要素が男子よりも強いやうです。それは社會が傳統的に作りだしたものかも知れませんが一體に宗教とか信仰とか言ふものは論理ではなく直感だと思ひます。ロマンテック精神の所產でせう。

佐藤　現代はそのロマンテック精神が衰へてゐる、懷疑も信仰も衰へてゐるのではないですか。

芥川　懷疑の强い時代が信仰も强いと言へるだらう。

佐藤　今の時代は懷疑的精神も衰へてゐるやうだ。信仰なんか誰も本氣で求めてゐないだらう。

芥川　君は狹い意味の信仰について言つてゐるのかね。

佐藤　狹くても廣くても今の時代は懷疑も、信仰も持たずに平氣で生きてゐる人が多いんだらうと思ふ。

芥川　現代人が信仰に對して冷淡になつたのは慥かだらうね。

帆足　從來の傳統的信仰は力を失つたでせうが、その時代にはその時代相應の信仰が生れてくる筈です。今日の樣に社會組織の動搖する時には、それに相應した信仰を求めるために青年男女が悶えてゐるのでせう。私共が地方に講演などにゆくとよくさうした問題にぶつかつて男女双方から質問を受けることがあります。

佐藤　それは本質的の要求ではなしに、雷同的な寧ろ一種の流行を追ふ氣持ではあるまいか。情誼的精神ではあるまいか。一般に懷疑的精神が乏しいと云ふ反證にもなると思ひますが。

芥川　情誼的精神は一つの信仰かも知れない

帆足　懷疑的精神があるといふことは何物かを求めてゐることを證明してゐるので宗教心の衰へた理由にはならないでせう。昔は社會的指導によつて信仰を支持されてゐたが、今では懷疑的な時代に變つてきました。が、懷疑の中から生れたものは矢張宗教的信仰だと言へやうと思ひます。

佐藤　雷同的精神だけがあるのではあるまいか……

芥川　他の宗教は知らないが、科學を信じ文化を信じ、藝術を信ずる。何でもいい、自分の生活の中心となつて、精神を投げ出してゐるものの中に信仰が伴う筈だと思ふ。

X　今の婦人はどういふ信仰に生きようとしてゐるのでせうか。與謝野さん如何です。

與謝野　婦人は直覺に賴るほかはなかつたと仰言いますが、婦人は男子のやうに敎養がないので、内容もない、懷疑もない、つまり男子程には進んでゐないでせうが、婦人だから特別これをとは言へますまい。今日の懷疑思想は男女に係はらずかなり進んでゐるやうですから。

磯貝　私が考へますのには、今迄の女の人は何から信仰を得たかと言ふに、それは主として戀愛からだつたと思ひます。男の人に賴ることによつて信仰を得てゐたと思ひます。それが男に賴らずに生きるやうになると、信仰の中心が動いて全體の中から信仰を生み出さうとするやうになると存じ

ます。信仰は哲學、藝術、倫理等の何れか一つのものから見出さねばならないものではなく、又それ以外に別に信仰といふものを區別すべきものでもなく、自分が一番近く接觸してゐるものから見出すものだと思はれます。信仰も廣い範圍から見出すやうになれば、どういふ範圍から見出すかは各個人によつて異つてくるので、一定の型にはまつた信仰はなくなり、男性も女性も共通な（形式上からではなく）求め方をするやうになります。さうなれば女性も全體の調和や、必然的の變化の中から理智的に信仰を見出すことが出來ようと存じます。

芥川　周圍から信仰を見出すとはどういふことですか。戀愛からとは？

磯貝　自分の近くにある凡ての現象の中に、ある力を見出すことです。戀愛の中にもさういふ力を見出すことです。

芥川　信仰の内容を具體的に言つたら？

磯貝　そのために自分のすべてを犧牲にする程の信念を持つて生きてゆくに必要なよりどころです。

鷹野　それが破れたらどうなりますか。一生つゞかなくなりますか。

磯貝　新らしい信仰を得られねばそれまでです。

佐藤　今までの婦人は社會制度を疑つてゐなかつたやうに結婚に對しても何の疑ひも持つてゐなかつた、その頃は宗教的信仰ではないが、日常生活の信條は持つてゐただらう。それが失はれて今後は個人的信賴を求めるやうになる、さうなるとこの問題は共通の問題ではなくなつてくる。

芥川　佐藤氏によると時代は信仰を求めてゐないのだね。

佐藤　何時の時代にも求めてゐないだらう。ある少數の信仰を持つてゐる者がその時代を形造り指導してゐるので時代は信仰を求めてゐない。

鷹野　私は求めてゐると思ひます。外に求める時代は過ぎたかも知れませんが、しかし私は個人としては求めつゝあるものと思ひます。個人々々としては心持の上に何等かの安定を得やうと探ねてゐるに違ひないと存じます。若しかういふことでも一種の信仰と言ひうるならば私はさう信じます。

三宅　宗教を求める心は男も女も同じだと思ひます。今までは男子の壓迫に堪へられないで宗教に逃げた人もありますが、周圍の理解がついてきますと從來の教會的な傳導的な宗教を抜けだしてしまつて、個人々々が自分の生活境を見出さうと努力する、そこから生れるものは一つの宗教的信

仰だとも言へようかと思ひます。さういふ意味で男も女も同じやうに宗教を求めてゐる筈だと思ひます。

芥川　私は贊成ですな。

石本　私も贊成です。

三宅　禮拜はしなくとも祈らなくとも信仰を求める心は進んでゐると思ひます。

佐藤　ものをクリエートする能力と、信ずる能力とは別なものだ。それは男性によくあるか、女性によくあるかは疑問だらう。クリエートするのは作曲するやうなもので信仰は演奏するやうなものだらう。演奏者は婦人に多からうと思ふね。

芥川　信仰は貴族的なものだ。民衆の懷疑はそこから生れる

佐藤　民衆は懷疑そのものにさへ徹底してゐない。だから今輕々しく信仰を與へても仕方がないと思ふ。

帆足　從來の信仰は貴族的で保守的だつたが、現在は一切の社會生活の根柢の動搖につれてそれを脱却しつゝありませう。現代人は專制的ではなく、生活の指導者としてのある力を求めつゝあると思ひます。さういふ意味でしたら信仰を求める心は、文化の發展に伴ひ、人間苦の增加に伴つて進んできはしないでせうか。

×　石本さんはどうお思ひになりますか。

石本　私には一般のことは分りませんが、全體的な信仰は認めません。現代の婦人は懷疑の方向に向つてゐますが、それが信仰を求めることになるかどうかは疑問だと存じます。

三宅　私は教會とか寺院とかへ出かけてゆく人の氣持には同感出來ません。

與謝野　あの人達はキリストが壇上に立たねば滿足しない人たちでせう。

芥川　そりあ、ほん者のキリストが立てば失望するでせう。

與謝野　さうでせうか……

佐藤　何時の時代にも民衆は天才から受けるものだが、如何なる人が天才か、僕などの考へる天才は現代人が一般的に考へてゐるのとは違ふ。存外つまらないと思つてゐた人も、あとから考へてみて傑れてゐたと思ふことがある。

三宅　深い懷疑を持つ人が、信仰を持つ人になるでせう。疑ふだけ疑つて最後に信仰に達しなければ滿足しないでせう。

石本　永遠に懷疑をつゞけて終りまで信仰を見出さなくてもいいと思ひます。

佐藤 人は懐疑の儘で一生を終つても、或は一生うか〳〵と過しても差支ないでせう。

芥川 しかしその「差支ない」といふ氣持が一種の信仰ではないだらうか。

三宅 現代人が實質の意味の信仰を持つことが多くなつたことは疑へないと思ひます。

佐藤 信仰を人に與へようとするのは功利的な見方で、生きてゐる間は懐疑でいい。キリストのやうな人のある時は、與へようといふよりも受けずにはをられぬのだらう。

芥川 懐疑を與へるのも、信仰を與へるのも同じことだ。

帆足 從來の信仰は確定の信仰であつたが、不安の狀態にある現代人の信仰は動的信仰でせう。

佐藤 信仰などは考へないと思ふね。

芥川 然し信仰といふ言葉の代りに理想といふ言葉をおきかへては？

（芥川氏のこの言葉が生かされなかつたのは惜かつたと思ひます）

帆足 婦人が今までよりも、男に賴る心がなくなればなくなる程、信仰が強くなると思ひますね。

芥川 しかし昔の車夫と今の車夫と、神武天皇の部下と、今の竹の橋の衛兵とどちらが信仰を持つてゐるでせう。

帆足 昔は夢中だつたでせう。

佐藤 羊群の後をゆく羊飼ひと、今日金鵄勳章を貰つた軍人と、信仰に意識を伴ふことと、伴はないこととはあまり違はないと思ひます。人間の生活は昔も今もさう變るものではない。

帆足 昔はたゞ牛が飼主に賴つてゐるやうなものです。後へついてゐたといふだけのことでせう。

佐藤 ぢやあ今は、牛の性質が少し惡くなつたんだ。

芥川 非常にリアリステックになつたんですね。

X 奥さんは現代婦人の信仰についてどんなお考へをお持ちですか

奥 私も二十頃は、哲學、宗教、文學とかいふものの中から何かを求めやうとあせりましたが今から考へますと、求めやう求めようとしてゐた頃は、却つて實際から遠のいてどう〳〵廻りをしてゐたにすぎません。今この席で信仰といふ言葉を聞いた時、何だか閑文字が出てきたやうな氣がしました。信仰がどういふ風に話されるのだらうと思ひました。信仰上の定義は閑文字を並べるやうなものでせう。今の私は自分が一番要求するものを掴めばいいのだ、掴んだものを取ればいいのだと思つてゐます。

佐藤　信仰といふ言葉を聞いて、閑文字が出てきたやうだ。おつしやるのは一つの問題になりますね。

X　奥さんは今何を一番要求していらつしやいますか。

奥　私は今物質的な要求を持つてゐます。社會的仕事の上でも家庭でも私の成長をはばみ邪魔するものを取除くといふ意味で。

芥川　私は凡てを相對的に見る。

帆足　奥さんが閑文字と仰言るのは既成宗教のことではありませんか。

奥　從來の宗教は感心しません。

芥川　あなたの成長を邪魔するものをとりたいと云はれるが、あなたは自分の成長を信じないのですか。

鷹野　奥さんはとにかく實際運動にたづさはつていらつしやるのですから、その方で何かの信念をお持ちでいらつしやいませう。

三宅　物質で若し償はれるものなら消えもしませうが、人の力ではどうすることも出來ない不可抗力があると思へばどうでせうか。

帆足　信仰は精神上の廢人のみが持つものではなく健全な人も持つてゐると思ひます。

三宅　人の精神が健全だと言ふことをどうして言へますでせう。

帆足　生命はそれ自身では維持されない。生命そのものは一種の冒險ですからそこに信仰の必要を認めるのです。

芥川　人間は相對的に多少健全なことがある。

奥　健全とはどういふ意味でせう。

帆足　精神的にも、肉體的にも全く健全だといふことは言へませんが、常識的に言へば、藥を飲んでゐる人は病人ですし、心の缺陷に惱んでゐる者も、無意識と有意識に係らず不健全でせう。

佐藤　祈るといふことはいいことだね。

芥川　僕は不幸な時は祈りたいとは思はない子供の病氣でも快くなつた時は一寸祈りたい氣にもなるが。

鷹野　さう云ふ意味で云へば消極的ですね。

佐藤　芥川氏のはセンチメンタリズムだ。

芥川　消極的とは？

鷹野　さういふ時に起る祈りたい氣持は、生活欲のゆるんだ時ではございませんでせうか。

芥川　私は神を信じません。佐藤君の言つたやうにセンチメンタリズムかも知れないが祈るやうな氣持になる時は幸福

な時です。

佐藤　要するに信仰などは、個人々々のもので、與へるべきものではない。

芥川　今の時代には宗教的信仰を必要とする場合があり、必要としい時がある。

帆足　自分の弱さを感ずる人はどうしても信仰を求めます。

×すべての社會狀態がどう／＼巡りをしてゐる今日、宗教的信仰によつて現代女性を導くのはどういふものでせう。與謝野さんそれの可否問題はどうでせう。

與謝野　つまり與へて貰へるものだと誤信してゐるんですね。

佐藤　それは天才が出現しない限り與へることは出來ないだらう。

芥川　しかし明日にも天才が現れるかも知れないよ。與へない方がいいと言つても、なつて了へば仕方がないぢやありませんか。

佐藤　それは可否も何も超越した問題ではないか、與へる與へないの問題ではない。

帆足　その議論は一寸社會主義に適用する、社會主義がいいものなら、宣傳の必要がなくなる譯ですね。

佐藤　自分自身が實行してゐたら、宣傳しなくとも廣がる筈だと考へる。

與　私は社會主義は宣傳ではなく、其人の要求に投ずるものだと思ひます。

佐藤　要求に觸れるのです。キリストには何の用意もなかつたらう、ただ止むに止まれぬ要求が言はしめたので、結果は宣傳になつても心持はちがふ。

與　一人々々が自分々々の信條に生きるのですが、その信條を宣傳する必要があるでせうか。

芥川　その必要があればこそ、物を考へたり言つたりするのでせう。

佐藤　かういふことを云へば相手にどうなるかを考へるのは不純だ。君も望むか、我も望むでいい。

帆足　しかし眞理を得た喜びを傳へずにはをられぬ心、自分の喜びを歌はずにはをられぬ氣持で宣傳するのはいゝことだと思ひますが。

芥川　佐藤氏は結果など意味してゐないのだね。

與謝野　色々な生活環境に刺戟されて、個人々々が持つてゐるそれでいいのなら、昔の女の信條は矢張戀愛だつたと言へませう。

世の中は飛鳥川ともなればなれ
　君とわれとのなかしさかねば

これなどは利己主義かも知れませんが、信仰だと言へるのでせうね。

芥川　此頃麵麭の中に何とかいふ小砂利が混つてゐますね。これは實際の話だが、かうなつてくると「誰かパンを與へるに石を與へんや」と言つた言葉なぞは、どつかへ飛んでしまひますね。

三宅　今の女の人に信仰を與へる事が出來ると思ひますが、これならば與へられるといふ完全なものはありますまい。

帆足　大本敎や、一燈園でも中世紀のやうな人心だつたら聖フランシスの勢力を持てたかも知れませんね。

芥川　聖フランシスの時代だつたらいゝでせう。

佐藤　僕は今でも聖フランシスが出れば宗敎的な信者になれると思ふ。一般的な信仰はロマンテックなものなんだらう。今の信仰の多くはロマンテックを失つてゐる。これも一つの見方としてだが。

芥川　個人的だつたら、聖フランシスの弟子でも火炙りになるやうな人間がゐたでせう。繪で見るやうに奇麗なものではありますまい。

帆足　西田天香でも中世紀だつたら殺されてゐるかも知れない。

（話はだん〳〵脱線しさうになりました）

芥川　僕は信仰を持つてゐる。

三宅　私も信仰を持つてゐます。

X　芥川さんの信仰は？

芥川　私の信仰は、全てのものは相對的であるといふ信仰です。

三宅　私の持つ信仰は、自然といふ不可抗力があつて、その前には科學の力であらうが何の力であらうが、どうすることも出來ないといふ信仰です。

芥川　それから私は、昔の二三人の偉い文學者に信仰を持つてゐます。

佐藤　僕はデカルトの「我思ふ故に我あり」の言葉を信ずる事が出來る。

石本　私も三宅さんの仰言るやうな信仰だつたら考へますがもつと具體的な意味では何にも持つことが出來ません。

三宅　私の信ずるものは神だとも言へます。

X　奥さんは？

奥　私はたゞ生きるんだといふこと、それだけです。

芥川　すべてのものは相對的だといふ言葉に誤解がないやうに一寸つけ加へますが、信仰も懐疑も亦相對的です。

與謝野　三宅さんの仰言る信仰は普通常識的に考へてゐることでせう。

三宅　私のその常識は、宗教をくゞつて後に得たものです。

芥川　さういふ常識だつたら信仰です。

鷹野　私は信仰があると思ひます。芥川さんとは少し違つて非常に狹められてゐますが自分が求めて行かうとする一つ一つの感動にしても、すべて、純粹な感情觀念から發するものゝ中に信仰を認めてゆきたいと思ひます。

×　磯貝さんの信仰はどうですか。

磯貝　すべての現象の中にある力を認める、それが私の信仰です。

芥川　それでは惡い力もですか。

磯貝　惡い力は正しい力に征服されるものだと思つてゐます。

芥川　それは本物の信仰だ。

磯貝　それから今の人に信仰を與へるか否かといふことに就ては、信仰そのものを外部から強ひる必要は認めませんが、信仰を得たいと望んでゐる人には、その段階となるべき知識を與へて、内部から自發的に信仰の芽を育てるやうにしたらいいと思ひます。

×　最後に帆足さん、あなたの信仰を聞かせて頂きませう。

帆足　私は宇宙の根本原理として流れてゐる愛の力を信じます。此愛の力は、クリエーテイブな人間生活を通して最もよく働いてゐることを認めます。

(二)　現代の女性より男性への要求

×(司會者)大變時間が遲くなりましたが、現代の女性は男性に何を一番要求するか。この問題に就てどなたからでも一言づゝ仰言つて下さいませんか。

佐藤　よき女性はよき男性を要求し、惡しき男性は惡しき女性を要求するだらう。

芥川　ところがさうとは限らぬ、よき男性が惡しき女性を要

求する場合がある。

三宅　私は女性が男性を愛する時、たゞ一人の男性にすべてを捧げようとするのに、男性は多くの女性を一時に愛しようとすることに不滿を持つてゐます。一人の男性と女性が凡てをゆだねあふ世界を要求します。

芥川　私は反對だ。ビスマルクの第十人目の妻になる方がいいか、ドイツ國境の番人の妻になつて、其男を一生獨占した方がいいだらうか。勿論ビスマルクの第十號がいい。

佐藤　ビスマルクを獨占したら一番いいだらう。

芥川　男性の側から言つて女性の方が優越してゐる場合も同じことで、私は醜い平凡な女の良人になるよりは小野小町の第十何號の良人になつた方が遙かにいい。

奥　芥川さんのそれは趣味でせう。

石本　御自分が一番優越してゐると御思ひだからでせう。

佐藤　一般の男子はさうではなからう。

芥川　僕はさうは思はぬ、實際眼の前に小野小町ととりどころのない女とを並べてみたとしたまへ。

帆足　それは芥川君のやうに滿足をする人もしない人もあるでせう。

石本　現代の日本の趣味は大概さうでせうが男性と女性の權威は同じであつていゝ筈ですね。

三宅　男の方が、何時までもさういふ社會制度をもつてゐるとしても、女の方がそれをすれば自然に反するでせうと思ひます。

帆足　性的にそれがありますね。

三宅　ある筈です。

帆足　種の保存といふことから。

石本　若し子供に對して男も女も同樣の責任を持つてゐたら如何でせう。

帆足　肉體的に子供をはらむものと、はらまぬものとの區別ですね。

芥川　子供を他に育ててくれるものがあつたら女も男と同じ感じになるでせう。

佐藤　僕の空想する社會に於ては、男女ともに子供を共有し合つても、何の不都合もなくなると思ふが。

石本　今の女性から男性への要求をこまかくのべたら色々あるでせうが、女性が男性に要求するといふ考へが間違つてゐるのではないでせうか。たゞ一般の民衆が男子と同じ所まで女を引上げることに妨げをしてくれないやうに望みます。

芥川　僕は今の男の地位が、女の地位まで高まつたらいいと思ふ。

佐藤　實際問題の場合だね。

芥川　有島生馬さんが「人間」といふ雜誌の表紙を書いた時内務省の檢閲官が「これは男の裸體だからいいが、これは女の裸體だから許されぬ」と言つたさうです。その實兩方とも女の裸體だつたさうだが……かういふ風に日本の社會制度が男子を標準にするために男が損をする場合が多いやうです。僕の知つてゐるある若い男が、不良少女に附纏はれて困つてゐたが……何でも男が少女と一緒に歩いてゐて、ある暗い路次へ入ると、その男が女から袋叩きにされたさうですが、そんな時でも咎められるのは男の方なんだから男と女と眞劍に戰へばきつと男の方が惡い樣に思はれる。

X　與謝野さんは何を要求なさいますか。

與謝野　男の支配の下にゐるのですから、うまい具合にゆきませんから先づ參政權を……

佐藤　僕は皮肉の意味でなしに、心から女を高めてみたいと思ふ。

芥川　僕も高めるのは贊成だ。

X　勝野さんは？

勝野　男よりも女からの要求が多いだらうと存じます。

三宅　でも男性への要求は、方々の婦人雜誌などで度々聞かされたのですから、今夜は一つ女性への要求を聞かせて頂かうではございませんか。

佐藤　婦人が自覺をして、傑れた男子と同じやうに趣味や情操を高めていつたら新らしい社會が出來ると思ふ。

奧　佐藤さんでしたね。「改造」に出た近代の女性觀の中で、女はたゞきまぐれな可愛い者で、女に深みがあると思ふとまるで底無しの井戸を掘るやうなもので、底のないものを掘るのだから女が謎のやうに分らなくなるのはあたりまへだと仰言いましたのは？

芥川　あれは佐藤君の趣味でせう。

佐藤　今ある女性でなしに、女性の本質に對して要求するのです。

X　礒貝さんは何を男性に要求なさいます。

礒貝　私は男性に對して別に何にも要求してゐません。

奧　私は抽象的に考へて、男性と女性とが分れすぎるのが番厭です。

佐藤　女性であることにブラウドをお持ちになつたらどうですか。

芥川　奇麗な男の子に稀に感ずるやうなエロテカルな氣持を僕は女性にのみ感ずる。男性に對してはあゝいふエロテカルな氣持は起らない。

帆足　これは男性側からも、女性側からも同じやうに言へることかも知れませんが、私は男子の方からは、婦人がもつと性の區別を超越して、男と同じ智識の程度や趣味の高さを持つて欲しいと思ひます。同じことを女性側からも言へるでせうが。

X　婦人の方は、どちらかと言へば自分より教養のある傑れた男子を要求なさる傾きがありませんか。

芥川　從來はありましたが、それは社會狀態からで本質的にさうだとは言へますまい。

帆足　やはり對等に共通しあふところに、大きな幸福を感じてゆけると思ひますね。

X　それではこの問題はこれで打ちきりにして、何か冷いものでも召上つて下さい。

芥川　かういふ問題がわざ〳〵テーブルを圍まなくとも話せるやうになるといいですね。

――閉會――

（文責在記者）

口繪解說

ウイリアム・ブレーク筆（第十七世紀）

ブレークは好んで舊約聖書中の物語を描いた。本誌口繪は創世紀中のエバが蛇に誘惑される圖である。

ブレークの繪の特長はその、ミスチックなところにある。線なり形なりの不思議な裝飾的効果が、その線なり形なりの一つ一つに少しの無駄もなく描かれ、一々にミスチックの味が籠つて居る。

本圖の中央に立つエバの肉體は不思議な肉感とともに靈感を持つてゐる、闇の中にふと浮んだ味である。蛇の線は蛇の凄さをその裝飾的効果と共によくあらはしてある。月に光る波の美しさと深邃さとを見逃してはならない。（岸田劉生）



フランス最近の劇壇

巴里より 佐藤紅綠

十や二十の芝居を見た處で其國の劇壇の眞相が解るものでないと誰しも言ふだらう、實際巴里の其道の人に會つて聞いて見ると、其人達すら返答に困つて居る。

「貴方が御覽になつてどう思ひますか、私達よりも寧ろ旅人の方が本當の批評が出來ると思ひます」

恁ういふ答にも眞理がある、如何となれば私が日本で想像したより數十倍も巴里の劇壇が混亂して居る、これは今日ばかりでない、七八十もの劇場が毎日休みなしに興業を續けて居る此の巴里では其れ〳〵に其の贔屓を有て居るので、其の中新聞で八釜しく書かれるものは其の當座だけ人氣を呼ぶだけで浮氣な見物人は直ぐに忘れてしまふ。特に目下の處でこれぞといふ滿都を騷がす程の脚本も出ない樣だ、だから何れが代表的の劇であるかは、一向解らない。

正直の處巴里の劇壇は倦んで居る、戰爭後には必らず絢爛たる藝術が生れるのは古來からの歷史が之を證して居るのだが、どういふわけか巴里には其れが出て來ない、只だ何かしらん欝勃たる氣が地の底に働きつゝある事は確かに見受けられるが、併し其れが爆發するのは中々年月を要する事だらうと思ふ、之に反して私は日本の劇壇の方が餘程緊張して居る

と思ふ、世界を通じて劇壇の氣力は日本が最優秀の地にあると言つて可い、前にも言つた通り混沌たる巴里の劇壇は一朝一夕に解らないのだが併し數千の劇を見ても五十年間巴里に住居しても何んにも感ぜぬ人もあれば一日だけで非常に多く感ずる人もある、私は今ま其れを書くのだ、誤まつて居るか否かは別問題として私の劇場めぐりの感想だけだから其のつもりで御覽を願ひたい。

私は昨日（四月二十一日）テアトル、ジムナーズのル、タロン、ダシール（挽かれた踵？）を見に行つた。これは巴里の劇壇革新運動の團體で、グループ、デユ、チヤナルソヴアジス（野鴨社）の一派の主催で、新らしい劇の芽城である、ジムナーズといふ劇場はベルンスタインが經營してゐる劇場で、巴里では劇作家が劇場を持つて居る事は珍らしくない、サシヤ、ギトリーガエドワール七世座を有ち、ヴユー、コロンビエ座はコツポのものである、數へたらまだ〱あるだらう、野鴨社はクロード、フアレルやジヤン、サルマン等中々腕利の作家達で、外國人ではメレヂコブスキーだのシユニツツラーだのアレキス、トルストイだのがある。私が其れを見に行つた時は滿員で入れなかつたので、二十一日の切符を買て歸つた。

新聞コメデアンでは作者のマルセル、ベルチエを激賞して居る、イブセンが若し生きて居たら今度のルタロンダシールの樣な脚本を書くだらうと言つて居る。（巴里では芝居だけの事を記載してる大新聞がある、コメデアンは最も大なるもので其れが大型の六頁である、今日は何座で何をやるかはコメデアンを見れば直ぐ解る）

新聞の事を記した序にもう少し書き加へたい。コメデアンに毎日出て居る芝居案内欄の劇場を數へたら、丁度七十ある、其れはオペラもオペラコミツクも加入した計算で、此の他に至極眞面目な研究的劇壇のものは新聞に記載されない、それは廣告料が拂へないためだ。

新聞の案内には時間もちやんと記してある、大抵早くて八時、遲くて八時三十分開幕といふのだ、八時十五分といふ刻んだのもある、時間の事で思ひ出したが、巴里の時計は二十四時まで記してある、だから新聞の廣告に二十一時開幕だの

二十時開幕だのといふのがある、二十時は八時で二十一時は九時の事だ、演伎の時間は大抵二時間半か三時間である、悠くり食事を濟ましてそろ〳〵出掛ける事が出來る。

野鴨社の開幕はマチネーで午後の二時半からである、恁ういふ新らしい劇はどうしても見物人が少ないから晝にやつて、夜は商賣的なものをやるのだらう、何れの國も同じ事だ、新らしい文藝的のものは金に縁がない、民衆が喜ばない、其處で私は野鴨社の此の新らしい劇を見た事を記す前に、其れより逆行して抑々巴里へ來て最初に見た劇の事から書き初め最後に野鴨社の批評に移らうと思ふ。

私が最初に見たのはオペラ座であつた、オペラといへば國立劇場でコメデーフランセーズと相並んで政府經營のものである、町の名もオペラと稱して居る位だから巴里人がいかに藝術を重んずるかゞ解る、役者は悉く政府の御役人で勲章もあれば年金もある、オペラへ行くにはタキシードか燕尾服でなければならぬ、最も其れは一階の一等席だけで、二階の方は脊廣でも構はぬ、此頃燕尾は餘り流行らぬ、重にタキシードである、だが私の思ひも寄らぬ事は短衣の事であつた。禮服の短衣は同伴者に依て區別する、白い短衣を着けるのは婦人同伴者に限り、男同志では黑い短衣だ、だから若し男同志で白い短衣を着て行けば芝居の途中で女に逃げられた人と見られるだらうし、女と一緒でありながら黑い短衣を着てゐれば途中で女を拾つて來たと見られるかも知れぬ。實に面倒な事だ。

私は此の夜近衞さんと同伴したのでもあり且つ二階に陣取たのだからまあ〳〵無事であつた。閑話休題として此の夜の出しものはボースゴドノヴであつた、此の莊重な陰慘な音樂に私はどれだけ期待を持つたか知れぬ、だが其れは失望に歸した、音樂專門の近衞さんに聞くとオーケストラは無茶苦茶だと言ふ、私の眼から見ても舞臺の惰氣が殆んど病魔の如く漲つて居た、懶惰と放縱と冷淡と其れだけでもう總てが厭になつた、ゴドノヴに扮したヴアンニーマルクが終りの幕で椅子からころ〳〵手毬の如く轉がり落ちたなどは寧ろ滑稽に近かつた。無論苦悶の餘り轉がり落るといふ事は洋劇に珍

らしくないが、充分な緊張味なくして單に型ばかりを逐ふて轉がるのでは米俵が轉がるも同然だ、魂が拔けて居る、さうだ、其れで全班を評し得る、巴里のオペラは魂が拔けた、其れは何のためだらう、國立！政府の技藝員！骨を折らなくとも月給が貰へるといふ氣が役者の藝術的良心を腐蝕したのではあるまいか。官營になつてから敗島が惡くなり、市營になつてから電車が惡くなつたと同じ事だ、帝劇と松竹と餘り仲が善くなると芝居が段々惡くなるだらう。

私は此の不眞面目なオペラを見て二度とオペラへは行くまいと決心した、二三日不快であつた劇場が貧しくとも眞劍なものを見たい、私は此の事を巴里の或靑年に語つたら、其の人は私の評を否認しなかつた、巴里は田舍者の遊覽所になりかけて居ますと彼は言つた、田舍者とは米國人と英國人を指したのである、特に文藝には何等の歷史も有たず傳統も有たぬ米國人がいかに巴里の內部に其の粗雜な不行儀な野卑な氣風を傳播しつゝあるか、心ある巴里人は涙に咽んで居る。

オペラに失望した私は喜劇を見たいと思つた、すると新聞にキャプシンヌ座で「何故御前は私に其んな事をしたか」といふ劇をやつて居るのを知た、此の劇は巴里の一部に大變な評判であつた、女優のロテイは拔群だと言はれて居る、どんなものかと私の好奇心が動いた。此にも一つ序に言ひたいが、巴里の劇場は一二を除くの他は大抵有樂座位の大きさで、帝劇の如きものは稀である、無論オペラは帝劇の二倍程もある（舞臺は左ほどの差はない）だから見物人は多くて千人はむづかしい位で大抵五六百人位のものだらう、其れで觀劇料はオペラでも三十フラン（日本の四圓五十錢弱）で、左りとてキャプシンヌの樣な劇場でも三十フランである、劇場の大小に依て料金が異はぬ、市內到る處に切符の賣場がある、良い席を取らうと思へば豫め賣場に申込んで置く、だが其の代りに豫約席は五フラン位は高い。全く評判の劇になると四五日前から申込まねば切符が買へない、活動寫眞でもゴーモンに今、デッキンスのオリバートキストが來て居るので三日も前からでなければ買へない、恁ういふ風に巴里の人は芝居が好きである。

キャプシンヌといふ劇場は粋な人逹の行く處で詰りパリジアンの好む處だ、これは有樂座よりも小さい、見物席と舞臺

の高さは同じ位で、寄席の高座の樣なものである、背景も至極粗末なものである。見物人は餘り野卑でない、女の數と男の數と相半ばして居る、此の劇の梗概を簡單に語らねば私の感想を記すに都合が惡い。

若し此の劇を東京で上場するとしたら警視廳は決して許すまい、許しても見物人は一人もあるまい、と思ふ程猛烈に淫猥な劇である、淫猥な劇！これを論じたい爲めに私はキヤプシンヌの「ブルコア、マチユフエ、サ」を紹介をするのである。

元來淫猥といふ定義が甚だ困難である、見る人の觀念に依て淫猥のメートルが異つて來るのだ、日本の警視廳が私の脚本に對して「愛する」といふ言葉を禁じた事がある。額に接吻したと書いたゞけで裁判所で罰金六十圓を取られた事がある、其れは五年前である、だが今日では其位の事は許されて居る、ずつと昔には文部省の展覽會で黒田氏の裸體畫を禁じた事がある、腰巻をさした事もある、其れも昔の夢となつた、淫猥に對するメートルが段々下がつて來たのだ。熟々考ふるに文化が進むに從つて淫猥のメートルが下がるのだ、詰り淫猥の感じが鈍くなるのだ、其れが善い事か惡い事かは今ま私の論議の主眼點でない、歐洲の藝術を嚴しく論ずれば、一つとして淫猥の氣を帶びぬものがない、だが要するに淫猥は見る人の氣持次第だ、色情に敏なる者はもの洗ふ女の脛を見ても天から落るのだ、然らば此の氣持とは何かといふ事になる、其れには個性があり傳統があり國民性がある、佛蘭西人は猥談が好きである、而も其れが日本流の露骨な言葉でなく極めて上品に言ふ事を重しとする、モウパツサンの小說が歡迎されるのも此のためである、ゾラが性慾に力を込めて書いたのも此のためである、即ち日本人が見て以て顏を反ける樣なものでも佛國人は平氣で……一種の低徊趣味を以て樂んで見てゐる、裸體の像や繪畫に馴らされ、戀愛を神聖に見てゐる彼等には其れだけ淫猥觀念に餘裕があると言つて可い、此の餘裕は私の目にも驚歎する程見えた。

此の脚本は恁うである、夫婦があつた、良人は妾を蓄へて居る、妻が嫉妬に堪へられなくなる、これだけなら何んでも

ない事だ、處ろが妻は自分の嫉妬の苦みを忘れるために良人の實弟と通じやうとする、日本では實弟では破倫だから友人位に訂正させられる處ろだ、處ろが實弟なるものが首を傾けて考へた、嫂と通じた處で世間に例のない事でないから小少位は構はんが、併しそんな危ない事をするよりも、もう少し安樂な方法で兄と嫂の仲直りをさせる樣にしたいものだ、恁う考へる、これが日本なら實弟は兄を思ひ家庭を思ふ道德家にする處だが、巴里人はそんな面倒な事は嫌だ、芝居を面白く見れば可い、道德なんてものは食卓のチエースの代りにもならないと思つて居る、だから弟は巴里人の嗜好を代表して居る、のんきで樂天家で快活で而して親切氣がある、其れが此の男の好かれる處だ、若し作者が此の男を道德律義の者となし、兄と嫂のために犧牲となる事にしたならば此の劇は巴里人の人氣を呼びはしないだらう

そこで弟は恁う考へた、嫂と通ずれば兄に怒られるし事が面倒になるから寧ろ兄の妾と通ずる方がいゝ。どうせ妾なんてものは他に情夫もあるのだから構はない、僕が妾を横取りすれば兄が本妻の方へ立戻る。夫婦圓滿になる、そして僕は妾を玩弄する、嫂には御禮を言はれる、此の方が得策だ。

此の考へ方も巴里人の嗜好に適して居る。これが日本人ならば、本妻も妾も同じく兄の所有ぢやないか兄の關係した女と通ずるは破倫だと言ふだらう、だが巴里人は前にも言た通り劇を見て道德を見ない、只そういふ事件が假りにあるものとして其の劇の進行から起る興味に夢中になつて居るのだ。

實弟は理髮師に化けて妾の家へ入り込む、そして巧みに妾の心を惹くと妾の心は次第に動く、此の間の言葉の渡り工合や表情は實に形容するに詞がない程巧みなものだ。其れと同時に双方の秘術を盡くした痴話や口說に伴うて迚も見て居られない樣な淫猥な動作に移る。場面は妾の寢室である。ベツドの上に寢卷の儘二人が半身を出して互ひに情を語り合ふ。

私の驚いたのは其ればかりではない、見物人がいかにも嬉しさうに笑つてる事である。丁度此の劇と同じくエドワルド七世座に於てエボン、ブランタンが「ラムール、マスケ」といふ音樂入りの喜劇をやつて居る。其れも矢張り寢床の中で

巫山戯る劇だ、プランタンは最も人氣ある女優であり、寢床の中で巫山戯る樣な場面は彼女の十八番である。彼女は當時通俗劇作家として最も人氣あるサシヤギトリーの妻である、(ルシアンギトリーの息子)サシヤギトリーの人氣は素晴らしいもので一時は襟などにもギトリーといふのが出來た程だ、作者だけでは物足らず自ら俳優になつて夫婦共稼ぎをやつてるが、舞臺の技巧は迚も父には及ばず、其のため作者としての人氣を幾分か損して居る、

ギトリーの事で思ひ出したが私は他年一つの疑を持て居る。どうしても本當の劇をやるには作者が役者を兼ねる事だ、佛國の劇の開祖モリエールは其れだ、英國のシエーキスピヤも其れだ、モリエールもシエーキスピヤも劇壇の神樣と言て可い、世界の劇は彼等に依て生れたのである。其れは脚本そのものの精神が舞臺に於ても少しも減ぜぬのみならず却つて一段の強味を加へるからである、他人の書いたものを多數が寄つて集つて銘々の異つた心持を妥協さした處で、それは間接の表現であつて、直接のものとはならない、日本に於ても若い作者は一方に於て役者たる事が極めて望ましい事である。これは私の宿論である。

再び前提に立戻る。巴里人は恁の如く淫猥觀念には寬大である、何のためであるか、其れは後日を期して巴里風俗觀の中に書く事としやう、ただ一言したいのは、恁ういふ藝術は欲しくないことである。恁ういふ氣風は絕對に日本に入れたくない事である。而も巴里の劇壇は恁ういふ劇のために眞面目な生長を妨げられて居る。而も是れで可いものとして滿足して居る。少數の藝術家は憤慨し苦悶し革命を叫ぶが民衆は冷やかに聞き流して居る、彼等は滿足して居るのだ。それ以上に何を要求しやう、所謂高尙な藝術は彼等には有難迷惑である、其れは日本も同じ事だ。私は民衆藝術なるものの價値を疑はざるを得ない。藝術が貴族の手を離れて民衆に下れば其の品位が劣等になるのだ、日本では演劇改良論が熾である。その中に最も聲の高い人は恁う叫ぶ。

「貴族的――ブルジョア趣味の劇を止めてデモクラチックな劇を起さなければならぬ」

デモクラシーの流行する日本で此の叫びを發する商賈人は極めて利口な處世方法である。だが藝術が民衆的になると墮落する事を忘れて居る。多數は腐敗すとアリストートルの格言を引き出すまでもない、私は貴族主義を取る、藝術は貴族的でなければならぬ、人間は英雄的でなければならぬ。

戀愛は巴里人の生命である。淫猥の危ない線を綱渡りして喜んで居るのは巴里人である。凡ての文藝にこれがなければ氣の拔けた麥酒になるのだ、丁度其れと同じく喧嘩は日本人の生命である、如何なる劇にも喧嘩がある。松之助と澤田正二郎、此の二人は立廻りに於て日本人の國民性を巧みに摑んだ、川上音二郎が旗上げしたのも立廻りのためであつた。私が曾て椿姫を飜譯した時マダム貞奴が恁う言た「惜しい事に立廻りの場が一幕欲しうございますね」カメリヤに立廻りの一幕を附加へるといふ事は日本俳優の注文であつた事だけでも日本人がいかに立廻を好きであるかは解る。巴里の戀愛は足を踏み外せば淫猥になるが、日本の立廻りは直ぐに殺伐俗惡になる、共に其の弊である。而も弊のある處は國民性の發露點である。如何ともなし難い、只だ此の弊に盲從するか否やは作家の權威である、民衆はこの如く俗惡を好む、私が貴族主義を高唱する所以は此にある。

オペラで失望し、喜劇で失望した私はパウル、ブルヂエのレミグレ（移住者）に望みを囑した。パウル、ブルヂエは文壇の老將である。彼は傳統主義愛國主義から今また新たに加特力教的の立場から宗教と自由との調節を叫んで居る。若い人達に言はせるとブルヂエはもう古いと言ふ。何れの國でも古いとか新らしいとか言て其の人を評定する言葉に代用すると見える、だが古くともブルヂエは大家である。私は其の腕並を拜見したかつた、況んや主役に扮するものは元老ルシアンギトリーである、ルシアンギトリーは在世當時の高田實と言つた風の格だ、私には特に興味が深い。

移住者といふ狂言はブルヂエの小說を座附作者（?）が劇に仕組んだものだ、小說を劇に仕組むのは日本も同じ事だ、而して其れは原作より遙かに劣るものになる事も東西同一轍だ、元來小說を劇に仕組むといふ事は無理な話で日本服を洋

服に仕立て直すと同じものだ、のみならず其れを仕組む作者なるものは概ね原作者より數十等も低級なものだ、だから原作の價値の半分も劇に見る事は出來ない、私は此點を懸念した、併し巴里の作者は日本と異ひ、相當の手腕のある事だらうと一方に樂觀した。

アントワン座は小ぢんまりした氣持の可い劇場である。私は友人のY君と同伴した、Y君は巴里に長く住つて佛語も達者である、私のためには此上もなき伴侶であつた。移住者の梗概を語ると長たらしくなる、私は只だ脚本に失望した事を言ひ置く、翌日私は巴里人に會つて此の事を話したら彼は恁う答へた。

「脚本はつまらないでせう、只だルシアンギトリーが主役に扮するので巴里人が評判してるのです」

何處も同じだ、つまらない脚本でも幸四郎が演れば、歌右衞門が演れば、左團次がやれば、菊五郎が演れば其れで人氣を呼ぶ、脚本よりも役者を見に行くのだ、其れが即ち民衆的なのだ。

某侯爵がある、其の夫人との間に一子がある、佛國の士官である。侯爵は某子爵の令孃を嫁にしや　と思ふ、息子は其れよりも戰死した自分の友人の若き未亡人に戀をして居るので父と意見が衝突する、これだけの事件は日本の小說や劇に數へきれぬ程ある。そこで其れを複雜にするためにこの一家の祕密をブルヂエが捻出した。祕密といふは侯爵夫婦と息子の關係である、殆んど二十何年前に侯爵家の領地支配人某なるものがあり、一人の妾を蓄へて居た、其れを見て侯爵は横戀慕をなし妾と通じ、遂に女を我が妻となしてしまつた、此の女も浮氣な女である、その時女は一人の子を携へて侯爵夫人となり玉の輿に乘つたのである、支配人は其れを見て文句も言はずに隱退した　彼は加特力敎信者である　妻を盜まれた事は腹立たしいに違ひないが、彼の加特力敎信條は彼を束縛した、如何となれば盜まれた女は本妻でなくて妾であつたからである　若し本妻であつたら彼は何を捨てゝも妻を引戾す方法を講じたのだ、日本で言へば戶籍に入つてないから文句を言ふ權利がないと同じだ、此の悲みを忘れるために彼は聖者の如く一向宗敎的生活に入つた。これはブルジエの宗敎趣味を

表はして居る。然るに一方侯爵は支配人から奪つた妻を愛し又た其の連れ子を我が實子の如く愛して居た、數百萬の財産を受けるものは此の子より他にないのである。

侯爵は頻りに息子に向つて子爵令孃との結婚を勸めたが息子は承知せぬ、二幕目は老いたる支配人の應接室である、支配人は今ま病んで居る。彼は妻子に捨てられ二十餘年を淋しく暮らして居たが、其の病が日増に募るを知て我が遺産を息子に讓りたいと思ふ、そして密かに侯爵夫人（元の妻）を我が家に招んで後事を托した。息子は立派になつたらう、顏も見たい、親子の名乘もしたいが、今まで何にも知らずに侯爵の令息だと思つて居る彼にお前は私の子だ、お前の母は姦通したのだと知らしたくない、私はもう昔の恨みを忘れた、侯爵が私の息子を實子の如く可愛がつてくれる事を感謝する。

彼は恁う言た。彼は我が子の前途のために凡てを犧牲にしようとした。此の點は日本の劇にも小說にもある。それは加特力敎徒の犧牲的な愛を示して居る そこへ息子が突然用事があつて侯爵の使者として入つて來た。侯爵は支配人の病を知て居る處から、せめて餘所ながら實の父を一と目見せて置きたいと思ひ、用事に托して息子を遣はしたのである、これも中々人情味のある處だ。ルシアンギトリーは侯爵に扮して居る。息子は支配人の前に立つた、支配人は息子をつく〲と見やつた。此の一刹那の面會は見物人の喝采を博した。我が子を見た老支配人は亢奮の結果急に倒れた、息子は介抱した介抱を受けながら父は囈言の樣に我が子の名を呼んだ、息子は初めて父母の祕密を知た。此の間は實に大芝居である、日本も巴里も此に至ると看客を醉はさずには居られない。實に甘い新派劇だ。しかし此の支配人と息子と母親に扮した三人の役者は決して巧みなものではなかつた。彼等の技倆はギトリーに比すると餘りに劣つて居た。

支配人は蹌踉と扶けられて次の室へ入つた、其處へ侯爵が息子の事を案じて迎ひに來た、息子は沈默する。彼は總ての祕密を知つた、今まで父と思つたものは父でない、貞淑な母と思つたものが貞淑でない、息子の頭に大なる變化が起つた、それと知らずに父は息子に對して例の結婚を勸める、息子は養父に對する總ての不平を訴へやうとして訴へる事が出來

ぬ、其れに拘はらず侯爵は密に息子を許付ける、堪へかねて息子は父に秘密の告白を迫る、父は愕然として急に懷柔的態度に出る、所謂虚々實々の論戰、互に秘密を抱いて戰ふ處は物凄いほど熱氣が迸る、そこは流石にギトリーの老巧だと感心したが何分相手の役者が惡いので物足りない處が多かつた、實際私は故高田實を思はずには居られなかつた、其の藝風は殆んど同型である、弛めつ緊めつ、相手を扶け〳〵して其れでも足りぬ時に自分一人の大芝居をやる、貫目と熱氣と相伴ふて而も高田ほど誇張的でない、流石に豪いものだと思つたが、併し私は一方に何となく前世紀の人の様な感じを起さずには居られなかつた、其れは此の脚本は日本で言ふと純然たる新派劇で、原作者のブルヂェの覘ひ處は何であるにお構ひなく單に親子の對面や財産の處分や、戀愛の進行のみに重きを置き、そこに觀客の俗惡な好奇心を惹き、思想や性格や、デリケートな人間味に注意する事を忘れて居る、然ういふ脚本を演ずると演じて居る役者も俗惡に見えるものだ、日本の新派が御客の機嫌を取らう〳〵と努めて却つて御客にいやがられる様になつたのは是がためであらう。何となくギトリーといふ役者は卑俗な役者で日本の新派役者めいて見えた。ギトリーも最早や六十に近いから前世紀の人となつたのかも知れぬ。時代は進む。古いと新らしいとは一歩の差だ、十九世紀の終りの大晦日の翌日は二十世紀になる、大晦日の夜の十一時五十九分の一分隣りは二十世紀になる。眼を瞬く間に古いと新らしいが替る、新らしい時代には新らしく生れ變らねばならぬのだ、藝術は日月の如く動く、進む、血管の中の血が停滯なしに働いてこそ人間が生きて居られるのだ、生きるといふ事は動くといふ事だ、ギトリーは動かなくなつた。日本のギトリーよ、願はくは注意せよ。

併し私は此の劇に依て得る處が少なくなかつた。其れは巴里人が言語を尊重する點である、長い〳〵臺詞でも決して倦怠を感じない、日本では五分間と一人で臺詞を言たら觀客が欠伸をする、眼から來る感覺を重んじて耳から入る感覺を度外視する、日本人は言葉を知らない、言葉の妙味を解しない、立廻りは見るが對話を聞かない、巴里人は何よりも美くしい言葉が好きである。言葉から受ける喜びは動作から受ける喜びと同じ程度である、歐洲の劇の長臺詞が多いのは此のため

である、文藝の進歩は此處から出發する。如何に發音や文字を尊ぶかは私が國立俳優學校を訪問した時に目下日の出の勢の女優達が發音を矯正して貰ひに來て居るのを見た事に依ても證する事が出來る。田舍訛を其の儘の役者や、不完全な所謂江戸ッ子言葉を誇る役者や、言葉の順序を勝手に言ひ廻はす役者や、又た臺詞には少しもお構ひなく、女に男の樣な言葉を使はしたり、不熟生硬な飜譯流をやつたり、人物と言葉の調和を思はなかつたりする日本の作者達は此に反省すべきだと思ふ。

若し私が充分に佛蘭西語が解つたら、此の劇に對する興味ももう少し多かつたらうと思ふ、Y君に聞くとY君は中々面白いことを言ふ それは同君は佛蘭西語の趣味が充分だからである、一つの國の言葉の味が解るのは容易な事でない、言葉の聯絡、發音の正確、言ひ廻しの自由自在、其れは藝術の重大な要素である、而も我國で言葉を輕んずるのはどういふ譯か、言葉は美くしくあらねばならぬ、言葉は實用のみを主とすべきでない。人は自分の顔の美を尙ぶ如く言葉の美を尙ばねばならぬ。

レミグレに失望した私はテアトルデガル（文藝座）に於てフランソワ、ド、キュレルの脚本を上演して居る事を聞いた、キュレルは現代に秀でた學者で正義派の首領で佛國の文壇では押しも押されもせぬ人である、彼の正義を重んずる信念と社會主義傾向を帶びた峻嚴な作品は今ま佛國の一方に異彩を放つて居るのだ、此の作風を見るだけでも私は巴里へ來た甲斐があると思つた。

脚本「テル、イニュメーヌ」は未だ刊行されざる新作である、私は此の劇を見ていろ〳〵な事を感じた、第一は恁ういふ眞面目な芝居は巴里でも見物人が少ない事である、勿論これは三月も前から演つて居るのだから客足も減るわけだが、それでも他のオペレットが滿員續きなのに比べると、何れの地でも眞面目なものは受けが惡い、第二には其れにしても兎に角五百や六百の客が來る事だ。日本なら十日も持てない劇である、第三は佛國の惡口を書いたものでも見物人が怒りも

せず却つてキユレルの正義に感服して居る想である、其他の感想は順次に記す事にする。

テル、イニユメーヌは不人情の土地といふ意味だ。不人情の土地とはアルサスローレンを指したものだが、キユレルは或は全佛蘭西若くは全世界を指したものかも知れぬ、國のために罪なき人を殺す青年がある、我が子のために罪なき人を殺す母がある。キユレルは是れを不人情だと叫んだのだ。不人情と譯すよりも非人道と言ふ方が日本人には解り可いかも知れぬ、つまりキユレルは軍國主義、國家主義に反對して人道主義を高唱したものだ。

恁ういふ點は堪らなく私の心に觸れた、私が他年心掛けて居たものがキユレルに依て發露された樣な氣がした。

アルサスローレンスに淋しく暮らす老母がある、息子は佛國の軍隊に從つて獨逸と戰つて居る、處が偵察のために飛行機に乘て故郷へ歸ると畠の中に百姓が居た、彼は其れを殺して其の着物を剝ぎ取り軍服の上に着て我が家へ歸つた、偵察の任を果たす目的のために罪もなき百姓を殺したといふ點に於て先づ非人道が現はれて居る、處が母は此の夜一人の客を泊めて居た、其れは獨逸の貴婦人で良人は獨逸陸軍兵站部の司令官である。彼女は良人に逢ふために重要な秘密書類を懷にして來たのである、息子は其れと知つて此の女を殺し書類を奪つて軍功を立てやうと考へた、そこで散歩に伴れ出して途で殺さうと母に相談した、母は首を掉てそんな慘酷な事は止せと言ふ、息子は國家のためだから敵の女を殺しても構はないと言ふ（此の思想は何れの國の人も常に有する思想で、其れを愛國思想だと信じて居る、キユレルは其の殘酷を果したのである）そこで母は息子の説に同意して言た。「仕方がない、お前は國のために盡すが可い、私は母としての義務を盡さう」

二幕目は息子が貴婦人の室へ入つて散歩に伴れ出さうとする場面である。これだけで劇的の要素が充分である、息子は伴れ出して殺さうと婦人を誘ふ中に彼の心に潛める不人道と男としての卑しき性慾が彼を動かした、どうせ殺すなら弄さんでから殺してやらう、彼は恁う思つた、で彼は巧みに女に言ひ寄た、婦人は今夜訪ねて來る筈の良人は明日來る事に

延びたので氣がいら〳〵して居る、二年の間良人に會はない淋しさが一轉して此の若き男に好奇の心を惹き出される、と言て又た貞操上の苦痛も起る、更らに又た男の脅迫に對する恐怖もある、複雜な不可解な女性としての煩悶と享樂、其れは絕好の劇的題材である、而して到頭此の弱き婦人——弱者——は男の擒になつて一夜を明かす、第三幕は翌くる朝である、母は息子に向て恁う言ふ。お前が殺さうと言た女と妙な仲になつてしまつて其れでは詰らないぢやないかと。息子は「私はあの女に關係したけれども決して國家を忘れはしない」といふ、そして遂に女を殺さうとしたが、假りにも一夜を契つた女だ、何となく殺しかねる、そこで次の室へ伴れ出して母が一發婦人を射つ、其れを見て婦人は既に覺悟した事だと言て母から短銃を取て自分で胸を射つて死ぬ、重要な書類は手に入つた、獨軍の巡邏が嚴しいのみならず、司令官が妻を迎ひに來るのは刻一刻に迫る、母は息子に國のためだから早く逃げよと言ふ、息子は母を棄てゝ出て行かうとして躊躇する、司令官が來れば母の生命が覺束ないのだ、それを見て母が言ふ「お前は國のために盡せ、私は母としてお前のために盡すのだ」

これで幕になる、實に立派な芝居である、襟を正して見るべき芝居である、國家のためには百姓を殺し、婦女を誘惑し凌辱し遂に殺してしまふ、日本では名劍紛失のため若くは茶壺一つのために此の位の不人道は平氣でやつた、其れを是認したのは日本の昔の作者である、其れを非認したのは巴里のキユレルである。

舞臺の上では俳優が上手だとは言へなかつた、其れは脚本が餘りに主觀的であつたから役者の苦勞は悉く作者の手柄になつてしまふからである、作者が餘りに豪く見える芝居は役者が人形に見へる、役者が餘りに活躍する芝居は作者が無能に見える、双方相伴ふ芝居は古來稀なり、稀なるものこそ眞の寶である。

テル、イニユメーヌに依て漸と溜飲を下げた私は脚本と役者としつくり合つた大芝居を見たいと思つた。それはコメデー、フランセーズの「ル、カーナヴル、デ、ザンファン」(子供の祭)であつた。コメデー、フランセーズは人も知る國立劇場で

ある。役者は御役人である。季節の終りとて重なるものは別莊へ引込む、殘つてるものに名優は少ないといふもの丶アンドブ、レルノヤレオンベルナールや女優ではボヴイヤウアンチユラがある。識者に言はせると國立劇場には碌なものが無いと言ふが、其れは新らしい方に偏した人々の言葉で、巴里の最も普遍的な劇風を知るには何と言てもこれが標準と言はねばならぬ、子供の祭は母と娘の葛藤を書いたもので一人の娘がありながら美貌が累をなし淫らな生活をして情夫の間に又一人の女兒を生み、情夫に逃げられて懊惱して居る中に遂に病に犯され、終りに杖柱と賴む一人娘にも逃げられて悲慘な最期を遂げるといふ筋であるが、最も高潮に達せる場面は二幕目で今賣出しの女優マ、ダムボビーは娘に扮して居た、母よりも戀人が大切であると叫びながらも母を思ふ情に絆されて苦悶する處から、到頭堪へきれなくなつて「御母さん貴方だつて私の父を捨て丶戀の奴隷になつたぢやないか」と母の秘密を詰る處は息も吐けぬ程の大芝居で、喜びにも悲みにも同樣に便利である。佛蘭西語の特長とボビーの熱氣と哀調とは看客を泣かさずに置かなかつた、之に對する母親に扮したマダム ヴエンチユールの伎倆も中々棄て難い、或點に於てはボビー以上の處もあつた、役は敵役だけに同情を惹きにくいが終りに病を忘れてベツトの上から跳び下り倒れてしまふ處は誇張ながらも此種の芝居としては完璧と言て可い。此の二人の女優を向ふに廻していかにも好人物らしい伯父さんに扮したベルナールは日本には迚も得られない溫味と深みとを有して居た、恁ういふ劇なら日本でも必らず歡迎される、甘いと言へば甘いが、財產爭ひや、立役と敵役の葛藤劇の樣な今日の新派とは大なる相違があり、人情の波動を主要として居る點に於て一面に藝術的であり一面に通俗的である、(何れ委しく紹介しやうと思ふ)

詰り私は本當の芝居らしい芝居を見たのである、役者と脚本家としつくりと呼吸の合つた劇を見たのである、私は藝術論をする暇はないが、毎も私が主張する言葉を更めて此に言ひたい。藝術は自然を省約し且つ誇張する事である。誇張といふ言葉を日本の藝術家達は大變に嫌ふが、作家が自然の中から何ものかを引き拔いて表現する場合には寫眞の樣に自然

そのまゝでは生命がない、そこに畫家の筆觸があり作家の文章があるのだ。私は此の主張を決して枉げない。

子供の祭を見てから私はいろ〳〵なコミックを見たが其れは此に略して、ル、タロン、ダシールに移る。

氣の毒な程見物人が少ない、序幕の開く時に僅かに三十人許りで正面の二階は私より他に一人もない、運動場も椅子を疊んで御茶を飲む事も出來ない、が序幕の中頃から少しづゝ客が殖えて終りには二百人近くなつた。前日切符が買へなかつたのは招待が多いためだと初めて解つた。何處の國でも眞面目なものは容れられぬと見える、特に巴里の樣に陽氣で派手で輕く明るいものを好む土地では、哲學の講義を聞くのは厭だと見える、見て居る時には何事をも忘れる樣な芝居、そして一旦劇場を出ると直ぐに芝居の事を忘れる樣な芝居ー其れが巴里人の好みである、私は巴里のいろ〳〵な人達に會つて芝居の話を聞くと彼等は大概記憶して居ないのに驚く、其の中の半は第一に脚本の全體を評する、役者の伎倆如何は餘り言ふものがない、これは日本と全然反對である。

「挽かれた踵」は新聞コメデアに恁う評して居る。

「人は自分の思想と行爲との矛盾に立ちながら、又た一方では肯定し一方では否認しながら猶ほ自己を維持して行く事は絕對に不可能な事で社會が許さないばかりか、愛する女すら逃げてしまう樣になる。」といふ見地からマルセル、ベルジエが書いたのは此の脚本である。

其れは如何にも此の劇を評し盡したと言つて可い。併しイプセンが生きて居たら恁ういふ處まで進んだらうと言ふ程であるや否やは疑問である。如何となればイプセンはもつと〳〵劇的の技巧に用心深く、舞臺上の用意が複雜であつたからである、

併し私は此の劇をキユレルの不人道の地と對照して見て少なからず興味を感じた、要するに作者が其の思想を表現するに如何なる術を用ひたかを知るのは私に取て好き見學であつた。

主人公ゼローム、カルダンは哲學者である、哲學博士が一念發起して政界に身を投じやうとした、そして最も不相應な社會黨員となつた、一人の人間が二つの道を歩まうとしたのである、これは何處にもある事で、人は自分の不得手なものを欲するものである、博士は獨身である、處が彼に一人の姪がある、姪は今結婚せんとして居る、其の姪の教へ子に十五歳になる一人の娘がある、博士は既に五十（？）に近い、博士はこの小娘に戀をした、其の戀文は反對黨の手に落ちた、此に少女誘惑の攻擊が始まつた、哲學者でありながら社會主義の政治家であり、戀愛自由論者でありながら因襲的道德に未練を有つて居る矛盾した性格者たる彼は此のために血を吐く樣な苦境に陷つた、此の二つの矛盾した心持は作者の力に依て極めて面白く表現された。

遂に彼は自ら隱退を決した、そして田舍住居を始めた、が彼は其の孤獨に堪へられなかつた、一方娘は又た世間のために迫害されて詮方なしに博士を訪ねて來た。が博士は其時、曾て娘の戀人であつた青年が娘を追跡してやつて來た、博士は娘を隱して青年を追ひ卻ぞけた、人道主義、自由戀愛主義たる彼の行爲としては大なる矛盾である、我儘である、此に於て娘は博士の人格を疑つた、そして默然として二人は別れた。

此の娘に扮したのはフランス座で子供の祭の娘に扮したマダム、ボビーであつた、國立劇場のスターが新劇の舞臺と掛け持をするといふのは意外であつた、無論此の方は一週に一度のマチネーであるためであらうが、併し新らしく進まう、そして新らしき藝術家達の仕事を助けやうといふボビーの勇氣に感服せざるを得ぬ。

實際此の劇運動は中々熱氣あるもので、幕合に若い青年が幕外に出て「生きよ巴里！目覺めよ巴里！」といふ樣な熱烈な詩を朗讀した時私の眼は涙に濡れた、何れの國でも青年は尊い、古い國を新らしくしやうと努力しながら中々思ふ通りにならない、オペラコミックのシブレットは毎夜滿員續きだ、其のシブレットが巴里を讚美して田舍者を嘲笑する歌を歌つて居る。

以上見來つた以外にいろ〳〵なものを見たが、其れは後日に譲る、ただ私は混沌たる巴里の劇壇を見て日本の若い作家達に充分の自重を希望する。

此の稿餘りに長くなつた。私も疲れた。　（四月二十九日　巴里にて）

詩人の妻より工場生活へ

江口章子

私自身にとつても昨今の出來ごとのやうにしか考へられない私の工場生活も、すでに、昨年の此頃九州の片田舍に於て、愈々準備しかけたものであつた。郡是製絲工場の本社に起臥した月日は僅か四ケ月位のものであつたが、工場を去つて彼これ半年の後今尚、その後始末に多くの頭を惱ましてゐる。この稿を書き上げることに依つて何がなし一先づ肩の重荷をおろしたい。序に私の工場生活をするまでの恥多い廻り路をも書くことにする。これも一つの殘務整理と思つて――
―

尼僧のやうな、あの黑い服を着るまでの過去數年に於ける自分を回顧して見ると、今更の如く萍のやうな一人の弱いしかも勝氣な寂しい女の後影がちらつく。――赤裸々に私はさう言はう。詩人北原白秋の妻であつた私は又、我儘な近代の女性として、某の愛に走つたもの丶某は間もなく歐洲の苦しい旅に向つたので、たとへ某の愛が一時的なものでないとしても、其日から杖柱を失つた私の其の後の苦しみは、餘りに慘めなものであつた。なまなか賢夫人だなどと、いい加減な尊敬を拂はれてゐただけ、世の迫害も並みではなかつた。あまりのことに、私は私達の住む國を呪ひもし、つまらない爭ひに、恨むまじき人々でさへ、恨んだりした。今の世の中に許されぬ戀を貫徹して行く女としてはあまりに力の足りない者であつたが、死ぬにも死なれないやうな、苦しい重荷をもつて流るゝまゝにゆく萍の私は、遂に紫野の大德寺山内に流れついた。

私は道を求めると云ふよりも只疲れ切つた身と魂を靜かな僧院の一室に於て、病犬が吾が舌によつて、おもむろに創口の血の滴りを甞めるやうに、獨り歎き獨り悲しみを守ることに僅かに魂を靜めるものであつた何にも深く私について知らない寺の人々から見たら、長い衣物を着て、朝寢をするだけの女であつたらうが、それにも拘らず損はしてゐても何の得にもならない、義理もない私を五六ケ月も遊ばして呉れる和尙に對して、只の一度も說法は聞かなかつたが、その

人格に靜かに接近するに從つて私は和尙に感心するばかりだつた。よくもよくも働く人でまるで立派な寺院の外形とは打つて變つて、百姓爺のやうな風をして、百姓も眞似が出來さうもない程働きになる。さうしては朝夕の柴の葉一枚も粗末にせずに、風呂を燃しては近所に住む長屋の人逹をまで、親切に世話して浴れてやるのだつた。偉さうな人逹には澤山逢つて來た私も、これ程淡い人間の味を持つた人に逢つたことは初めてであつた。私は知らず知らず百姓のやうな無學な坊さんに引きつけられるばかりであつたが、參禪等と云ふ聲に自ら恐れてやはり、遠い國の人間のやうにちいさくなつて、ちらりちらり感心して日を送つた。その內に私の苦しい生活の城もかうしてゐる事をゆるされなくなつたので、私の行爲の善惡によらず常に私を愛護して下さるT先生を賴つて、東京で何かの職業を求す爲めに、餘儀なく私には色々都合のよくない小田原の先生の御宅に、御厄介になつて暑い夏を送つた。私には再び雨のやうな迫害の矢が向けられる。それを平氣で受けてゐることの出來ない私は、職業を求めに行つて、結局前よりも大きい呪咀の壺を抱くものであつた。幾ら何人が何と言はふと、私はこの呪咀の壺を生涯破つて堪るものかと、眼前の事に神經ばかり尖り立てゝ、T家の御家族の愛情を知らず〱裏切つてゐた。私を看ること神の如き先生はこの有樣を見て、靜かに一喝されるのであつた。『あなたは人間が駄目だ、勝ちも敗けも出來ない、自分の過去の事が惡かつたと懺悔するか、さもなければつまらない事に爭つたりする愚を捨てゝもつと大きな爭ひをしなければいけない。一度や二度は死ぬ位の覺悟で苦しまねば駄目です……。』私はこの時程驚いたことは無かつた。さうして靜かに考へて見た。苦勞をさける爲めに大變な苦勞をしてゐたことにも氣がついた。私は先生と相談の上で、再び京都に戾つて人間としての足許をつくる爲めに、紫野の土をほんとうに踏まして戴くことにして、小田原を立ち去つた。

京に歸つて來てからも、言ふに言へないつらいことは澤山起つて來た。然し私はいつも先生の寫眞を見て睨みごつこをした。ある時は奧樣の御言葉を思ひ浮べた。頑固な私はすなほに頭を下げることを知らなかつたのでさうした私を制し、勵まして下さるたつた一つの奧樣のそれは私の好きな言葉だつた。『惡魔主義者の御弟子ならサタンまでならねばなりませんよ。』と、私は世の中の多くのいゝ加減な善人を堪らなく憎んでゐたので、小供のやうだが惡魔が好きだつた。何の教養もない私は決して作家として先生のお弟子にして戴けはしない。たゞ一生懸命になつて惡魔主義のお弟子にならう。惡魔の弟子はけちけちした爭はすまい。――――堪られないやうな苦しい折も惡魔は泣いてはいけない。私は心にもない懺悔らしいことはしない。あくまでこの心でゆく。――――ぐん

ぐんと私は力んでいつた。おかげでよほど健康も恢復して來た。ろくに本氣で讀みもしなかつた本も、すつかり別れて見ると寂しくて堪らなかつたが、その心に打ち勝つて行くのも亦、一つの修業だと思つては、和尚の言はれる通り草取りと風呂焚き、雑巾と箒の生活に入つた。朝から晩まで立ち働いてばかりゐるやうな禪寺の生活は、他から見たら飯事のやうでも私には大變だつた。かつて小田原へ轉地した頃、どの醫師からも同じやうに、肺病の注意として筋肉勞働のよくない事を聞かされてゐたので、本能的に私は勞働を恐れ發熱を怖れてゐたので、命に向つて斧をふるふやうなものであつた。然し追々と僧堂の氣に馴れてゆくやうになると、男の雲水に敗けたくない氣持一點張りで、十二月も一月も素足で暮してすましてゐた。横着な私はよく雲水に虐められたり、女の癖にと、どこかで馬鹿にされたりするので、負けて堪るものかと、たつた一人でよく突かつても行つた。老師はいつもいつも澁い顔一點張りでどことなくやさしく導いて下さつた。雲水の人達との喧嘩にも味があつた。

私の大德寺生活中に於てこゝに書くのをあまり好まないが、それは私の呪咀の壺を打ち破つてくれた意外な贈物として、書かねばならぬ。

一寸したゆきがかりで二三日、看護をしかけた老人は全く誰れからも世話して貰へない、不幸な人だと知れたので、私はとても誰の眼にも再び立てさうにも思へなかつた、重態の病人を死なせるものなら墓場までと言ふ氣で最後の望みさへつきたやうな何の知覺もない、呆けた老人の世話をしてゐると、ある日老人は私を見て初めて氣がついたらしく兩手を合して拜んでくれた。その時に私はハッと考へた。私もこの人にとつては佛様だなあ………と、何かしらそれから私は呪が一掃された。たとへ瞬間にせよほんとうに人に拜まれることは勿體ない話だ。何が無くなつてゐても、人をまだ幾分か助け上げてゆく力は私にも殘されてあるのだと考へると、人に罵られ通しだつた私は自分にも又自分を罵つたりしてやけな氣持ちもあつたのだと、その病人に私の方から、どれ程感謝したか知れなかつた。私は次第に全快して來る老人を見て親を拾つたやうに有難かつた。内から湧き出る樂しみは私の心を他に向けることは出來なかつた。紫野の小ナイチンゲールの話は雲深き某宮家にも知れたらしく、和尚にまで再度私の宮仕への相談もあつたが、私は忝じけなく感謝はしても、さうした高い尊い世界に伺へる身柄でもなし、それよりも私には他に奉公の道が何れ求められるものと低い方へ低い方へ身も心も向けてゆくばかりだつた。私のさうした心持ちは決してひねくれた反抗と言ふものでなく世の底に自分が落ち沈むで初めて自分の進むべき路が幽かながらも知れて來たからだつた。

一人の病人は全快したがどうした廻り合せか亦私のゐる寺に肺病患者が出來た。一月の初旬から床に就いた病人は二月に入つて、とうとう吐血しだした。私は出來る限りの世話もし、寺の家族同樣に立ち働き續けて居つたが、一進一退の有樣で暗い寺の氣分はとうとう私をも半病人にしてしまつた。極度の疲勞は私を大層臆病にして、赤い血を見る度に、クラクラするので、自分の病人に對する溫情を責めもしたが、絕望的な病勢はいつまでも續くものかはかり知れない、それに不幸とは言へ病人は立派な看護を受けることの出來る人だつたので、私は友人の忠言を尤もとして、自分の健康を回復するには一番よい故鄕の家に歸つた。それは、三月の中旬で京都驛を冬の心地で去つたが、九州は菜の花が咲き、桃が咲いて明るい春景色であつた。豐後の片田舍の海邊の家に歸ると不思議なほど、喰べるものが皆おいしい。私は一つ一つ感謝せずにはゐられなかつた。そして日增に健康を取り戾して來た田舍の喰べものに長らくありつけなかつた私を知つてゐる家族、況して嫂は『章さんも禪寺にゐたお蔭ですつかり別人になりました』と、來る人々に告げてゐたものの、以前は天女が舞ひ降るやうな裝ひして歸つてゐた私が、今度は染絣の衣物を着て平氣で故鄕に歸り、白粉をつけることも忘れて了つたやうな、私の外面生活をのみ見て、人知れず歎いてゐるのは、ひとり嫂ばかりではなかつた。村の者は却つて驚いてゐた、琴を彈いてゐたあの白い手で能くも百姓のまねが出來るものだと――。私は好んで炎天に出て鍬をとつた、桑畑の草除りや、肥料を施る事もした。一日でなえるだらうと見てゐた私が、五日六日と一仕事濟むまでは、百姓女について負けない氣でやつた。私はもう勞働を怖れなくなつた、人間は何でもぼつぼつやる氣でかゝれば出來ると云ふ自信を得たのは、炎天の桑畑で敎へられたものであつた。私の姿がたとへ案山子のやうであらうとそんな事はどうでもよかつた。太陽から直接に受ける惠みと、土に蘇生へる新しき歡喜は何物にも增して貴いものであつたから………。

私は昔自分の育つた家屋敷の大部分が、この桑畑になつて私がその畑を耕すのは、弱い氣で考へ込んだら堪らない淋しさであるが、あまり涙に押し流されて來たものか、泣くことが嫌ひになつた。愚痴にも疲れた、拾つた物は捨てゝ來た。人生を一廻りして歸つた私は再び故鄕の土をひつ把まねば止まない、百姓になりたいと痛切に願つた。自分の生れた家が昔のやうに百姓をしてゐるのだつたら、私は毎日默つて野外に自分の仕事を探しにゆかう、それによつて私は一旦離れた家の娘になることも出來やうが、私の家は商家になつて仕舞つてゐるし、煙草を賣ることより出來ない私は、何の役にも立たなかつた、それよりも貧しい者の僻目から金に觸れることに多く遠慮する私であつた。

獨立して百姓になる事も考へて見たがその爲めには、牛の子一匹を買ふ金が先づ必要だつた。野の草は自由であつても、私はどうしても、犢子一匹得る金が出來なかつた。家の周圍の小百姓が濟むと、私は荒れた桑畑の中の離れ家に籠つて、哀れなバスケツトからノートの一二冊を取り出して涙を流した。その中には旅から旅を渡る間に折節書きつけた私の貧しい詩歌が秘め記してあつた。燒き棄てても出來ず世間にも出せないものばかりだつたが、讀むべき一册の本も無い私にとつては、その中から一つ二つの栗粒を拾ひ出してゆくことに幽かな溜息を洩らしていつた。

何の才も無い私！　それに私の過去の重い苦しみは、美しい詩に歌に成る前に胸の鉛に代つた。けれども、私は自分だけに對する務めのやうな氣で、氣兼をしながら店の藥紙を貰つて塵混りの墨汁でさらさらと書き附けてゐた。夜になると拙い詩の中にも心が落ちついてゆき、詩を墨汁で書く不快も忘れてはゆけるが、さて、ランプの石油がつきる——、私は自分の詩才を疑ふ前に、暗の中に坐つたまま、この貧乏を疑ひ、且つ覗極めねばならなくなつた。

こゝに於て、私の工場生活の決心は最早如何しても動かないものになつた。それは暗の中に燈いた一つの燈であり、そこに私を導いて呉れたものは、やはり私の詩であつた。

私が斯くまで苦しんでゐる事は、私を想ふこと厚い村の人達の知る處ではなかつた、私の生れた家は昔のやうな大名式な外形を捨てゝ祖先の廣い塵溜の上に種を蒔いて來た今日の相當に豐かな生活は、其家の正統を承けてゐる私に塵溜の土の一握りを返してゐるものと思ふのは當然であつた。が、私にはすでにさうした願ひは薄かつた、唯自分のやうな落ちぶれ者の歸つて來る家は、矢張り村で一番貧しい家である方が双方に都合が好いと痛切に考へた。

うらぶれ者の私の一番親しい友達は村一番の貧しい家の娘で、女工で十年間も働いた末今では夫を失つて一人の赤ん坊を育ててゐる不幸な女だつた。彼女の妹の二人も現に工場で働いて居り、其年老いた父親も工場の人事係をして居たので、彼女から聞くことは田舍の工場の生活が根柢であつた。私は其萍の女達の話を心から聞くことの出來る彼女にとつての無くてはならぬ友であつた。彼女は未だ二十五だつた。それにしては大變荒んでゐたが、人情を好く知つてゐることは四十女以上だつた。苦勞から得た彼女の愛には塵程の欺りも無かつた、それは毎時もだらしのない下等な話を平氣でする彼女の前に、私を跪かせるものであつた。朝早く水を汲みに來ては、そつと雨戸を開けて椽側に措いて行く芋の丸燒きの一つであつた。私はそれを食べては晝過ぎまでも夢中になつて詩を書き續けていつた。

「奥さん唄が出來ますか」と言つて赤ん坊を脊負つて洗濯物

を抱へて來る彼女は、私の詩の牢獄を見舞ふ竟駄希夫人だつた。其盤はまた蜜よりも甘い慰みだつた。

わたしや豐後の野良むすめ
京で血を吐いて死ならより
牛に突かれて死ぬがまし
麥の黒穗で唄をかく——
わたしや豐後の野良むすめ、野良むすめ。

彼女に解る言葉で私はこんな詩を書くのが何より樂しみだつた。

彼女は名を「おしえ」さんと云ひ、たつた一人の私の詩の愛讀者であつた そのおしえさんが、或日燒芋を包んだ紙に、こんな歌を書いてあつた。

糸ひきはつらいつとめとおもへどもこのみどり兒をどこに捨つべき。

私はこの歌を讀むとき知らず〳〵涙を流した。おしえさんは夏の暑い日中、ある時は祭物日にも小兒を背にして、幾何の小遣錢を得るために、工場に居ると同じ樣に、村で、たつた一人糸ひきをしてゐた。おしえさんが、私を慕つて呉れる心持は私の荒庭の草花の上にも現れてゐた。私が離れ屋に行かれない日等に、忙しい夕方の水汲みの歸りに、屹度私に代つて、どの草花にも、たつぷり水をかけて呉れるのだつた。ある時、おしえさんが言ふには「奥さんが離れに、おゐでにならぬ日は、花があなたの方を向いて咲きますか。」と自分で水を灑ぎかけて呉れることは一度も言はなかつたが、堪らなく寂しくなると私の家に氣がねをしながら、そつと來ては、そつと告げて歸つていつた——同じ村に生れた、おしえさんと私とが、けちな田舎の階級制度の許に、二人の親しみを、隱さなければならぬやうな場合など、私は、面倒くさいと云ふよりも腹立しくなつた。このけち臭い感情の大きな縺れを悔しく思つた。曾て賀川豐彥氏が柴野中學で講演された時にも、私たちは全く、ぢつとしてはゐられないと思つた、それは斯うであつた。

「貧しい者は土地の低い汚穢ない處に、ごちやごちや住んで、明るい陽さへ浴びる事が出來ない。貧しい者が高い立派な處に來ることは出來ないから高い方から降つて貧しい者の生活を知つて貰ひたい…………」と今さらの如く氏の言葉を味ひ返した。

おしえさんが私の家に來るにさへ、大層な氣兼があつた、私の方から彼女の仲間入りをするのには、工場へ行くに限る。その爲めにも私は一人のおしえさんと別れて、彼女の妹や、何れ同じ樣な村の貧しい娘たちのお友達になることを、どの位望んだか知れなかつた。村で女學校に行けない娘たちの寺小屋でもする心持でもあつた、彼の女の話によると『宇の島工場は新しい工場で人數も少なく從つて教育係としては

今鳥渡したお針の先生が一人であるだけだから工場でも、あなたの樣な方を得られたら、女工も樂みが出來、必然よくなつてゆきます。』と父や妹たちのゐる工場を非常に愛してゐる彼女は大層骨折つて吳れた、私は鄕土と云ふ大きい安心もあり、工場とは云へ娘ばかりで作つてゐる一つの花園に違ひない。昔から使つて來た、女中と云ふ女中の、悉くから不思議にも厚く信頼されて來たこと等思ひ浮べては、無知な若い娘たちに對する幾分の自信はあつた。工場は初めてであつても要するに漸次仕事に數へられてゆくだらう、多くの月給を貰ふ考も無し、數へられたり、數へたりしてゆく……そのうちには自然私も工場生活の知識も出來るだらうから——さうなつたら……。先づ片田舍の小さい工場に隱れて、草履取りから始めやうとする願であつたので、彼女の父の手を煩はして簡單な履歴書を郡是製絲宇の島分工場長甲斐氏に屆けると、早速、會見したいとの通知を得た。

愈々一兩日中に行くと決したので、家の者に談し出すと、私の考へてゐた通り嫂は大層不滿らしかつた。嫂としては、尤な譯である、それは嫂の里方の極近くである宇の島工場へ、たつた一人の義妹を、何は兎もあれ、働きにやることになるので『私たちの顏に泥を塗るやうなものだ……、況して、あんな田舍の下等な工場に女工募集人の世話で行くなんて、あなたの生涯の名折だから、どうせ行くのなら、せめて中津の紡績位にして親族（嫂の）にも重役とか株主とかがあるし、立派な方のお顏を借りて行く方が好い。』と、それは一々尤ではあるが、私には、最早人樣のお顏を借りて行くやうな事が嫌であつた。私は立派に過去に別れたかつた。只一人の大きな野良娘として村の娘同樣に、絲を繰く繰かないかの相違はあつても、せめてさうした心持ちで行く考へだつた——。

七月二十四日私は一切に耳を傾けず一人で宇の島工場の門を潜つた。そこに迎へて吳れたのは若い甲斐場長であつた。場長は極めて頭の低い人であつた、私達は小さいテーブルを圍んで相互に打ち解けて談じた。

『あなたの工場に對する御希望が大層氣に入りました、國虎さん（おしゑさんの父）から御噂は略ぼ伺ひましたが、一度御目に懸つた上で御相談したいと思ひましたので……。私も矢張り大分の者ですし自分の鄕土近くに働くことを望んでゐます。御說の通り地方によつて、多少の人情も違ひますし、いくら本社で仕込まれた教育係でも、こちらに來たら實際役に立ちさうに思へません。地方の呼吸がわかつて居ないと、人間を纏めてゆけません。それで私は教育係の力は、成る可く、こちらから推薦して本社の許しを得たいと考へてゐたのです、御覽の通り至つて不完全な工場ですが、完全に成つたものより、自分たちの力で、ぼつぼつ立派なものにしてゆく樂

しみは充分あります。昨年までは本工場は築上郡の株主ばかりで持つてゐたのですが、郡是の手に入れたばかりで中々、私も骨が折れます。殆んど一人で何も彼も、やつてゐるやうなものです。それに今迄の地方の女工さんを其儘、働いて貰つてゐますのですから本社で育てた人達と違つて、中々統一がつきませんが、どうか一つ協力して工場に對する世間の間違つた考へを打ち破るに足る丈の模範工場をこしらへたいものです……。あなたの、仰言通り此の地方では、女工さんを、大そう賤しむ風習があります。家で莚を織つても女工には仕ないと云ふ樣な有樣ですが、それは今迄の悪い工場ばかり見てゐるからです。然しそんな工場は段々廢つてゆきます。我田引水のやうですが郡是は全く波多野さんが、どうかして郡是の爲めに、立派な工場を拵へたいと云ふ宗教的な愛情から半ば教育半ば勞働と云ふ風にして女學校に行けない貧家の娘さんたちの爲めに、働きながら、立派な教育をして行くことを目的とされて、今日に及んだものです。現今日本で屈指の製絲工場となつて、京都府下綾部町の本社の外に二十四の分工場もあり約一萬人の女工さんがゐる譯です。さう云ふ譯ですから決して女工さんを奴隷扱にするやうな事はありません、本社には教育部もありそこには、川合先生と云ふ、大層徳の高い方が御出でになられまして、皆その方の教を受けて修養されてゐますので、あなたの樣に工場生活を以て、即禪の道場と、されます御考へであれば、非常に好都合ですから、御苦勞ですが本社へ一度、見聞のお積りで、御出でになつて戴くと、いいと思ひます。いよいよ社の人になつて戴きますのには、矢張り、さうして戴きますことになつてゐます。それに失禮ですがあなたも工場に御經驗も無いことですから直ぐに、この工場を御覽になつて御引受け下さるより、完備してゐる工場を實地に見て下さると、其方針も立ちませうから……。世間では郡是が、キリスト教を弘める爲めに、工場を各地に持つなどと申しますが、何も從來の囚はれた宗教に據るのではありませんし、本社には色々の悩みを持つた人や、各自の信仰を持つた人たちが、各々信ずる處に向つて進んでゐるのです。』云々

場長の談は實に立派であつた、私は何の用意もなく飛び込んで來たのではあつたが、私は思ひ懸け無い、好い理想を持つた本社を持つ宇の島工場に來た事を大層喜んだ。それで場長との談は一と先づ纏つたので、明日、場長が本社に出張するので本社と相談の上、直ちに私は本社へ二週間あまり視察にゆく事に取り極めた。其夜は工場の寄宿舎に泊めて貰ふ事にして案内さるゝままに、工場を一通り見て寄宿舎へゆくと、赤い襷や、青い襷を肩に引つ懸けて、どさどさと若い

田舍の娘たちが工場から歸つて來るところだつた。私の姿を見ると飛びつく樣に村の娘たちが、七八人群れ寄つて來た、彼女たちは、もう私がこの工場で世話をして上げるものと信頼してゐるらしかつた。皆と一緒にお湯を貰つて食堂で麥の多い黑い御飯に薄い味噌汁に、汚いお漬けもので夕飯をすました。それよりも白木のテーブルの前に立ちながら喰べるのが生れて初めてなので實に驚いて仕まつた。一つの蚊帳の中に大勢、ごちやごちや寢るので、蒸し暑くて臭くて一晩中一睡も出來なかつた。疲れ切つた人たちは、前後不覺で深い睡りに落ち行くやうであつた。

未だ薄暗い内に笛が鳴つて皆が起ると私も一緒に朝飯を戴いて再び場長に逢つて改めて本社と相談の結果に於ける通知を待つ事にして別れた。

八月十日、宇の島工場からの再度の報知によつて、私は場長に會ひにゆくと、場長は本社と相談の結果によつて徐に口を開いた。『本社の教育部は、世上の經驗ある中年の婦人を求めて居りますので、都合によると本社に働いて戴くかも知れません、あなたの外に今一人中津町の某製絲に一年間寮長をしてゐた婦人も、御一緒に一應本社に行つて戴くことになりましたので、二人とも、こちらへ歸つて戴くやうになれば其上はありませんが、一人だけはどうしても本社に止められさうですから、都合によりましたら、あなたの立派な御希望を以つて、廣く大きくして戴く上にもさうして戴いたらと考へます……。然し最初の御考へ通りにして、こちらで働いて下さるにしても二週間が二ケ月位の視察になるかも知れません。』

私は場長の話によつて長く本社で工場の智識を養なつて來ることを喜んだ、それに京都へは折々ゆける樂しみがあつたので、一兩日中に行く事を約した。其日に私は初めて川合信水氏勞働代表云々の新聞記事を讀んだ。故鄕の娘達に別れを告げてゐると、私をこゝに世話して呉れた人事係が來て、『甚だ失禮ですがあなたの東京で御緣づきになつていらした御主人の御姓名を一寸この紙に書いて下さい、それから其方は博士樣ですか。』と訪ねるので私は『北原隆吉』と書いて渡し、そんな偉い人ぢやありません歌俳諧の御師匠さんでしたと、言つて俥に乘つて了つた。

八月十四日、場長からの注意もあり下の關を夕方發すると綾部行きの連絡がよいと言ふので其汽車に乘り込んだ。

工場へ行くと思ふと氣が引き緊つて三等列車の一夜も存外樂だつた、京都驛に着いたのが翌日の正午前だつたが、最早今日から地獄入りだと思ふと何よりも此の世の御飯を澤山喰

べて置きたくなつたので、都ホテルの食堂に入つて久々の明るい氣分を味つた。木綿縞の衣物を着て髪の型も職業婦人らしくなつてゐる私の姿と、美しい花を以て飾られた食堂とは一寸不釣合であつたが、綾部行きの汽車は發車まで充分時間があるので、落ちついて食後の冷いコーヒーを啜りながら二枚の葉書を書いた。

丹後の女工さんが大きな袋をやつこらえつこらと脊負ふて今から、丹波の山奥の工場へ行くところです。

一枚は横濱のT先生の奥樣へ、一枚は、紫野のS寺の老和尚に宛て……。自由の旅行で無い私は紫野に一寸立ち寄ることも出來なかつた。會社の旅費を貰つた以上さうする譯にはゆかなかつた、一週間も經つたら改めて老師や、S和尚等にも相見に出やうと京都の土も踏まず、丹波行の汽車に乘りかへた。嵯峨の曳き舟を見乍ら川に添ふてだん／＼山奥にと汽車は進行を續けた。丹波路の旅は初めてであるのでしんしんと氣が引き緊つて來た、隨分蒸し暑い日であつたが青い毬栗の林の中に奥深く進み行くのが大變嬉しかつた。綾部驛に着くと既に四時過ぎであつた。折柄の雷雨を犯して俥で直ぐに本社の受附口に立つた。

女性の運動につき

數年前までは運動は單に男子のみの運動が多く、よし女性で運動なさる方がありましても、世の中の人ははねつかへりだとか、お轉婆だとか冷笑していましたが、現在では學校でも、家庭でもいろ／＼な運動は必須科目の主たるものとなりました。それは體育の上からも、智育の上からも賞讃すべきことです、我國の婦人雜誌では運動に力を注いでいるものがありません。依つて本誌は愈々本號より世界的の大家だとか、女子大學、高等師範の有名な先生方にお願して最新式の運動を講義して貰ふこととなりました。そして運動欄には最新式の體操、學校ダンスに至るまで恐く網羅することになりましたから、各學校、家庭でも本誌は必要品として備へ付けて置はなくてはならぬ樣になりました。熊谷氏の講座なぞはどこの運動雜誌でもまねることの出來ない權威ある講座です。

決勝點を贖めて

號砲は響けり――自叙傳の三――

澤田正二郎

人生といふ大きな舞臺の上に立つた時、そこには、數へきれないほどのさま〴〵な場面が展開されてゐることを知る。そして人間は、そのどの場面へ自分は登場すべきであるかを考へる。考へた揚句迷ひもする。しかも普通の人間は、その一つの場面をさへ發見することは容易でない。たとへ、やつとのことで發見することが出來て、それへ乘り出さうと不亂の努力はしてみても、この大芝居の司たることは出來ないで跪くのである。彼ももう、彼の進むべき舞臺の方向を定めなければならなかつた。彼は眼をつぶつて考へた。――俺が活躍すべき舞臺は、どんな場面であらう。――

眼を見開いた時、そこには「芝居國の世界」が、覗き繪のやうにまざ〳〵と現はれ出てゐるのであつた。彼は驚いた。何故なれば、曾て彼が夢想だもしたことのなかつた、あまりにも突飛な世界――所謂舞臺面――であつたからである。

一枚の「柳蛙」の繪を畫いて稀なる非凡兒と謳はれたのを光榮と心得た幼少時代、美しい女性との戀愛をもつて人間幸福の至上と感じた青春時代、海軍兵學校の勇敢な生活を羨み憧れた時代、一高に入學して未來の大政治家たらうと夢みた時代――時代々々に變遷する心持から、ある時は人を呪つたこともあつた彼れ、また或る時は世を樂むだこともあつた彼れ――十七八年といへば、極く短いやうではあるけれども、さうした、幾つもの曲折ある過去をもつた彼は、今人生のあらゆること、即ち、あらゆる長所、あらゆる缺點などをしみ〴〵と味はつてみたいやうな考が頭を擡げて來たのであつた。

――人間性の種々相を、もつとも手近に取扱ひ、表現し得

るものは何だらう。演劇の中の世界ではあるまいか。——嘗て觀た開盛座の舞臺や、自由劇場の公演等によつてさういふ考へを抱いてゐた彼は、もし普通人であつたならば、狂人とも、愚人とも呼ばれたであらう俳優の生活に、その望みの第一歩を傾けたのであつた。

二

何事にも失意であつた歳はながれて、彼の心にも忙しい師走の暮が迫つて來た。二三の私立學校を轉々しながら、悩ましい不規則な生活を送つて來た彼も、來たるべき新たな年には、愈ゝ、彼の一生の羅針盤の位置を決めなければならなかつたのである。それを知つた彼は、すべてのことに、焦燥たる心持をもつてばかり接してゐた。ちようど、彼の智勇兼備の雄將でありながら、何國の大將にも仕官することが出來なくて、常に、母にあたり散らしてのみゐた山本勘助の心的境遇に似てゐたのであつた。

大晦日の夜のことであつた。彼は、ちよつとした母や兄の言葉に怒りを發して、明くる元日から履くやうにと買つてもらつた正月下駄を履いたまゝ、五六冊の書物をかゝへて、座敷からふいと飛び出してしまつた。そして彼は、去年までは一家族こぞつて、正月の樂さなどを語り合つてゐたこの一夜を、悶々たる不平と、涙ぐましい懐しさとを抱いて、長いこと脚氣病になやまされて力も減退しきつてゐる足を引きずりながら、身を切るやうに寒い北風の吹きすさむ街を、夜を徹して歩き廻つたのであつた。

都大路の巷は、人々の心もおのづから騒ぎ立つて、新しい春を迎へる準備などで忙しさうであつた。軒並に立ちならんだ門松、それにつるした横一ト筋の注連縄、眼に映るものみなは、悉く新春を寿く装ひばかりであつた。

除夜の鐘は早や既うに鳴り響いたのに、彼は歸つてゆくべき家もなく、元旦の朝となつても、四方拜に登校すべき學校もなかつた。疲れきつた體を、本郷森川町の自宅の前まで引きずつては來たが、内へ入らうとはせずに、塀づたひに、家の屋根の尖角へ登つて、さうして彼は、そこで、夜の明けるまで、うと／＼と、死んだもののやうに、瓦にしがみついて眠つてしまつたのであつた。眼が醒めた時、附近の街々は、昨夜の彌走に疲れきつたとみえて、ひつそりと靜まりかへつてゐた。空は曇つて、初日の光も、まだ輝きわたつてゐなかつた。けれども、彼の行くべき道は、既にはつきりと決定してゐたのであつた。彼はこの夜、屋根の上で、人生といふ大

きな夢を見たのであつた。
行くべき道――何？――「人間苦の學び」それであつた。

その日も彼は、足にまかせて賑かな元旦の街をたゞひた走りに走り廻つた。あだかも、ランニングの選手が目的地もなく、試練のために走り廻つてゐるやうに――。さうして、最後に彼が落ちつくところは、むかしから、彼には何處よりも好ましい地であるところの谷中の天王寺の墓地であつた。すなはち其處には、嘗て、彼に學びの動機を與へてくれた五重の塔が聳え立つてゐた。

頭腦の修養のためにあらゆる書をあさつたことのある彼れ、また、人間幸福の基礎は健全なる身體にありとして諸種の體育運動に沒頭したこともある彼れ、しかも彼は、それよりももつと／＼重要な、人間生存上第一番の骨子であらねばならない魂の習練を忘却してゐたことを知つたのであつた。

――俺がこれから爲さうとする仕事は、輝ある魂の所有者のみが爲し得る仕事である。俺はこれから、俺の魂を洗練し、同時に、何ものにも挫かれないところの膽力を練磨しなければならない。――

彼は、榊の垣根に巡らされた父の墓前にうづくまりながら。その訓練を始め出したのであつた。月も星もない冬の夜は更けて、正月とは云へ、谷中の森は、暗く、寒く、云ひがたい靜寂さに蔽はれてゐた。彼は、附近に物淋しさうに突立つてゐる幾多の石碑や塔婆にむかつても の云つた。

「墓場の夜は更けても、汝らの中には、未だにして寢靜まることの出來ないものがあるであらう。前世の歡樂に喜悦しきつてゐる亡靈もあるであらう。晴れぬ怨みを抱いて悶えつゞけてゐる亡靈もあるであらう。あゝ汝ら靈魂よ！喜びあるものも悲しみあるものも、亦恨みあるものも、みな我が身邊に集り來たつて我と語れよ！」

彼は、東の空の白みわたるまで、緣もない人々の墓標をかいなでては語りつ問ひつしてゐたのであつた。

最初は背後から猛獸のやうな闇が襲ひかゝつて來る氣なこともあつた。然し彼は決してそれに怖れなかつた。大山の如き怒濤が、百雷の落つる時のやうな音を立てゝ押しよせて來る氣なこともあつた。が、彼はこの大波をも難なく擊退した。紅蓮の炎が大風のやうに追ひかけて來る氣なこともあつた。彼はそれをも亦易く薙ぎ消すことが出來た。そんな晩が幾十回つゞいたであらう。けれども、彼の心邊に近寄らうとする魔物はあつても、遂には皆、どれもこれも、彼の面前に頭を下げてゐるかのやうな狀態であつた。

第一歩の用意は出來あがつた。彼はこれから、彼の肉聲の練習をしなければならなかつた。當代の名優と稱せられつゝある優々の聲調を見聞して來た彼は、まづ自己の肉聲をもつて、何人をも懐しめる聲音、何者をも恐れしめる意氣を表現し得べき涵養の必要であることを知つた。さうして、只管にそれを研鑽しはじめた。

それも出來あがつた。お粗末ながらも旅裝だけは整つた。今度は、どの道をとつて進むべきかゞ問題であつた。——在來の因習を踏襲して、地位ある優々の手引を乞ふべきか、或は自ら開拓してゆくべきか——

當時、文壇、劇壇の大勢力が、早稻田學園を取り卷いてゐることを知つてゐた彼は、まづ手近な道として早稻田大學の文科へ入らうと考へた。

ある日の事。彼は、今は故人の河岡潮風氏を訪れたのである。これは彼が、個人的要件を帶びて長上の士に面會を求めたそもそもの初めであつた。病の爲めに臥床の人であつた河岡氏は、彼のためにわざ／＼起き出して面接して呉れた。然るに彼は、河岡氏に引見されても、一語の言葉をも發しようとはせずに、たゞ河岡氏の風貌をのみぢつと見詰めてゐた。河岡氏も亦、氏の方から彼に口を利かうとはしなかつた。二人むかひあつたまゝ、斯うした無言の時が小一時間もつゞいたころ、河岡氏は、病中と云ふのに、些の迷惑さうな顏色も見せず「君が訪ねて來た用件は何ですか」と、先づ口をきつて彼に質問した。

「私は貴方を占の神樣のやうに思へてならないのです。然し私は、道を授けて下さいとは云ひません。すでに決つてゐるのですから。たゞお願ひしたいのは、どの道を行つた方が一番近道であるか、早く決勝點へ行きつかれるか。その方向を言つてもらひたいことです。私は俳優となつて身を立てようとするものであります」彼は、漸くこれだけのことを河岡氏の前に陳述したのであつた。怪奇的な彼の態度や彼の言葉に、始終注意を怠らなかつた河岡氏は、彼が望むところの俳優として、彼の有望であることを見拔いてか、やはり、早稻田の文科に入學することを勸めて、なほ、今後の俳優には、大いに學問の必要であることをも懇切に說いてきかせたのであつた。彼が早大の英文科の豫科に籍を置いて通ひはじめたのはそれからであつた。

四

その年もいつしか暮れて、いつも彼には物思ひの時季である春がまた訪れて來た。彼は一日、彼が着るべき久留米絣を買ひに、母に連れられて三越に行つた。丁度、竣成した新館に於て營業されるやうになつて間もない後のことであつたしそれに初春の賣出しの開期中でもあつたししたので、さしもに廣大な店内も、買物に來た人々と、ひやかし半分に見物に來た人々とで、身動きも出來ないくらひの混雜であつた。エスカーレーターによつて二階へ運びあげられた時、遙か前方に、いかにも仲睦ましげに立ち並びながら、陳列棚を見て話しあつてゐる新婚らしい若夫婦の姿が彼の眼にとまつた。

脊のすらりと高い、大縞を重ねた品のいゝ美人！

――見たことのあるやうな婦人だ――

彼は男女の側へ近よつて、振りかへりさま女の横顔をのぞいてみた。さうして彼は、見てはならないものをでも見た時のやうに怖れて、顏一面を眞赤にしながら、母にかまはず其處を立ち去つてしまつた。

何といふ運命の惡戲であらう。今彼が見た丸髷の美人といふのは、嘗て、彼がまだ中學生の時代に、學校よりの歸途、毎日、午後三時にはきつと時間を定めたやうに、あのどんどん橋の上でめぐり逢つてはお互ひに若い顏を赤らめあつてゐた懐しい女學生、さうして初めて彼に戀心を抱かせた問題の女性、さうして又、彼の母や姉やにも、容姿の美しい、心の賢い婦人よと賞め稱へられてゐた〇・T子その人だつたのである。

「我は彼のT子を、花咲き花散り花咲く花として眺めよう。T子さらばよ！」といさぎよく彼の女への戀情をうち捨てゝ學業にはしつたことのある彼も、今現在眼の前に、他人の妻君となつてゐる姿を見せられては、一時いかに「愛する彼の女の上に幸あれかし」と祈つたこともあるとは云へ、過ぐる年の運動會の時など、彼の女らの視聽をあつめたバイオリストの得意さを羨むだことさへあるものを、どうして人妻の容姿を備へた彼の女を、いゝ氣持で眺めて居られよう。

彼は二階を一ト廻りして漸く母を探し出し、急いで三階の陳列場へ昇つて行つた。とそこでも亦夫婦づれの彼の女に巡り逢つた。彼は復た顏の赤らむのを覺えた。

――おそらく彼の女は、ある小さな恐怖は感じながらも、心の中は、斯うして俺と目見ゆることを希望してゐるのではないだらうか。――

彼は自惚れた自分の心持から、彼の女の心の中を想像してみたりしながら食堂へ這入つて行つた。すると又、そこにも彼の女の姿があつた。

——彼の女は、俺を弄ぶつもりで、わざと俺の眼の前に現はれるのではないだらうか。それにしても、母はこれをどんな心で眺めてゐるのだらう。——

　彼はもう、とても彼の女の姿を見るに忍びなくなつた。そして一つは、今の自分の醜い（自分ではさうは思はないのだけれど）心の態を見られるやうな氣がするので、それが厭さに、食事が終ると、母を急かせて、この悪戯な運命の手からのがれるべく、エレベーターに體をかくして階下へ降りてしまつたのであつた。彼はほんたうにその時は、奈落の底へでも引き入れられてゆくやうな氣持であつた。少年音樂隊は、彼を嘲り笑ふかのやうに、何かの曲を、面白く賑やかに奏しつゞけてゐた。

五

　ものゝきまりははつきりとついた。行くべきものは去つてしまつた。胸の奥底に影さしてゐたあるものもすつかり消え去つてしまつた。彼の進む道は、完全に、一途より他にはもうなかつた。

「此れへゆけ！此れへゆけ！」彼は、自ら自分の心に鞭打ちながら、眼ざす方向にむかつて眞しぐらに突進すればいゝのであつた。

　その年の、文科の春季大會の余興として、坪内博士の『桐一葉孤城落月』を上演することになつた。我が時來たれりとばかりに、彼は同好の人々とともにこれが演出に全力を傾倒して奮闘した。余丁町の邸に坪内博士を訪問して、博士のあの温顔に接しながら、『桐一葉』の上演を請ひ、また、道を拓く便宜をもいろ〳〵と與へてもらつたりしたのであつた。

　大會の日が來た。舞臺に充てられた大隈總長邸の大廣間は、總長を始め、學長、各教授、各講師その他、來賓、學生など、千餘の觀客によつて埋まつた。一葉の前と、石川伊豆守との二役（早替り）を振られた彼は、望みに望んだこの晴の舞臺に立つて、どんな演出を試みたであらう。長い間鬱積してゐた力の全部を、彼は一トたまりも殘さず、手一パイに吐き出したのであつた。恰も、議政壇上に於ける時の隈侯（當時は隈伯）の獅子吼そのもののやうに——。されば彼の演技が、他の誰のそれよりも多く、拍手喝采をもつて迎へられたことは云ふまでもなかつたが、幕がしまつてから、大隈

總長がわざ〴〵樂屋を訪れて、その勞をねぎらはれた時には、意地ッ張りの彼も、感涙の流るゝのを禁じ得なかつたのであつた。

單なる餘興とは云へこの演藝會は、今の彼個人に取つては、最も重大な、一つの試驗的問題と云つてもいゝものであつた。これによつて、彼の技倆は、遺憾ないまでに校內一般にわたつて認められたのであつた。

「澤田君、君は役者となつた方が成功するよ。役者に成りたまへ！　役者に――」先輩や同級生らは、口を揃へて彼に勸めた。彼は、美事に試驗に及第したのであつた。これからの彼は、愈々本式の道を踏まなければならなかつた。

その年の六月には、坪內博士が私費を投じて苦心經營して居られる文藝協會の試演が、催されることになつてゐた。文科大會の餘興に出演して成功した彼は、文藝協會の一員たるべく、博士邸の隣にあつた協會の門をくゞつたのであつた。

下駄ばきの儘で汚い教室に出入してゐた荒つぽい學生は、斯うして急に、木の香新しい協會の養成室で、しかも清新な氣持で、演劇に關したいろ〴〵の講義を聽かなければならなかつた。生れつき學問ぎらいの彼には、可なりに窮屈な授業ではあつたけれど、望みに榮えた首途の第一步と思へば、彼はあらゆる苦痛を堪えて熱心に講義を謹聽することを厭はなかつた。

黑板越しの彼方に、澄ましこんで稽古をしてゐるその體と同じやうに聲の大きな男、聞けばそれは一期生の加藤精一君であつた。その横に立つてゐる眼鏡をかけた牧師然たる圓顏の男、それは佐々木積君であつた。分限者の勘當息子か、お召の着物をぞろりと着ながした、下町育ちらしい眼のおそろしく飛び出した秀麗の美少年、それは金井謹之助君であつた。そこへ、おさんどんのやうな格好をして、「今日は島村先生のワリダツクの講義でしたね」と云ひながら這入つて來た、品の優れぬ肥え太つた一人の女生徒、それは松井須磨子であつた。

「あんた早稻田の學生ですか。どんなつもりで入つて來ましたの？」

三枚目（滑稽役）が老役にでも適しさうな容貌を備へた、謹直らしい男は、「僕も二期生です。倉橋仙太郎と云ひます、どうぞよろしく」と名乘りかけながら、彼に質問するのであつた。

「僕は澤田正二郎といふ新入生ですが、君はどういふつもりで……」と彼は反問した。

「ハッハッハ………」と、その聲の出しかたからして三枚らしく笑つたきりで、倉橋と稱する男は答えなかつた。彼も負けずに大きく笑つて見せた。
　初めて會つて、しかも誰よりも先に名を名乘り合つたこの二人の青年、彼らは、後に、一心同體の如く、堅く手と手を握りあつて離れず、ある時は生命を的に、或る時は黑血を吐きながらも猶ほ土にかぢりついて、あるものゝ建設の爲め奮鬪努力した二人であつた。

六

　望み多い日は、喩へにもある如く、矢のやうに早く進んでゆく。彼の平常の性質は、こゝでも亦ときどき飛び出して、人々の笑ひを招くのであつた。嘗て、支那人の兒として侮辱され、門跡前の惡口と嘲笑された彼は、こゝでは、その服裝や擧動がいつまでも書生じみてゐた爲めにか、「泥くさい學生」として田舍者視され、人々の望みとあまりにもかけはなれたことを口にするからであらう。誇大妄想狂として疎外されたのであつた。けれども、いつも唯一人、彼の言葉の全部を受け容れて呉れる男があつた。即ち倉橋仙太郎君であつた。
　文藝協會の公演として、帝劇で『ヴェニスの商人』が上場されたのは、明治四十△年であつた。東儀鐵笛氏のシャイロック、故土肥春曙氏のポーシャ姫、彼の役は、後の方に槍を持つて突立つたまゝ、一幕中、一と口も臺詞を云はない雜卒であつた。これぞ彼が俳優としての初舞臺であつた。彼は、ふられたこの槍持つ雜卒一ト役を身にあまる大役と心得ながら頗る滿足心をもつて毎日帝劇に通ひ、充てられた大部屋の片隅に鏡臺を並べて、自分の出幕である「法廷の場」の開くのを待つのであつた。
――若し、俺がしてゐるこの役が、この槍をもつて、あのシャイロックのお尻を突き刺したならば、この芝居はどんな終局を告げるであらう。――
　舞臺に出ては、そんなやうな叛逆的な空想に耽つたりしながらも、彼は自己の職責を完うすべく、極めて忠實に勉めたのであつた。
「見ろ！　愈々澤田が役者になつたぜ」
「何ッ、澤田が役者になつた――？」
「ウム。帝劇に出てゐる。文藝協會の公演に――」
「さうか。行つて見よう。彼奴、子供の時分から好きだつたから。芝居はうまいだらう」

「うまいもまづいもない。一ト言のセリフも云はせてもらへないで、槍をもつて默つて突立つてゐる」

彼の友人らは、彼が俳優になつたことを異常事のやうに不思議がつて、彼の前途を嘲笑したのであつた。

公演の中日ごろのことであつた。突然、彼の家を訪れて來た彼の友達の一人は、

「おい澤田！　君は江川伸(假名)の『母親とその子ら』といふ小說を讀んだか、君の家庭のことを書いてあるぞ、君が役者なんかになるから、あんな奴の小說のモデルなどにされるんだ」と彼を責め立てるやうに、また自分のことをでも書かれたやうに憤慨して、彼にそれを告げたのであつた。

「江川伸」と云へば、森川町の彼の家の直ぐ筋向ふに住まつてゐる、蒼白い顏をした貧弱な文士であつた。

――あの江川が、俺の家庭をモデルにして何を書いたんだらう？――

彼は友だちに數へられた雜誌を買つて來て讀んでみた。『母親とその子ら』なるほど彼の家庭をモデルにしたらしい小說である。

若し實際にそれが、彼の家庭をモデルにして書いたものだとすると、彼の母は以前藝者であつたといふこと、また彼の兄と彼とが女中を口說いたといふこと、そんな出鱈目なことばかりが、弄ぶに巧みな彼一流の筆をもつて記述してあつた。

彼は烈火の如くに憤つた。そして路地板を踏みならしながら、筋向ふの江川の家へ怒鳴り込んで、强硬なる談判を開始した。

「君の『母親とその子ら』といふ小說は、何をモデルにして書いたのだ？僕の家庭のことだといふ評判だがさうか？」彼の語氣は荒く鋭かつた。

突然の襲擊に可なり面喰つたらしい江川は、その蒼い顏をなほも青くして「あれは友だちから聞いた事件をモデルにして書いたものであるが、小說の事件は、僕が聞いた事實とは全く相違してゐる」と聲を震はしながら、曖昧な答辯をしようとするのであつた。

「その聞いた事といふのは、僕の家庭のことではないと云ふのか？」

江川は答えなかつた。

「俺の友人らは、みなあの小說のモデルは俺の家庭だと云つてゐる。よし俺の家のことではないとしても、他人の家庭の私事を露骨に描寫して迷惑をかけることが小說家の職分か。

創作家のなすべき仕事か。謝罪しろ！」
　江川は猶も無言のまゝであつた。
「謝罪せんとなぐるぞ…」
「なぐる？」江川はさも口惜しげに云ひながら彼を睨んだ。
「さうだ。謝罪狀を書け！俺の眼の前で書け！」彼も江川を睨みつけたまゝ、容易に躊らうとはしなかつた。
　やがて江川は、一札の謝罪狀を認めて彼の前に差し出した。
「拙者執筆の小說『母親とその子ら』は、決して貴殿及び貴殿の家庭をモデルとしたるものには無之候」云々
　彼はそれを懷にして、意氣揚然として江川の家を引きあげたのであつた。
　一札の謝罪狀、そんなものを取り得たからとて、それが、彼の母や兄や彼が受けた心の侮辱に、どれだけの報ひとならう。江川に對する一時的な腹癒せが濟んだだけに過ぎないのであつた。しかもこの問題は、彼の職業に對して飛んで來た迫害の第一矢としていつまでも彼の心を抉り痛めるものであつた。
　友人らからは、斯樣に非難され、輕蔑されはしたけれども、江川の小說のとから、母の心事を想ひ出すにつけても、彼は男としての意地を忘れなかつた。
「今に見て居れ！」彼は槍持つ雜卒の役を大事々々に、じつと決勝點の彼方を眺めながら、相も變らず帝劇の裏門をくゞつては、暗い部屋の片隅に陣取り、時間が來れば槍を握つて、默々と舞臺にあらはれることを樂んでゐたのであつた。
「あゝこの地下室の樂屋よ！お前はいつまでも俺を、こんな姿で迎へて吳れるか。迎へて吳れい！俺は、よし將來どんなに偉い俳優となることが出來ても、いつまでも今のこの下廻りの心持をもつてお前に接するであらう」
　彼は公演の最終の夜の役を終り、初めて這入つた想ひ出深い樂屋を辭し去る時、名殘り惜しげに振り返りながら、斯く語つたのであつた。

――つゞく――

運動講座

女子と庭球

熊谷一彌

近來我國婦人の間に一般的の戸外運動が勃興し、就中テニス競技が學校に家庭に目醒しい流行を極めつつある事實は一大に驚異に値する。是等の流行を來す原因は各所に行はれる婦人競技會等に於ける斯技の奬勵方法と、最近の極東大會で我婦人選手の優勝による直接の刺戟とが與つて力ある事勿論であるが他方に我國の婦女子が之によつて心身の練磨に對する大なる利益を確認するに至つた事實が最大なる原因を爲して居る。

此戸外運動の勃興の現象は之を曲解せば我國人の通弊たる一時の流行にカブレて取捨撰擇に注意せず單に衆の赴く處を追ふの批難が起るかも知れないが、兎に角此種の戸外運動殊にテニス熱が高まつて來たのは婦人の體育上欣ぶ可き事柄である。

抑も戸外運動は其種類多く其特長も亦異るが故に各自に適合せるものを撰定せねばならぬ。特に婦人にありては男子と異り體格力倆相違するの結果、男子の特技を直に移して實行するも終局の効果は獲られないのみか却つて女性美を破壞するの因となるのである。

故に婦人は婦人に適當した運動を撰び其特性を發揮して心身の充實に努むべきものである、が之が要件としては過激に亘らざる事及び女性味を破壞せざる事である。婦人の性質上並に體格上より推して過激なものの忌む可きは言を俟たない。更に婦人の特性たる優し味を奪ふが如き運動は排斥しなければならない。

例へば蹴球の競技の如きは前述兩樣の意味により單に男子の獨占物たる可く婦人の之に入る餘地は尠い樣に思はれる。

然るにテニスに於ては恰もテニス自體が婦人の爲めに作られて居るかの如くに前述の諸條件に適合した運動である。

元來テニスは各種の運動中長時間を要し且つ想像以上に激烈なものである事は一度之を經驗した者の均しく首肯する處である。斯る烈しい運動が過激に亘らないと云へば聊か奇妙に感ぜられるが其の譯は以下の說明に依つて了解されると思ふ。

即ちテニスのゲームに於て球の速度の如何はプレヤーの身心を疲勞せしむる尺度となるのである。如何に巧妙なプレーも其の打つ球の速力が劣つたならば相手は之を容易に打ち返す事が出來る結果比較的に身心を勞する事なくしてゲームを遂行し得る道理となる。相手に餘裕を與へず左右前後に球を送つて奔命に疲れせしむる爲めには相當の速力ある打球を必要とする。プレヤーがゲーム中に激勞を來す原因としては此外にも種々あるが球の速度の强弱は其重要なる要素となるのである。

然るに一般より見て婦人の體力は男子に比して遙に劣るが故に男子と同一の速球を打つ事は不可能である。勿論全力を傾倒して之を打球に注げば或は强球を放つ事も出來るが原則として打球に對する力の入れ加減は全力の約八割を以て極度とし夫れ以上は失策の危險を伴ふの常であるから婦人の打つ球の速度は比較的に弱いものと云はなければならぬ。彼の現在に於て世界屈指の女流選手たる佛蘭西のランラン孃の打球の速度は婦人選手中にても拔群なる爲めに誰も彼女に追從を許さないのであるが其速度とても男子のそれに比べると尙遜色あるを免れない。

斯の如く婦人の打球の速度は男子に比して、著しく弱い爲めに相手を壓倒するには僅に球をコントロールする事に依り婦人一般の弱點たる馳走力の缺陷を利用して攻擊を持續するに過ぎない爲めにゲーム全般が緩慢となり延いて相互の疲勞の程も輕減される。

次に婦人殊に我國の婦人に望ましき事は女性特有の優美性の保存に注意する事である。戶外運動に於て過渡期に在る我國人は動もすれば歐米一部分の風潮にカブレ淸濁併せて之れを受け入れ徒に盲從する傾がある。近來婦人が運動に熱中の餘り服裝、動作其他に於て識者の顰蹙を買ふが如き場合も折々見受けるが、斯る弊は將來共に嚴禁するの必要がある要之婦人が戶外運動を爲すに當つては先づ種類の撰擇が最初の急務でなければならぬ。

此點に於てテニスは聊かも排斥す可き點はない。コートの双方に分れて純白のシャツ、スカート、靴の服裝で輕快に打ち振ふラケットに飛ぶ球を追ふスタイルは恰も花に胡蝶の舞ふ

のにも似て、その姿こそは女性美の極致を發現するものではあるまいか。筆者は此點を想ふ毎にテニスが婦人に最も適當せる事を高唱したいのである。

現今世の趨勢は我國を驅つて世界の一等國に列せしむると共に今後は凡ての事情が國際化するのは已を得ない事である。隨つて婦人のテニスの競技も亦將來國際的の競技となるのは必然の運命であつて過般の極東大會は實に其第一歩を印したものと云ひ得らるのである。

斯る狀態に推移せんとする時代に於て我婦人庭球選手の踏む可きステップや覺悟は如何。之を論じて私見を述べて見る。

テニス競技が近來多數の若い婦人の間に流行し初めて居るが、現在は尙其大多數の人々は在來の軟球のテニスに親しんで硬球を使用して居る人々は比較的少數であるが、將來は漸時硬球に進む可きもので又國際的となるには是非共必要な事柄である。故に筆者は硬球の立場に於て論ずる次第である。

我婦人選手の一般を通覽するのに硬球に移つてより日未だ淺い爲かゲームの方法戰鬪の掛引に於て歐米選手に學ぶ可き處多きは言を俟たない。

筆者は從來種々な婦人庭球試合を見て回一回と其技倆の進歩の程度著しきものあるに驚嘆するものであるが未だ是を歐米の選手達に比較する時は其差は霄壤も啻ならない事を發見する。ランラン孃やマロリー夫人の如き優秀な選手の出現を我國に見るは近い將來には期待されぬ。卽ち現今の我婦人選手は適當なる指導者なき爲めに無方針に唯練習のみを續けて居る。無暗に練習した丈けでは大成は期し難い。

筆者が此處にテニスのゲームの方法や練習の仕方に就て詳細に述べる事は限りある紙數が許さないので之は宜しく拙著「テニス」によつて御硏究を乞ひ此處には唯婦人のテニスとして男子のそれと各方面に差異ある點のみを指摘し以て御參考に供する。

前述の通り男子と較べて體力に相違ある婦人は球の速度の點で他に優らん事を心掛けるよりも先づ球を自由に扱ひ、場所を狙つて何處へでも意の欲する處に打てる樣に練習しなければならぬ。無理に强球を連發して强引に極め或は單に考へもなく球を打ち返すが如きは共に排斥す可く斯かる者は將來の望み更になき人である。テニスは之を自然的に行ふ事が一大原則であつて如何なる場合にも無理があつてはならぬ。無理は破綻を生ずるの因となるのである。又徒に球を相手のコートに入れる事のみを能事とするが如きは無策の甚しき

ものであつて其人は必ずや強敵に逢つた場合に施す術もなくして敗れるのは火を睹るより明かである。故に練習に際しては常に注意し相手の間隙を見ては其處に自由に球を送る事を心掛く可きである。歐米一流の婦人選手のゲームの方法に徴するも彼等の球速は男子のそれに劣るも場所を狙ふ事は却つて正確である事は此の方針に對する教訓である事を忘れてはならぬ。

故に各種のストロークは勿論サービスに至る迄正確にプレースする事を主とし球の速度は無理を生じない程度に於て爲す事を努む可きであらう。

次に現今の理論ではネット・プレーはバックコート・プレーに勝る事になつて居るが、是は男子の場合にのみ適用す可きもので婦人のゲームは全然バックコート・プレーで終始しなければならぬ。

蓋しネットプレーを遂行するには多大の努力を必要とする。此努力は血氣旺盛なる男子のみに可能であつて婦人には望み難いプレーである。加之ネット、プレーに缺く可からざるスマッシュは婦人の大部分が不得意とする處であつて假令ネットプレーする位置を占めても相手はロッビングによつて容易にベースライン迄撃退する事が出來る。更に婦人のコート・カバーリング（守り）は馳走力に於て劣る爲めに著しく不完全なものとなり、從つて左右のサイドを拔かれる虞がある。
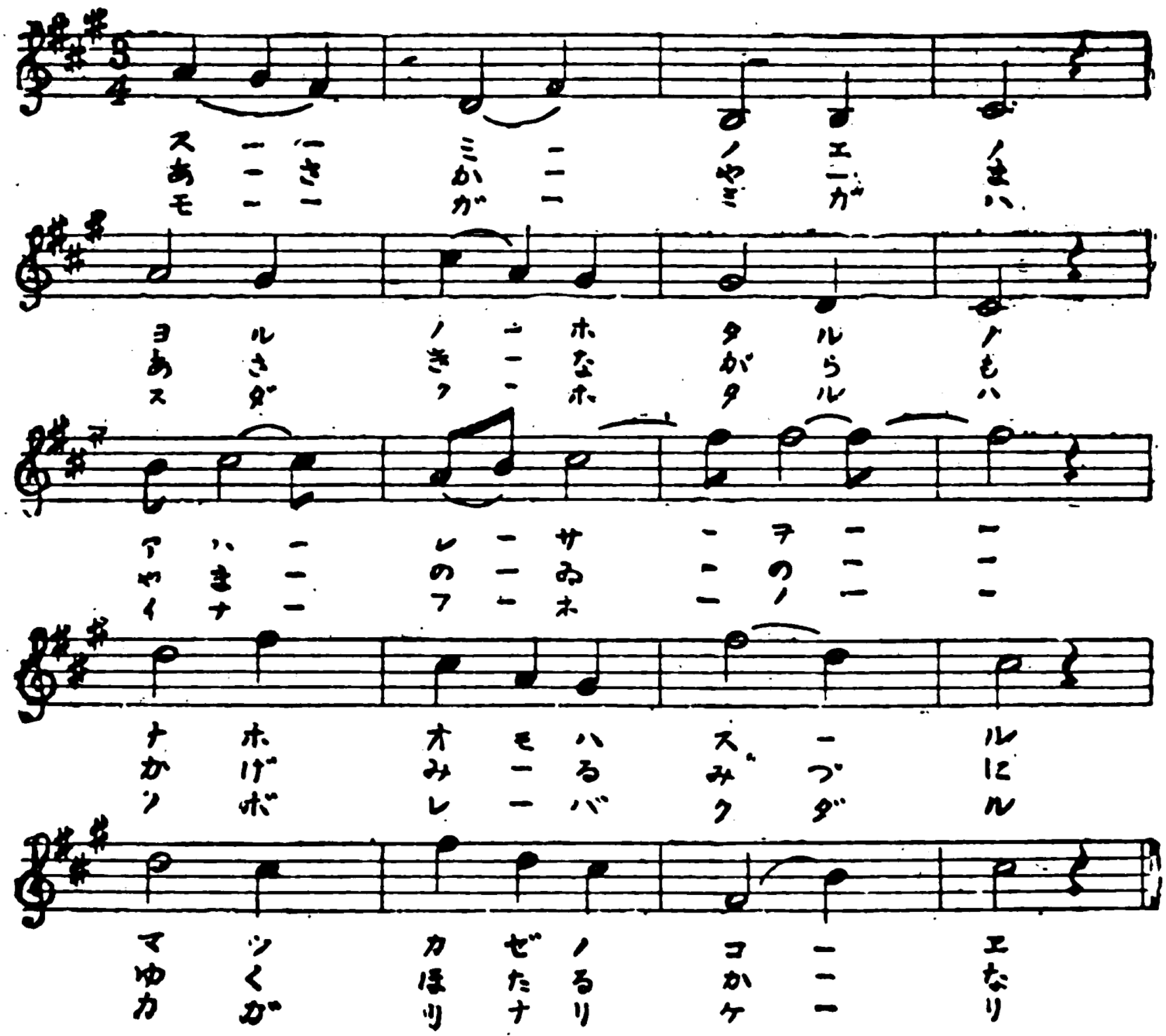
斯くの如く何れの點より見てもダブルの場合を除いてはネット・プレーは婦人選手に取つて有利ではないのである。然るに往々にして此理を知らずネットの近くに位置する人も見受けるが斯る事は改めなければならぬ。

婦人のゲームの方法がバックコートに在りとせば最も意を注いで練習す可きはグラウンド、ストロークである。バックコートゲームの生命たるグラウンド、ストロークの會得は我婦人選手の最初に爲す可きもので且つ最後のものであらねばならぬ。然しネット・プレーの位置に進む場合も往々あるが故に其折に相手の攻撃を防ぐ丈けの準備が必要な事は勿論である。

筆者は、玆に球のコント・ロールとバックコート・プレーとは婦人選手の以て進む可き二大條綱であることを斷言して筆を擱く。

まだ此の外に言ふ可き事は尠くないが餘は他日の機會に讓る事とする。

螢



螢

臼井規矩郎作曲

すみの江の夜のほたるのあはれさを　慈鎮
猶ほおもはする松風の聲

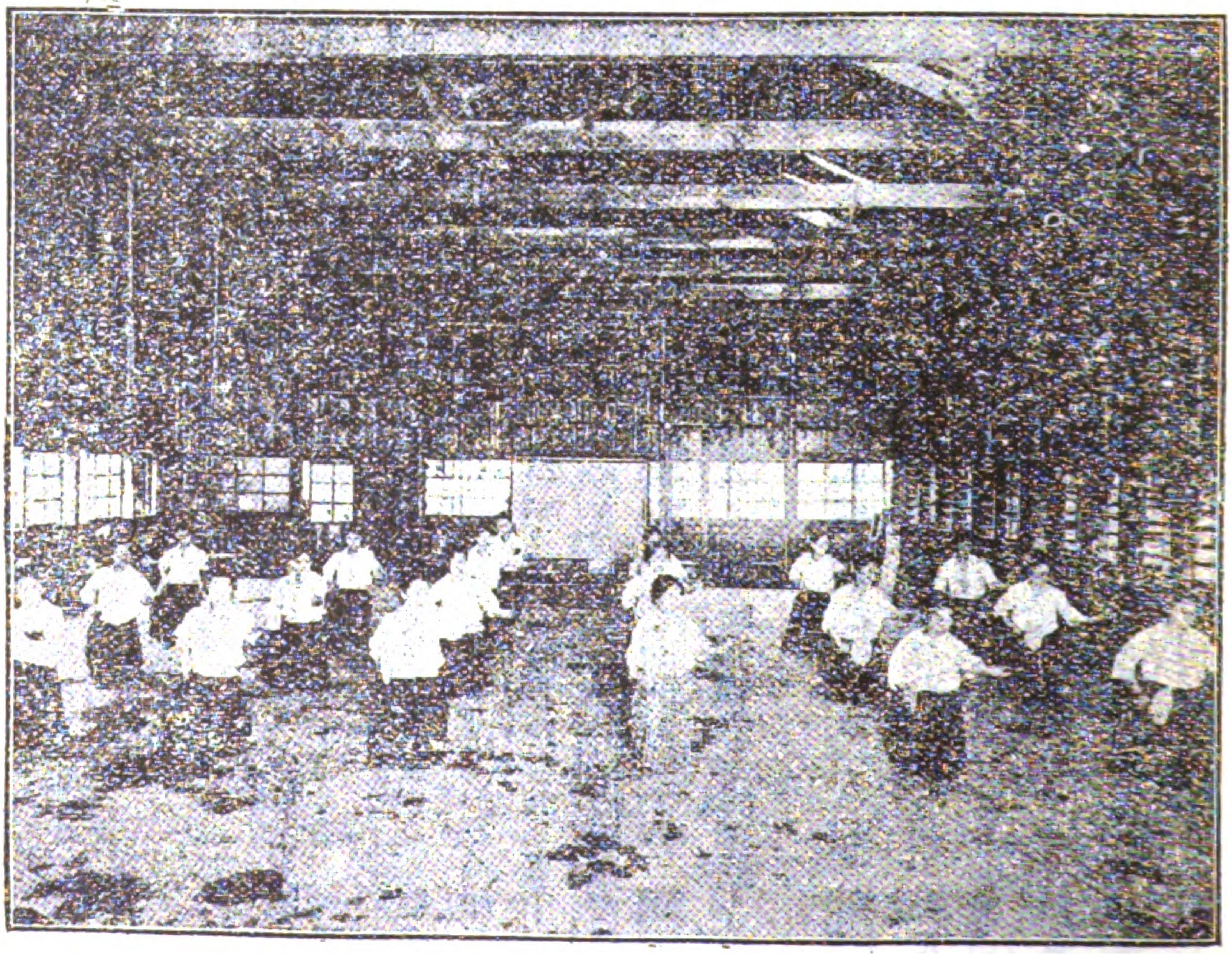
淺香山あさきながらも山の井の　少將内侍
かげみる水にゆく螢かな

最上川すだく螢は稲舟の　大江廣言
のぼればくだる篝りなりけり

(一)なほおもはする……



(二)ゆく螢かな……



日本女子大學校生實習

表情體操

螢

白井規矩郎

近來童謠に振り付けをして兒童に踊らせることが一の流行の樣でありますが、之も一種の表情體操であらうと思はれます。又、先頃表出運動とか律動遊戯とか云つて、唱歌や簡單な樂曲などに合せて動作をさせるやうなこともありましたが、之れ亦た一種の表情體操でありませう、日本在來の能にしても舞踊にしても亦廣い意味の表情體操でありませう。

何れにしても表情的の運動は演技者の年齡に相應したものでないと、行つて反て嘲笑を受けたり雅正のものも滑稽になつたり致します。

童謠遊戯も年少の稚兒が行つてこそ可愛らしいとか可憐とかの情も興りますが、是れを十五六才以上のものが行つたとて何の感興も起りません寧ろ馬鹿氣て居る樣に見えませう。又、能などにしても或るものゝ仕舞などを清楚に行へば演者が少年少女でも其の情想を完全に表現することが出來ますが、若し之れを大人の衣裳持物を其まゝ用ひて本能一番全局を少年少女に演じさせましたなら、決して大人が行ふと同一の感興を促すことは出來ますまい

自分は平素女學校以上の學生を取扱つてゐる處から、成るべく此等の年齡性情に適應して學校でも家庭でも出來る樣な遊戯的運動をと思つて作つたのが此の表情體操であります。

斯樣な次第ですから歌にしても動作にしても童謠遊戯や律動遊戯などと異つて幾分か複雜になつて居りますので、始めは一寸面倒の樣ですが少し慣れますと興味のある處が能く分る樣になります。

歌の方から申しても和歌や今樣體も採りますし、又、現代の名家に委囑した長い歌曲體のものも作つて見ました、玆に掲げましたのは古人の和歌に因て表情したものであります。

又、動作の方に致しても童謠遊戯の樣に單純專一でも厭きが參りますし、又、舞踊の樣に濃艶な色彩に富んでは之れを行ふに憚る家庭もありますし、左りとて能の如き擬古趣味の

ものではチト現代離れの傾がありますので、自分は佛人デルサート氏の表情法を基として之れを適當に日本化させることに苦心して見たのであります。

月といふ表情にしても「マルイ〳〵マンマルイ」と謠つて兩手を頭の上へ圓の形に掲げますのは童謠式の動作で、三笠の山に……とか雁なき渡る……位の處で月といふ感じを起させるのは表情體操の主旨であります。

と申して何も山の形や雁の眞似をして月を省く譯ではありませんが、其邊は次に掲げたものを若し實地に試みて頂けば大概は御分りになりませうと思ひます。要は凡ての動作に餘裕をつけて餘り狭細しくない樣にしたいことです。

螢がり

此の遊戯は第一部第二部に分れて居りまして、第一部では螢を採集する動作を含んだ運動をし、第二部では茲に掲げました歌曲の表情を致す樣になつてゐるので、第一部は家庭の娯樂には適しませんから、第二部だけを述べることに致しました。

それから此の遊戯は一人でも二人三人でも出來ますので持ち物は各一本の團扇だけ（第一部を行ふのには螢碗が入用ですが）で宜しいのです。說明は成るべく分るやうに致す積りですが、餘り詳し過ぎても讀むには却て面倒で實際行つて見やうとする方々にも何が何やら分らなくなりますので、歌と比べて一通り御覽の上は適宜演者の工夫で然るべく表情を加へられたら猶ほ宜しからうと思ひます。

（一）

すみ……

團扇を右手で常の如くに保ち、起つて右側に垂れて居ります。「すみ」と謠ひ出すと共に徐かに左の足を前少しく斜に踏出して其膝を屈げ、同時に左の手を横から頭の上に掲げ、掌を上向にして美しく屈げます。

のその……

左の膝を眞直に伸ばすと同時に、左手を徐かに元の通り垂れ、この左手の運動と共に右手の扇を前左の下から左上へと掲げ、左肩の邊から漸く手首を反して團扇を平らに頭の上へ掲げて、左の趾先きで起つ樣に致します。

よるの……

右手を元の位置に下ろしながら、左足を右足の後ろへ引いて、體を左方へ回します。

ほたるの……

（イ）左足を右足よりも前へ踏出して前向となり
（ロ）兩趾先で右の方からクルリと回つて脊向となり
（ハ）其まゝ右の膝を起てゝ跪づきます。

あはれ……

其まゝ起つて、兩趾先で左の方から回つて前向となり、直ぐに左の踵を右の踵とそろへる樣に致し、同時に團扇を左手に與へます。

さを……

徐かに右足を一歩前へ踏み出しながら、右手を半圓を畫く樣に下から左の肩の前へ中てまして、右の前を見つめます。

なほおもは……

徐かに左の上の方を眺めて、

する……

右手を左の肩から美しく下ろして、直ぐに兩手を兩側から頭の上へ掲げ、兩手で團扇の柄を持ち（其持ち方はあふぐ方を右へ向けて左手を放せば團扇は元の通り右手であふげる樣にして）、體を右の趾先で支へる樣にして、

まつかぜの……

徐かに兩手を（左手は團扇から放して）兩側に下ろして、同時に右踵を左の踵にそろへて、

こゑ……

始めの音にて（則ちこを謠ふと共に）體の前下で團扇の裏面を左の掌で拍つて、次に徐かに顔を上げて上の方を見て

（二）

あさか……

右足を一歩前へ踏出して、右手の團扇を前から頭の上へ、と眞直に伸し、終りに其まゝ手首を屈げて團扇を後頭部へ垂れる樣に柄の方を上に向けて、

やま……

左の手を腰にとり、右手は頭の上から右側へ肩と平らにまで下ろし、團扇を面を前から見える樣に向けて、

あさき……

右手は前のまゝで、左手で右の上臂を握り、

ながらも……

右の肘を屈げて團扇を左肩の前へ來たし、丁度兩臂を交叉する樣にして、

やま……

兩手の交叉を解いて左右へ開き、肩と平らに兩側へ伸ばして、兩肘を美しく屈て、

のゐ……

指を屈め、前臂を少しく下方へ掉りながら直ぐに頭の上へ圓形に掲げて、

の……

團扇を頭の上で平らに保ち、左手を團扇の　頭の方へ添へて、

か……

兩趾先で左方からクルリと背向きとなり、

げ……

兩膝を屈げて、同時に兩手を頭の上から兩側に下ろして、

み……

此方向で右足を左足よりも一歩前に出して右の下斜を眺めて、

る……

右足をあげて左の方からクルリと前向になり、直ぐに右足を左足よりも一歩前へ置いて、兩手は前の樣に頭の上へ美しく掲げる、

みづ……

「兩手を頭の上から體の前へ下ろして兩掌の向き合ふ樣にして、

に……

掌を下向にして兩手を兩側へ伸ばし、目は團扇を見る樣にして、」

ゆく……

跪いて兩手を腰におく

ほたるかな……

左手の掌を下向に左前斜に伸ばして、直ぐにそれを右の前斜へと回はし、再び前から左側へと動かして、目は常に左手を見て。

（三）

もがみがは……

團扇を其處へ置いて起ち、左手を徐かに腰にとり、右手を前へ（掌を下向に）食指だけ伸ばして（他の指は輕く振つて）直ぐに右側へ半圓を畫く樣にして下ろすと共に右足を左足へそろへて、」

すだ……

急に左足を一歩前へ踏み出し其膝を屈げて、兩手で恰も小球を保つ樣にしてそれを左の膝の上に置く樣に、目は左の趾を見て、

く……

體を右の後ろ斜に回はし、兩脚は眞直にして同時に右手を

—登—

左の膝から斜めに右の後上斜へと揚げて掌を其方へ向けて、

ほたるは……

右手を先づ胸の前へ平らに（掌を上向にして）來たしながら體を前向に復して、右の肘を十分後へ引く樣にして、

いな……

（イ）で兩掌を前の下方で向き合せ、同時に左の踵を右踵の側へ打ち付け、直ぐに、

（ロ）で兩手を（掌を下向に開いて）兩側へ肩と平らに伸ばし、同時に左足を後ろへ上げて體を少しく前へ傾けて、

ふね……

徐かに體を眞直にして、兩手を兩側へ下ろして、

の……

左手を（掌を開いて右向にして）前から眞直に頭の上へ伸ばし、漸く體を後ろへ屈げて、顔を上げて左手を見て、

のぼれば……

徐かに左手を頭の上から眞直に前へ下ろして、同時に體を眞直にして、直ぐに

くだる……

徐かに左足を一歩前へ踏み出し、體を右足で支へて、兩手を拳として恰も棹を持つ樣な心持で、左手は下に右手は上に胸を中心として斜線にして、左下斜を見て、

かゞりなり……

跪いて左手の四指（拇指を除いて）を左膝の上へ置き（掌を膝に向けて）終りに右上を見て、

けり……

徐かに起つて右足を一歩前へ出し、兩手を體の前下部で拇指と拇指とを組む樣にして、徐かに左の上斜を見て。

先づ大體は右のやうにするのですが、細かい處は迚も記し兼ねますので、演ずる方々が十分工夫をされたら以上の表情が出來ることゝ存じます。



調和へのあこがれ

磯貝ふさ子

何の豫告もなく突然じいつと自分を見つめる。邪魔になるものはすつかり剝ぎ取つて、無遠慮に見つめる。例によつて手のつけられないやうな騒ぎが不整頓な私の心に始まつて居る。見つめる心はモーセの樣な律法的な心だが、見つめられる心は無智なイスラエルの民衆に似て限りない雜多な慾望の滿足にあこがれて居る。私の心に住むそのモーセは民衆から超越して平然と構へて居る放任主義者で昔のモーセと異つて、自分自身で民衆の中に進んで行かうとしないのである。しかし民衆の一擧一動を監視し、民衆を光のある方へ導かうとする意志を持つて居る點は同じである。

私の心の中にうごめいて居る無智な民衆は口々に叫ぶ。

「私は渇いて居る、水がほしい」

「にがい理窟には飽き飽きした。蜜がほしい」

「それは贅澤ぞ。私はパンがほしい。飢えて居るんだもの」

「私は暗いのがいやだ。光がほしい」

或者は高く、或者は低く、叫んではたがひにもがき合つて居る。此處にも其處にも底力のある聲が反撥し合つて氣味わるい程だ。

「智慧がほしい」「生意氣な奴だ」

「力がほしい」「思ひ上つた奴だ」

「私は淋しい」「弱虫め」

叫び聲はだんだん高くなる、うごめきは暴動に變つてしまつた。その狂亂！　まるで赤熱の坩堝に入れられたやうだ。或る欲望は無暗に荒れ狂つて居る。或欲望は誇大妄想狂にかゝつて居る。或る欲望は他の欲望を征服しやうと、智慧の限りを盡して熱狂して居る。或る欲望は愚かなことをぼんやりと夢みて、騒ぎに氣がつかないらしい。

「狂はして置け。疲れるまで狂はして置け。どんなに狂はうとも、私がついて居る間は破裂はしないから」

狂亂を見つめて居る心はさう言つたまゝ群集の熱狂を放任して置かうとする。何と言ふ自信ありげな言葉だらう。何といふ冷靜な態度だらう。群集の一人はたまりかねて手硬く抗議を申し込んだ。

「民衆の狂亂を放任して置いてどうしやうといふのだ。早く民衆の誰かに味方してこの騒ぎを鎭めたらどうだ。お前は人間たちの社會で、ブルジョアとプロレタリアが睨め合つたり、なぐり合つたり、だまし合たりして、現在の事物の秩序――政治、法律、財政、產業、道德、宗教、國と國との對立、其他さまざまの制度――がもはや從來の方針では、これ以上進む事が不可能になつて、一つの新らしい出發點を見付けなければならないと、人間たちが命を賭して騒ぐ樣な場合に、これ等の人間たちのすることを狂氣だと一笑に附して、知らん顏をして居る人間を理想にして居るのか、あの老教法師ガマリエルの

様に。

今我れ汝等に語らん。此人々を許してこれに係る勿れ。もしその謀る所、行ふ所人より出でば必ず亡ぶべし。もし神より出でば汝等を亡ぼすこと能はず恐らくは汝等神に逆ふ者ならん。

などゝ言つて、最後に勝つたものに味方をしやうと待つて居るのか。それは卑怯ぢやないか。

すると放任主義者なる見つめる心は、群集に向つて静かに話し出した。

「誤解しては困る。私が今お前たちの狂亂の中に飛び込んで一緒に騒ぎ出したら、――もつと分り易く言へば、つまり私が或る一つの欲望に加勢して、その欲望とばかり共同したら、どんな結果になると思ふ？　一つの欲望ばかりが異常に興奮して、他の欲望は盲目的にそれに追從し、結局全體が畸形兒のやうな無意味な肉塊として、空間をふさいで居るだけのことになる。私がかうして手も出さずにぢいつと見つめて居ることは、いかにも冷淡のやうに見えるが、ほんとうは全體のために忠實なんだ。これまでに私はお前たちの中へ飛び出して行つて、何度失敗し、後悔したか分りはしない。でも後悔したのは幸福だつた。もうあんな落ち付きのないことはしないつもりだ。私が今お前たちの狂亂を、いかにも冷淡らしくじつと眺めて居ることの有難さは、お前たちにもこの頃だんだん分りかけて來たのぢやないか。

私とお前たちとで出來て居るこの一人の女はお前たち欲望を一束にしたものでもなく、又慾望のモザイクでもない。だから時には惡魔の様にお前たちが荒れ狂つても、その狂亂の底には常に一つの道がある、又一つの意味がひそんで居る、只それがはつきりと現れて居ないで、騒ぎのためにかくされて居る。私が冷靜にお前たちの騒ぐのを見つめて居るのは、その狂亂の底にある道を、はつきり見つけたいからだ。そこから新しい理想が生れやうとして居る。渦卷いて居るお前たちは、混沌の深い淵の底から、何者かゞだんだん上に向つて現れやうとして居る。最も激しい、最も奇妙な動搖の中から、最も生き生きした意味が生れて來るだらう。

私はそれを待つて居るのだ。私は強制もしない、干渉もしない。落ちついて静かに見守つて居る。しかしあくまで嚴正な批評を加へる。そこに、人間たちのむづかしい言葉で言へば、個人の人格の統一が出來上る。」

「それと同じ調子で人間たちの社會の統一も出來さうぢやないか」と誰かゞ言葉をはさんだ。群集はもうずつと静かになつた。

見つめる心は又話し出した。

「さうだ。全然出來ないことはないが、今のところ人間たちの社會では、全部的の統一といふやうなことは、たゞ空想して見るだけで具體化するのは不可能なことゝされて居る。しかし調和した統一ある社會といふものを人間たちが望んで居るのは事實らしい。理窟つぽい人間たちは、「社會の全部的統一は單に心理的に成立するより外はなく、價値的に成長するものではない」などゝ言つて居る。人の心が成立すれば、人間の内的生活が有機的に統一されるのに反して、人間の社會はまだどこか機械的に統一されて居る。どこかに強制的な所がある。人間たちの社會はまだ赤ん坊なのかも知れない。人間たちの間のモザイク的な結合がとれて、機械主義的な色

彩が消滅すれば、人間たちの社會はもつと理想的に進歩するだらう。そして各自の忠實の努力に依つてさうならうといふ傾向は見えて居る。たゞ統一の根本が何であるかが殘された大問題である。」

心の中に起つて居た手のつけられない樣な騷ぎはだん〳〵に鎭まつて來た。光つた道が見えて來る。その道を進みさへすればいゝのだ。すべての欲望はその道へ向つて秩序正しく歩いて行く。安全な有機體である一個の人間としての自分を神秘なものとして感謝したくなる。さうするといつもきまつた樣に、心の中に深い谷の樣な空間が出來て、其處は一面に香り高い霧の中には美しい花が咲く。群盲の如く醜い形でうごめいて居た欲望は、もう美しい花と咲き匂ふて居るのだつた。ひもじがつて居た心は綠の葉となつた。戀人を思つて淋しがつて居た心は、明るい空色の花と咲いた。暗いのをなげいて居た心は燃える燈を思はせる黄色い花と咲いた。赤い花も、紫の花も……。香り高い霧の中にすべては美しくほゝえむ。見つめる心と見つめられる心とを包んで、滿足の心はひた〳〵と波打つて居る。

見つめる心はあらゆる欲望に向つて、思ふまゝの命令を下すことが出來る。

おゝ貴い調和よ！　自由な奉仕よ！

暴風雨の後の青空と輝く太陽を見るやうだ。熱いキスと抱擁を受けながら、ふと見上げた大空を輕々と飛ぶ白い雲の自由さにあこがれるやうな極めて心よい矛盾さへもなくなつてしまつた。

束縛は自由におきかへられ、不平は滿足に置きかへられた。すべてが調和だ。

時々落ちついてぢつと心をみつめることが、その調和への道を敎へてくれた。

「人が生れて死ぬ」

「花が咲き　鳥が歌ふ」

「白い紙は太陽の光でまつしろに見える。まつくらな夜には何色だかわからない。どんなものでもまつくらな夜には何色だかわからない。」

「十から十をひけばゼロだ」

…………

何といふ恐ろしい事實だらう、そして何といふ崇高な事實だらう。

「じつと心をみつめろ」

私にかつてさう敎へてくれたのはそれらの事實だつた。

そして私は自分の心を無遠慮に見つめることを始め、心の中の調和にあこがれ、調和への道を見つけ出した。

もつと若かつた日には、燃ゆる心やたぎつ涙が、ともすれば見つめる心の足もとをゆるがして、狂亂の中にひきずり込んでしまつたことが度々ある。貴い命の幾日かを、矛盾や不安の中に落ちつきなく過してしまつたことがある。苦しい試練だつた。

けれども私はもう成長した。見つめる心はしつかりした足場をもつて居る。長い靜思の後には必ず光る道を見出さずにはおかない。

その道をたどれば調和に到達する。

成長した人間たちは大抵この調和を感じ

て居るだらうと思ふ。

けれども人間たちの社會はどうしてまだぎごちないものなのだらう。どうしてモザイク的の集合なのだらう。いつまでもかうなのだらうか。

過去の人間の歴史にはさまざまな色彩があつた。雜多な主義が唱へられ、多様な運動が起つた。綜合すれば灰色になりさうだ。とても汚れのない白にはなるまい。しかしたつた一すぢ金色に光つて居る糸が、その灰色になりかけた遠い過去から現在まで續いて居る。その糸の價が貴いから金色といつたのではなく、色彩が鮮明で、その上絶ち難いからだ。一度も切れたことはあるまい。そして少しも變色しないやうだ。その糸には階級爭鬪といふいやな名がついて居る。そのために何時の社會も不安になやみ、不平に滿ち、爭亂に滿ちて居た。一時は表面的の平衡を得ても、その金の糸が切斷されない間は、爭亂の再發は限りなく繰り返される。いつまでもつぎはぎだらけのぎごちない社會の姿を見なければならない。

しかしこの金の糸を切斷して社會をもつと調和あるものにするには、どうしても其處に犠牲を拂はれなければならないのだらうか。理想的な有機體である人間が幾人も生命を棄てなければならないのだらうか。何事にも犠牲を必要とするのが神の掟なのであらう。あまり物惜しみをするのはよさう。社會のために犠牲にする生命ならば、それは決して棄てるのではなくて獻ずるのだ。獻ずるならば最も價値あるものとして――。

人間の顔としてはあまりに情ない表情をして、金もうけ、投機、征服、壓制などについて心にもない會話をしなければならない恰度ガタ馬車のやうな今の社會を。

やがては調和の讃美をもつてみたす時が來るだらう。

必要な犠牲は要求され、そして提供されるだらう。

青葉の蔭

純情の青年詩人佐藤春夫氏の新著「侘し過ぎる」がいよいよ出版されました。我が文壇の一大權威であることは、今更申すまでもありません。それから、新進にして既に大家を凌ぐの面影があると云はれる、犬養健氏の「一つの時代」それから、現代女流作家の金星、藤村千代氏の「脂粉の顔」これらは孰れも夏期の讀物として、青葉の蔭に、或は夕風の濱の砂の上に、繙いて沁々時を過すに相應しい書物として文藝愛好家諸姉にお勸めします。



千切れ雲（入選）

安田良子

靜かな夜の大空で
マラソンはじめた千切れ雲
それ飛べ、それ飛べ
それ走れ
オット危ない、慌て雲
お月様にぶつかつた。

佳作三篇

釣鐘草

井元ふさ子

見えぬ小人が
鐘を撞く
釣鐘草の鐘を撞く
夕べが來たと
撞くけれど
さても不思議な
魔法鐘
いくら撞いても鳴りもせで
揺れるばかりの魔法鐘

かよひ

不二子

魚やに米やに青物や
酒やのかよひは一等した
柱にブラリさがつてる。
カタコト、カタコト御用聞
とびあがつてもとれはせぬ
酒やのこぞうさん待つといで
物指持つて來て取つてやろ

僕の靴

尾関伊都

僕の靴が並んでる
小さい二ツの皮の靴
お口をあいて待つてます
僕のお出掛け待つてます
僕が學校に行く時も
お庭でジヨ　と遊ぶ時も
キユツキユツ小唄を唄ひます
可愛い小唄を唄ひます。

讀者欄

心に浮ぶまゝ

芝口いち子

世にも美しく華かな女優のナナを打擲する者が、いつも彼女の家から近所の人々の耳に響いてくるのであつたが、ナナはどんなに打たれても、叩かれても彼の俳優（名を忘れた）とだけは別れることが出來なかつた。そして彼女の魅惑と嬌媚に惱殺されて死物狂ひになつてゐる巴里の男の群がどうなつてしまおうがナナにはそんなことはどうでもよかつた。彼女の妖麗な肉體が天然痘のために腐りきるまでも親切な優しい戀心を失はずに、ナナを看てゐたミュッファ伯爵をさへも、どうしても愛する氣にはなれなかつたのに、苛酷な殘忍なかの俳優とだけは叩かれても、ぶたれても、どういふ犧牲をはらはされてもナナはつきまとはずにはをられなかつた。愛は不思議な調和の働きでありどんなに醜いものをも恐ろしく美化してみせる力を奇蹟のやうに成しとげるものだ。

ナナにとつては殘酷で無法で全くとりどころの少い彼俳優ほど世にも得がたいものはなかつたのである。

□

心がやりきれなくなつた時、私が思ひ浮べる一枚の好きな情景がある。

海には急に暴風雨がきた。大空には俄に黒雲がガタ〳〵とあばれだして、嵐と雨とが恰も一艘の船をめがける樣に一時に襲ひかゝつてくる。どこから飛んできたのか、白い鴎が一羽二羽、氣狂ひのやうに檣の先にとまるといきなり悶苦しい悲鳴をあげる。稲光が船底を貫ぬく樣に落ちかゝつてくる。救ひを叫ぶ男や女や子供の叫喚は嵐と雨とを破つて此世の悲愴を盡す。船は次第に傾いてゆく……。

その時今まで檣によぢ上らうとしてゐた一人の男が、突然傍の葡萄酒に手をかけて一滴々々唇に落してゆく。男はその時はもう死を超越してゐるのだ。彼の唇にも彼の瞳にも既に神の影が宿つてゐるのだ……。死を見つめながら死を超越して、葡萄酒を味ふ瞬間の解脱の氣持が、私達の生活のよい藥になる。

□

「私は善も惡も知らない。……理性なんぞ私の法則にはならない。――正義とは何のことだ？―――私はお前に生命をやつた。私はそれを又お前から取つて他の者にやる。人間にでも蟲にでも……何だつてかまやしない。だからお前もそれまでは自分の仕事によく氣をつけて私の邪魔などしなさるな。」

人間と自然との關係に對するこの思ひきつた手ひどいツルゲネーフの見方に、私は時々烈しい誘惑を感ずる。がそのあとから眞空妙有を説いた佛陀の教理にも否み難い肯定を感ずる。そのあとにはまた「一切を知らずして一切を否定することが出來ない。一切を知らずして一切を肯定することが出來ない。」と云ふ聲がひよつこり頭を擡げてくる。そのうち私はまたこんなことを呟いてゐる。―――双六の賽の

やうに振り方によつてどうにでもなるやうな理窟にこだはつてゐる人よりは、直感の出來る、瞑想の出來る人の方がどんなになつかしいか知れない――。誤魔化されてはいけない。たゞ自分のものをしつかり探ねあててみたいものだ。

□

女と女の交際は一口で云つて餘計なお饒舌りの交換である場合が多い。在來の女同志の交際は餘りに貧弱すぎた。それは一人々々の女性が貧弱すぎるといふことを意味してゐることに他ならないが、私は女性の成長を知識とか才能とかいふ方面に要求するよりも先に、女性の性格の上に要求したいと思ふ。妻とか母とか娘かといふ名で一つの家に隠れてゐる間は、その性格の淺さや小さゝは目立たぬのであるが、社會的に所謂有名になつた日本の代表的な女性のことを考へる時、私は女の持つ心の世界の不自由さといふものをつく〴〵思はずにはをられぬ。餘りに小さな自己に拘泥しすぎるやうだ。自己を愛しようとして却つて自己を卑しくしてゐる。暫くエレンケイの膝下に遊び、ペエトオフエンの藝術に息づき、求める者の前にはいつまでも現はれてくる新の、ドストイエフスキーの靈と手を取りながら、高いところから静かに自分自身を客觀視して、冷かに自己を嘲笑するに堪へる位の眞實は、有名であればある程必要であらうと思ふ。

□

「これほど喜劇的人物としての素質を完全に備えた作品は嘗て世界のどこにもない」と言つて、激賞されたほどの戯曲を、火中に投げいれずにはをられなかつたクライストの藝術的良心を日本の誰が持合せてゐるであらうか。

眞夜中頃突然、彼の部屋からは歔欷の聲が洩れてきた。驚いて忍び足に近づいて見ると、彼はたゞ一人机に向つて靑ざめながら涙を流してゐるのであつた。

「おいクライストさん、どうしました」肩先を不意にゆすられた彼ははつとして現實の我に返つて不審さうに自分の傍に突立つてゐる男を見上げた。

「どうしたんです。泣いたりなんかして。」

「なに、僕が泣いてゐたんですか？實は書きさしの戯曲のことを夢中になつて考へてゐたんです……」

此時まで彼が藝術家であることを誰一人知らなかつたといふ「ギスカルトの死」の作家のやうな人間が日本のどこかに隠れてゐるやうな氣もする。

讀者諸姉に

この讀者欄を有益に利用しませう。諸姉の感想、批評、隨筆、日記など種類を選びませんから、少くともあなた方の内的生活に觸れたものであつたら、何でも自由に御投稿なすつて下さい。

(イ)　讀者欄と朱書して下さい。
(ロ)　住所氏名を名記して下さい。
(ハ)　すぐれたものには薄謝を呈します。

婦人生理

性別の決定（下）

永井潛

性別の決定に關しては、種々なる假說があるが、要するに最後の解決は遺傳にあることは、已に述べた所である。

兩性の別が、遺傳物質によつて決定せらるゝものとして考察する場合、兩性の生產數が相等しいと云ふことは、最も大切なる意味を有するものであらねばならぬ。蓋しメンデル法則から明示さるゝ如く、斯る場合には、何れか一方は等胚であり、他方は異胚である。等胚とは、或る遺傳性質に關して父方からと、母方からと、同樣の遺傳物質を受けて居る場合を云ふのであり、之に反して、異胚とは、相違せる遺傳物質を受けて居る場合を云ふのである。例へば今Fを以て女性たらしむべき遺傳物質とし、Mを以て男性たらしむべき遺傳物質とすると、女性の場合には、Fを有せる卵に、Fを有せる精子が入りて受胎する時、即ちFFなる等胚であり、之に反して、男性の場合には、Fを有せる卵と、Mを有せる精子とが受胎して、MFなる異胚であると假定する。さうすると、女性の生殖細胞たる卵は、FFであるから、夫れが受胎の準備として遺傳物質を半減する場合、（所謂減數分割）卵は何れもFなる遺傳因子を有せる一通ものとなるが、精子が減數分割を行ふ場合には、Fを有するものと、Mを有せるものとの二通が同數の割合で出來る筈である。そこでFを有せる精子が、Fを有せる卵と合體する機會と、Mを有せる精子がFを有せる卵と受胎する機會とは、大數の法則から考へると、均等であるから、同數のFF即ち女性と、FM即ち男性とが出來ることになるのである。

若し斯る假定が正しいものとしたならば、卵と精子とに於て、遺傳物質を荷へる細胞の核の中にある核絲なるものに、何等か相違を見るべき筈である。然る所近時に至つて、果して此の豫想を實現することが出來た。元來核絲なるものは、動物の種類によりて一定數を示すものであるが、夫の數が同種類の動物でも、性の異なるにつれて違ひがあることが近時に至つて分つて來た。例へば人間では、キニワーター氏が白人に就て調べた所では、卵の核絲の數は四十八本であるが、

精子のは夫れよりも一本少なくて四十七本である。更に又進みて各核絲の狀態を研究して見ると、夫々固有の性狀を具へ特殊の遺傳物質群を荷つて居るもので、隨つて遺傳學上獨特の機能を爲すものであることが明かになつて來た。然り而して此の核絲は、受胎に際して、其の一半は父方より、他の一半は母方より與へらるゝものであることは言を待たないのであるが、其の父方から來たものと、母方から來たものとは、各々對をなすものである。そこで、前例、人間の卵の如く、核絲の數が48で偶數である場合には相匹敵せる二つ宛のものがあつて、二十四の對をなすものであるが、之に反して人間の精子の如く、核絲の數が47で、奇數である場合には、23の對をなすものと、外に一個丈けで對をなさぬものとがあることになる。精子に於ける此の對をなさぬ染色體を、X染色體若くは性別を決定する上に大切なる意味を有て居る所から、性染色體と唱へるのである。つまり卵に於ては23對の普通染色體の外に、尚ほ一對即ち二個のX染色體があるのであるが、精子に於ては、23對の普通染色體と、唯一個のX染色體があるのである。即ちX染色體が二本あれば女性となり、一本しかない時には男性となるのである。

そこで上述の如く受胎の準備として生殖細胞が減數分割によつて核絲を半減する場合には、卵に在ては核絲の關係に於て23＋Xと云ふ一通りのものしか出來ないが、精子にありては23＋Xと、23と云ふ二樣の核絲の配列を有するものが同數出來る譯である。今若し23＋Xの染色體を有する卵と、23＋Xの染色體を有する精子とが合一すると、48（其の中にX染色體が二個ある）の核絲を有する女性が出來る。之に反して、23＋Xの卵と23の精子と受胎すると、47（其の中にはX染色體が唯一つある）の核絲を有する男性が出來て、而かも男女兩性の數は同じにならねばならぬ。動物の種類によりてはこの關係が反對で卵に二通が出來精子は一通のものもある。即ち先に述べた遺傳學上の立論は染色體の研究に關する斯の細胞學上の研究成績から立派な裏書を與へられたのである。

尚ほ又、性別の決定が、特殊の遺傳物質によつて出來るものであり、而して其の遺傳物質は、各種の形質を決定すべき一般遺傳物質と等しく、メンデル法則に從つて離合集散するものであることは、性に限局せる遺傳の研究からも確實に立證せられて居る。性に限局せる遺傳とは、男性たるか女性たるかに從つて、或る形質の遺傳關係が趣を異にする場合を云ふのである。其の最もよく知られたる例は色盲の遺傳である。

普通の眼は、光波の波長の異なるにつれて、之を各種の色として感ずる能力を有つて居るのであるが、色盲の人には、この能力が缺けて居る。就中最も屢々見らるゝ色盲は、赤と緑とが共に色のない感じ卽ち灰色に見えて、隨つて此の兩者を識別することの出來ないもの、卽ち所謂赤緑色盲なるものである。而かも注目に價することは、夫れが專ら男子に見られて、約三%に上るに反して、女子には其の數男子の十分の一にも及ばざる程の極めて少數なることである。なぜ女子には色盲が少ないのであるか。その謎は色盲の遺傳に關する研究によつて始めて奇麗に解くことが出來た。色盲は確かに遺傳性のものであるが、而かも其の遺傳する有様を統計的に調査して見ると、極めて奇妙に感ぜられる事實がある。例へば、(一)色盲の男子と、色盲の家系に屬せざる隨つて色盲の遺傳質を有たない女子と結婚したとすると、其の間に生れた子供は男女共に健眼であつて色盲にはならない。

(二)色盲の父と健眼の家系に屬せる母との間に生れたる色盲でない男子が、色盲の家系に屬せざる女子と結婚すると、其の子供は男女共に悉く健眼である。而して此の健眼なる子女が、健康なる家系の子女と結婚すると、其子孫は又全く健眼である。是に由つて之を觀れば、色盲の父と健眼なる家系の母との間に生れたる男子の子孫は、其の人が色盲の家系に屬せる人を配偶者とせざる以上、幾代か代を重ねても、色盲者を出す憂はない。卽ち父の色盲は其の男系には遺傳しない。

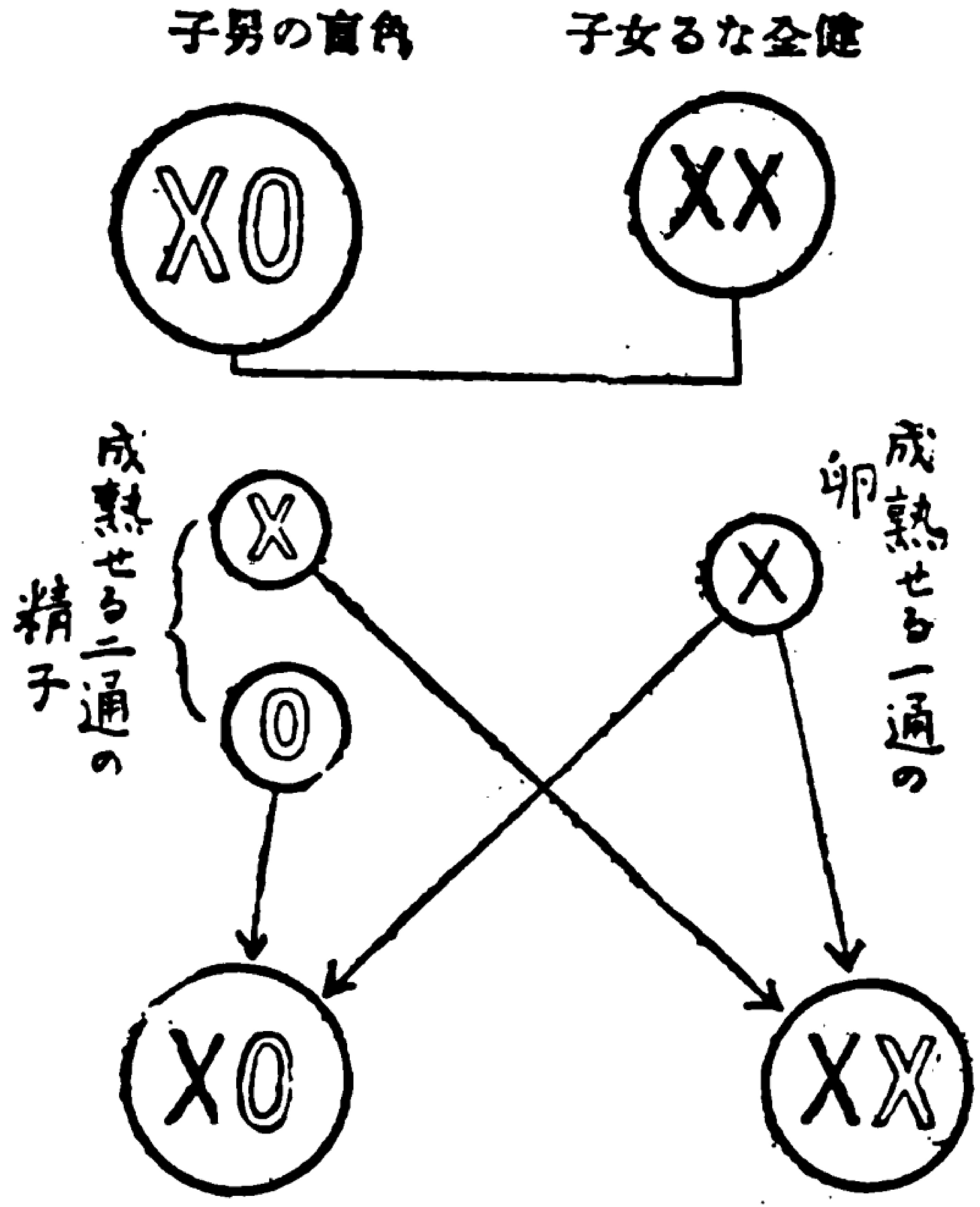
(三)色盲の父と健眼の家系に屬せる母との間に生れたる女子は、上述の如く、自分自身は色盲でない。而して此の健眼なる女子が、健眼の家系の男子と結婚すると、假令配偶者自身は共に健眼であつても、其の間に生れた男子のは、半數は色盲になる。之に反して其の女子では、何れも皆健眼である是れに由つて之を觀れば、色盲の家系に屬する女子は、たとひ自身は色盲でなくとも、色盲たるべき遺傳因子を保有し、隨つて父の色盲は、其の娘(夫人自身は色盲でなき)を通じて男性の孫(其の半數)に遺傳するのである。斯樣な關係があるから、色盲は男子には多くして女子には比較的少ないことがよく分かる。

(四)女子と雖も、全然色盲を起さないものではない。若し色盲の家系に屬せる男女が結婚すると、色盲が女子にも現はれて來る。卽ち色盲の家系に屬せる女子で、自分は色盲ではないが、併し色盲の遺傳因子を保有せる人が、色盲の男子と結婚すると、色盲の遺傳因子が相重なつて濃厚となる結果と

して、其の間に出來た子供は、男女共に半數は色盲になる。而かも斯く色盲者間の結婚の行はれる機會は極めて稀であるから、從つて女子には色盲を見ることが少ないのである。

(五)色盲の女子が、色盲なき男子と結婚すると、其の間に出來た子供の中、男子は皆色盲になるが、女兒は皆色盲には

第一圖



健眼の女兒
色盲の因子を保有し子孫に之を遺傳する惧あり

健眼の男兒
色盲の因子を保有せず隨つて子孫に色盲を遺傳せず

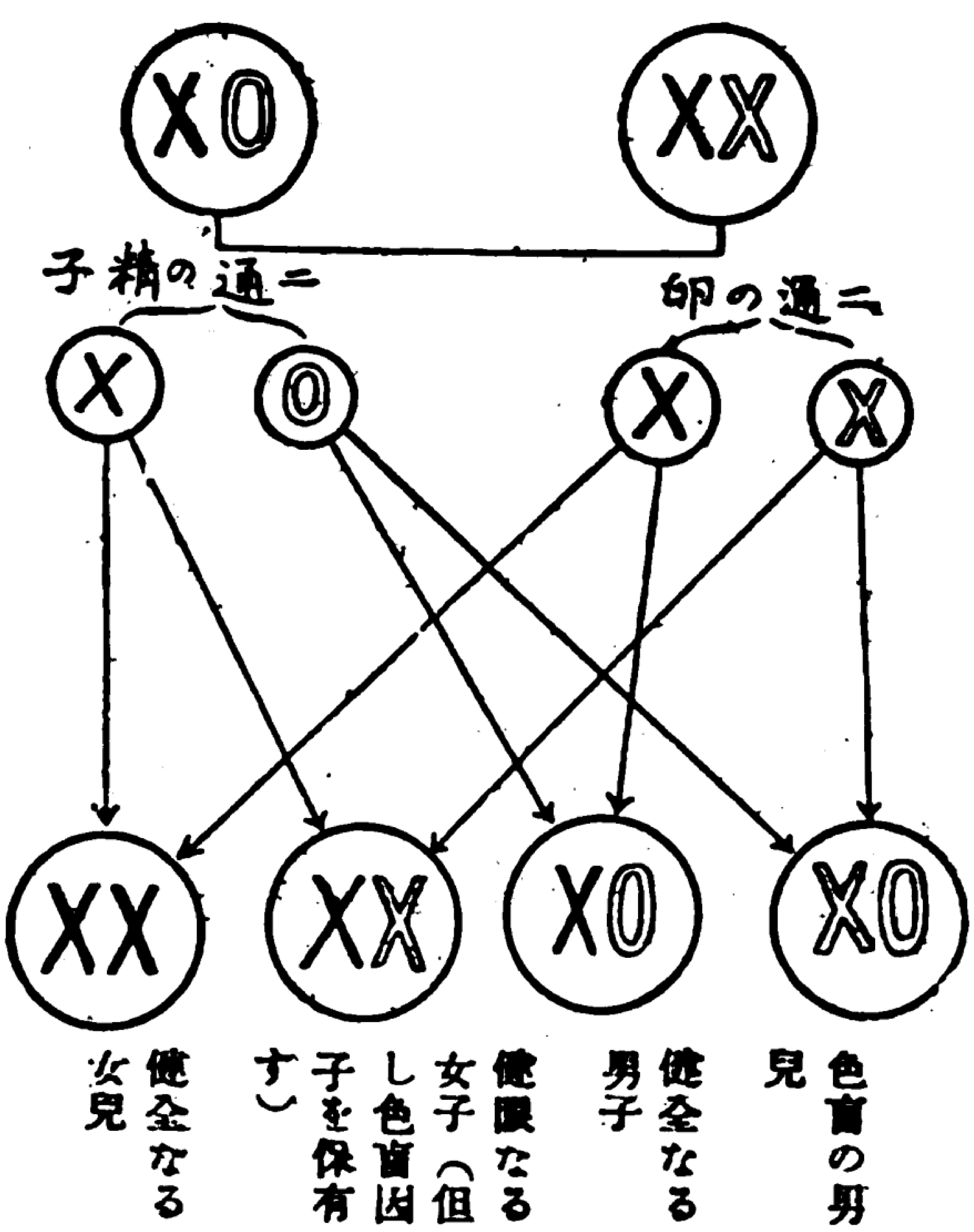
ならない。即ち母の色盲は男兒に傳はり、父の健眼は女兒に遺傳する。即ち所謂交叉遺傳なるものが起る。

色盲の遺傳に就きての以上のべた事實から見ると、色盲が遺傳によつて現はれるのは、男子に多くして女子には少なく而かも其の色盲の遺傳因子を後代に遺傳する媒をなす者は、男子でなくして、女子であることが分かる。

扨て前述の事實を、遺傳の學説上如何に説明すべきかと云ふに、已述の如く性別を決定する爲の遺傳因子があり、それが他の一般の遺傳因子と等しく、メンデル則に從つて離合集散すと考ふることによつて、滿足なる解決を與へることが出來るのである。例へば(一)(二)(三)の項に擧げたる事實の説明を與へんに、上述の細胞學上の研究によつて知られたる如く、Xが二個ある時女性を、Xが一個ある時男性となることを前提とし、又色覺を起すに必要なる發育を眼の網膜に喚び起すべき遺傳因子を、黑色にて示し、該因子が缺如して色盲となるものを、白色にて示すと、××は健全なる家系に屬せる女性。XXは色盲の女性。XXは健眼なるも併し色盲因子を保有せる女性に相當することになる。又XOは健全なる男性。又たXOは色盲の男性に於ける遺傳因子の配列を示すことになる、そこで、今、色盲の男子と健全な女子との間に結婚が行はれたとすると、其の生殖細胞が、受胎に先だつ準備として、減數分割を行ひ、遺傳因子(核絲)を半減すると第一圖に示す如く、卵には一通しか出來ないが、精子には二通が因數の割合で出來て、此の成熟せる精子と、卵とか合一する機會は、均等であらねばならぬから、大數の計統を取つて

見ると、略相等しい數の男女が生れ、而して兩性共に健眼であることがよく分かる。而して斯くして出來た男兒の遺傳因子には、Xのみあつて、X卽ち色盲たるべき因子がないのであるから、此の男子が健全なる家系の人を配偶者とすれば、其の子孫には色盲者の出る憂はないのである。

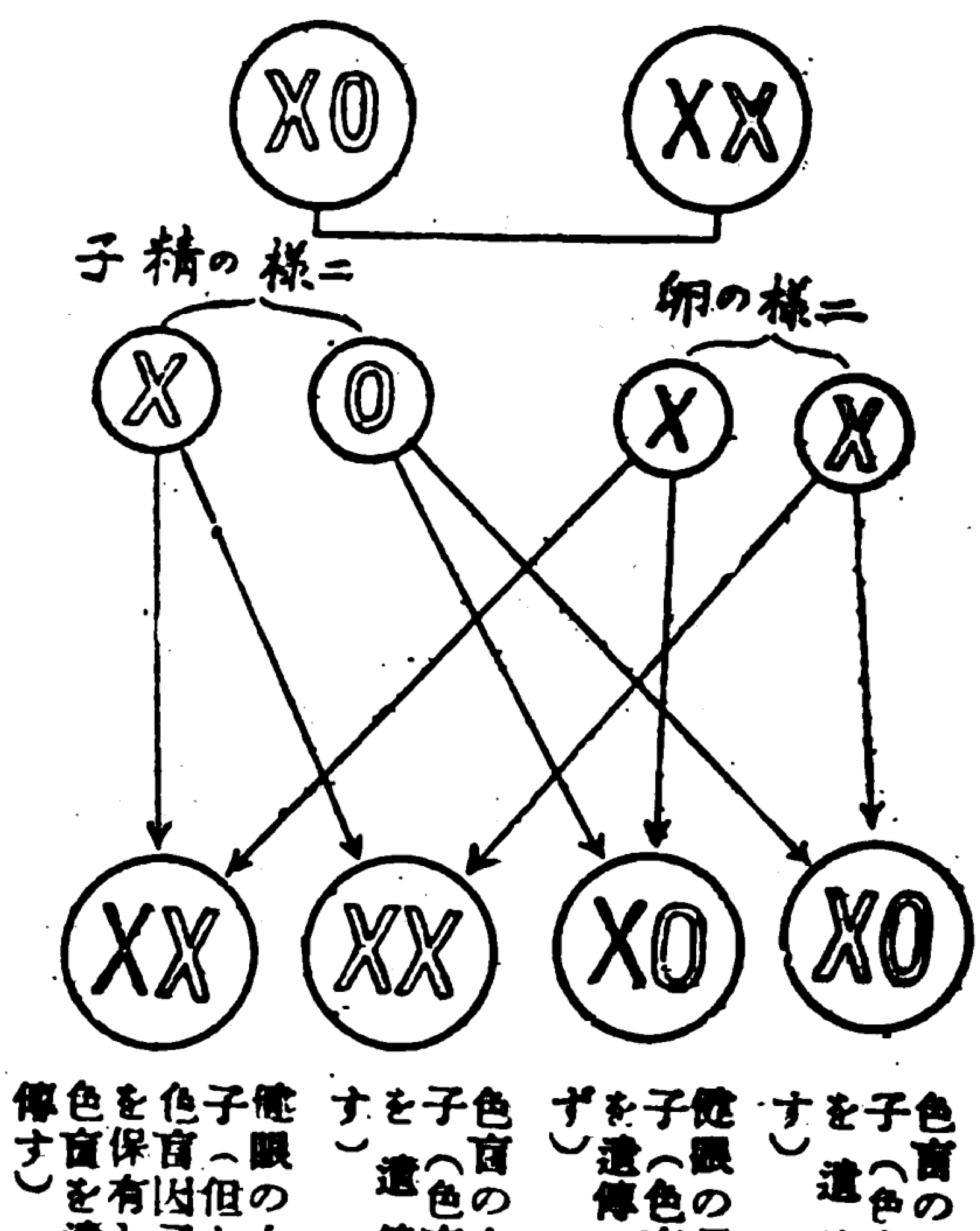
第二圖



之に反して女兒では、二個のX中一個はXであつて、隨つて色盲にはならないが、而かも他の一個はXであつて、色盲たるべき遺傳因子を保有して居る。そこで今、この健眼ではあるが、而も色盲の因子を保有せる女子が、健全なる家系の男子と結婚すると、第二圖に示す樣に、其の女兒は皆健眼であるが、男兒の半數は色盲となるのである。

次に色盲遺傳因子を有せる男女間に結婚が行はれると、第三圖に示す如き方式によりて、其の間に出來た子供は、男女共に半數は色盲となることを豫想しなければならぬ。卽ち、

第三圖

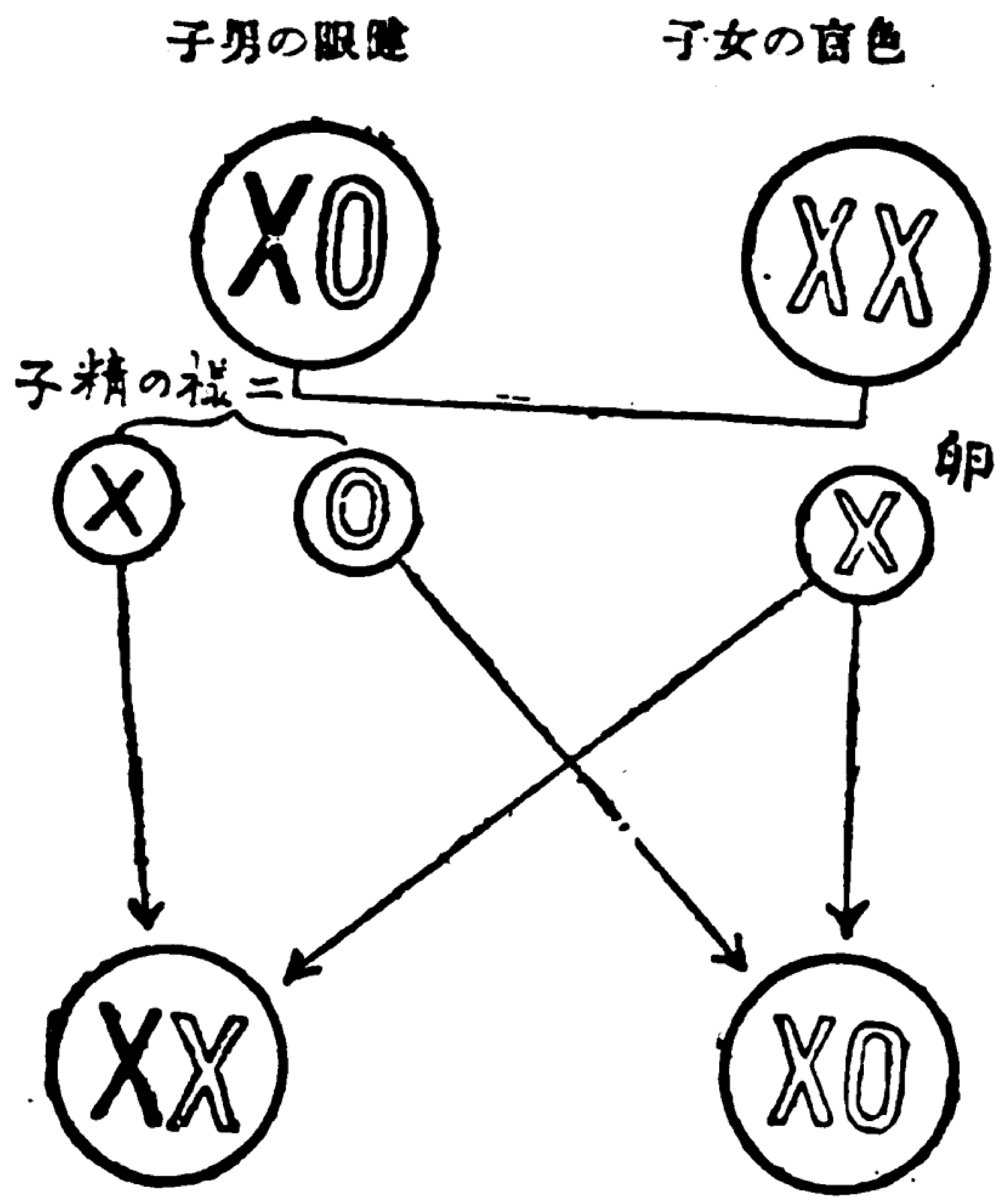


盲の血が濃厚になる場合、女子にも亦色盲を起すものである。

同樣に又第四圖に示す所によつて、色盲に於ける交叉遺傳の關係を容易く理解することが出來る。

斯く、色盲其の他一般に性に限局せる遺傳の現象が、性別決定に關して特殊の遺傳物質があり、而して該遺傳物質は一般の遺傳物質と等しくメンデル法則に從つて離合集散するものであるとして、奇麗に説明せらるゝものとしたならば、性別の決定は、人間の如きものに於ては、早く已に受胎の瞬間

第四圖



色盲の男子

健眼の女子 但し（色盲を遺傳す）

に於て起るものと見ることが妥當であらねばならぬ。隨つて榮養とか温度とか云ふ樣な環境の爲に、後天的に影響せらるべき筈のものでない。今より去る約二十年程前に、當時澳國ヴイン大學の生物學教授であつたセンク氏は、已述の如く、母體の榮養の如何によつて、胎兒の性が男ともなれば女ともなるものであると信じ、隨つて母體に獨特の榮養法を施すことによつて、冀望する所の性を有する子を生むことが出來ると唱導したが、夫れが端なくも學界に於て大なる批難の標的となつて、終に名譽ある教職を拋たねばならなくなつたのは、實に氣の毒なことであつたが、又止むなき次第であつた。

蓋し若し性別決定に關するセンクユング、キユネー諸氏によつて唱導せらるゝ榮養説が正しいものであるとしたならば、已述の如く、双生兒は毎も同樣な性を示すべきであるが、併し事實は左樣でない。双生兒が必ず同一の性を示すのは、一卵性双生兒の場合に限られる。一卵性双生兒とは何を意味するものかと云ふに、元來一個の卵細胞に、一個の精子が入り込んで、受胎を遂げた卵細胞は、間もなく分割して二個となるものであるが、此の際其の二個が相寄つて居ると、夫々身體の右半と左半とを造るべき運命を有つて居るのである。併し若し何等かの原因で、二個が相分離すると、各が一個の完全なる個體を造り、斯くて二個の胎兒が出來る。斯る場合を一卵性双生兒と云ふのである。之に反して、人間に於て、通常の如く一個の卵細胞が、二十八日毎に成熟し

て、夫れに一個の精子が受胎することの代りに、是れに二個の卵が同時に成熟して、各卵細胞が夫々一個の精子と合一することがあるが、さうすると、二卵性の双生兒が出來るのである。斯の二卵性の双生兒では蓋然律によりては(一)双方共男性の場合と、(二)甲が男で乙が女の場合と、(三)反對に甲が女で乙が男の場合と、(四)甲乙共に女の場合とが、均等なる機會を以て起り得るのであるから、つまり双方共男性の場合と、一人が男で他の一人が女の場合と、兩方共に女性の場合との數の比は、1:2:1の割合をなすべきである。實際羊の如き專ら二卵性の双生兒を生ずるものでは、斯の比率を取つて双生兒が生れるのである。隨つて人間でも、若し凡ての双生兒が二卵性のものであるとしたならば、双生兒の統計を取つて見る場合、上記の三つの場合の比率は、1:2:1となるべきである。然るに事實はさうでなくして、人間の双生兒では、双方共に同性のものゝ比率が比較的高い。ニコル氏の多數の双生兒に就きての統計調査の成績によると、次の如き數を示して居る。

双方共に男	一方が男他方が女	双方共に女
:31497	264093,	21 312.
1 ・	1 ：	1

即ち上記三の場合は、略同數であつて其の比率は1:2:1となる代りに1:1:1となつて居る。是れ畢竟、双生兒には、二卵性のものゝみでなく、一卵性（隨つて毎に性を同うす）のものが加はつて、双方共同性の者の數を增すからである。

一卵性の双生兒は、常に同性であるが、之に反して二卵性の双生兒では、双方共に同性の場合の双、一方と他方とが性を異にする場合が起ることの事實は、疑もなく、性別の決定が遺傳物質によつて惹起さるゝことを明瞭に裏書するものである。北米産のキウヨ（狁狳）と稱する動物の如きは、四匹の子を産むが、夫れは常に皆同性である。而して其の發生の狀を見ると、一卵性であつて、一個の受胎した卵が、二回分裂を重ねて四個となつたものが、相分離して、各一個の胎兒をなすのである。蓋し性別の決定が遺傳物質によるならば、一個の受胎せる卵が二分し若くは四分して生ぜる双生兒若くは四個の胎兒は、性別に關して同一の遺傳物質を有すべく、即ち悉く皆同性であらねばならぬが、二卵性のものに於ては、性に關する遺傳物質の結び附きは、或は双方共に男性か、若くは女性か、若くは一方が男性で一方が女性であり得べく、其の各場合の比率は、已述の如く蓋然律によつて決定せらるべきである。

性別の決定は、以上述べたる如く、明かに遺傳物質の如何によつて惹き起さるゝものであるが、而かも其の關係を詳細に考察すると、昆蟲類の如き下等動物では、獨り主要なる性徵、即ち生殖腺の差別のみならず、附帶的第二次的性徵も亦、專ら直接遺傳によつて決定せらるゝものである。隨つて生殖腺を去勢しても、乃至は生殖腺を移殖しても、もつて生れた第二次性徵は、殆んど其の爲に影響を蒙ることはないのであるが、高等動物になると、遺傳によつて決定せらるゝのは、主として第一次性徵であつて、而し斯くして出來た生殖腺から、內分泌作用によつて固有のホルモンを造り、此の働きによつて第二次性徵を喚び起すのである。隨つて生殖線の差別即ち第一次性徵以外の兩性の差別に關しては、高等動物の體は中性であつて、女性必しも女性でなく、男性必しも男性でなく、男ともなれば女ともなり得ることの出來る性狀を具へて居ると云ふことが出來る。而かも此の中性の性狀を何れの方向に振り向けるかは、主として生殖腺內分泌物の働きによるのである　斯る立場から考へると、男らしさに於ても女らしさに於ても、種々の程度が現はれ　男性にして而かも餘程女性に近づき、反對に女性にして而も男性に似よつたものが、動物並びに人間に於て出來るのも、敢て怪しむに足ない。



私の好きな夏の女の衣裳

荻原井泉水

一枚の浴衣

夏の女の衣裳は、衣裳としては云ふに足らない浴衣が好きだ。一枚の浴衣――襦袢もなく、羽織もなく、素肌の上にふはりと懸つてゐる浴衣こそ、其人の姿體をも、表情をも、窮屈でなく自由にいき〳〵と見せる。品質に於て餘り贅澤を競ふ餘地の少い所も面白い。金持の令夫人も長屋のおかみさんも、浴衣がけとしては大體に同じやうなものを着てゐる。浴衣は肉體の美しさを助けて見せるもので、他の金目のかゝつた衣裳のやうに、肉體の醜さを蔽ふものではない所が面白い。其と共に浴衣は、其趣味に於て存分に好尚を現はし得る所も面白い。粋な柄とか野暮な柄とかいふ事でなしに、其人

の姿にぴつたりとはまつた圖柄の浴衣は、其人の肉體を生かすばかりでなく其人の趣味をも生かして見せる。

浴衣の趣味は線の趣味だ、だから微塵に近い線はツキナミで、あらい曲線が自然だ。而して四肢の曲線に對して、それが自然と調和を作るやうなものならば猶いい。浴衣の趣味は又、黒と白との對照の趣味だ、だから、寫生的のものよりも、寧ろ全然圖案的でなければならぬ、又、月夜の物象、殊に月夜に見た植物の枝や葉といふ圖柄がとかく面白い。又、黒と白といふ感じの上からは、髪との調和も考へなければならぬ。つまり、浴衣の美は浮世繪版畫の美だとも云へる。浴衣其物には色彩はなくとも、春信や歌麿が適度に節約した色彩を用ひて、曲線の情調に暖い潤ひを與へた如く、帶や髪の物に淺い落付いた感じの色彩を加へて、肉體と着物とを籠めた全體の線のリズムを引きしめることも出來る。是には其を着る人自身に畫家のやうな敏感な好い趣味が必要である。

夏の衣裳に比べて、冬の物は多くの物を重ねて肉體を包みおほひ、又、衣裳其物にもぼつてりとした物質感があるので、兎角、人間が隱されて、衣裳だけが動いてゐるやうな氣がする。更に其衣裳が衣裳としての美的價値よりも、其の物質的價値（高價とか上等とかいふこと）に依つて評價されたり、其が其儘、着てゐる人をも評定する言葉になつたりする。是は日常普通の事で殊更らしくいふまでもないが、人間の爲めの衣裳でなく、衣裳の爲めの人間であるかの如くなるのは面白くない。かういふ點で、私は女の冬の其よりも、夏の衣裳の方が好きである。而して、夏物のうちでも、殊に衣裳らしくない浴衣が好きである。勿論、斯ういふのは女が一番美しく見えるのも、冬よりも夏であるといふ事實を裏書きとして――。

とは云へ、浴衣がけで正式に乘出すことは出來ないが、たとへ、きちんとした衣裳にしても、之を推した心持で、夏は殊更單純な感じの色と線とで、衣裳其物の物質感が薄く、肉體に少しの重みをも感じさせないやうな、自由な而して肉體の線とふくらみとを調和的に生かすものが好いと思ふ。

夢の女の夏衣

厨川蝶

湯上りの匂やかな素肌に、江戸趣味のすつきりした中形を着て、幅狭の博多を恰好よく膝間結びにした美しい人を見る事は夏の夕べの樂しみの一つです。然しそれも埃臭い七三のハイカラ髪とあつては打壞しでせう。私の好きなのは、洗髪の銀杏返しに、白のやつこ元結、簪は青色の滴るやうな翡翠の大粒のに、華奢な金足を打込んだと云つた「鏡花式」の裝ひなのです。ざぶ〳〵の鼠色の足袋に、レースの袖口と取合はされた日には、中形の生命である涼味はなくなります。

菊池寛氏の「眞珠夫人」と云つたやうな型の美人なら、黑曜石のやうな黑の絹レースを、イヴニング、ドレス仕立にして、黑の長い絹手袋、靴下も黑絹の透し入りのにして、黑繻子に青銀色の飾りを附けた夜會靴と云ふ、凡て黑ずくめの裝ひに、首飾りには美事な大粒のダイヤを唯一つ、白金の鎖で下げたのが、身動きする毎に、彗星のやうな光りを放つでせう。

此頃の蚊取線香の廣告のやうに、だらしなう寢そべつた人の大柄の浴衣着たのも、明石上布に紗の丸帶、絽縮緬の長繻袢、手にも、髪にも、帶上げにも、光るものを數多く附けた貴婦人の盛裝とやらも、見るからに暑苦しくて、いやです。やさしく、美しいひとには、あの「牡丹燈籠」の「お露」の衣裳をこそお勸めしませう。然し幽靈になつてもらつては困ります。町家の女房なら「夏祭浪華かゞみ」の「お梶」のやうな衣裳もいゝと思ひます。

オリムピックにも出やうと云ふ、女學生方なら、純白の洋裝に、白パナマの帽子、そして帶も帽子の飾りも、黑リボンにした爽やかな裝ひこそ好ましいと思ひます。

斯樣色々と呉服店の陳列窓のやうに、並べ立てゝ見ましたが、さて實を云へば、どれも、これも、ほんとうに私の理想

に叶つた、夏衣裳と云ふものはないのです。謂はゞある物での間に合せに過ぎません。では、ほんとうの私の好きな夏衣裳は？

それは夢の世界で見た美しい女性達の纏つてゐた世にも珍らしい着物なのです。夢の國ですから何所だか名はわかりません。見渡す限りの荒磯、轟々と打寄する浪の飛沫をあびた巨大な岩石の上から、黎明の海を目がけて、先を爭つて飛び込む若い彼女たちの、豐麗な肌につけた衣、それは水にぬれて青々とエメラルドのやうに光る、房々とした天然の海草であつたのです。何と云ふ奇麗な衣裳でせう。かの「イエーツ」が「光明の、こがね白がね織なせる、あまつみそらの繍衣眞晝と夜とたそがれの　碧や、うすゞみ、ぬばたまの、そめわけ衣、われ待たば」と云つた其光明の空の織物を秋の衣裳に欲しいと思ふ私は、あの美しい海草をこそ『私の好きな夏衣裳』と申ませう。然しあれもこれも私の願ひは夢の國でこそ。現實の世界でかうした自由奔放な装ひは思ひも寄りません。それこそは、彼の小賢しい人達にやれ虚榮の、節約のと嘲の種になるでせう。

全體の感じ

中原綾子

同じ着物でも、着る人と時と場所と、その他帶とか下に着けるものとか、持物の一寸した相違で、よくも惡くも享ける感じが大變に違ふものですから、一口にどんなのが好きとは申兼ねます。

夏物に限つたことではございませんが、矢張り各自の顔立や體つきや性格などによつて、その個性の長所や美點を充分に發揮した装ひを凝らすべきだと存じます。

然し、夏は殊更目まぐるしいごちや〳〵した感じは厭ですから、全體としてまとまつた、なるべく單純なすつきりした身なりをするといふことを頭に置いて、着物や帶やその他の

もの丶柄や色合ひを選擇するように心懸けたいと存じます。その點から云へば洋裝が一番い丶譯ですが、それを着こなすに馴れない日本人には、誰でもといふわけにはまゐりません。

強いて申せば、藍色系統のものが好きでございます。柄もあまり大きいのや、こみ入つたのでなく、小さい花や秋草などを白くあつさり染め拔いたもの。紺地に淺黃の模樣、といふやうなのに、白地の帶。

特別に色の白い方は別として、晝間の外出に白つぽい召物は感心いたしません、日光の直射する所では誠にいかつく暑苦しく見えます、それよりも黑地の荒い縞の薄物に、水色がかつた帶など、瀟洒として見る眼に快いものです。

夜分は艶やかな淺黃や淡紫の裝ひが涼しげでい丶でございませう、白地の派手な召物に、臙脂のは入つた帶や、脊負上げ、又はお端折の赤を少し覗かせたのなど鮮かで美しいと存じます。

瘦せた方には絽や絽縮緬や、浴衣にしてもなるべくしなやかな地質のもの。肥えて汗ばんで見える方には、輕い明石や麻や帷子のしやんとした召物がよろしいやうです。

長襦袢も召すなら淡色の無地か、極く淡淸した模樣のもの、半襟も同じ色のを細目に。

若い方の眞夏の羽織。刺繡入りの半襟がたるんで胸いつぱいに擴がつているのや、肌襦袢のレースが、着物の袖口とすれすれに見えているのなどは不可ません。薄物にはもとより、肩當類は一切つけぬこと。

下町風の粋な方になら、單や幅狹の帶がお似合ひになります。紗やガーゼの浴衣は概して下品に見えるものですが、先年ある夫人が白い肉づきのい丶素肌に召していらつしやるのを見た時には、たゞ美しく涼しく艶やかで大變い丶と存じました。

その他、髮かたち、お化粧、素足の美醜など申し出したら、際限がございませんが、要するにその人次第で、結局初めと同じような理屈つぽいことをくり返さなくてはならなくなります。

涼しい紺縮緬の浴衣

茅野雅子

特別私の好きな夏の衣裳など申すほどのものはありませんが時に旅行などをしてしみ／＼うらやましく思ふのは西洋婦人の純白、又は明るい色の服装です。青々とした自然の景物を背景にして、輕快な色彩が動いてゐる有樣をみると、いかにも心持ちよくすが／＼しく思はれます。

併し、日本服になると私は全く反對の感じを持つてゐますこれは全體の容姿とか、動作とかいふものにもよるのでせうが、夏の和服は總じて濃い暗い色、といふよりは寧ろ黑味の勝つたものが適するやうに思ひます。しかし餘り眞黑になるのも寂しすぎますから、少しなまめかしさを持つた紺のやうな色が私には一番よいやうに思はれます。白つぽい暑い烈しい光線の中に、白い和服をつけてゐる女の方を見ると、何となく直線的な又は角立つた感じがします。之に反して黑味のかつたものを着てゐる人は圓く涼しい心持がします。それ故晝の着物にしても、紺の明石に白く出た格子縞や、紺と白との辨慶縞や紺の飛白などのやうな種類のものがよく、況して浴衣なぞはどうしても紺地のものに限るといふ氣がしてなりません。全體にけば／＼しく強い感じよりは、華奢にしなやかに細い感じを與へるやうなものが、夏の女の服裝としての私の理想です。それですから、こわい絽よりは、透かなくても縮緬のやうな軟かく細かい線の出るものが好きです。今關西の方では白地の浴衣に濃い色の半衿をかけるのが流行してゐるとのことですが、それはほんの一寸目先が變つたと云ふだけで、眞の夏の婦人の美しさを發揮する服裝だとは思へません。若く美しい女の方なぞの、白い衿あしのなまめかしさ涼しさは紺縮緬の浴衣によつてどれ丈け增されるかしれない位です。

さて着物が紺とすれば帶は着物の對照として淡白な水いる

に銀糸の模様なぞのものが欲しいと思ひます。着物にしても帶にしても成る可く軟かく閑味を持つた女性的のものがよいのですから、秋草とか、觀世の水とかいふ風なものにした〳〵濃厚な、重苦しい感じのものは避けたいものです。

ジョーゼットの輕裝

原阿佐緒

夏の衣裳は、やはり地質の薄い、見る目にも涼しい感じを與へるやうなものを撰びます。

それに夏の着物は特に肌ざわりを吟味したいと思ひます。近頃はジョーゼットや何かゞ日本の着物にも用ゐられてまゐりましたが、これは夏の着物としての要求を滿たさせるものだと思ひます。國産のうすいものとしては明石やかたびらもありますけれど、これらはしやんとしてゐて、肩から腕につながる線などが硬つて、腕なら腕のうごきと同一の柔らかな線があらはせないので困るやうな氣がしますが、明石など輕いことにおいては氣持ちがいゝと思ひます。ジョーゼットは明石よりもうすこし柔軟かに、やゝ重みが勝つてるので體につけた姿のうへで優れた線を見せられると思ひます。併し明石もジョーゼットも價が高いので平常着にはならないので私はメリンスやボイルなどをとります。色も地質に伴つた感じのする、淡色がいゝと思ひますが、私はどちらかと云うと夏でも紺系統の方が好きです。柄はなるべく單純で着てゐるひとそのものが、水のやうな感じを與へるすつきりした柄と色との調和をみたいと思ひます。

とにかく、日本の着物の形は、木綿では姿を整へるうへに困ると思ひます。これはおほく袷もの〻時に感ずるのですが、そこへ行くと洋服は日本の木綿ものに對するのと同じ價のもので作つても、形のうへからさうをかしくないのが德です。

日本の女性特有の姿の美を見せるには、やはり、しなやか

な重みのあるものがいゝと思ひます。日本の着物も、袖つけを少くして帯を胸高にしめあげた兩脇から長い袖のゆらぐとき、またはなやかな裾さばきなどは、美觀のうへからは洋服に遜色のない優美さをもつてゐることを誇つていゝと思ひますが、夏だけは、あの大はゞのひろい帯を脊中一杯に脊負ふのでなければ訪問にも失禮だといふことなら悲觀してしまひます。

洋服の形はいろ〱ありますが、夏はやはり寛やかな、胸も腕も少し多く顯はれた方が好きです。そして地色は白も黒もいゝと思ひます。黒ならジョーゼットのやうなもので腕や胸を白く透して見せるのに役立たせたいと思ひます。純白ならフランスちりめんなどで作り黒か銀ねずみいろなどの南金玉で飾をつけたものがいゝと思ひます。

斯うは云つても、着物も着るとき〲の氣分によつて色も柄も選びますから、一概にはきめられませんけれど、夏は概して、瀟洒に、寛やかに、涼しげにそして高雅な感じを保つやうなものが好ましく思ひます。

見た眼と肌の感じ

岡本かの子

先づお断りいたして置きます。私は呉服ものに巧者でありません――――、私は呉服屋で好んで色々な布地を見ます、自分でも相當に工夫して好なもの、身に合ふものを着ます。それで居て、その各々のもの〻地質や染樣の固有名詞をあまり知りません。産地などはもちろん詳しくありません。

「あなたの着て居るのは何ですか、大變涼しさふですね。」と或る男の人が私にたづねました。

「さあ――――。」

私は困りました。去年のことです、澤山のもの〻なかから無意識に、たゞ見た目と肌への感觸を想像したゞけで不

斷着に買つたものです。今年の單衣を買ふ序に某呉服店の番頭に聞きました。なんのむづかしいものでもない、それは木綿絽であるといふことが分りました。しかし巧者や通で無いだけに却つて理論に渡らず趣味にとらはれず、自由な新鮮な感受性をもつて選擇なし得る特長を持つとも云へませふ。

さて、不斷着から云ひます。

いゝもすりんでは白地にすつきりした藍の竪縞、薄鼠に白抜きの夏草へ焦茶でぽち〳〵つと螢を散らしたもの、暗夜の様な眞黒な地へ白く井の字絣を現はしたもの。それから何と云ひますかずつと古來からある木綿縮、あれを本麻ほど眞白に洒らし抜いて――縮みを洒らすものかどうか知りませんが――黒で青桐の草葉を寫生風に置いたもの。

但し以上は私の視覺が實際見たり、また想像したりする理想であり羨望である所の好みです。私の病的に鋭敏な皮膚の觸覺が、以上の好みの品を私に適用させません。普通の人がさらりと着流すもすりんのデリゲートな纎毛やつゝましい縮のしぼが眞夏にはふだん絶對に襦袢を用ひられない私の皮膚へ一種奇妙に不快な刺戟となります。ですから、やむなくそれに斷念しました。で、久しい前から「今年は何の單衣を買はふ。」と迷ひます。五六年前、日本橋通四丁目の松屋の三階賣場で、絹とも木綿ともつかない（價格も丁度その位）極くしなやかな地に洋風の線畫で露草を描いたものを買ひ當てました。**大好きで、肩の邊が擦切れになるまで着ました。**其後決して同一品が見當りません、これも同じく、何といふ縮か水つぽい様な白地へ薄墨で雲を現はしたのがありました。隨分氣にいつて着切つてしまひましたが、その後直きに變つてしまつた渡り品のなかゝら見出すべくもありませんでした。

あきらめて近來は野暮な銘仙や見榮えのしない綿絽のうちから比較的氣に入つた柄を見立てゝ間に合はして居ます。洗濯が氣安いといふお蔭はあります。何紗といふのが今年また新らしく出來ましたね。あれも縮むか切れ安いかといふ懸念が當らないなら至極宜さそふですね。訪問着は普通麻の白絣とか黒を基調とした縞や、格子の明石や、かべをりなるべく羽織は着度くありません

藤ねづ色の竪絽に銀絲と極薄い青磁と朱。こんな色のとり合せでクス玉かもしくは石竹を擴大した豪奢な刺繍の腰模様

の式服がほしい。たゞし地を野暮な堅絽にしたのは、絽縮緬などデリゲートなだるみを持つものは、私の樣な大柄なすつきりしない體を決してひきしめて與れないといふあはれな自覺からです。なほ帶や襟に就ては紙數がつきたので述べ殘します。

安くて手數のかゝらぬもの

山川菊榮

夏は縮みか木綿の浴衣か、精々よいところで銘仙かモスより以上のものは着心地も知りませんのお答へに苦しみます。上に列記した品でしたら、その時の身體の具合と氣温次第で調節すればどれも同じくらゐ心持よく着られると思ひます。何といふ切れ地ですか、雁皮の縮れたやうなのや、ペラ〳〵した透きとほるやうなものを着るのはよいとして重たさうな帶で胸をしめつけたりして窮屈な格好をしてゐるのは人ごとながら暑苦しさうです。私のやうに貧乏で無精な人間は、凉くて仕事するに手數のかゝらぬ物といふ以上に、着物に對して註文はありません。

洋裝

森律子

とかくお暑い時の日本服は直ぐ着崩れやすく又殊に私は汗かきで御座いますからヘチマやらゴム引の肌着などを用ひて

かなり要心は致しますが殆んど夏の着物や帶に汗じみの無いのはないと申してもよい位で御座います。

私は着心地のよい點からしても見た目の淸々しい點からしても經濟の點からしても夏の外出には洋服に限ると存じました、汗になればドン／＼洗濯屋に出す事も出來ますし私は今年は大いに實行致す考で居ります。

明るい色よりも暗い色

らいてう

お斷りするのが本當なのを瞬間のちよいとした氣弱さから誤つて御引受してしまつたことを今正直に後悔してゐます。

何故なら、可成り長い間の私の餘裕のない生活は、服裝の上に自分の趣味性を働かせるといふやうなことは望んで見たところで殆ど不可能なことで、多くの場合その餘地のないほどの制限を受けてゐますので　いつかしら服裝と言へば、その最初のそして本來の目的である寒さ暑さがしのげればいゝ、そして經濟で便利であればいゝといふ風に自然――といふよりは寧ろ止むを得ず實際的にばかり見且つ考へるやうにさせられてしまひましたから。さうしてかうなることによつて自分がもつてゐたこの種の趣味性がだん／＼鈍らされて行くのではないかと氣遣はれるほど、この頃では益々自他の服裝に對して無頓着になつて居ますから。これはほんとによくないことですけれど。

こんな譯ですから夏の衣裳といふやうなことに就いてもデリケートなことは恐らく私の注意にはいつては來ないに相違ありません。

好きといふよりもいやなことに於て――特に夏はたまらなくいやなことに於て私の注意をひくのは、あまり多過ぎる色數が――しかもお互に殺し合つてゐるやうな不調和な色が全

く心なしにゴタ〱と用ひられてゐることです。折角着物と帶と半襟と襦袢の袖などの間によき統一のある服裝が、もつてゐる風呂敷包の色やパラソルの色ですつかりぶちこはされてゐるのなどは殊に殘念な氣がします。總じて夏は或る一つの色で全體が統一されてゐるのが特に凉しい氣持よい感じを與へるものです。そしてその色もどうも私共日本人のは膚には淡色(明るい色)よりも却て濃い色（暗い色）それも淺黄、紺、黑などの方が遙にさつぱりと美く見せるやうに思はれます。西洋婦人が夏純白の洋服をつけたのはいゝものですけれど、日本人が眞似るといやに暑くるしく、且つきたなく見えます。寧ろ眞黑のドレスの方が幾倍凉しく見えるか知れません。（これは餘計なことかも知れませんが、夏になると日本の男子は誰れも彼れも無暗に純白の麻などの洋服を着てゐるやうですが、餘程美しい人でない限り、大抵は一層きたならしく見えるのです）

それから夏の衣裳で私の嫌いなものはあの薄羽織です。可成多くの人が着てゐるやうですが、どんな透き通るものごしであつてもすつきりした感じの來ないものです。四十を越えた婦人ならともかく若い人のは殊に好みません。色も模樣のあるのは一層いやです。

浴衣は夏特有のものとしてほんとに氣持のいゝ美しいものです。矢張り私はこれも白地のものよりも藍又は紺地の縮の浴衣が好きで、（尤も柄のいゝものでなければいけませんが）夏の着物として若い人には勿論、少し年をとつた人がきても恐らく一番夏らしい感じのいゝものだと思ひます。

とりとめもなく書いてしまひました。

浴衣

佐藤春夫

私のやうな野暮にそんなことを尋ねたつて駄目だよ。

美しい女なら何を着たつていいし、美しくない女なら……。

さうだな、やつぱり何を着たつていいだらう。

僕は男の夏の衣裳なら知つてゐる。洋服なら、ゴリゴリしたチャイニースポンジイ。和服なら薩摩上布。但し十字薩摩にかぎる。ところで女の衣裳は――一向知らない。が、あの下からうすもいろが透いて見える類のものはどうも見た目にも性に合はない。

僕は一たいが盛裝の美人より輕裝の美人を撰ぶ。されば、夏の美人も亦、浴衣の人、手に團扇をもつて凉臺にあれ。

賭博館の娘

村松梢風



（一）

賭博館の瓢箪口は今日も相變らずお客で繁昌してゐる。二階でも階下でも、幾組も勝負が始まつてゐる。それは「麻雀」といふ博奕だ、お客達は、二人でやつてゐる組もあれば、一つの盤へ四人で對き合つてやつてゐる組もある。紫檀のテーブルの上へ盤を置いて、象牙の駒を指で抓んでは「カチーン、カチーン」と打つてゐる。各々の前に銀貨が堆く積んで並べてある。大洋の一弗、小洋の廿錢と十錢、それを一弗は一弗、廿錢は廿錢で別々に綺麗に積み上げてある。ガチヤ〳〵と駒を崩す音、チヤリ〳〵〳〵と銀貨を數へる音。廣い部屋中一杯に煙草の煙が滿ちてゐる。

其の煙草の煙の中から、階下の部屋の眞正面の壁に「瓢箪口」と太く達筆に書かれてゐる額の字が霞んで讀まれる。それは此の賭博館の家號だ。併し瓢箪口とは家號にしてはあんまり妙な家號ではないかと、お客の中でも不思議がつて尋ねたりする人も偶にはある。けれどそれは聞いて見れば他愛の無いはなしだ。瓢箪口といふのは 今から三月ばかり前にふとした病氣が原因で死んでしまつた此の賭博館の主人だつた林といふ男の綽名だつた。林はもういゝ齢だつた。其の林が一人の可愛らしい娘を伴れて此の廣東へ流浪して來たのは今から六七年も前の事だつた。彼は此處へ來る前は福州に住ん

でゐて堅着な商賣を營んでゐたと言つたり、そして生れは浙江だと言つたりしたが、何しろ誰も確かな事を知つてる人はない。青島だの天津邊の事も知つてゐて、兎に角世間の廣い、さうして事件の多い生涯を送つて來たらしい男であることは、其の老いてはゐてもなか〳〵鋭い氣質や引締つた容貌などでも直ぐに想像することができた。處で、林は廣東へ來て何に依つて生活を立ててゐたかといふと、賭博が本職だつた。彼は「麻雀」の名人だつた。どんな人が掛つて行つても大概彼には歯が立たなかつた。其の時分は現今のやうに官許の賭博館といふ物は無かつたけれど、支那の他の土地と同じやうに有らゆる勝負事は公然の秘密で行はれてゐたので、林は博奕さへ打つてゐれば可成りいゝ商賣になつて樂に生活が出來るのだつた。

林は獨身者だけれど、前に云つた通り一人の娘を有つてゐた。娘の名前は青兒と云つてゐた。青兒が父に連れられて初めて廣東へ來た時は漸う十二位の齢だつた。其の時分から青兒は眼鼻立ちの優れた色白の美しい子供だつた。林は何處へ行くにも其の娘を伴れて歩いた。親父が博奕を打つてゐる側で青兒は大人しく遊んでゐた。

さうして幾年か此の土地で暮らしてゐるうちに、偶然にも林に取つては非常な幸運の機會が到來したといふのは、近年廣東省では財政が窮乏の極に達してどうする事も出來ない處から、賭博を公許して賭博税を徴收して財源に充てる事となつた。そこで公然の賭博館といふ營業が官許に依つて營まれることになつた。林は早速賭博館を開業した。すると彼の店は大變繁昌した。

林には以前から「瓢簞口」といふ綽名が付いてゐた。其の綽名はどういふ意味なのかそして誰が云ひ始めたのかはつきり知つてゐる者は少なかつたが、兎に角蔭で人が「瓢簞口瓢簞口」と言つてゐたくらゐだから無論いゝ意味の綽名でないことは明らかだ。處が、如才のない林は、賭博館を開業すると同時に、或書家を頼んで自分の綽名を額に書いて貰つて、それを戸口の看板にまで出して、家號にしてしまつた。そんな彼の政略が圖に中つたのだつた。

「瓢簞口」の由來はさつと右のわけだが、併し此の家にはまだ一つ他に繁昌しなければならない重大な原因がある。それ

は看板娘の青兒の力が大いに與かつてゐる。父の林が亡くなつた後は、今年十八歳の娘の青兒がたつた一人で此の店を經營してゐるのだ。

青兒は今朝も十二時過ぎ頃に漸う起きて、それから鏡に向つて自分で髪を結つて、着物を着替へてしまふと其處へ年取つた下婢が朝の御飯を持つて來たので、たつた獨りでテーブルに向つて寂しさうに御飯を食べた。父が生きてゐる時分には必ず親子二人揃つて朝飯を食べた。先に起きた父が時間を見計らつては青兒を起しに來た。

「青兒や、青兒や、もう起きないと御飯が遲くなるよ。お客樣も入らしつてるんだよ」林は娘の寢臺の帷を引き明けて、額まで蒲團を着てよく睡つてゐる娘の顏の側へ口を寄せて呼び起すのが每朝の慣ひになつてゐた。

併し、起して呉れる父が亡くなつて後は、青兒は其の時間が來ると屹度ひとりで眼を醒ました。さうして獨りでテーブルに向つて朝の御飯を食べなければならなかつた。青兒にはそれが寂しくて溜まらなかつた。居りもしない父親の姿をテーブルの向うに描いて見たりした。誰でもさういふ場合に感じるやうに、彼女もまた父がほんたうに死んでしまつたのだといふ氣持がしなかつた。さうかと云つて死んだ事は自分も最後の病床に附いてゐて目擊した動かすことのできない事實である。

が、一旦死んでしまつた父が矢張り何處かに生きてゐて、自分の眼の前にヒョッコリ現はれてでも來さうなやうな氣持がした。さういふ不自然な氣持がちつとも不自然でなしに感じられた。生と死との間がハッキリとした一線でなしに、其處に煙のやうな朦朧とした場面があつて、彼女の父は其のどつち付かずの處をさ迷つてゐるかのやうな氣持がするのが、現在の彼女の氣持だつた。

青兒は、食事のあとで刻み煙草を二三ぷく吸つた。煙草を吸ふ事を覺えたのも近頃のことだ。獨りでぼんやりしてゐる時退屈しのぎに、父が使つてゐた煙草の道具を取り出して吸つて見たりしてゐるうちに、此の頃ではほんたうに好きになつてしまつた。

其の部屋は、一間半に二間位の廣さで、其の餘り廣くない部屋の中に、寢臺、簞笥、化粧臺、テーブル、椅子――そん

な道具がキチンと片附けて置いてある。壁には死んだ林の引きのばし寫眞が額に入れて掛けてある。紫檀類の紫色の光澤、銀金具の白い光。其の部屋を、優しい女の持物や、芝居の人形や、造花や　それから桃色の絹の寢臺の帷や、それらが、此の部屋の住み手にふさはしい色彩や、情調を漂はせてゐる。

「お客が待つてゐるだらう」と青兒はぼんやり考へた。其の日其の日の自分の商賣に對して、さう強い興味も感じてはゐないが、墮性的に每日同じ事を繰り返してゐることがさう厭でもなく倦きもしなかつた。

（二）

階下の構造は支那式と西洋式との折衷式に造られてゐる。表の扉を押して這入つて來る人は、其處に大きな紫檀の衝立が立てゝあつて內部の光景を遮つてゐるのを見るだらう。其の奧が直ぐ店になつてゐて、片方の玻璃窓の方へ寄せて賭博臺が幾臺も据えてある。反對の側の壁の方にはテーブルが二三脚置いてあつて、こちらは主に物を食べたり茶を飲んだり手のすいてゐる時雜談をしたりする場所になつてゐる。ストーブの中では石炭の紅い火が勢よく燃えてゐる。例の「釀缸口」の額は、麻雀をやつてゐるお客達の頭の上の處に掛つてゐる。

十二三人の客が其の室に集まつてゐた。老人もゐれば若い男もゐるが、皆定連ばかりだ。其處へ、向うの隅の螺旋階段をコトコトと輕く鳴らして、シガレットを一寸伊達な手つきで吸ひ乍ら青兒が二階から降りて來た。

「皆さん、お早う」と彼女はほんたうに優しい聲を遠くから投げた。

「ヨウ〳〵、お待ち兼ね〳〵、佳人の顏が見えないので胸の音がちつとも冴えなかつたよ」王さんといふ家作持の肥つた男が言つた。

「あら、王さんが又うまい事ばつかり」

「何ほんとだよ、彼處にゐる李さんなぞは、お前の顏が見えないので先刻から勝負もしないで起つたり座つたりして焦れてゐたんだよ、それにしても起き方が遲すぎるぢやないか」

「いゝえ、是れでもいつもと同じ時間よ」

「何だ一時間位は遅いやうだ、ねえ青兒、いゝ夢が惜しくて起きられなかつたらう」
「いゝ夢つてどんな夢？」
「さうだなあ、お前のやうに美しい娘の夢といへば大概極つてゐるなあ、美男子で優しいお婿さんが來た夢でも見てゐたのだらう」
「いやな王さん」青兒は小さな絹のハンカチーフで王さんの顔を打つた。
お客達はみんな愉快さうに笑つてゐる。全く誰でも青兒の姿が見えると、部屋中の空氣が急に明るくなつたやうに感じられるのだつた。
「王先生、僕ばかりを攻撃なさるから、一つ復讐に勝負を願ひませうか」と、李といふ實業家の息子が茶を飲んでゐたのを止めて起ち上つて言つた。
「よき敵、望む處だ」と王さんは答へた。
青兒は其の側へ腰を掛けて勝負を見物してゐた。眞晝の強い光線が薄いカーテンを透して青兒の顔へまともに射いてゐる。うす紅味のさしてゐる白い皮膚に柔らかなうぶ毛が見える。前髪を斬つて房々と垂れてゐる。其の一本並べの前髪の透き間から、丁度簾越しに物を見るやうに、細く長い眉と眞つ白な額とが透けて見える。其の下に、是れも細くて長い美しい眼がジーッと動かずに据はつて盤の上に注がれてゐる。紅く燃えてゐる耳朶の下で、翡翠の耳飾が冷たく光つてゐる。
其の時、表の扉を押して一人の客が這入つて來た。青兒が一寸振り返つて見るとそれは見なれない若い男だつた。支那服を着て新型の中折帽を冠つて、馬に乘つて來たと見えて手に鞭を持つてゐたが、それを帽子と一緒に壁へ掛けた。
「入らつしやいまし、さあ何卒こちらへ」
青兒はにつこりと自然の愛嬌を見せて席を起つて行つて、向うのテーブルの方へ客を招じた。客は大樣な態度で椅子に腰掛けた。まだ廿か廿一位の眉目秀麗の青年で、金の掛つた立派な服裝と云ひ、其の氣品のある樣子と云ひどうでも何處か身分の高い家の貴公子か、でなければ少し田舍の物持ちの息子か何かに違ひはなかつた。
「僕は張といふ者です、初めてお宅へ來ました、どうかお心易く」

「まあ申し遅れて恐れ入ります、妾は青兒と申しまして當家の主で御坐います、どうか何分御贔屓に」青兒は係う云つて頭を下げた。

「貴女のお店は大層繁昌するさうですね」

「ハイ、お蔭樣で皆さんが贔屓にして下さいますので」

客はボーイが運んで來た茶を一寸一口啜つて下へ置いた。

「時に、青兒さん、貴女は大變勝負がお上手ださうですね」

「いゝえ、まるで駄目ですの」

「いや確かにさういふ話を聞きました。處で、僕は貴女と一勝負しようと思つて來たのですが」

「おやまあ、そんな酔興はお止し遊ばせ、他にいゝお相手を御紹介致しますから」

「いや是非共、貴女と勝負がして見たいのです」と若者は熱をこめて言つた。

「何んといふ世間知らずのお坊ちやんだらう……」と青兒は思つた。「此の人は幾らお金を持つて來てゐるのか知らないけれど、わたしと勝負をしたら持つてるだけは吐き出さなければならないんだのに――」

青兒は負かしても氣の毒だと思ふので返事をしなかつた。此處へ來る程の客ならそれを知らない者はなかつた。彼女は父の林に劣らない賭博の手腕を有つてゐた。

「青兒さん、折角お客樣のお望みなんだからお相手をしたらいゝぢやあないか」と向ふで其の問答を聞いてゐた王さんが一寸手を休めて言つて、癖になるから負かして遣れといふやうな眼付きをして見せた。

すると青兒もそんな氣になつた。見れば相當物持ちの息子でもあるらしいからちつと位負かして遣つたところで差支へはあるまいといふやうな氣持になつた。

「ではお相手を致しませう。何卒こちらへ」と言つて青兒は一番奥のテーブルへ若者を案内して對き合つて座つた。

王さんを初めみんな自分達の勝負を中止して、此の物好きな若者が負かされる處を見物しやうと思つて其の周りへ集まつて來た。其の時若者は上衣の下から一つの包みを取り出して、テーブルの上で解き始めた。中から書類だの帳面のやうな種類の物を出して、

「青兒さん、これは僕の全財産で、祖先傳來の地券と、銀行

の預金帳です。どうか調べて下さい。時價にして優に五萬弗はあります。是れ丈を僕は賭けませう」と若者は落ちつき拂つて言つた。

周圍の者は皆吃驚して顔を見合はせた。靑兒も驚いて顔の色を變へた。

「そんな無茶な事をなさるものではありません、お止しなさい」と靑兒はキッパリ言つた。

「いや、どうせ貴女と勝負をするなら是れだけ一度に賭けませう」

「でも貴郎はいまに後悔なさるでせう」

「いや、斷じて後悔しない」

「併し、貴郎が五萬弗賭けると仰しやつても、妾にはそんな財産は到底有りません、一萬弗も六か敷う御坐いますわ」

「それはさうでせう。だが貴女には金を賭けて貰はなくともいゝのです」

「お金を賭けなかつたら何を賭けるんです」

「貴女の體を賭けて下さい。早く云ふと、若し貴女が負けたら、貴女は僕の妻になるといふ契約をして――」と若者は言つた。

靑兒は其の美しい頰をぽツと紅く染めた。けれども彼女は同時に少し腹が立つた。今迄男からいろんな事を言はれたことがある。だが併し初對面の男から恁んなに露骨な事を云はれたことはない。いやに落ちついてゐる若者の容子が小面憎くも見えて來た。構はないから五萬弗卷き上げて泣き面を掻かせて遣らうといふ殘酷な氣持も手傳つて來た。

「宜しう御坐います、承知しました」と彼女は答へた。

見物してゐる人達も餘り意外な若者の出樣に驚いたが、半は面白半分に「それでは後で苦情の無いやうに公正證書を作製して置くがいゝ」と兩人に注意したので、直ぐに近くの公證人を連れて來て其の場で右の契約書を作製した。それから兩人は勝負を始めた。靑兒も若者も兩方とも蒼ざめた顔をしてゐた。

若者も流石になか〱強かつた。が、矢張り靑兒の敵ではなかつた。三番の勝負に三番ともいつも際どい處で若者は負かされてしまつた。最後の勝負が決すると、若者は「あゝ――」と大きな息を吐いた。彼の顔には一滴の血も殘つてゐな

いやうに青ざめてしまつて、手はブル〱と戰いてゐた。青兒も「ほツ」と息をした。併し彼女も勝負に勝つた愉快な氣持にはなれなかつた。反對に重苦しい氣分になつてゐた。

「では、是れはお渡しゝます、僕は直ぐ歸ります」若者はヨロ〱よろめき乍ら起ち上つて歸り掛けた。

青兒は自分としてどう言つていゝか判らないので默つて其の後へ隨いて送つて行つた。若者は帽子と靴を取つて扉のハンドルを握り乍ら背後を振り向いて、

「青兒さん、左樣なら」と云つて片方の手を差しのべた。

「左樣なら――」青兒もさう言つて相手の手を握つた。どちらの手も氷のやうに冷たかつた。

（三）

青兒はいつぞやの若者の事が氣になつて仕方がなかつた。五萬弗の財産が殖えた事を考へても何んだか嬉しい氣持になれなかつた。

「あの人は財産を失くしてしまつてどうしてゐるだらう？」とそれが氣にかゝつた。

「馬鹿な奴があつたものだ」其の話が出ると誰でもさう言つて、青兒の前でも何でも構はず若者の愚かさを嘲り笑つた。

併し青兒は笑ふどころではなかつた。成る程若者の行爲は愚かな行爲かは知らない、が、其の愚かな行爲の中に、彼女としては笑ふことの出來ない何物かゞあるやうに感じられた。

彼女は人を賴んでそれとなく若者の在家を探して見たが、何處へ行つたか行方が知れなかつた。

それから三月ばかり經つた。すると或日一人の定連のお客がやつて來て、青兒に向つて、

「青兒、俺は或處で面白い人間に遇つたよ」と言つた。

「誰れにお遇ひになつたの？」

「奇遇なんだよ、實は昨日用事があつて佛山迄行つて來たんだが、佛山でネ、そら、いつか此處でお前に負かされて五萬弗取られたあの青年と遇つたんだよ」

「え、ほんたうですか？」

「ほんたうだとも、それでネ、實際有りつたけの財産を賭けたもんだと見えて、今では零落してまるで乞食さ、見られた

態ちやあなかつたよ」
から言つて其の人は若者に遇つた時の模樣を詳しく話した。青兒はそれをハツキリ心に留めて聞いてゐた。
青兒は直ぐ樸家僕を佛山へ遣つて、あの若者を探して若しゐたら直ぐに伴れて歸つて來るやうにと命けた。佛山といふ處は、廣東からさう遠くない小さな田舍町だつた。家僕は翌日戻つて來た。彼は主人から命ぜられた通りに若者を伴れて來た。
青兒は二階の自分の部屋へ若者を伴れて來させた。若者はよごれた木綿の着物を着て、そして破れた靴を履いてゐた。あの贅澤な着物を着て鞭を持つてはいつて來た時の貴公子らしい名殘りは何處にも無かつた。
「暫らく、よう入らして下さいました。さあ何卒お掛けなすつて」青兒は椅子を若者の側へ寄せて、其の側へ自分も腰を掛けた。
「あの時は大變お氣の毒な事を致しました。其の後さつぱりお見えがないからどうなすつたかと思つて居りました」
「僕も、伺つてよいものなら來たかも知れなかつたが、何しろあの爲めに恁んな態にはなるし——」と若者は極り惡さうに言つた。
「妾も實はそれをお案じ申して居りましたの。だが併し、いつたい貴郎は何んであんな無茶な事をなさつたんです？」
「それだけは許して下さい」
「どうか仰しやつて下さい、貴郎の氣持を正直に」
「では言ひませう、實は僕は貴女に人知れず深い戀をしてゐたのでした。それで、慾も得も考へなかつた。が、あゝして自分の全財産を賭けて勝負をしたら屹度負けつこはないといふ自信があつたのです。處が運惡く僕は負けてしまつた。さうして恁んな境涯になつた。それは考へると殘念だけれど、自分の力が足りなかつたのだから仕方がない、僕はすつかり諦めてます、今では後悔も何もしてゐない、戀の爲めに自分の力で出來る限りの事をしたといふ寧ろ滿足な氣持さへあるのです」
青兒は感激してハラハラツと泪をこぼした。彼女は突嗟に此の若者に對して燃ゆるやうな愛を感じた。そして若者の手を確りと握りしめた。それはいつぞやの別れ際に扉の側で握手をした時のあの冷たい手ではなく、どちらの手も火のやうに熱かつた。
若者の望みは遂げられたのであつた。彼等は間も無く正式の結婚をした。そして廣東の街ぢうに、珍らしいロマンスだと云はれて噂の種を撒き散らした。



歐洲の旅と女の印象

柳澤健

○

巴里には一番長く滯在した。それ許りではない、巴里の町は、何と言つても容姿の美しい女性の數々に充ちてゐる點では、倫敦や伯林やには勿論のこと羅馬やマドリツト等の所謂南歐美人の群れ集つてゐる土地に對しても遙かに群を拔くものがあつた。それにも拘らず、いま自分はこの巴里のなかから、最も印象に殘つた女性の面輪と容姿を思ひ浮べやうとしてゐるのに、それを明瞭思ひ浮べられるものはないと言つてよかつた。その癖自分は、巴里の大街のなかで、公園のなかで、劇場のなかで、或は客間のなかで『あゝ、何といふ綺麗なひとだらう!』と、半ば嘆息しながら凝視つた面輪や容姿の持主が數へ切れぬほどいくらもあつたのであるが。——

かくのごとく自分は巴里に於ける『最も印象の深い』美人をば記憶の迷路のなかでそれとその行方をば見失つてしまつたのであるが、その代りに所謂美人とは言へない型の女性で自分に深い印象を今に殘してゐる人がたしかにひとりはゐる。それは、千九百廿一年の一月元日の日のマチネで偶然オペラの第四階のボツクスのなかで席を並べた若い貧しい娘がそれである。パードルーの音樂會の日で、モツアルトとベートーヴエンのみの演奏があつた當日だつた。指環一つも手にはつけてゐず、穿いてる靴も古び切つたものでその身なりだつてずゐ分とお粗末なものであつたが面輪は淨らかな處女の優しさと强さとの美くしさに匂ふてゐた。場內で賣つてるプログラムを買ふ餘裕までもないと見えて、朝刊新聞の音樂欄の切拔をその小さな掌のなかに擴げては次々と曲目を涼しい

眼で追ふてゐた。自分は、不覺あのロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』のなかにあるアントアネツトの肖像をまざ〳〵とこの貧しげで健げな娘の上に見る思ひまでしたのだつた。自分の近刊の著書『歡喜と微笑の旅』のなかに、『巴里の元日』と題して書いた一文は實にこの貧しい娘の印象記に他ならない。それにしても、巴里の數萬、數十萬の麗人を無視して、かくも侘しき娘の上を追想しやうとする人間の頭腦の氣紛れなる働きには、我ながら自然と微笑まざるを得ない。――

○

十月の末佛蘭西からピレネー越しに西班牙へはいる時のことだつた。まつたくの獨り旅であるに加へて、西班牙語と言つたら一語すら解し得ない自分が、ポール ブーといふピレネーの山中の小驛で汽車の到着を數時間も待つてゐた時の心細さと言つたらなかつたのである。外は風雨がうなり聲を立てて何とも云へぬ慘澹たる光景であつたし、また內は內で、汚ならしい待合室のなかを足の踏み所もないまでに、木の靴を穿いたぼろ〳〵着の山男たちが地面に直接に尻餅をついてゐるといふ狀態であつた。そして時折顏色の異つた自分の方へぎよろつとした不氣味な眼尖を注ぎかけられるときは、あの『カルメン』のなかへ出てくる山賊か何ぞのやうな氣までした所がさうしたなかに、これはまた白百合そのまゝとも言はれさうな淸らかな若い女性が、―尼が 年老いた尼に連れられて立つてゐた。その人逹はペルピニオンから來たことは、自分と同じであつた。言はゞ背景をなしてゐる周圍が汚なく荒つぽかつたためもあつたかも知れないが、ともかくその若い二十歲頃合の女性の淸らかな美くしさは、まつたく稀にしか見ることが能ぬ所のものであると、自分は思つた。眞白な帛布で面輪をつゝんで、更にそのうへを黑い帛布で圍んでゐた。ふくよかな胸の上には黃金の十字架が小さく垂れてゐた。淸らかな澄き透るやうな面立、優しく整つた鼻とその恰好のいゝ鼻翼と、その下の雛罌粟のやうに紅くほころびてゐる脣と。眼は、おそらく世のなかの鮮やかな色彩を見せまいとするためか、薄墨の眼鏡にかくれて、ぢかには見ることが能なかつたけれども、明るく涼しい眼尖であることはそれとなく感じられた。……

粗野な陰慘なこの山國の小驛に黃昏は迫つて來た。自分はその時何とはなしにその美くしい尼が、冷たい寺院のなかの一すぢの聖燭の焰のやうにも思へて來たのであつた。この地上のものではない！――そんな氣さへ起つてくるのであつた

女性を見てあんなに美しく、あんなに淸らかに感ぜられたといふことは、長い旅の間にもそう自分には覺えのないこ

とであつた。

○

亞弗利加近いアンダルシアの地方を旅して歩いた折だつた。ある夜セヴイラの町で、踊りを見た。その踊り子の一人が舞臺から下りて來て、自分たちが掛けてゐる卓に近寄つて來た。おゝ、その眼は！自分は思はずその時に『林のかなたに燃ゆる焰のごとく』といふ女の眼を歌つたアラビアの唄の文句を思ひ出した。まつたく、その眼は不思議な底知れない神秘に充ちてゐた。獸とも神ともつかぬ蠱はしい燦きがちらちらとそこに動いてゐた。

巴里の女の眼尖は――、さては伊太利の女の眼尖は、表情に充ちてゐるといふ。然しながら、あのアンダルシアの女の眼のことを思ふと そんなものは何でもないやうな氣がする。

○

英吉利へは二度も行つたけれど、そこの料理と同樣そこの女性も、どうも自分の趣味には合ひさうもなかつた。それ計りではない、トーマス・クックか何かの手で佛蘭西なり伊太利なりを巡遊してゐる英吉利の女性と來たら到底たまらなかつた。そこの土地の女性がいゝだけに、一層その侘しさは目立つたと言つてよかつた。

所がこゝにただ一つの例外があつた。それは、伊太利のアツシジに行つた折のこと、泊つた宿屋の食堂で、一人の氣高く優しい感じに充ち〲た面輪を持つた英吉利の女性を見たのであつた。自分は、土地が土地とて、たちまちその聯想をサンタ、クララに持つて行つた。サンタ・クララにしては優しみが多過ぎるかも知れないけれど、ともかくも、聖らかなチャームをそなへてる人だつた。一眼で自分の心は強く惹かれた。その夫と一緒だつた。

偶然のことで、その晩、バルコンで月を見てゐたらその夫になる人もそこに出て來て、むかうから口を切つた。程なく、その美くしい夫人も現はれてきた。月と野とを眺めながらしばらく三人は話をし合つた、――その追憶は今でも甘いものに思つてゐる。

二三日滯在してから、この地を立たうとした時に、自分はこの夫妻に挨拶を殘して行かなければならないと思つた。所がボーイは戻つて來て、何處か散歩にでもお出掛けになつたやうです、と言ふ。倫敦に住居があるといふことを聽いただけで、詳しいことは名刺ででもと思つたことも、そのまゝになつてしまつた。

物寂しい思ひで、自分は、フイレンツエへと立つた……。



千葉龜雄

◇暴力統治時代

血に對する恐怖の觀念は、人間の本能の中で、もつとも敏感なものの一つに見える。血といふ一字を單に見ただけでも、反應的に身ぶるひを覺える人の場合さへもある。赤色が、危險なるものの象徵として普通に考へられる根據はどこにあるのか、確實にはわからぬが、破壞を象徵する火と血、ことに血の色がこの恐怖觀念を暗示するのに、有力な働らきを持つて居ることは爭へない。何よりも生に執着するのが生物の本能である故に、その大事な生命の破滅を暗示する血が、强烈な恐怖をもつて、生物の心理を脅やかすのは、もとより無理のない話なのである。かくして生物は、その生命を脅やかすところの血を怖れる。その血を見るに至るところの暴力を怖れる。或は戰爭さへも、この血の怖れる觀念に基づくものだといつたならば、一種のパラドックスのやうに聞えるかも知れない。けれども事實は何であれ、戰爭と戰備は、いつも國民の、そして國民箇々の、止むを得ない生存の保障だといふ口實によつてわづかに存在をゆるされ、野心深い君主や、陰謀家が、それを利用して自分達の慾望を遂げやうとする。つまり生存の脅威といふ弱點を利用するからである。だから、もし始めから、その生存を脅かす人間さへなかつたなら、戰爭なるものは決して起り得ない。人類は、決して屠殺の血を嗜む惡魔でないからである。殊に文化の高まつた現代では、人類は、みづから手を下すところの屠殺事業にますます堪へられなくなつた。世界平和說は、或る點から見て、人類共存の

理窟を、不自然に、功利的に結び付けやうとするやうな傾きがある。むしろ人類が元來弱いもので、お互ひに血を見ることの嫌ひな生物だといふ心理から人類共存の組織を考へ出す方が、もつと力づよい自然の根據を持つことになりはしまいか。

それであるのに、現代において、暴力と血の脅威が相かはず横行して居る。血と火の暴力をきわめた歐洲大戰が、恐らく人類恐怖時代の最後のもので、世界人類はそれによつて、共同に平和と人道の理想境に立かへるべきものと我人ともに考へられたのも、まことに暫時の空だのみに過ぎなかつた。一九一八年で、一時活動を止めたと思はれた暴力の統治は、依然としてその勢力を一九二三年までにも延長して居る。アイルランドの内亂はやうやく止んだが、イタリイにはフアスシスチがあり、アメリカには、クークラツクス、クランがあり、近頃の海外電報は、ワシントン條約のすきをくゞつて、イギリスが海軍擴張に力を入れ、アメリカが、大規模な空軍の組織に取りかゝつて居ると傳へられる。勞農ロシアはまた勞農ロシアで、更に赤衛軍を强力にする理想を計畫して居るといひ、フランスは例によつて、頭として軍備縮少などには耳をかさず、ドイツ征伐に全力をそゝいで居る。日本はまた日本で、反動思想を代表する一種の國粹團體が、雨ふり上りの菌のやうに一雨ごとにふえて來る。そして、それはどれもみな武力を以て足がためして居り、すでに在る社會主義思想、民主的自由主義に、この保守思想が入りまじつて、神聖なるべき講堂や、教室やにさへも、血や鐵拳の雨が頻りと降る。またこの反動團のばつこに憤慨する社會主義者が絶望のあげく、實際行動で始末をつけやうとして、反動團とピストルの打ち合ひをする。かくして現代の雰圍氣は、一般の民衆の上に、何か知らまさに起るべき、不吉な出來事を、象徴するものでないかと感じさせ、底知れぬ不安の底におののかして居る。

尤ともこの一般の恐怖にも無理は無い。元來こんな暴力の統治時代は、決して今まで始まつたことでは無いので、むしろ昔の方がもつとひどく、もつと慘酷であつたのであるが、その代りに、昔の民衆は、今日ほどに烈しい血の憎惡をもつて居なかつた。一つはさうした出來事があまりに始終中なので、すつかり感覺が麻痺して了つたためもあらう。また現代人ほどに、纎細で感じ易い神經をもつて居なかつた爲めでも

あらう。また社會民衆の交渉について、はつきりした意識をもつて居なかつた爲めもあらう。また社會道德思想が、そういふ社會狀態を肯定して居た爲でもあつたらう。然るに不幸にして現代人の神經は、病的なほど敏感である。その癖からした慘虐な血の脅威は、昔にくらべれば、ずつと數が少ないのであるが、少ないだけに、またその一つ一つが、前の二倍三倍の恐怖をもつて心象に迫つて來る。するとそこに待構へて居る敏感の波動が、勝手に極度に大きくその映象をひきのばすといふ譯で、だから表面で一寸した刺激も、恐ろしく大きな打擊としてその心理の底に還つて來る。

かゝる現象が、人類の觀念に與へる最も恐るべき結果は、その不安から來る思想の動搖と絕望の疾驅とである。懷疑の果が絕望にはしり、絕望の果が頭腦の混亂を釀して來る。そして理性が沈默するとともに、今まで永い間意識の下に眠り忘れられて居たところの、原始的獸性のみが頭をもたげて來る。そして絕望とこの獸性が結びついた刹那、そこに測り知れない血の洗禮が起つて來るといふのが、即ち今日の暴力統治の一面相である。現代の殺人や暴力利用の一部が、多く壓迫された感情の、止むを得ないはけ　として現はれて來ることはそこで大に注意すべきものでなければならぬ。

更に暴力統治の他の一面は戰爭肯定論の側から出る。彼等は云ふ。闘爭本能は、人間には永久になくならない。だから誰が何と云つた處が、戰爭は決して宇宙から消え失せるものでない。そして戰爭の存在は當然暴力の存在を肯定する。さうだ、世界人類一切の運命を決定するものは、ただ暴力がある許りだといふのが彼等の哲學である。彼等は思想といふものが、暴力によつてはもちろん、いかなるものによつても屈伏する事の出來ぬものであることを知らない。また暴力がどれほど力強いものであつても、その物理力の及ぶ範圍が極めて狹く限られて居ることをも知らない、だからただに十人を半殺しにし、百人を袋叩きにすることによつて、世界の全體の思想が、何ほどをも抹殺し得るものでない事にも氣が付かない。殊に相手方の思想には、何か知ら、人をひきつける力があるから、始めて思想として有力になるのであるのに、暴力團のは、それが暴力團であることの外に何等の思想をも持たない。こゝに彼等の現代においての致命的な運命がある故にもしかゝる風體の存在が、今日において、許すことの出來ない時代錯誤であることを知るならば、社會も、政府も協力して、かゝる團體の存在を沮むべきであるに係はらず、彼等

は決してその手段を採らない。それどころか、官憲と社會の或階級は彼等に隱然たる助力を與へ、更に却つて軍國主義の持つ凡ての時代錯誤の觀念をもつて、若い女性や、小學生徒までをも侵さうとする。そして愛國主義の名において、この無邪氣な少年少女の血の恐怖の本能を麻痺させ、國家主義のカモフラアジをもつて、暴力萬能の信仰を强めやうとする。

しかも、それは彼等がその暴力統治によつて、既成社會の特權をどこまでも丈夫に持ちつづけ、新興の階級の爲に、一歩もその地歩を讓るまいとする半永久の政策であるが故に、彼等は新階級の壓抑の爲には、可なり大膽に暴力を用ゐても大目に見のがされる。新興階級はまた新興階級でかくも不合理な迫害につひに堪へられなくなる。そこに殘されるものは暴力以外にないために、自然に最後の手段として暴力に依賴することになる。かうして暴力統治時代は、反對した二つの側から同時に起つて完全に抱合される。

そこでこのつまらぬ小論文の結論をどうしやうか。それは私自身が結論を提出するのを止めて、直接に社會と當局に問ふのが、一番賢明な方策であるやうに思はれる。

◇大東文化學會の設立

漢字制限や中等學校漢文科廢止が與論として提唱されて居るときに、漢學保存の機關として、大東文化學會が議會の協贊によつて出來上つたことは興味がなければならぬ。その費用として可決された百五十萬圓の多額は、失業者頻出の今日にあつて、不急の事業に、不急に投じられた國費だといふ批難もあつたが、それもまた一應の理屈があらう。しかし際立つて、漢文の勢力が衰へ、それが漢字制限や漢文科廢止によつて表現された今日に、漢學保存のこの會が起ることは決して無意味ではない。たゞ此會の人々が口を開きさへすれば、漢學は我邦の道德の根本であるから、今日の道德の頽廢をすくふには、漢學を復興するに越した事はないと說くのは少なからず奇怪に聞える。一體今日の我國の道德が果してどれほど頽廢して居るかはわからないが、たとへば頽廢して居るにしても、それは寧ろ或る階級だけであつて、社會の中堅をつくる人々の道德は、理智とともにいかなる時代よりも遙かに進歩し、健全である。むしろ頽廢したのは、特權階級時代に生れた漢學のやうな、思想をそのまゝに、後生大事に持ち

傳へて、少しも改造をはからない人々の道德である。道德思想は時代とともに進步する。漢學がその進步する時代において、いかに時代に取りのこされた思想であるかは、どの五六頁をくりかへして見てもすぐ合點が行く筈である　過去に何等かの效力を持つたことは、それが過去に適應するものであることを示し、同時にそれは、將來に交渉する生命を持たぬものであることさへも豫定する。もしそういふ事が誇張であり、虛僞であるといふならば、そしてこの文化會の主唱者たる某々氏が、果してこの聖經を、實踐躬行した道德者であるといふならば、そういふ聖經の價値のどんなものであるかは彼等の生活と行動の一部分を見るだけでも直ぐそれは理解される。文化會の使命はさうした既成道德の宣傳よりも、科學としての古典研究の方にあるであらう。

◇頻々たる學校騷動

早稻田研究室の臨檢問題は、まだ研究の間にあり、文化同志會と縱橫クラブは、訴訟のまゝ引分けて、水を入れて居る形になつて居る。東洋大學は、文部省からの學校と學長の認可取消しで一先鳧がついた。それと前後して、市內や地方と官私學校で、頻々として騷動が起つてゐる事を報ずる。ことに東京府立二中で、父兄側が生徒と連署して、校長彈劾を同意したのはたしかに新らしい傾向である。そしてこれ等の傾向から看取されることは、今日は、もう師弟の名義や官憲の强壓で、生徒を壓迫することが絕對に出來ないほど、それほど生徒が批評精神に銳くなつて居ることで、これは何よりも喜ぶべき傾向であるが、一方に生徒が、容易に師長を彈劾することを輿論が助けて行くことは、やゝともすると校內の野心家や不平家が、煽動し易い輿論を利用して、その野心を逐げ得る機會を與へることになる。現にそうした事實もある。それと共に、お互の理解より成り立つべき、自治機關である學校そのものの、自治の精神を弱めて行く效果を招ぐ憂へが無いとは云へない。若し何百人何千人の團體生活が、お互にお互の感情を勝手に達成させやうとするなら、共同團體は一日も生存することが出來ない。早稻田の軍團騷動のやうな、統治者が時代を理解しない心理も困つたものだが、またその他の學校のやうに、與へられた自治の權能を自分から棄權して自分達の醜體を、わざわざ世間に公表するのも決して褒めた話ではない。爾後の學校騷動は、よほどの戒心をもつて眺められるべき一つの社會現象でなければならぬ。

婦人日露交驩會の印象

山川菊榮

ロシアの革命家として、同時に全世界の無產階級運動の功勞者として敬愛されてゐるアドルフ・ヨッフエ氏と其一行が日本に來てもはや半年になる。此間一行は警視廳の巡査と資本家新聞記者との重圍の中にあつて、官僚や商賈人や赤化防止團以外の日本の民衆と接觸する機會を全然奪はれてゐた。然るに七月二日、東京の各方面の婦人によつて企てられた日露交驩會の催しによつて、ヨッフエ夫人その他の一行は、始めて婦人大衆の一少部分と會合する機會を得たのであつた。

無產階級の國家から來た是等の賓客を無產婦人の名に於て招待することが出來たなら、吾々の本懷はこれにすぎない。けれども現在の日本では無產婦人はどんな小さな團體でも、どんな小さな集會でも組織することを許されぬ狀態におかれてゐる。此時に當つてとにもかくにも婦人日露交驩會の催しによつて、直接勞農婦人に敬意を表する機會を得たことは吾々にとつてせめてもの慰めであつた。

此意味で、七月二日夕刻精養軒ホテルの大廣間で開かれた會合には、赤瀾會其他の共產主義婦人有志十餘名も參加したのであつた。

私は棚橋絢子、嘉悅孝子其他の謂ゆる名流婦人のお集まりを見て、社會主義に對しては敵意のほか何の感じも抱きさうもない、是等の人々が社會主義共和國の珍客を迎へる熱心さに感服するよりも、是等の人々にさへ、かうした態度を取らせるやうになつた勞農ロシアの威力を今更の如くに感ぜずにはゐられなかつた。

もしシベリアが依然として日本軍の占領の下にあり、セミョノフらの反動政府が依然としてその一隅に割據し、勞農ロシアが僅かに列強の相互牽制によつてその存在を許されてゐる弱少な共和國にすぎないのであつたのなら——この綺麗びやかに華やかな貴婦人令孃、この忠孝や貞節の化身のやうな老婦人達が、何しにこれだけ多く集まつて、この位階もなく

勳章も帶びず、殊には共産主義者である一介の勞働婦人に對して競つて笑顔を向け、競つて握手を求めたりするだらう？要するに彼等を動かしたものは無産階級國家の偉大な威力であり、その支配下にあるシベリアの富源――日本のブルジョアジーが最も密接な利害關係をもつ所物質上の問題である。自身これを意識すると否とに拘らず、又愛や人道の名に於て、會合に列席したと否とに拘らず、ヨッフェ氏を日本國に送つた社會主義共和國の國是を解せず、その立國の精神を排しながらこの席に出席したものは、要するに上のやうな客觀的事實に動かされて來たことに變りはない。

こんなことを考へながら退屈がる子供をすかしてゐる中に、呉服屋の廣告然とした、芝居でしか見られぬやうなけばけばしい衣裳をつけて金屛風の前に居並んだ、指環だらけで白粉塗れの娘達の長い退屈な遊藝がやつと濟んだ。餘興のプログラムにある『亂れ』といふ題目を、何だらうと仲曾根貞代氏や堺まがら氏らが首をひねつた發句、踊りのことだらうと皆で決めて、ちつとは眠氣ざましになるかと待つたが、幕があいて見ると琴と三味線の合奏だつたには、笑ひもし、がツかりもした。

餘興の後に開かれた食堂では西洋人形に魂がはいつたかと思はれるやうなウラヂミル少年が隨せんべやサンドウイッチをかぢつてチョコチョコしてゐたのが、見とれるほどに可愛かつた。次にヨッフェ夫人の挨拶を英譯から重譯してみる。

『親愛なる婦人諸君

私はあなた方の歡迎をもつて、近づいて居る日露の和解に就いてはその親睦をあなた方が喜ばれるしるしと見ることを許されたい。多分御承知であつたやうに、ロシアの勞働者及び農民の政府は五ケ年の間、世界中のあらゆる國民に對して、劍を鋤に鍛へ直すこと、且つ『自然の王者』の一部分が、その塹壕から出かけて何等の罪をも犯さぬ他の人人を殺すやうなことがあつてはならぬといふことを提議してゐた。西洋に於てロシアが殆ど總ての隣國と和を結んだのは、此平和のための努力が生んだ結果の一つである。所がロシアの東洋の隣國はまだ其處までになつてゐない。そして今日、確乎として力强くこの平和のために働いてゐる後藤新平子爵は、ロシアで最も人氣を呼んでゐる。

私共は此會合について皆さんの御招待を受けた時、喜んで承諾した。社會や民衆のあらゆる階級、及びあらゆる人間の集團は彼等の前衞隊を通じて思考するものである。そ

して今や日本の首府の最も進んだ、最も思考力のある婦人達は、あらゆる階級の婦人の前衛を網羅したこの會合によつて力强く示される通り、二大國民間の交情を暖めんとする意思を表示することを決心された。これは日本婦人、即ち日本國民の半數が、戰爭か平和かの問題については、平和の味方であることを意味して居る。

此會合の主催者諸氏は私に向つてロシアの婦人問題に關して話をせよと依賴された。所で私は、ロシアにはモウ婦人問題はないといふことを公言する地位に在ることを喜ぶ者である。わがロシアに於ては婦人は全ての方面に於て絕對に男子と平等の權利をもつて居る。婦人はいかなる職業に從事しようとするにしても、あらゆる道が開かれて居るそして婦人はいかなる地位にも——大臣の地位にさへも就くことが出來る。既にロシアには婦人の大臣があつたのである。

吾々の間に謂ゆる『婦人部』といふものがあることは事實であるが、それは別に女權運動を作るがためのものでなく、却てその反對に、婦人に男子と共同の仕事に參加し得る能力を與へるに適當な準備をすることを目的とするものである。

婦人は男子より後れて居り、男子よりも新しい事物に適順しにくいものだといふことは確かに事實である。これは過去の一切の歷史からみて當然の事でもあり、それによつて說明の出來ることでもある。けれども私は婦人が健全な政治的及び經濟的狀態の下におかれたならどうなるか、といふことについての印象をお話したく思ふ。私の觀察は、曾て私が勞働婦人と一所に働いて居つた一つの都會（ペトログラード）の一つの區域に限られて居る。私は二つの例を擧げやう。

その一つは私が或勞働婦人の會に對してその生涯の最も忘れ難い日のことを敍述しやうと提議した時のことである。最初は此仕事は遲々として進まなかつた。けれどもそのうち、最初の文章は極めて拙劣なものであつた婦人の一人が誰しも才能の閃めきを認めずにはゐられぬやうな作品を出した。私は彼女を（日本ではよく知られてゐる）マキシム・ゴルキーに紹介した。ゴルキーはその作品を稱揚した。その婦人は勉强する機會を與へられた。そして早くも、私が東洋に來て以來、その婦人の新作がロシアから來た雜誌に掲載されてゐるのを私は見たのである。

まだもう一つ例がある。ある纖維工場の女子從業員の集

會で、四十歳になる勞働婦人がその地方の托兒所についての報告をした。報告はハツキリしてゐてよく要領を得てゐた。けれども私はその婦人が數字をすべて暗誦して話してゐるのに驚いた。次にこの立派な報告者はあきめくらなのだといふことが分つた。私は彼女に學課を教へようといふ申出をした。ホンの僅かの間に私は私のこの生徒の精力と才能とに滿足することが出來た。今此婦人は其等の諸托兒所の監督者になつて居る。

私はかういふ例を澤山擧げることが出來る。婦人の能力が發揮され、その智能の可能性の全部が實現されるのは、人間らしい生活狀態の下に於てのみである。

諸姉が日本の婦人運動の消息を傳へられた好意を感謝する。私はこの報道をロシアに傳へよう。そしてこれはロシア婦人にとりて最も深い强味をそゝり、彼等は私と同じく諸氏の成功を祝することを斷言する。

婦人がその權利のためにする鬪爭の道は險しく困難である。殊に東洋婦人の道は二倍も險しく三倍も困難である。

私は今日の招待に列席した人々の名に於て諸姉の熱心な歡迎を感謝し、且つロシア婦人の名に於て諸姉の事業の成功を衷心より希望して措かぬものである。」

嘉悦孝子氏、久布白落實氏らの『世界の平和や』『愛や』『人道』の名に於ける歡迎の辭は、日本がシベリヤに出兵しようとする矢先でもなく、現在駐兵中でもなく、萬事休して撤兵を餘儀なくされ、隨つて平和の外に道のない今日に至つて否さうした今日なればこそ僞されたといふことに皮肉な滑稽味が加はつてゐた。然し日本のみならず今日の平和運動が、一朝戰亂の勃發した際には戰爭激勵運動の陣頭に立つ愛國主義者の平時に於ける暇つぶしであり道樂に過ぎないといふことは今更咎め立てする價値もあるまい。封建時代のお婆さんには佛いぢり、嫁いびりといふ道樂があつた。資本主義時代のお婆さんには『愛』のお說法や『平和』いぢりぐらゐの道樂が相當してゐるのだらう。

主催者側の依頼によつて最後に私も大要次のやうなテーブル・スピーチを試みた。

『私は今夜此處に列席してゐる極めて少數の社會主義婦人の一團を代表して、ロシアの賓客と本國の無產階級とに對して敬意を表したく思ふ。省れば滿六年前、ロシアに革命が起つて以來、ロシアの無產階級は國內の經濟的破綻や饑饉に加ふるに、資本主義諸國の武力干涉、經濟封鎖等、算

創作



出世五人男

宇野浩二

厨戸夏生の小説といふのは何から何までがをかしく風變りなものであつた。先づ彼はあんな突然な仕方で、赤木阿珂丸を訪問して、さて自分は今度小説を書いたので見てほしい、と言ひながら、懷中から取出したところの、ぼろ〳〵の雜誌であるが、

「何です、それは、女學世界ですか?」と阿珂丸が訝かしさうに目を顰めて、その半分破れた表紙の字を讀みながら、聞くと、

「ソ、さうです、これは醒子の讀んでゐた雜誌なんです、」と夏生は、その殘されたものをいとしがるやうな仕方で、改めて兩手に抱きながら言つた。

「で、その中にあなたの小説が載つてゐるんですか?」と阿珂丸が聞くと、

「え、その、こ、こゝに、」と夏生は言ひながら、頁といふ頁が悉く捲くれたり折れたりしてゐるので、それを繰ることに幾度も指先に唾をつけて骨折つてゐたが、やつとしてから、「これです、」と言つて、彼が阿珂丸の前にそれの或部分を開いて見せたところに依ると、流石の阿珂丸も少し度を失つた程驚いたことには、それは活

字になつてゐる文章ではなくて、謂はゞ昔の小學校の學童が新聞紙に手習ひしたのを思はせるやうな、可成り大きな、亂暴な書體で、日本筆で認めてあるものなのだつた、即ち彼はその古雜誌の各頁を原稿紙の代用にしてゐるのである。

無論、その書かれてある內容は、小說どころか　一通りの文章をもなしてゐるとさへ言ひにくかつた。而もそれは雜誌を橫にして、一頁おきに、その一頁は凡そ字數にして四五十字で、それが全體で十頁以上のものではなかつた。阿珂丸はそれを手にとつて、

「これでみんなですか？」と讀まない先に先づ斯う聞くと、

「え、え、それでざつとみんななんですが、」と夏生は答へて、「ひよつとしたら、もう一枚ぐらゐ書けるかも知れません。

そして、それは次のやうに始まつてゐた。

『ぼく――は悲しい、――殘ねん――だ！』そして行が變つて、『鬼子母神――の森を、椛子――の乘つたくるまが――はしつて行つた！』

「これは、この無暗に棒の引つ張つてあるのは、一體どういふ譯なんです？」と阿珂丸は讀みかけた雜誌を膝の上に置いて尋ねた。

「そ、それですか、」と夏生は答へた。「そ、それは、この頃の小說にはみんなそんな風な棒が澤山引いてありますから、僕もやつぱり……」

「あ、さうですか、あの棒のつもりですか」と阿珂丸は益々心の中で驚きながら、「然し、あの棒はこんなに無暗に、無茶苦茶に書いてあるんぢやないんですよ。」

「ぢやあ、ど、どういふ風に引くんですか？」と夏生は極めて柔順な態度で聞くのだつた。

「どういふ風につて……」と阿珂丸は閉口しながら、「それは、その……」と說明に困つてしまつたが、やがてそれは後の

事にして、『ところで、これは皆本當の名前で書いてあるやうですね？　夏夫の夫だけが變つてるやうですが？　それに、この僕といふのと夏夫といふのは同じ人なのでせう。一寸變ですね。」

「あ、さうですか。」

『輕子――！と夏夫は大聲を――上げた――けれども輕子のくるまは――走りさつた――』と阿珂丸はその後を讀みつづけた。『無情な女――！　僕は泣いた――』

「これは少しどうも變ですね、」と阿珂丸は言つた。「だつて、これでは書いた人には分るかも知れませんが、ただ讀んだんでは、よく意味が分りませんもの。一體、これはどういふところなんです、この次のところと何だか別々見たいぢやありませんか？」

と言ふのは、『僕は泣いた――』とある次に『鬼子母神の道で――花子は――歩いてきた――花子は――私にあいさつもせぬ――トツ無情者――』などとつゞいてゐたからである。

「この輕子さんの車の走つてゐる鬼子母神と、花子の挨拶しない鬼子母神とは同じ時なんですか、それとも別の日なんですか？」と阿珂丸は重ねて聞いて見た。

「そ、それは違つた日です、」と夏生は答へた、が、彼はそこで稍々不滿らしい顏をして、「ち、違つた日のことを書いても、か、かまはないんでせう？」

「そ、それはいゝんですけど、」と阿珂丸も多少吃りを傳染させられて、「然し、日が違つてゐるなら違つてゐるやうにしなければいけませんよ。まあ、何にしても、これだけでは輕子さんが車で走つてゐて、夏夫が悲しがるのがあんまり突然過ぎて、つまりそのモデルの輕子さんやあなたやを知らない者にはよく分らないぢやありませんか、ね、さうでせう？　これでは多少消息を知つてゐる僕にだつて、あんまりよく分りませんもの。」

「はあ、はあ。なる程、小說といふものはむづかしいですな、」と夏生は言つた。そこで、暫く言葉が絶えてから、「ぼ、僕はその時、仕事を探しに行つた歸り途だつたんです。それで、目白の驛で電車を下りて、あの鬼子母神の並木道のところを、夕方だつたんですが、歩いて來たんです、」と夏生はその小說の、そして同時に彼自身のその頃の生活の說明を始めた。

それに依ると、輕子は入井の家から姿を隱す時に、夏生と花子とに宛てゝ、簡單な書置を認めて行つた。前者には、自分が一緒にゐると、いつ迄も彼が發憤しない、で、よく／＼考へた末、自分はこゝで身を引く方がいゝと思つた、と言つて、今更おめ／＼國へも歸る譯に行かないから、これから獨りで何とか方法を立てゝ行くつもりだ、が、これ迄の工場は都合に依つて止めることにした、もう今日限り自分といふものはこの世にゐないものだとあきらめてくれ、云々といふので、後者には、長い世話になつたこと、自分は今度考へた事があつて、いろ／＼思案して來たが、厨戸と別れることにした、就いては、斯ういふことは相談などしてもうまく行くものではないから、厨戸に默つて自分は出て行くことにする、どうか御迷惑だらうが、厨戸のことを宜しくお賴みする、云々といふのであつた。

それはいつもの通り七時頃に輕子が工場の方へ出かけて行つたあとのことで、それから厨戸は一人で部屋の中を掃除したり、疊の上に寢ころがつたり、小唄を口吟んだり(諺に吃音者の小唄といふ通り、この男は小唄が上手だつた)うたゝ寢をしたりして、三時間ほど經つた後だつたから、多分十時頃のことであつた、彼はふと爪を剪らうと思つて、机の引出しから鋏を出さうとした時、計らずそこに輕子の書置を見出したのであつた。彼はそれを讀み終ると、子供のやうにわーツといふ聲を立てゝ泣いた。多分それは彼の隣の五號室にゐる、何をしてゐる男なのか、一日おき位には朝から晩まで外出してゐる代りに、他の一日おき位には朝から晩まで家にゐて、花子の報告に依ると、大きな筆や小さな筆やで習字の稽古ばかりしてゐるところの横道といふ三十歲の男が、その日は丁度家にゐる番だつたので、その隣室の厨戸の泣き聲に一時彼の習字の筆を止めて、聞き耳を立てた程であつた。(厨戸はよく泣く男で、そして彼の泣聲は又吃音者獨得の甲高

い聲を發した。」

厨戸はそんな風にして、大方三十分ばかりの間、泣いたり、讀んだり、又泣いたり、讀んだりしてゐた。やがて、彼は彼女の書置の今一通の方の、花子に宛てられた分を取上げて、どうかして花子を呼んで、彼女と顏を寄せてそれを讀んで見たい思ひに頻りに驅られたが、彼の部屋の呼鈴は外の部屋のゝやうに呼鈴それ自身の役目を果しさうに思へなかつた。實際、輕子のゐた時分から、彼等はその呼鈴のボタンを押したことが一度もなかつた。それを押したら「お呼びになりましたか？」と女中が聞きに來る代りに、忽ちお上が現れて、彼等に立退きを命じさうな、さういふ引け目をいつとなく彼等は心に感じてゐたのだつた。厨戸は、だから、暫くそれの白いボタンを怨めしさうに見てゐたが、やがて立上つて、障子を開けて、薄暗い廊下の方を、花子が現れないかと、何度となく透かして見た。そして又、三十分以上經つてしまつた。

彼はそれから部屋の中に戻つて、机の前に坐つて、改めて花子宛の手紙をつくづくと眺めてゐたが、ふとその中には若しかすると、輕子の居所が書いてあるかも知れないといふことが、もう間違ひのない事のやうに思はれ出した。花子、花子——どうかして花子がこの部屋に來ないか知ら、と彼は苛々しながら思つた。然し、輕子がゐない留守の時に、これ迄花子が來たことは一度もなかつたことを思ふと、彼の手は機械のやうに動き出して、夢中でその封を破つてしまつた。そして中味を貪るやうにして讀んで見たところが、彼の失望にまで、それは前記したやうな内容のものに過ぎなかつた。

それから、彼は夢中で家を飛び出して、暫くの間は何處を的となしに町を歩いてゐたが、ふと思ひついて、輕子のこれ迄通勤してゐた工場に尋ねて行つた。すると、受附のところで、何處の受付にも同じ人間が坐つてゐるのかと思はれる程、何處の受附にも見られる型の、眼鏡をかけた六十歳の老人が、「從業中面會は出來ません、」と判で捺したやうな聲で報いた。厨戸は夢中でお辭儀をして、その工場の門を出たが、そこから一二間と歩かないうちに、「さうだ、面會に來たんぢやない。唯ゐるかゐないかが分りさへしたら、そしてゐると分つたら、工場が引けるまでこゝで立つて待つてゐてもいゝん

だから、」と考へ直して、忽ちその場に立止まつたが、然し、どうもあの受附の老人の顏や態度を思ひかへすと、勇氣が沮喪して、大凡十分ばかりの間その邊をうろ〱してゐた後、やがて思ひ切つて、もう一度その受附口の前に立つた。そこで、彼は口を開く前に二三度頭を下げて、

「あの——面會ぢやないんですが、その加川輕子といふ者が、その加川輕子といふのはこゝの女工なんですか、それが今日こちらへ出、出席——その、出て——居りませうか、その、休んでゐませんでせうか、それを調べてほしいのですが………？」と額にたら〱汗をかきながら言つた。

「大勢の女工ですから、そんな事は面倒ですな、」と受附の老人は相變らず冷淡な調子で答へた。

然し、幾度も幾度も賴んだ末、やつと老人に調べてもらつた結果は、厨戸に加川輕子がその日は出てゐないといふことを教へただけであつた。厨戸はがつかりして、泣く少し前の氣分で、とぼ〱と入井の家に歸つて來た。

「こ、この小說に書いてあるのは、それから一週間も後のことなんです、」と厨戸はそこで說明した。「わ、私があの鬼子母神の並木道の方へ曲らうとする、丁度あの交番のあるところで、ふと擦れ違つた車がありますので、何氣なしにそれに乘つてゐる者を見上げますと、それが、それが輕子なんです。か 輕子は私と別れてから十日も經たなかつた時なんですが、見違へるほど立派な裝をして、いゝ女になつてゐました、」と言ひながら、彼は例の古雜誌に書きつけた彼の小說の文章を指さして、「そ、そこのところなんです。輕子は一寸僕の方を振り返りましたが、車を止めるどころか、止まりかゝつた車屋を急がして、走つて行つてしまつたんです。……」

阿珂丸はその時相手の聲が震へを帶びて來たので、氣がついてそつと夏生の顏を窺ふと、彼はその色黑の、眞四角な顏を先程からもう泣いてゐたのだと見えて、炭屋のやうに黑くしてゐた。

「あゝ、さういふところなんですか、分りました、」と阿珂丸はそこでわざと注意を小說の方に向けた。そして、改めて、

「鬼子母神の道で——花子は——歩いてきた——花子は——私にあいさつもせぬ——トツ無情漢——」そこで行が變つて
『花子は——ちか頃お上さん——と同盟してゐる——僕は二人の女に見すてられた——己さん——は地獄の——ほとけである——僕のかなしみの心を知つてくれるのは——己さんである——！』

そこで、夏生の小説は終つてゐた。現今ならば、それは若しかすると表現派とか、ダダ主義とか思ひ做されて、多少の注意を引いたかも知れないが、その時、阿珂丸はそれを讀み終つて、唯呆れた外はなかつた。

「つまり、その次は、それから又別の日に同じ鬼子母神の並木道の邊で、君は花子さんに會つたといふ譯なんですね？」と彼は尋ねた。「……で、何ですか、その時分は花子さんはこゝの家を出てゐたんですか？」

「い、いゝや、こゝの家にゐたんです、」と厨戸はせき込んだ調子で答へた。「丁度、輕子がゐなくなつた時分から、どういふ譯だか、お上さんと仲がよくなつたらしいんです。だから、折角あゝして輕子が書いて行つた書置だつて、あれを花子に渡したのは二日も經つてからのことでした。花子の、花子の野郎！……」とそこで厨戸は悔やしさうに、又涙を目に溜めながら、「花子の野郎、それを碌に見もしないで、私のへ、部屋へほり込んで、すたすた行つてしまつた切りなんです。あ、あの時から、花子は一度も僕の部屋に來たことがありません。……」

そして、厨戸のつゞけたところに依ると、輕子がゐたうちは、人數に於いても二人であつたばかりでなく、夏生と違つて彼女は所謂しつかり者だつたので、入井のお上から見て、彼等に出て行つてもらひたい心持は一ぱいではあつたが、それを迫ることが出來なかつたのだつた。それが斯うして夏生一人になると、お上たちはこれ迄の幾分敬遠の態度をがらりと變へて、露骨に輕蔑し出したやうに見えた。そして、彼を追拂ふ手立として、お蘭を通して、これ迄のやうに自炊してもらふことは斷然止めてほしいと申込んで來た。「あなた一人なんです、さういふお客様は。さうすると、外のお客様があなたを見習つて、みんな自炊をすると言ひ出されては、私の方の商賣が干上つてしまひますので、」とお蘭は言つた。

「ほ、僕もさうして貰はうと思つてゐたところなんです、」と厨戸は答へた。「今迄と違つて、輕子がゐないんですから……」

さういふ譯で、お上の方での第一の計畫は結局失敗に終つたので、次に第二の難題として彼のこれ迄の拂ひ殘りの溜つてゐる借金を、この年末に當つて全部拂つてもらひたいと言ひ出して來た。それには厨戸は甚だ狼狽してしまつて、「い、今金を持つてゐませんから、少し待つて下さい、」と言ふ外はなかつた。それから、毎日ほどお闇がお上の命を受けて、厨戸の部屋へそれの催促にやつて來た。そこで、彼は目が醒めたやうにあわて出した。以前輕子がゐた時分には、半分遊びと暇潰しのつもりで廻つてゐた求職口を、毎日毎日半分泣き顏をして、額の上に汗を一ぱい溜めながら、一所懸命に奔走した。が、容易に、と言ふよりも殆ど絶望的に、それに有りつけさうになかつた。が、何でも彼でも、彼はあの、輕子の香の未だ殘つてゐる、いつ何時お闇でなくお上が薪でも持つて叩き出しに來るかも知れない、と思へるところの部屋に坐つてゐるよりも、さうして的なく外を歩いてゐる方が氣樂だつたので、彼は唯夢中で歩き廻つてゐたのだつた。

さういふ最中にも、彼は今に花子が、あの輕子と親しくしてゐた、輕子から少なからぬ恩を受けてゐたところの花子が、或朝早くとか、或晩遲くとか、そツと救ひに來てくれさうな氣がして仕樣がなかつた。彼は毎日心の中でその事を考へて、花子を呪ひながら、矢張り若しやといふ氣持を失ふことが出來なかつた。それが、先の小說にあつたやうに、鬼子母神の道でふと彼女に會つたので、彼ははツとして、目の色を輝かして彼女を見たところが、何ンといふことであつたらう！彼女は明らかに彼を見てゐながら、見ぬ振をして、彼の所謂『あいさつもせぬ』のである。

それから又三日程後のことであつた。その頃の何日の例であつた通り、厨戸がその日も要するに全然徒勞に歸したところの、就職の奔走の一日を終つて、それは最早や後幾日で正月が來るといふ、しん〳〵とした寒い晩の九時過ぎた時分であつた。彼はマントもなしにぶる〳〵震へながら、例の裏木戶の方から便所の横の非常口を通つて、がらんとした彼の室六號の部屋に歸つて來た。そこは彼が朝出かけた時のまゝの、それから丸一日の間誰一人そこへ這入つて來なかつた證據

に、そこに敷放しになつて居る夜具の三角型に捲くれた上蒲團も、彼がそこから抜け出した時のまゝの形態を止めてゐるシーツの皺も、さては抜殼のやうに脱ぎ捨てられてある寢間着も、悉く朝からのまゝで、こゝだけは世間的の時間の進行から除外されてゐたやうに見えた。彼はしかし一分の猶豫もなしに大急ぎで着物を脱いで、その寢間着と着更へて、冷い掛蒲團と晝間の着物とを重ねた中に、蓑虫のやうにもぐり込んでしまつた。だが、十二月の夜の寒さと、現在の彼自身の生活の不安とが、彼のやうな兵隊のやうな健康な男をも容易に眠りの（平安の）國へと彼を送らなかつた。だが、諺に云ふ『虫が知らした』のか、その晩は殊にそれが一層であつた。と言ふのは、夏生はさうして煎餅蒲團の中に蝦のやうに縮まつてゐながら、時々上歯と下歯ががち〳〵と震へるのは、それは無論半分は寒さの爲であつたらうが、他の半分は確かに何かを怯えてゐる爲であると考へられた。その證據に、廊下の遠くの方で誰かの足音の起つた時は言ふ迄もなく、隣室の一日おきに習字の稽古ばかりしてゐる横道が便所に立上つた音とか、さては向ひの己が急にその甲高い聲を張上げて本を讀み出した聲とかにも、夏生は一々疳の高い子供が物音にびく〳〵するやうにはツとしなければならなかつた。そしてそれに續いて屹度歯と歯ががち〳〵震へ出すのである。實際、それを後になつて考へて見ると、その時彼は確に鬼にねらはれてゐて、間もなくその鬼が彼を襲ふといふことを、小兒のやうな鋭い感性を以て感じてゐたのだつたのである。

つまり、その鬼といふのは、入井の別嬪のお上に外ならなかつた。間もなく、本當に彼の部屋に向つて一つの足音が近づいて來て、「御免なさい、厨戸さん」と彼女の聲が障子の外で聞えたかと思ふと、彼女は中からの答を待たないで這入つて來た。前に言つた事がある通り、彼女はその素人下宿を開業した日、即ちこの部屋に厨戸夫婦を、そして向ひの九號室に己武良夫を案内した時以來、それはもう半年以上前であることは讀者諸君も知つて居られるだらう、以來一度もこゝへ足を踏み入れた事がなかつたのである。だから、彼女はこの第六號の部屋の障子を開けた瞬間、長い間見なかつた彼女の

部屋が、その借手の故に、彼と共に淺ましい迄に窶れて見えたに違ひない。それは何の誇張でもなく、彼女の縹緻の惡い娘が貧しい男に嫁入つて落ち振れた姿を、久しぶりで見たやうな思ひと言つても、そんなに間違ひではないだらう。彼女は、だから、それを見ると、一層感情が興奮したのを感じた。

「厨戸さん、厨戸さん！」と彼女はその北海道訛りの言葉で、蒲團の虫のやうな厨戸に向つて、到頭その蒲團に手を掛けて揺すりながら叫んだ。

そこで、厨戸はむく〳〵と起上つて、寢間着の前を搔き合せながら、固くなつて、疊の上にぢかに坐つた。「う……う……う……」と彼は何か分らぬことを口の中で呻つてゐた。

「どうです。お金はお出來になりましたか？」とお上は言つた。

「い、い、いゝえ、その未だ……」と厨戸は首を抱えながら言つた。

「でも、お出來になる的はついたんでせうね？もう今年も後五日ですからね、」とお上は言つた。「それや今年中でもよござんすけど、何日の何時頃といふことだけ、ね、厨戸さん、こゝで約束してもらはうぢやありませんか。」

「う……う……う……」

「厨戸さん、私の方でも道樂にこんな商賣をやつてゐるんぢやないんですから、それに、もう斯うして大節季が近づいてゐるんですから何處其處へ幾ら、何處其處へいくらと言ふ風に、一々當て箝めて豫定してあるんです。だから、どうでせう、二十九日か、三十日位に……？それは三十一日でも午前中位なら、そして間違ひさへなければお待ちしますよ、然し、そこのところをはつきりと定めておいていたゞきませう。」

「う……う……う……」

「厨戸さん、そこのところを、斯ういふ場合ですから、正直にはつきり言つて下さい。」彼女の皺枯れた聲がだん〳〵皺枯

れたまゝに、ヒステリイ的に甲走つて來た。

殊にその頃は、いつも夜になると酒を飮んだり、唄をうたつたり、大勢客を呼んだりするそれ〴〵の部屋の學生たちが冬の休暇で國に歸つてゐたことで、殘つてゐるものは謂はゞ己とか横道とかいふ虫のやうに物を言はない人たちばかりだつたし、毎日の晴天つゞきで空氣は乾燥し切つてゐて、安普請の柱が時々ぴしりツ〳〵と裂ける音が冷たい空氣に反響するやうな、靜かでそして物音の遠くまで響く時であつた。だから、そのお上の聲は第四號から第九號の部屋の隅から隅までに鳴り渡つた。もつともそれ等のうちで四號と七號と八號との部屋の主人たちは悉く留守であつた、そして第五號の横道は時々火鉢の埋み火で手を焙り焙り、相變らず習字に親んでゐたし、第九號の己は火鉢もなしに、古毛布を頭から達磨のやうに被つて、手に息を吹きかけながら讀書してゐたが、彼等は共に時ならぬ隣室からの餘り耳に心地よくない聲に惱まされてゐた。すると、その時、その聲の間に、くツくツと男の泣きじやくりのやうな聲が洩れて來たのに、これ等の虫のやうな隣人たちも、思はずそれぞれの仕事から顏を上げた。

「厨戸さん、」とお上の聲がつゞいて聞えた。「おや、厨戸さん、あなた、男のくせに泣くなんてをかしいぢやありませんか。何でもない、あなた、お金のことで、而も僅かなお金のことで、そんな、男が泣くなんて。厨戸さん、あなた、お國の方へ言つてやつたらどうなんです？」

「……」厨戸は暫く答へなかつた。と言ふよりも、咽喉が詰まつて答へられなかつた。が、やつとして、「僕は、く、國の方へは、い、言つてやれない譯があるんですもんですから……」

「でも、それぢや私の方が困るぢやありませんか、」とお上は言つた。「ぢやあね、厨戸さん、幾ら考へても今のところで的がないと仰有るのを、私の方で無理にと言つたつて仕樣がないことなんですから、それなら、兎に角、お出來になるまでお待ちすることに致しませう。いさとなつたら、願はぬことですけど、お國の方のお所もお名前も分つてゐるんですか

ら、こゝのところはあなたを信用してお待ちすることにしませう、ね、その代り來月――といつても來年ですわね、來年の一月から月五圓づゝ、間違ひなしに持つて來ていたゞく、と、斯ういふことにして、つまり私の方でもそれだけの我慢をしますから、あなたの方でも、こゝで一度この部屋を立退いていたゞく事にしやうぢやありませんか、お金はそんな風に、今でなくても宜しい、月賦といふことにして上げますから。それで、今直にと言つても、もうこんなに夜更けですから明日の午前中までに出ていたゞきませう、ね、それならいゝでせう？」斯うお上は言ふことだけ言つてしまふと「ぢやあ、お休みなさい。おゝ、さむ！　何といふ寒い晩だらう！」と獨言しながら、ちよこ／＼と流石に女らしい足音で、廊下を駈け去つてしまつた。

彼女の足音が消えた後は、一層暗さと寒さと靜かさとがそこらの空氣の中に沁み渡つたやうに思へた、そして、その凍つたやうなしんかんとした空氣を破つて「う……う……う……」とそれは異樣な響きではあるが、確に鳥や獸の聲ではない、人間のむせび泣く音が聞えるのである。それは取も直さず途方に暮れた大男の厨戸夏生の泣く聲に違ひなかつた、そして、それは五分、十分とつゞいて止まなかつた。

その時、突然夜の寂寞を破つて、文字通り夜の寂寞を破つて、厨戸の向ひの第九號の部屋の中で人の立上る音が聞えたかと思ふと、がらりと激しい音で障子が開いて、そこに髯達磨のやうな顏をした己い姿が現はれた。彼はつかつかと厨戸の部屋の前に進んで行つて、

「厨戸君、厨戸君、」と二聲ばかり呼んでから、殆ど返事を待たないで、障子を開けて、その中に蒲團の上に俯伏しになつてゐた厨戸の傍に歩いて行つた。

「厨戸君、聞いてゐたよ、」と口はその傍に坐つて、髯の目をくしや／＼させながら、重い口調で言つた。「隨分ひどい事を言ふ奴だね、怪しからない！……君は、それで、今のところ金の取れる前はないんですか、こゝを出されて何處かへ行く

的は！　え、君、泣いてたつて仕樣がないぢやないか？」

「うツ――うツ――うツ――」と厨戸はこの際思ひがけない人の同情を得たので、一旦泣き止みかゝつてゐたのが、改めて咽喉元に込み上げて來る泣き聲を嚙みながら、然し長い間言葉が吐けなくて苦しんでゐた後、「ぼ、僕、今こゝを出されたら、こ、困るんです、」と言つた。

己はそこで一層激しく目をくしや／＼しば叩かせながら、一二分の間、厨戸の樣子をぢつと睨むやうに見てゐたが、やがて思ひ切つたやうに「ぢやあ、君、斯うし給へ、明日から僕の部屋に同居し給へ。然しね、僕も僕一人かつ／＼食つて學校へ行くだけしか、一文の餘裕もないんだから、君を食はせる譯には行かないがね、どうです、それでも一時君に血路を開く役に立つなら、さうし給へ。」

「あ、有難う、有難う、」と厨戸は言つて、又もや、今度は口の中に含むことなしに、彼獨得の大聲でわツと泣き入つてしまつた。が、泣きながら「そ、そ、そしたら、何ぼ花、花子だつて、屹度少しは同情して、ぼ、僕に握り飯ぐらゐお上さんにな、な、內所で持つて來てくれるかも知れません。ぼ僕　この恩は一生忘れません、うあ……うあ……うあ……」と後は泣きつゞけた。

そこで、己は立上つて、「君、泣くのは止し給へ、泣いたつてせうがないぢやないか。ぢやあ、明日から僕のところへ來ることにし給へ、」と言ひ殘して、どつし／＼と重い足取で歸つて行つた。――つまり先の厨戸の肉筆の小說に『花子は――ちか頃お上さん――と同盟してゐる――僕は二人の女に見すてられた――己さん――は地獄の――ほとけである――僕のかなしみの心を知つてくれるのは――己さんである――！』と結んであつたのは、この顚末を指すのである。

「それで、花子君は君のところへ握飯を持つて來てくれましたか？」と阿珂丸はその時夏生に尋ねると、

「それが一度も、なんです、」と後者は殘念さうに答へた。「し、而も花子は私がそんな苦勞な目に遭つてゐるのを知つてゐ

ながら……或時など、己さんが表で花子に會つたことがあつたさうです。その時、己さんのことですから、花子に厨戸君があんなにこ、困つてゐるのに、君は厨戸君と多少關係がある譯だといふ話だが、何とか少し位助けてやつてもいゝぢやないかと言はれたさうです。す、すると、花子は『關係』といふ言葉を取違へたと見えて、關係なんかありませんと言つたさうですが、それでも、矢張り知らん顔をしてゐるんです。」

「ぢやあ、君はどうしてゐるんです、食べることは？」と阿珂丸は尋ねた。

「己さんが時々自分のこ、御飯の殘りを下さいますんです、己さんは、それに、いつでもお菜は大抵味噌を食つて居られます。あの人は本當に親切な人で、わ、私がお世話になるやうになつてからは　し　鹽を買つて來て下すつて、わ、私にそれで握り飯にして食へと言つて下さるんです。……」

「然し、下宿の御櫃といふものは小さいは小さいが、三食の度に握り飯一つや二つ分は殘してくれさうなもんぢやありませんか？」と阿珂丸が尋ねると、

「いえ、お、己さんは大食で、あれが本當なら二つ分位ないと足りないんださうです、」と夏生は笑ひ顔一つしないで言つた。「だから己さんもいつもお腹が空いて困ると言つて居られるんです。それに、己さんもさう言つてますが、僕に己さんのところへは同じ御櫃でも外の人たちのとこよりか、ずつと少なく入れて來るらしいんです。お上は己さんのことも憎んでますから、こ、殊に私がお世話になるやうになつてから、これ迄よりも尚ひどくなつたんださうです。」

「そんな事なら、」と阿珂丸は言つた。「失敬ですけど、僕は又いつの時でもお櫃に半分位しか食べませんから、君の握り飯分ならいつでも寄附しますよ。」

「あ、有難う、」と夏生は嬉しさうな色を正直に顔に現はして、「え、も、若しかしましたら……で、ですけど、流石の己さんも此頃のこゝの家の仕打には大變怒つて居られて、ひよつとすると、近いうちに越すかも知れないと言つて居られるん

ですが……こゝより安く暮して行くのは中々骨ださうです。」

「ぢやあ、その時は君はどうするんです？」

「僕もお、己さんは連れて行つてやると言つて居られるんです、」と厨戸は言つた。それから、彼は稍々暫くの間、「さよなら」を言つて立上らうとする前の、もぢ／＼した態度で坐つてゐたが、やつとしてから半分腰を浮かして、「ぢやあ、こ、この小説は、こ、これはいけませんから、又書直して見ます。そ、そしたら又見てもらひに來るかも知れません。」

「しかし、」とそこで阿珂丸が言ふには、「どうして、あなたはわざ／＼僕のところなぞへそんなものを持つて來たんです、その、君と一緒にゐる己君に何故見せないんです？」

「え、それはその、その、己さんあゝいふ頑固な人で、私が小説を書いたなんて言つても、あ、相手にしてくれないもんですから……」と厨戸は一旦立上つたのを、又中腰に戻つて言つた。そして、つゞけて、何か口の中で吃つて言へないやうな發音をしてゐたが、「あ、赤木さん、」と急に何故か緊張した顔付になつて、「あゝいふ頑固な、あゝいふ荒武者の人でも、小説家になれるんですか？」

「それやなれない事はないでせう、」と阿珂丸は苦笑しながら答へた。

私はこゝで私の説話法の拙を恥ぢなければならない事が起つたのである、といふのは、厨戸夏生が赤木阿珂丸を訪問した一節の中に、

「己？　己といふのは一寸ない名前ですが　己何といふ人です？」と阿珂丸が何か思ひ當ることがあるらしく、斯う夏生に聞いたことがあつた。そして彼は後者から己武良夫といふ名を聞くと、ひどく驚いた樣子で、「へえ、己武良夫、……己武良夫がこゝにゐたんですか、それや驚いた、ちつとも知らなかつた、」と叫んだ。

「さう言へば、己さんもあなたの事を、」と厨戸が言つた。「あなたの事を知つてるかも知れない、多分知つてる男らしい、顔を見ないから分らないが、と言つて居られましたよ。あなたは赤木丸吉と言はれたことがあるんですか？」

「え、丸吉といふのが僕の本名ですよ」と阿珂丸は答へた。

「己さんがさう言つてらつしやいました、多分、あの赤木丸吉君だらうつて。ぢやあ、あなたは矢張り己さんと中學時代のお、お友達なんですか？」

以上の會話は突然にすると餘り小說的であるのと、それに就いての說明を加へてゐると讀者の頭を無暗に混亂に誘ふ恐れがあるのとで、わざと私は先の話の場合に省いたのである。

そこで、私はこゝに讀者諸君の寛恕を乞うて、次の章を、その阿珂丸と己武良夫との風變りな交渉の次第から始めることを約束して、この章の筆を擱かう。

（つゞく）

螢籠

生田春月

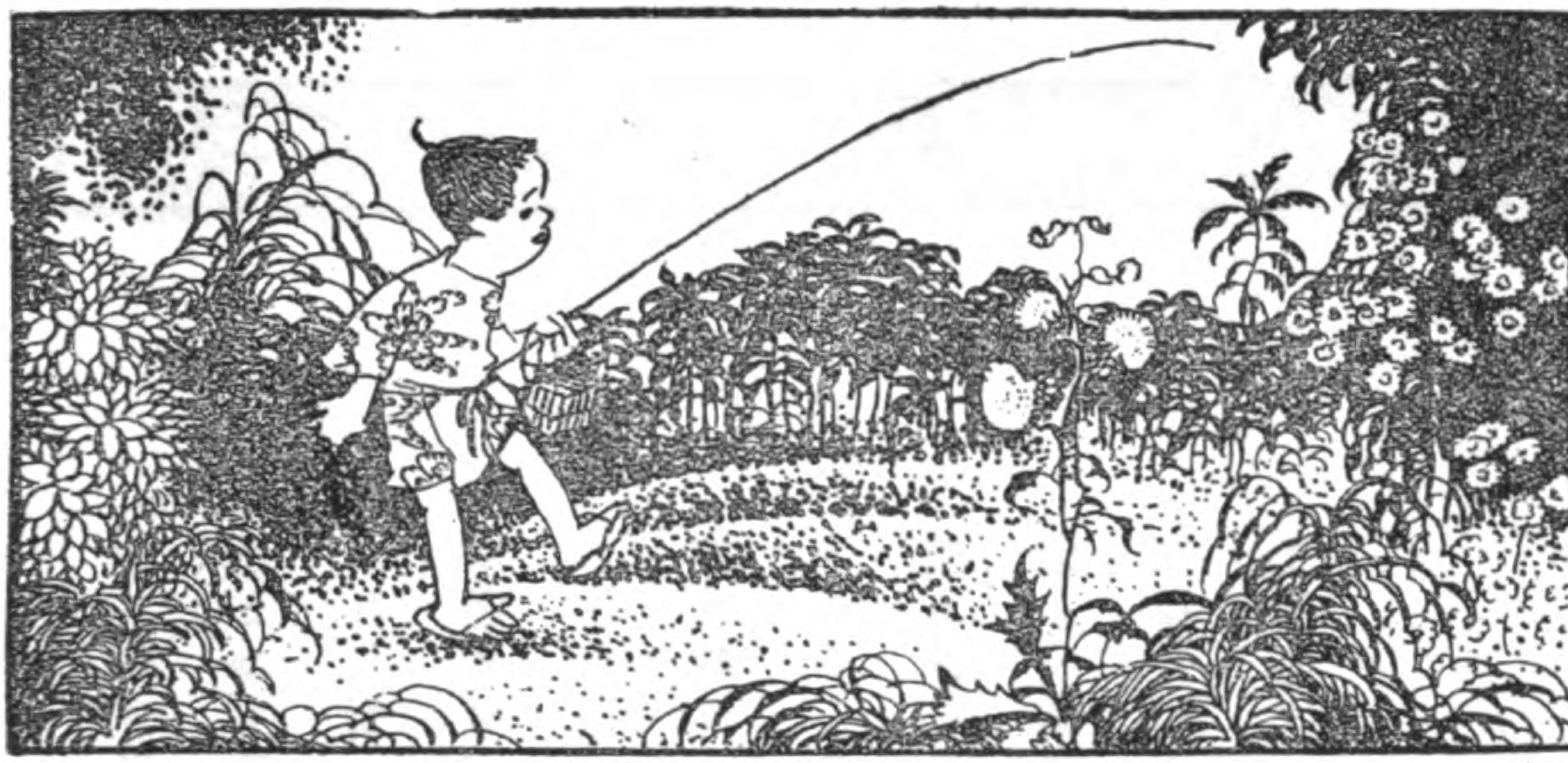
何處からまぎれ込んだか
枕もとに、首筋の赤い虫が一匹、
かはいいね、めづらしい螢——
てのひらに載せて見てゐると、
手の筋のながれの上に
ぽつと青い火をてらす。

螢ツてほんとにかはいいのねと言つて、
蚊帳の中に一杯螢をはなして

ひとりで寝てゐたその人の俤が
ふとおもひだされてなつかしさ——
あれ、螢、螢と子供たちが遠くで叫ぶ、
部屋一杯の大きな螢籠です。

溪流のほとり、草露にむらがる螢、
水はさらさら一夜ながれて、
螢も流れ、影も流れて、涼しさ。

忙しい都ずまゐに、ふとそのかみを思ひだし
私はそつと螢を庭へはなしてやつて、
しばらく、桓根の覺束ない光を眺めてゐた。



白

芥川龍之介

或春の午過ぎです。白と云ふ犬は土を嗅ぎ嗅ぎ、靜かな往來を歩いてゐました。狹い往來の兩側にはずつと芽をふいた生け垣が續き、その又生け垣の間にはちらほら櫻なども咲いてゐます。白は生け垣に沿ひながら、ふと或橫町へ曲りました。が、そちらへ曲つたと思ふと、さもびつくりしたやうに、突然立ち止つてしまひました。

それも無理はありません。その橫町の七八間先には印半纏を着た犬殺しが一人、罠を後ろに隱したまま、一匹の黑犬を狙つてゐるのです。しかも黑犬は何も知らずに、この犬殺しの投げてくれたパンか何かを食べてゐるのです。けれども白が驚いたのはそのせゐばかりではありません。見知らぬ犬ならば兎も角も、今犬殺しに狙はれてゐるのはお隣の飼ひ犬の黑なのです。每朝顏を合せる度にお互の鼻の匂を嗅ぎ合ふ、大の仲よしの黑なのです。

白は思はず大聲に、「黑君！　あぶない！」と叫ばうとしました。が、その拍子に

犬殺しはじろりと白へ目をやりました「教へて見ろ！　貴樣から先へ罠にかけるぞ。」——犬殺しの目にはありありとさう云ふ嚇しが浮んでゐます。白は餘りの恐しさに、思はず吠えるのを忘れました。いや、忘れたばかりではありません。一刻もぢつとしてはゐられぬ程、臆病風が立ち出したのです。白は犬殺しに目を配りながら、じりじり後すざりを始めました。さうして又生け垣の陰に犬殺しの姿が隱れるが早いか、可哀さうな黒を殘した儘、一目散に逃げ出しました。

その途端に罠が飛んだのでせう。續けさまにけたゝましい黒の鳴き聲が聞えました。しかし白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころを蹴散らし、往來止めの繩を擦り拔け、五味ための箱を引つくり返し、振り向きもせずに逃げ續けました。御覽なさい。坂を駈け下りるのを！　そら、自動車に轢かれさうになりました！　白はもう命の助かりたさに夢中になつてゐるのかも知れません。いや、白の耳の底には未に黒の鳴き聲が虻のやうに唸つてゐるのです。

「きやあん。きやあん。助けてくれえ！　きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

二

白はやつと喘ぎ喘ぎ、主人の家へ歸つて來ました。黒塀の下の犬くゞりを拔け、物置き小屋を廻りさへすれば、犬小屋のある裏庭です。白は殆ど風のやうに、裏庭の芝生へ駈けこみました。もう此處迄逃げて來れば、罠にかゝる心配はありません。おまけに青あをした芝の上には、幸ひお孃さんや坊ちやんもボオル投げをして遊んでゐます。それを見た白の嬉しさは何と云へば好いのでせう？　白は尻つ尾を振りながら、一足飛びに其處へ飛んで行きました。

「お孃さん！　坊ちやん！　今日は犬殺しに遇ひましたよ」

白は二人を見上げると、息もつかずにかう云ひました。（尤もお孃さんや坊ちやんには犬の言葉はわかりませんから、わ

んわんと聞えるだけなのです。しかし今日はどうしたのか、お嬢さんも坊ちゃんも唯呆氣にとられたやうに、頭さへ撫でてはくれません。白は不思議に思ひながらも、もう一度二人に話しかけました。

「お嬢さん！　あなたは犬殺しを御存知ですか？　それは恐ろしいやつですよ。坊ちゃん！　わたしは助かりましたが、お隣の黒君は摑まりましたぜ。」

　それでもお嬢さんや坊ちゃんは顏を見合せてゐるばかりです。おまけに二人は少時すると、こんな妙なことさへ云ひ出すのです。

「何處の犬でせう？　春夫さん。」

「何處の犬だらう？　姉さん。」

　何處の犬！　今度は白の方が呆氣にとられました。（白にはお嬢さんや坊ちゃんの言葉もちゃんと聞きわけることが出來るのです。我々は犬の言葉がわからないものですから、犬もやはり我々の言葉はわからないやうに考へてゐますが、實際はさうではありません。犬が藝を覺えるのは我々の言葉がわかるからです。しかし我々は犬の言葉を聞きわけることが出來ませんから、闇の中を見通すことだの、かすかな匂を嗅ぎ當てることだの、犬の敎へてくれる藝は一つも覺えることが出來ません。）

「何處の犬とはどうしたのです？　わたしですよ！　白ですよ！」

　けれどもお嬢さんは相不變氣味惡さうに白を眺めてゐます。

「お隣の黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かも知れないね。」坊ちゃんもバットをおもちゃにしながら、考へ深さうに答へました。「こいつも體中まつ黒だから。」

白は急に脊中の毛が逆立つやうに感じました。まつ黑！　そんな筈はありません。白はまだ仔犬の時から、牛乳のやうに白かつたのですから。しかし今前足を見ると、――いや、前足ばかりではありません。胸も、腹も、後足も、すらりと上品に延びた尻つ尾も、みんな鍋底のやうにまつ黑なのです。まつ黑！　まつ黑！　白は氣でも違つたやうに、飛び上つたり、跳ねまはつたりしながら、一生懸命に吠え立てました。

「あら、どうしませう？　春夫さん。この犬はきつと狂犬だわよ。」

お孃さんは其處に立ちすくんだなり、今にも泣きさうな聲を出しました。しかし坊ちやんは勇敢です。白は忽ち左の肩をぽかりとバツトに打たれました。と思ふと二度目のバツトも頭の上へ飛んで來ます。白はその下をくゞるが早いか、元來た方へ逃げ出しました。けれども今度はさつきのやうに、一町も二町も逃げ出しはしません。芝生のはづれには棕櫚の木のかげに、クリイム色に塗つた犬小屋があります。白は犬小屋の前へ來ると、小さい主人たちを振り返りました。

「お孃さん！　坊ちやん！　わたしはあの白なのですよ。いくらまつ黑になつてゐても、やつぱりあの白なのですよ。」

白の聲は何とも云はれぬ悲しさと怒りとに震へてゐました。けれどもお孃さんや坊ちやんにはさう云ふ白の心もちものみこめる筈はありません。現にお孃さんは憎らしさうに、「まだあすこに吠えてゐるわ。ほんとうに圖々しい野良犬ね」などと、地たんだを踏んでゐるのです。坊ちやんも、――坊ちやんは小徑の砂利を拾ふと、力一ぱい白へ投げつけました。

「畜生！　まだ愚圖々々してゐるな。これでもか？　これでもか？」

砂利は續けさまに飛んで來ました。中には白の耳のつけ根へ、血の滲む位當つたのもあります。白はとう〳〵尻つ尾を卷き、黑塀の外へぬけ出しました。黑塀の外には春の日の光りに銀の粉を浴びたモンシロ蝶が一羽、氣樂さうにひらひら飛んでゐます。

「あゝ、けふから宿無し犬になるのか？」

白はため息を洩らした儘、少時は唯電柱の下にぼんやり足をとめてゐました。

三

お嬢さんや坊ちやんに逐ひ出された白は東京中をうろ〳〵歩きました。しかし何處へどうしても、忘れることの出來ないのはまつ黒になつた姿のことです。白は客の顏を映してゐる理髪店の鏡を恐れました。雨上りの空を映してゐる往來の水たまりを恐れました。往來の若葉を映してゐる飾り窓の硝子を恐れました。いや、カフェのテエブルに黒ビイルを湛へてゐるコップさへ、――けれどもそれが何になりませう？　あの自動車を御覽なさい。えゝ、あの公園の外にとまつた、大きい黒塗りの自動車です。漆を光らせた自動車の車體は今こちらへ歩いて來る白の姿を映しました。――はつきりと、鏡のやうに。白の姿を映すものはあの客待ちの自動車のやうに、至るところにある譯なのです。もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでせう。そら、白の顏を御覽なさい。白は苦しさうに唸つたと思ふと、忽ち公園の中へ駈けこみました。

公園の中には鈴懸の若葉にかすかな風が渡つてゐます。白は頭を垂れたなり、木木の間を歩いて行きました。此處には幸ひ池の外には、姿を映すものも見當りません。物音は唯白薔薇に群れる蜂の聲が聞えるばかりです。白は平和な公園の空氣に、少時は醜い黒犬になつた日ごろの悲しさも忘れてゐました。

しかしさう云ふ幸福さへ五分と續いたかどうかわかりません。白は唯夢のやうに、ベンチの並んでゐる路ばたへ出ました。するとその路の曲り角の向うにけたゝましい犬の聲が起つたのです。

「きやん。きやん。助けてくれえ！　きやあん！　きやあん。助けてくれえ！」

白は思はず身震ひをしました。この聲は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はつきり浮ばせたのです。白

は目をつぶつたまゝ、元來た方へ逃げ出さうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の間のことです。白は凄まじい唸り聲を洩らすと、きりりと又ふり返りました。

「きやあん。きやあん。助けてくれえ！　きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

この聲は又白の耳にはかう云ふ言葉にも聞えるのです。

「きやあん。きやあん。臆病ものになるな！　きやあん。臆病ものになるな！」

白は頭を低めるが早いか、聲のする方へ駈け出しました。

けれども其處へ來て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しなどではありません。唯學校の歸りらしい、洋服を着た子供が二三人、頸のまはりへ繩をつけた茶色の仔犬を引きずりながら、何かわいわい騷いでゐるのです。仔犬は一生懸命に引きずられまいともがきもがき、「助けてくれえ」と繰り返してゐました。しかし子供たちはそんな聲に耳を借すけしきもありません。唯笑つたり、怒鳴つたり、或は又仔犬の腹を靴で蹴つたりするばかりです。

白は少しもためらはずに、子供たちを目がけて吠えかゝりました。不意を打たれた子供たちは驚いたの驚かないのではありません。又實際白の容子は火のやうに燃えた眼の色と云ひ、刃物のやうにむき出した牙の列と云ひ、今にも噛みつくかと思ふ位、恐しい權幕を見せてゐるのです。子供たちは四方へ逃げ散りました。中には餘り狼狽したはづみに、路ばたの花壇へ飛びこんだのもあります。白は二三間追ひかけた後、くるりと仔犬をふり返ると、叱るやうにかう聲をかけました。

「さあ、俺と一しよに來い。お前の家迄送つてやるから。」

白は元來た木木の間へ、まつしぐらに又駈けこみました。茶色の仔犬も嬉しさうに、ベンチをくゞり、薔薇を蹴散らし白に負けまいと走つて來ます。まだ頸にぶら下つた、長い繩をひきずりながら。

× × ×

二三時間たつた後、白は貧しいカフェの前に茶色の仔犬と佇んでゐました。晝も薄暗いカフェの中にはもう赤あかと電燈がともり、音のかすれた蓄音機は浪花節か何かやつてゐるやうです。仔犬は得意さうに尾を振りながら、かう白へ話しかけました。

「僕は此處に住んでゐるのです。この大正軒と云ふカフェの中に。――おぢさんは何處に住んでゐるのです？」

「おぢさんかい？　おぢさんは――ずつと遠い町にゐる。」

白は淋しさうにため息をしました。

「ぢやもうおぢさんはうちへ歸らう。」

「まあお待ちなさい。おぢさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？　なぜ又そんなことを尋ねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜は此處に泊つて行つて下さい。それから僕のお母さんにも命拾ひの御禮を云はせて下さい。僕の家には牛乳だの、カレエ、ライスだの、ビフテキだの、いろ〱な御馳走があるのです。」

「ありがたう。ありがたう。だがおぢさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。――ぢやお前のお母さんによろしく。」

白はちよいと空を見てから、靜かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフェの屋根のはづれに、三日月もそろそろ光り出してゐます。

「おぢさん。おぢさん。おぢさんと云へば！」

仔犬は悲しさうに鼻を鳴らしました。

「ぢや名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと云ふのです。ナポちやんだのナポ公だのも云はれますけれども。――おぢさんの名前は何と云ふのです？」

「おぢさんの名前は白と云ふのだよ。」

「白――ですか？　白と云ふのは不思議ですね。おぢさんは何處も黑いぢやありませんか？」

白は胸が一ぱいになりました。

「それでも白と云ふのだよ。」

「ぢや白のおぢさんと云ひませう。白のおぢさん。是非又近い内に一度來て下さい。」

「ぢやナポ公、さやうなら！」

「御機嫌好う、白のおぢさん！　さやうなら、さやうなら！」

四

その後の白はどうなつたか？――それは一一話さずに、いろいろの新聞に傳へられてゐます。大かたどなたも御存知でせう。度々危い人命を救つた、勇ましい一匹の黑犬のあるのを。又一時『義犬』と云ふ活動寫眞の流行したことを。あの黑犬こそ白だつたのです。しかしまだ不幸にも御存知のない方があれば、どうか下に引用した新聞の記事を讀んで下さい。

東京日日新聞。昨十八日（五月）午前八時四十分、奥羽線上り急行列車が田端驛附近の踏切りを通過する際、踏切り番人の過失に依り、田端一二三會社員柴山鐵太郎の長男實彦（四歳）が列車の通る線路内に立ち入り、危く轢死を遂げようとした。その時逞ましい黑犬が一匹、稻妻のやうに踏切りへ飛びこみ、目前に迫つた列車の車輪から、見事に實彦

を救ひ出した。この勇敢なる黒犬は人々の立騒いでゐる間に何處かへ姿を隱した爲、表彰したいにもすることが出來ず、當局は大いに困つてゐる。

東京朝日新聞。輕井澤に避暑中のアメリカ富豪エドワアド、バアクレエ氏の夫人はペルシア產の猫を寵愛してゐる。すると最近同氏の別莊へ七尺餘りの大蛇が現れ、ヴエランダにゐる猫を呑まうとした。其處へ見慣れぬ黒犬が一匹、突然猫を救ひに馳けつけ、二十分に亘る奮鬪の後、とうとうその大蛇を嚙み殺した。しかしこのけなげな犬は何處かへ姿を隱した爲、夫人は五千弗の賞金を懸け、犬の行衞を求めてゐる。

國民新聞。日本アルプス横斷中、一時行衞不明になつた第一高等學校の生徒三名は七日（八月）上河內の溫泉へ着した。一行は穗高山と槍ヶ嶽との間に途を失ひ、且過日の暴風雨に天幕糧食等を奪はれた爲、殆ど死を覺悟してゐた。然るに何處からか黒犬が一匹、一行のさまよつてゐた溪谷に現れ、恰も案內をするやうに、先へ立つて步き出した。一行はこの犬の後に從ひ、一日餘り步いた後、やつと上河內へ着することが出來た。しかし犬は目の下に溫泉宿の屋根が見えると、一聲嬉しさうに吠えたきり、もう一度もと來た熊笹の中へ姿を隱してしまつたと云ふ。一行は皆この犬の來たのは神明の加護だと信じてゐる。

時事新報。十三日（九月）の名古屋市の大火は燒死者十餘名に及んだが、横關名古屋市長なども愛兒を失はうとした一人である。令息武矩（三才）は如何なる家族の手落ちからか、猛火の中の二階に殘され、既に灰燼とならうとしたところを、一匹の黒犬の爲に啣へ出された。市長は今後名古屋市に限り、野犬撲殺を禁ずると云つてゐる。

讀賣新聞。小田原町城內公園に連日の人氣を集めてゐた宮城巡回動物園のシベリア產大狼は二十五日（十月）午後二時ごろ、突然嚴重な檻を破り、木戶番二名を負傷させた後、箱根方面へ逸走した。小田原署はその爲に非常動員を行ひ、全町に亘る警戒線を布いた。すると午後四時半ごろ、右の狼は十字町に現れ、一匹の黒犬と嚙み合ひを始めた。黒犬は

悪戦頗る努め、遂に敵を噛み伏せるに至つた。其處へ警戒中の巡査も駈けつけ、直ちに狼を銃殺した。この狼はルブス、チガンティクスと稱し、最も兇猛な種屬であると云ふ。なほ宮城動物園主は狼の銃殺を不當とし、小田原署長を相手どつた告訴を起すといきまいてゐる。

五

或秋の眞夜中です。體も心も疲れ切つた白は主人の家へ歸つて來ました。勿論お孃さんや坊ちやんはとうに床へはいつてゐます。いや、今は誰一人起きてゐるものもありますまい。ひつそりした裏庭の芝生の上にも、唯高い棕櫚の木の梢に白い月が一輪浮んでゐるだけです。白は昔の犬小屋の前に、露に濡れた體を休めました。それから寂しい月を相手に、かういふ獨り語を始めました。

「お月樣！　お月樣！　わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの體のまつ黒になつたのも、大かたそのせいかと思つてゐます。しかしわたしはお孃さんや坊ちやんにお別れ申してから、あらゆる危險と戰つて來ました。それは一つには何かの拍子に煤よりも黒い體を見ると、臆病を耻ぢる氣が起つたからです。けれどもしまひには黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、或は火の中へ飛びこんだり、或は又狼と戰つたりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪はれません。死もわたしの顔を見ると、何處かへ逃げ去つてしまふのです。わたしはとうとう苦しさの餘り、自殺をしやうと決心しました。唯自殺をするにつけても、唯一目會ひたいのは可哀がつて下すつた御主人です。勿論お孃さんや坊ちやんはあしたにもわたしの姿を見ると、きつと又野良犬と思ふでせう。ことによれば坊ちやんのバットに打ち殺されてしまふかも知れません。しかしそれでも本望です。お月樣！　お月樣！　わたしは御主人の顔を見る外に、何も願ふことはありません。その爲に今夜ははるばるともう一度此處へ歸つて來ました。どうか夜の明け次第、お孃

一　白　一

さんや坊ちやんに會はして下さい。」

白は獨り語を云ひ終ると、芝生に顋をさしのべたなり、何時かぐつすり寢入つてしまひました。

×　　×　　×

「驚いたわねえ、春夫さん。」

「どうしたんだらう？　姉さん。」

白は小さい主人の聲に、はつと目を開きました。見ればお孃さんや坊ちやんは犬小屋の前に佇んだ儘、不思議さうに顏を見合せてゐます。白は一度擧げた目を又芝の上へ伏せてしまひました。お孃さんや坊ちやんは白がまつ黑に變つた時にも、やはり今のやうに驚いたものです。あの時の悲しさを考へると、――白は今では歸つて來たことを後悔する氣さへ起しました。するとその途端です。坊ちやんは突然飛び上ると、大聲にかう叫びました。

「お父さん！　お母さん！　白が又歸つて來ましたよ！」

白が！　白は思はず飛び起きました。すると逃げるとでも思つたのでせう。お孃さんは兩手を延ばしながら、しつかり白の頸を抑へました。同時に白はお孃さんの目へ、ぢつと彼の目を移しました。お孃さんの目には黑い瞳にありありと犬小屋が映つてゐます。高い棕櫚の木のかげになつたクリイム色の犬小屋が、――そんなことは當然に違ひありません。しかしその犬小屋の前には米粒程の小ささに、白い犬が一匹坐つてゐるのです。淸らかに、ほつそりと。――白は唯恍惚とこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いてゐるわよ。」

お孃さんは白を抱きしめた儘、坊ちやんの顏を見上げました。坊ちやんは　御覽なさい、坊ちやんの威張つてゐるのを！

「へつ、姉さんだつて泣いてゐる癖に！」

（終）



白き蝶

山田邦子

杉垣に白き蝶一つとまりをりけ重き梅雨の朝ぐもりかも

け重き梅雨の曇りの雨あはひ行潦のひまを蟻の列とうる

梅雨ぐもり暗くしづまる辛夷の梢雀ばさりと飛び入りにけり

梅雨の暴風しきりにさわぐ障子の外かごの雲雀の聲あはれなり

梅雨の降る庭はさびしも蟻さへや生物なればみなこもるらし

飛行機の音こそすなれ珍らしく梅雨あがりたる青葉のそらに

五月晴照りかへるなり外濠の土手の八千草きらきら靡く

刑務所の煉瓦は長し此裏道ひつそりとして蝶々とべり

刑務所の長き煉瓦に添へる道を歩むみちすがら心さぶしも

つくづくとたけのびし子等やうつし身のおのれの事はあきらめにけり

編輯者より皆さんへ

◇有島氏の死は我誌同人の尤も哀悼する所です。其死がいかに社會に大なる反響を投げたか、思想家として、文壇の第一人者として、將た人格者として有名であつた、氏の死は矢張り社會の評價を縮圖したものです、此意味に於て有島氏の理想は社會的に重大な意義があります。

ただ、此際守舊的な輕薄な考察を加へたくないものです私どもは有島氏の行爲を批判したくはない、しかしかくの如き眞劍な人があつたと云ふとは忘れてはなりますまい。

◇いろ〳〵の意味で本月號若くは九月號より内容を一新し、尤も純な雜誌にしたいと思ゐます。そして純眞なる藝術へ、權威ある新道德へと步いて行きたいと思ゐます。

◇かく内容を更新し、品位あり、權威ある雜誌として婦人界の最高の讀みものとして恥しからぬ實質を具へ、そして家庭にでも、學校の讀者へでも絕好の伴侶として相應はしいものにしたいと思ゐます。

◇私たちの一生にはいろ〳〵な波瀾が幾たびも襲ひくることだらうと信じます、しかし私たちはいかなる困難にも打ち克ち、そして自分の信ずる地點にまで漕ぎつけねばなりません、その間の辛苦、憂さ樂さそうしたことをお互に語り合ひ、助け合つて立派な家庭、社會を築き上げたいものです私たちは我國人の誰をも路傍の人と見たくないのです、殊に記者と讀者とはお互に血の繋がるやうな氣持ちでありたい。

◇それから今後毎月、皆さんの御信頼になる先輩の御婦人や、思想、文壇の方々にお話して談話會を開いて時事問題や道德、文藝等について有益な談話を交換して戴くことになりました。本月號は筆者と出題者が不慣れのため思はしき結果を見ることが出來ませんでしたが、來月からは篤と此點に注意したいと思ゐます。

◇それから空前の大盛況を極めました、本誌の文藝講演會は今秋第二回を開きたいと思ゐます、里見、岸田、佐藤、菊池さんに出演して戴きます。尙ほ西田幾多郎氏倉田百三氏等へもお願するつもりです。

◇光明皇后に關する投稿は未審査の分がありますので來月號で發表することをお許し下さい。

女性改造定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	五十錢	壹錢五厘
六冊	參圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

註文の注意

◇附大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅拾六錢を申受く(但し支那を除く)
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料 一等百圓 二等七拾圓

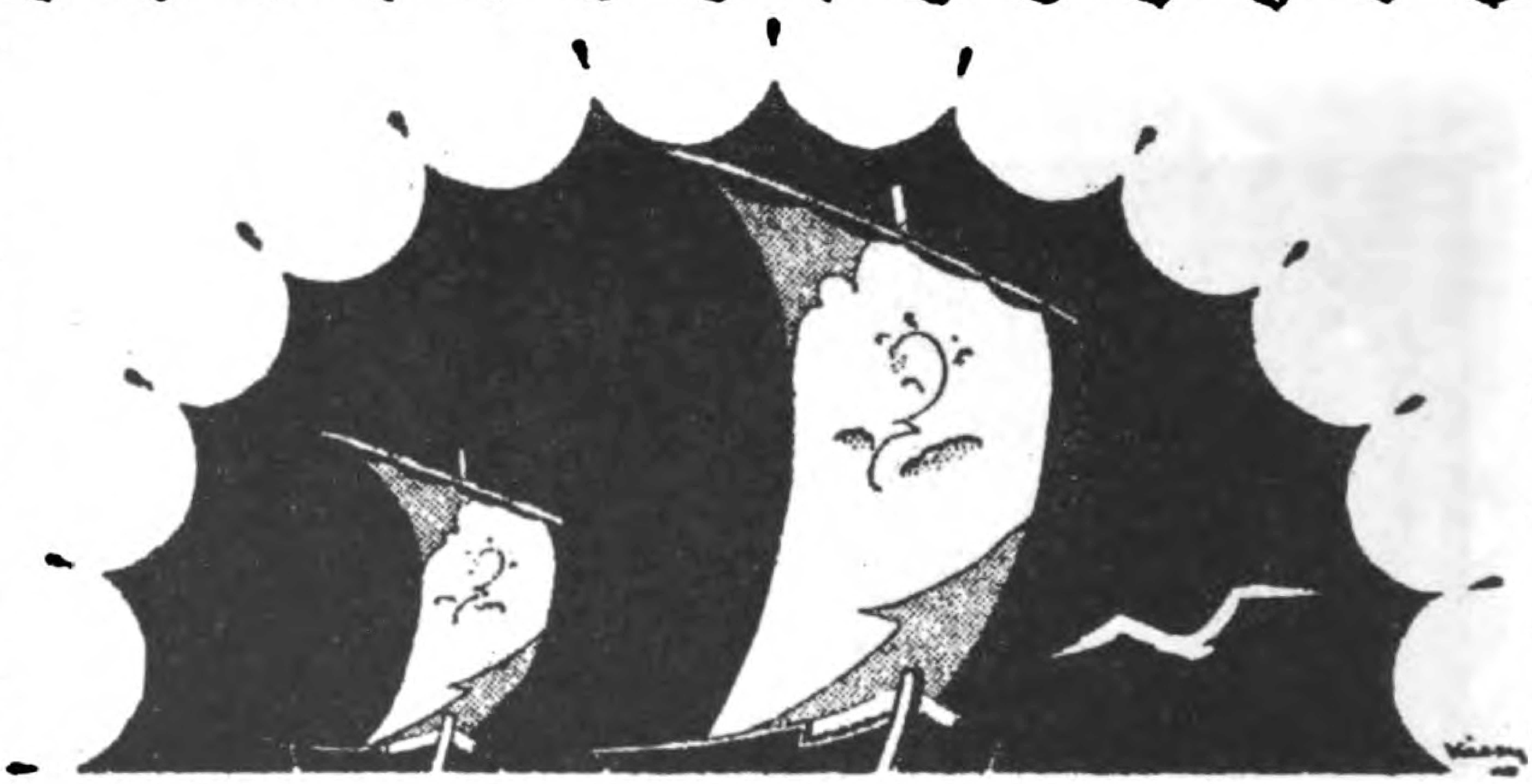
◎本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

(八月特別號價金六十錢)

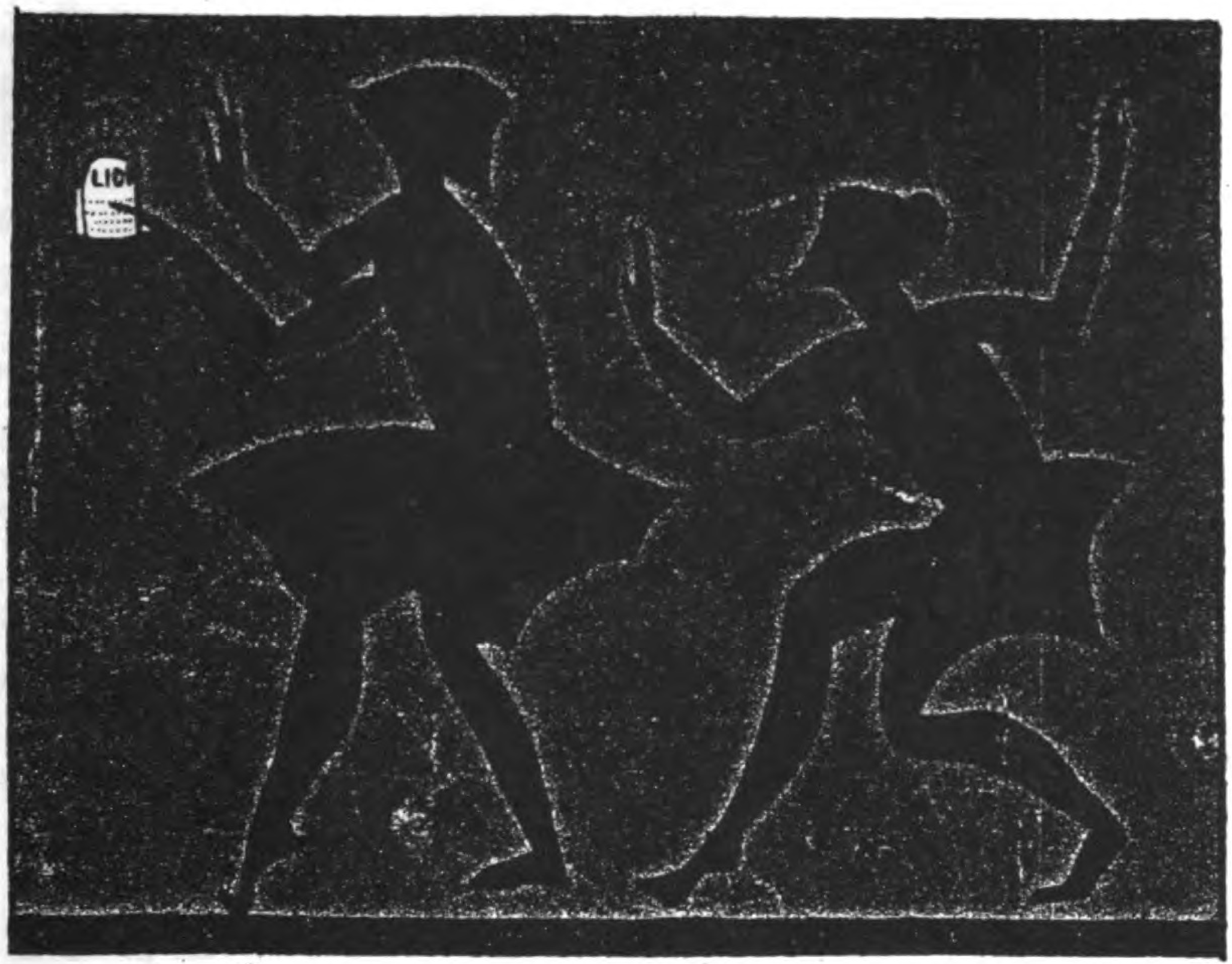
大正十二年七月十三日印刷納本
大正十二年八月一日發行

編輯兼發行者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 株式會社秀英舍
印刷所

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話芝 一六三八 二八五四
東京振替 四三〇三 八四〇二



大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年八月一日發行(毎月一日一回)大正十二年七月十八日印刷納本
第二巻第八號 八月號 特價六拾錢(送料二錢)



東京秀英舍印刷